1月号 第7巻第1号 通巻72号 1993年1月1日発行(毎月1回1日発行) 1988年(昭和63年)12月3日第3種郵便物認可

MONTHLY

パチ・パチ・ロックンロール

PATi·PATi ROCK'N'ROLL

新装刊第5号
390 YEN
1
JAN 1993
VOL.67



Buck-Tick Climax Together premium

全アーティスト
スペシャルグッズ
プレゼント

OPENING SPECIAL
X 12 PAGES
HEATH 独占インタビュー

unicorn 応募者全員サービス

LUNA SEA / LADIES ROOM / ZIGGY / BY-SEXUAL / 氷室京介 / JUN SKY WALKER(S)
布袋寅泰 / BRAIN DRIVE / 電気GROOVE / すかんち / MR.CHILDREN / M-AGE etc.


MCA

maxell

相性をよく考えて、空欄をうめなさい。

（いくつできるか、やってみよう。）

例題❶こそには[け][れ]を。

❷東男には[京][女]を。

問題❶たらちねには□を。

❷not onlyには[b]□□ □□□□を。

❸チグリスには[ユ]□□□□□を。

❹CDには□□'□を。

⑤ゾルには[ゲ]□を。

⑥空海には[最]□を。

⑦前九年には[後]□□を。

⑧運慶には[快]□を。

⑨過酸化水素水には[二]□□□□□□を。

⑩ちはやぶるには□を。

⑪i^2には[－]□を。

⑫同位角には[錯]□を。

⑬ax^2+bx+cには$\frac{[-]\square\square\sqrt{\square\square\square\square\square}}{2a}$を。

⑭必要条件には[十]□□□を。

⑮沖積平野には[洪]□□□を。

⑯杜甫には[李]□を。

⑰ムンクには[叫]□を。

⑱ネコには[マ]□□□を。

⑲入鉄砲には[出]□を。

⑳裾上げには[ま]□□□□を。

㉑菅原道真には[飛]□を。

CD's発売記念懸賞クイズ
ペアマウンテンバイクプレゼント

CDと相性バッチリの"CD's"いよいよ新登場！マクセルでは、CD's新発売記念オリジナルマウンテンバイクを、相性のいいペアに、勢いよくプレゼント。問題に答えて、どしどし応募してください。

〈宿　題〉
本文中の問題①～④の
❶たらちねには□を。❷not onlyには[b]□□ □□□□を。
❸チグリスには[ユ]□□□□□を。❹CDには□□'□を。
の空欄をうめなさい。ヒント：CD'sのCF・交通広告を見よ。

〈応募方法〉
官製ハガキにクイズの答えと住所・氏名・年令・職業（学校名）・電話番号を明記の上、下記の宛先までお送りください。
〒104-91 東京京橋郵便局私書箱231号
マクセルCD'sオリジナルMTBプレゼント係

〈賞　品〉
金賞：CD'sオリジナル
ペアマウンテンバイク　10組20名様



※実際の賞品とは仕様が異なる場合があります。

銀賞：CD'sオリジナル
ペアウォッチ　30組60名様



特別賞：CD'sオリジナル
相性トランプ1000名様

〈締　切〉
平成4年12月10日（当日消印有効）
当選の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。

相性のいいものは、くっつけて覚えましょう。ハイ、

CDにはCD'sを。

世の中には、相性がある。相性のいい人やモノに出会えば、たいていのことはうまくいく。ところで、CDと圧倒的に相性がいいのが、マクセルCD's。低ワウフラッター設計と安定した高域出力で、音がゆれない、こもらない。CDの収録時間にピッタシ対応の3タイプ・9タイムバリエーション、などなど。まさにCD'sは、CDを聴く環境に最適なのだ。「CDにはCD'sを」、と覚えよう。

（新発売）



Normal Position　High Position　Metal Position

●CD's I (Normal Position) 20￥300/46￥370/50￥400/54￥430/60￥460/64￥490/70￥520/74￥550/80￥580（税抜き）●CD's II (High Position) 20￥330/46￥420/50￥450/54￥480/60￥510/64￥540/70￥570/74￥600/80￥630（税抜き）●Metal CD's (Metal Position) 20￥410/46￥500/50￥530/54￥560/60￥590/64￥620/70￥650/74￥680/80￥710（税抜き）■価格はすべてメーカー希望小売価格（税抜き）です。

問題の解答⑤ゲル ⑥最澄 ⑦後三年 ⑧快慶 ⑨二酸化マンガン ⑩神 ⑪－1 ⑫錯角 ⑬$-b\pm\sqrt{b^2-4ac}$ ⑭十分条件 ⑮洪積台地 ⑯李白 ⑰叫び ⑱マタタビ ⑲出女 ⑳まつり縫い ㉑飛梅


ROCK'N'ROLL
Opening Special
Extasy Summit 1992
Heath(X) Long Interview



無敵 2 （サイレント・イヤラシーズ）



無敵 BAND

EXTACY SUMMIT 1992

無敵と書いてエクスタシーと読む!!

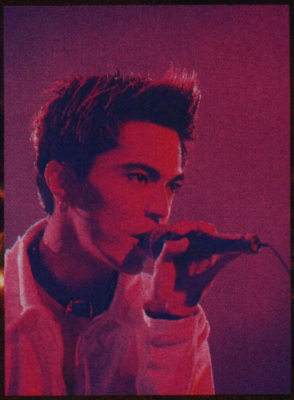
LUNA SEA, Gilles de Rais, S.M.G & Psychosis,東京ヤンキース、DEEP, MEDIA YOOTH, THE ZOLGE, ZI:Kill, JUN, 百太郎、GEORGE, KIBA, JIMMY, FAIMAS, DINAMITE TOMMY, TOSHI, HIDE, PATA, HEATH, YOSHIKI, and more…….

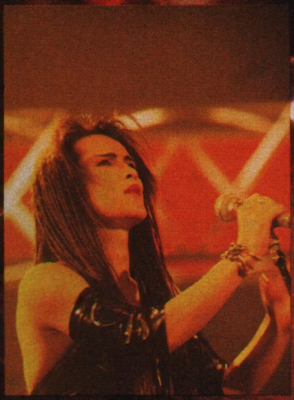
この恐ろしいメンツが1年に1回、(今回は大阪と東京の2回)集うという。大阪と東京のEXTACY SUMMITを追った!!

Photography **Kenji Tsukagoshi** Text **Yusuke Kato**




LUNA SEA


DEEP


MEDIA YOOTH


THE ZOLGE


S, M, G & Psychosis


Gilles de Rais

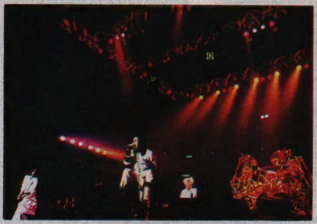

東京 YANKEES


Zi:Kill

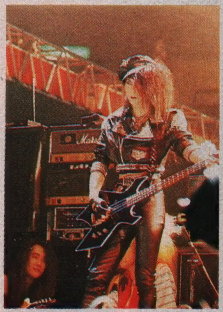











National
日本船舶振興会
平成3年度 補助物件
YAMAHA
YAMAHA


10.29 大阪城ホール



10・29　大阪城ホール出演バンド（出演順）
LUNA SEA／Gilles de Rais／S.M.G & Psychosis／東京ヤンキース（with HIDE & PATA）／Zi:Kill／無敵2（サイレント・イヤラシーズ）／無敵BAND

大将YOSHIKI不在!! 若頭TOSHI大活躍!!

遂にスタートしたサミット。10月29日の大阪では、しかしYOSHIKIの姿はなかった。
その穴を埋めようと必死にふんばる強者ぞろいのエクスタシー軍団。
なかでも、歌に司会に大活躍のTOSHIの姿が印象的だった!!

いよいよやって来ました、年に一度のお祭り騒ぎエクスタシー・サミット。今年は大坂城ホールを借り切っての堂々の興行とあいなりましたが、そのお目当てはといえばもちろんXはYOSHIKI大将。なにせ7月30日のトークライブ以来とんとお見限り、エクサーの欲求不満もつのります。

しかーし、司会進行のTOSHI、大竹まこと、レポーターの東海林さんがいきなりのショッキングな発言。

TOSHI「今日はYOSHIKIは出ません。ギリギリまで帰って来る予定だったんですけど、レコーディングでまだロスアンジェルスにいます」

悲鳴とブーイングが交差する客席にはすすり泣きの声も。その代わりといってはなんですが、HIDEとPATA、新メンバーのHEATHがステージに現れた。特にHIDEは形見(?)のYOSHIKI人形を持って。

HIDE「組長不在ですけど残りのメンバーでがんばります」

初お目見えのHEATHは地元が大阪ということで

HEATH「おかえりなさいの一言が欲しいですね」

とすでにXにすっかり打ち解けている様子。

1バンドめはルナシー。この日のために新調した純白の衣装で盛り上げる。2番手は地元大阪出身のジルドレイ。ソリッドでグルーヴィーなリズム隊とアグレッシブなギターとボーカルは大会場にも負けてはいない。続いては今年の目玉バンドのひとつ、スクリーミング・マッド・ジョージ&サイコーシス。『ジェラシー』のアルバム・ジャケットやXの去年のツアーのステージ・セットを制作した特殊効果アーティストのマッド・ジョージがインダストリアルダンスやテクノコア調の曲に乗せてアバンギャルドでドラマチックなステージを展開。11月11日にエクスタシーから発売された彼らのアルバムも一聴の価値ありだ。

そしてサミットならではのセッション大会となった東京ヤンキース。HIDEとPATAが参加して「ドラッグストア・カウボーイ」と「エース・オブ・スペード」を演奏。特にHIDEはAMIちゃんとお揃いの特攻服を来て「てめぇらあんまりウチの兄弟を怒らすんじゃねぇよ!」とガラが悪い。PATAも本当に楽しそうにニコニコ顔でギターを弾く。

その後のMCにもTOSHIと登場したPATAは大竹まことと一緒になってTOSHIにツッコミを入れる。

大竹「初めて買ったレコードは?」

TOSHI「キッスとかツェッペリンとか」

PATA「ウソをつくな!」

TOSHI「本当は山口百恵の「ちっぽけな感傷」です(笑)」

さすが大阪大会、PATAちゃんもしっかり吉本ノリを会得したみたい。

見事復活を果たしたジキルに続いてのセッションはサイレント・イヤラシーズ、直訳すればむっつりスケベ(笑)。ルナシーのSUGIZOと真矢、ジキルのKen、ヤンキースのUMEとNORIで曲はあの「X」。大将が出ないんでウズウズしてたファンも一気にフラストレーションを爆発させてのXジャンプ。お馴染みのTOSHIのメンバー紹介がこだますると、なんとそのTOSHIがステージに駆け込んで来てスーツ姿のまま「X」を熱唱。ファンはもう大将がいないこともすっかり忘れて狂喜乱舞。

ラストの大セッション無敵バンドに入る前にTOSHIから朗報一発、ロスのYOSHIKIと国際電話が繋がっているという。会場に流れる聴き覚えのあるピアノの音色。YOSHIKIだ!

YOSHIKI「今日は帰れなくなっちゃってごめんなさい。今ロスにいましてXのレコーディングをやっています。ピアノ録りをやっていまして、がんばっているんですけれどもなかなか上手く行かなくて……。HIDEいる? なにやってんの?」

HIDE「なにやってんのじゃないよ。あんたアタマでしょ? レコーディングはどお?」

YOSHIKI「相変わらずだよ」

HIDE「じゃあ煮詰まってるわけね(笑)」

TOSHIが粋な計らいで客席の声援を海の向こうのYOSHIKIに聞かせる。YOSHIKIの「気合入れて行くぞ!」の掛声で無敵のセッションが始まった。曲はお馴染み「ゴッド・セイブ・ザ・クイーン」と「アナーキー・イン・ザ・UK」。ステージ上にはエクスタシーの面々が勢ぞろいしてまさにお祭り騒ぎ。YOSHIKIもきっと草葉の陰で喜んでることだろう(笑)。

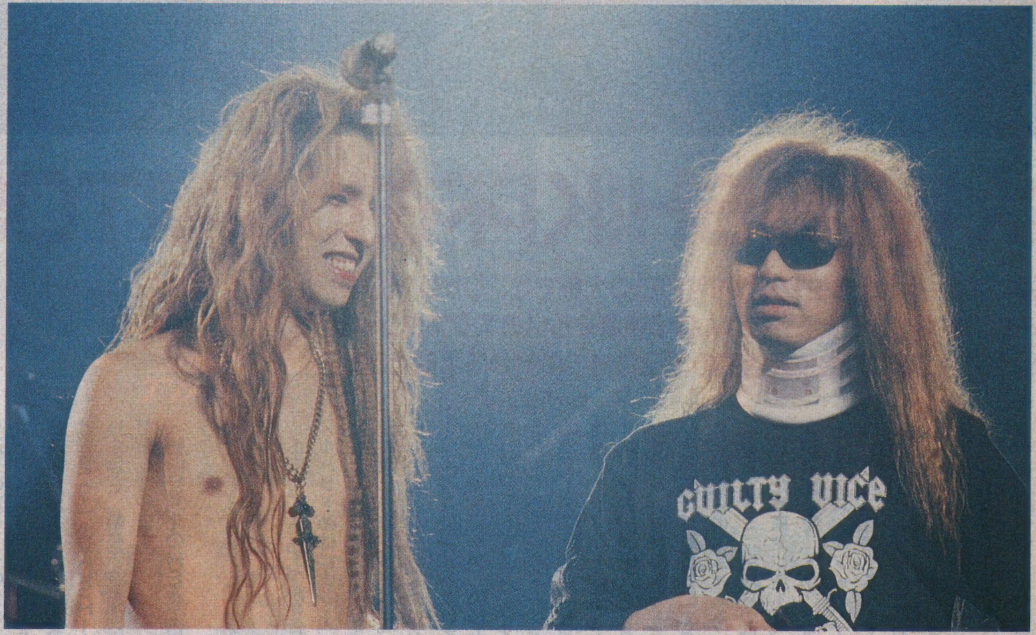
ここの勢いをかってエクスタシー・サミットは翌々日舞台を日本武道館へと移す。さすがに武道館には大将も出てくれるでしょう。じゃなかったらファンも黙っちゃいないかんね。堪忍袋の緒ももう切れそうなんだから。さ、とっとと東京へ帰ろっと。




無

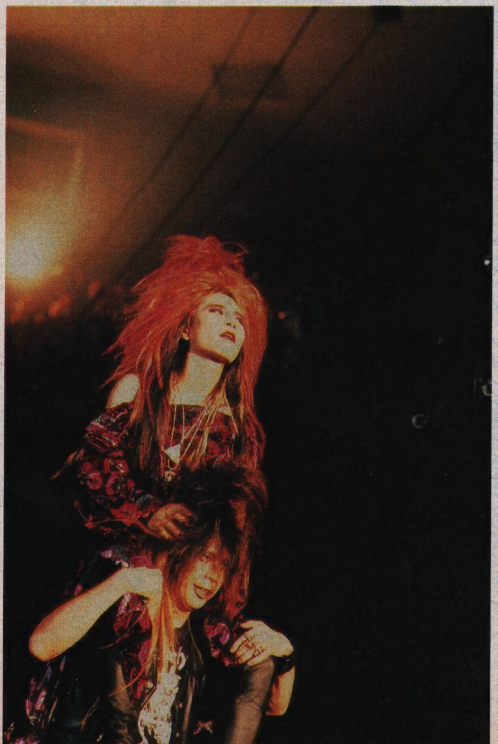





GUILTY VICE



















10.31日本武道館

10．31　日本武道館出演バンド（出演順）
LUNA SEA
DEEP
MEDIA YOOTH
THE ZOLGE
東京 YANKEES（with HIDE & PATA）
E. M. G & Psychosis
Gilles de Rais
ZI:KILL
無敵 2（サイレント・イヤラシーズ）
無敵 BAND

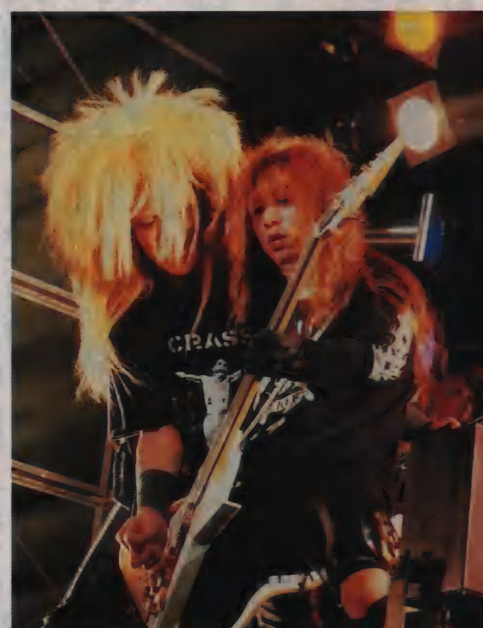


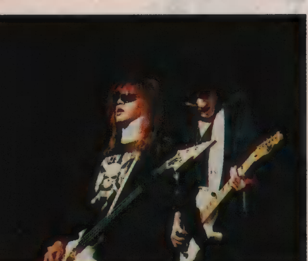
大将YOSHIKI到着!! これで役者が揃ったぜ!!

ここで出なけりゃ男がすたる!
怒濤の義理人情男・YOSHIKIが間一髪、間に合った10月31日の武道館でのサミット。
レコーディング疲れも時差ボケも全くYOSHIKIにゃ関係なし。
ひたすら出ずっぱりの大将は、やっぱり無敵のお祭り男だ!!





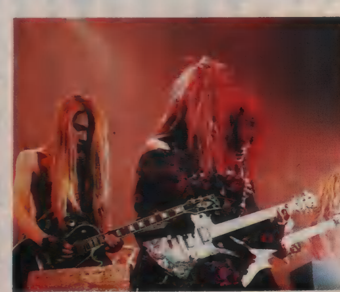












祭りだ　わっしょい　エクスタシー!!

エ　ク　ス　タ　シ　ー　・　サ　ミ　ッ　ト　　1　9　9　2

YOSHIKIが出たぞぉ!!　大阪には間に合わなかった大将が、武道館には堂々の凱旋帰国。これで役者も勢揃い、祭りだ！　喧嘩だ！　エクスタシーだ!!　つーわけで、ここではYOSHIKIのナマの声を中心に武道館を振り返ってみよう。それにしても年々派手になる一方のエクスタシー・サミット。来年は東京ドームですかい？

　とゆーわけで大将不在のまま決行された大阪大会の翌々日、場所を天下の日本武道館に移して行われたエクスタシー・サミット92。今日こそは大将に出てもらわないと全国から集まったファンもさすがに納得しないんじゃない？　オープニングからTOSHIと大竹まことさんと東海林のり子さんが今日のYOSHIKIの動向について報告。

TOSHI「今日はYOSHIKIどうなんでしょうね？」

大竹「私のつかんだ情報では成田でマドンナの写真集を持ってて捕まったらしいです」

　おいおい、そんな他人事みたいに。どうやら今日も大将が出るか出ないかは最後までわからないらしい。その代わりといっちゃなんだけど、新メンバーのHEATHを東京で初お披露目。

HEATH「どうも初めまして。HEATHです。ヨロシク」

TOSHI「今日に懸ける意気込みは？」

HEATH「がんばります」

東海林「カッコいいですよね、HEATHさん。足も細いし」

大竹「TOSHIとHEATHが同じバンドのメンバーとはとても思えないな」

TOSHI「いいんですよ、俺は。俺は特別なんですよ。だってこの3人（大竹と東海林さんと）でいるんだもん」

　そうこうしてるうちにいよいよサミットがスタート。オープニング・アクトは大阪と同じく純白の衣装に身を包んだルナシー。今ノリにノってるだけあってのっけから武道館をルナシー色に染め上げる。

　続いてはサミット初参加のDEEP、メディア・ユース、ゾルゲが次々に登場。

　ゾルゲが引っ込んだステージが明るくなると、突然ウーパールーパー、女の子、アンパンマンもどきのぬいぐるみが3体、軍配で必死に顔を隠す行事、すもうのコントで使う肉じゅばんを着た大竹まことが登場。来た来た、来ましたよ、サミット名物ぬいぐるみ大相撲。大阪大会ではやんなかったけど、やっぱりサミットにはこれがなくちゃね。そしてぬいぐるみがかぶりものを取るとその正体はルナシーのSUGIZO、レディース・ルームのGEORGE、行司はジキルのSEIICHIとそうそうたる顔触れ。

大竹「これだけはやりたくなかったのに……。誰がそんな恰好しろっていったんだよ？」

Ken「大将」

GEORGE「組長」

SUGIZO「親分」

　ということは……？　出たーっ！　ついに登場しました、エクスタシーの大将・このとんでもない企画の首謀者・なぜか名前を漢字でかくと無謀になる男、そう、YOSHIKIの登場だぁ！

YOSHIKI「みんなそんな恰好マジでやってんだもん。冗談に決まってるじゃん」

　ってアンタ、それじゃあSUGIZOやGEORGEやKenの立場は（笑）？

YOSHIKI「緊張してます。YOSHIKIです。大阪はすいませんでした。昨日の晩、帰って来まして。またすぐ帰りますけど。久し振りです」

　いきなりの大将の登場に客席は興奮のルツボ。泣き出すファンもいれば喉が潰れそうになって叫ぶファンもいる。そういえばYOSHIKIが直接ファンの前に姿を表すのは7月30日のトークライブ以来だもんな、これぐらいは当たり前か。

　そして場面は東京ヤンキースへ。4人だけで3曲を演奏し終えると、UMEが助っ人のHIDEとPATAを呼び込む。特攻服を着たHIDEが叫ぶ。

HIDE「今日はアラヤマの兄弟とペアルックってやつだ！」

　相変わらずガラが悪いHIDE（笑）。曲は「ドラッグストア・カウボーイ」。HIDEとPATAがステージを走り回る。そこに突如真っ白な特攻服にギターを抱えた金髪野郎が飛び込んで来た。YOSHIKIだ！　いきなりステージの端から端まで駆け抜ける。その笑顔は本当に嬉しそうだ。曲が「エース・オブ・スペード」に変わってもYOSHIKIはギターそっちのけで暴れまくる。しまいにゃUMEに肩車されてステージを闊歩。なんか飛び入りというよりただ騒ぐために出て来ただけって感じなんだけどなぁ？　まぁ楽しけれゃいいか（笑）。

　その後のMCにも大竹さんと東海林さんとSUGIZOに交じって顔を出すYOSHIKI。

YOSHIKI「この特攻服今日のために作ったんですよ」

　出るか出ないかわからないのにそういうとこはちゃんと用意してあるのね（笑）。

大竹「ここで質問です。今日はどんなパンツを履いてますか？」

　さすが大竹さん、ナイス質問！　しかしYOSHIKIは照れ臭そうに逃げ回る。かわいいんだな、これが。結局答えなかったYOSHIKIに大竹さんが次の質問。

大竹「じゃあ一番好きな女の下着は？」

YOSHIKI「僕は裸よりも下着をつけてる方が好きですね。でもなんでもいいですよ」

大竹「色は？」

YOSHIKI「白とか黒とか」

大竹「肌色は？」

YOSHIKI「あ、肌色もいいんじゃないですか？」

　サミットだかなんだかよくわかんなくなって来ちゃったけど、YOSHIKIにこんなこと聞けるのは大竹さんしかいないもんね。

　スクリーミング・マッド・ジョージ&サイコーシスがアバンギャルドでドラマティックなステージを展開した後のMCにも出て来るYOSHIKI。今度は大竹さんと東海林さんと脊髄を痛めて首にギプスをつけているレディースのGEORGEとの絡み。「どうしたの？」とGEORGEをいたわる優しいYOSHIKI。いつもなら「なに怪我なんかしてんだよ！」ってケリの2〜3発くれてやるところなのにね。

　とにかく今日はYOSHIKIはありとあらゆるところに顔を出す。ジルドレイが終わった後のMCでは「あんまり日本にいないんでなるべくみんなに合いたいんですよ」と温かい言葉でファンをホロッとさせる。しかし血も涙もない大竹の質問は続く。

大竹「今使ってるシャンプーは？」

YOSHIKI「チャンリンシャンです」

　これには場内大爆笑。

大竹「てめぇの女がいたとして、その女につけて欲しい香水は？」

YOSHIKI「僕は香水すっごい好きでコレクターなんですよ。好きなのはココ・シャネルとかポアゾンとか。今一番好きなのはエタニティーです。でも匂いじゃないですよ、女の人は」

　ニクイね、どうも、このフェミニスト！

　ジキルのステージの後はいつものお笑いトリオ、TOSHI・大竹・東海林さんのMC。しかしそこにも顔を出すYOSHIKI。

大竹「頭の中に好きな女を思い浮かべてください。その女の髪の毛は長いか短いか？」

YOSHIKI「どっちでもいいですよ」

大竹「指は？」

YOSHIKI「怪我してない指」

大竹「好きな女と一緒に今どこにいますか？」

YOSHIKI「好きな女の子はここにいっぱいいるじゃないですか」

　またまた出ましたフェミニストYOSHIKI。客席の女の子はもうたまんない。

　そして今年のサミットの超目玉企画、サイレント・イヤラシーズの登場だ。ギターにルナシーのSUGIZO、ジキルのKen、ヤンキースのNORI、ベースにレディースのGEORGEとヤンキースのAMI、ドラムにルナシーの真矢、ボーカルにヤンキースのUMEという顔触れで曲はご存じ「X」だ！　武道館がXジャンプで揺れる。ブリッジでTOSHIのメンバー紹介が入る。ひと通りメンバーを紹介した後、「オン・ギターPATA、HIDE、YOSHIKI！」の叫び声。ギターを抱えたYOSHIKI・HIDE・PATAにTOSHIがボーカルで加わって史上最強の「X」。ラストのNORI・HIDE・SUGIZO・PATA・YOSHIKIがステージ最前列に並んでのギター・ソロは圧巻。まさに〝祭りだ　わっしょい　エクスタシー〟だ！

　その勢いをかっていよいよラストは無敵バンド。演奏に入る前に首謀者からひとこと。

YOSHIKI「8月6日にロスアンジェルに行って久し振りに東京に帰って来てこんなにみんなに集まってもらって……。1年振りに逢う友達、みんな素晴らしい友達です。僕たちもXとしてみんなに一刻も早く会えるようにレコーディングしてますので待っててください」

　そのとき感極まったYOSHIKIの目には光るものが……。

　YOSHIKIの「気合入れて行くぞ！」の掛け声で無敵バンドのテーマソング「ゴッド・セイブ・ザ・クィーン」と「アナーキー・イン・ザ・UK」。名前を紹介されたメンバーだけでも20人以上、総勢50人は下らないだろう大セッション。メジャー組もインディー・バンドもエクスタシーじゃないカラーのTOMMYちゃんもここにいるヤツは全員仲間。楽器を掻き鳴らし大声で叫ぶその顔は本当に楽しそうで活き活きしてた。これがエクスタシー・レコードがインディーズながらここまでビッグになった理由なんだろうな。そしてそれが大将YOSHIKIの人柄なんだろう。

　それでは、年に一度のお祭り騒ぎエクスタシー・サミットが来年も続くことを祈りつつこのレポートを締めたいと思います。来年はいよいよ東京ドームですか、大将？

現場の東海林がお伝えします



司会者としてサミットを盛り上げてくれたレポーターの東海林さんは自他共に認める達人エクサー。彼女から見たメンバーの人となりをレポートだ。

YOSHIKIさんはハードで気合いが入ってる人ですね。クラシック勉強した人だから「アート・オブ・ライフ」みたいな曲も作れるんだと思うんですけど、それプラス、ミステリアスな部分を残してるのがすごいですね。それに優しいんですよ。最初はインタビューするのも緊張したんですけども、ふたことみこと話すとすごい優しい人で、「東海林さんありがとうございます」なんてごく普通にしてくれるし、聴けば秘密情報以外はなんでもしゃべってくださるし、すごく優しい人ですよ。

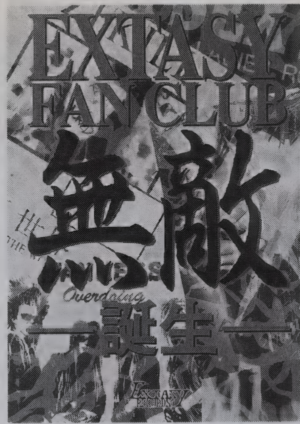
TOSHIさんは体育会系の人ですね。それにあの声がすごいんですよ。あれはXジャンプさせるだけの声だし。綺麗だとか甘いだとかじゃなくて刺すような声なんですよね。素顔はおとなしい人なんですけど、とっても人に気使うし、うんと親しくなってもきちんとしてるところはきちんとしてて、私も今回舞台に上がるときに肩を抱いて「東海林さんがんばろうね」ってはげましてもらいましたし、いい人ですよ。

HIDEさんは芸術的にすごいもの持ってるし、見た目「ウェッ!」て思うほど派手なのに、柔軟で優しいですよ。だからみんなが「HIDEさん!」ていうんじゃないかな? 大坂城の無敵バンドのとき、私、無敵の旗を持って袖で見てたんですけど、そしたらHIDEさんが来て「東海林さん!」て私の手をひっぱってセンターまで連れてってくれたんですよ。そういう気配りっていうのがすごくいいんですよね。大きな人だなって感じがしますね。

PATAちゃん(笑)。PATAちゃんは無口ですけどホントは音楽をちゃんと勉強してる人ですね。インタビューすると「いや、僕はギター弾かせてもらえればそれだけでOKですよ」みたいなね、ちょっと三枚目風に答えるんですけれど、実際はものすごい考えてる人ですよ。だから逆にそういうこと話さないんですよね。だから「猫ちゃん元気ですか?」とかって聞くと「うん、猫元気で今度L.A.で猫買って来たんですよ」なんてホントに優しい目で話すんですよ。それがまた魅力なんですよね。

HEATHさんはまだ深く話してないんですけど、Xに入って十分やって行ける人だなと思います。静かな人でね、「剣道やってました」なんてお話してましたけど。「小さいときは剣道の面をつけたい一心で習ったんです」なんていってましたけどね。だから自分からワーッとしゃべるタイプではないんですけど、聴くとちゃんと真っ直ぐ答えてくれる人ですね。

エクスタシー・ファンクラブ〝無敵〟結成

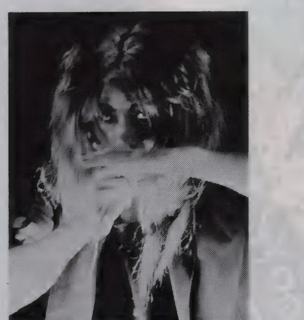


ついにエクスタシー・レコードのファンクラブが誕生した。その名も「無敵」。X、ルナシー、レディース・ルーム、ジキル等のメジャー組に加え、東京ヤンキース、ジルドレイ、メディア・ユース、ディープと新バンドもぞくぞく参加してますますパワーアップのエクスタシーを会社ぐるみで応援しよう! チケットの優先予約やグッズの通販など特典もいっぱいだ。詳しい問い合わせは〒106東京都港区六本木2-2-13ローズビル エクスタシー・ファンクラブ無敵 Tel 03-5570-0384まで。

一方X周辺の話題としては、11月21日にロンドンフィルハーモニーがXの名曲を演奏した『オーケストラ・セレクション～ブルー・ブラッド&ジェラシー～』がソニーレコードから発売される。クラシックをバックボーンに持つYOSHIKIの本領発揮だ。

そのYOSHIKIに地下鉄の駅で逢えるゾ! 地下鉄マナー・キャンペーンのイメージ・キャラクターにYOSHIKIが大抜擢、あちこちの駅にポスターが貼り出されている。(YOSHIKIとマナーねぇ、う～ん……)現在はロスで「アート・オブ・ライフ」を制作中の(ハズ)YOSHIKIを地下鉄に乗って思い出そう、なんてネ。

ハリウッドの鬼才 S.マッド・ジョージ Xを語る!



『ジェラシー』のジャケットを手がけたスクリーミング・マッド・ジョージを来日中に緊急取材! Xとのコラボレーション秘話を語ってもらった。

『ジェラシー』のジャケットの場合はYOSHIKIに〝ジェラシー〟について深く掘り下げてもらったんですよ、「どういうことやりたいの?」って。そこで出たYOSHIKIのイメージに僕が方法論をいって。〝サイレント・ジェラシー=何もいえないジェラシー〟っていうことで僕がパッと浮かんだアイデアっていうのは、YOSHIKIが向こうで鎖に繋がれてて、しかも顔がない。で、それを見てるもうひとりのYOSHIKIがいてその取った顔を持ってニカッと笑ってる、っていうのだったんですよ。でもYOSHIKIが「ふたり自分を出すのはヤだ」っていうことをいって。「それやったらYOSHIKIがひとりだけ鎖に繋がれてて得体の知れん物がYOSHIKIの顔を取るようにしたらどう?」って。それで壁から誰の手かわからへんけど手が出てて顔を取ってるというあのジャケットになったんですよ。

HIDEは僕のことをすごい気に入ってくれてるし趣味的に近いんじゃないかな? HIDEの写真集とか見てもコンセプト的にも似通ったところすごくあるし。狂気をメインにしてますからね。HIDEは僕がプロデュースしてるパラノイア・カフェっていうお店のオープン・パーティーにも来てくれて、そこは音楽も僕がセレクションしてるんですけど、そこに置いてあったCD見て「ヤバイですよ、これは」とかいうんで「どうしたの?」って聞いたら「いや、俺このCDの95%持ってる」って。「こんな自分の好きな物ばっかりがあるところって他にない」っていってて。やっぱり趣味的に似てるんでしょうね。だから今度HIDEがソロで参加する「ダンス・トゥ・ノイズ」はヤバイなって(笑)。あれ打ち込みでしょ? 「僕のサイコーシスが食われちゃうんじゃないか?」って心配してるんですけどね(笑)。

Xの世界進出ですか? 僕にはどういうふうにやるか全然見当つかないんですけど、日本語でやるのか英語でするのか、どういう売出し方をするのか。また、まったく新しいものを作るのかそれともこれまでのやつをリメイクするのか。ただ、YOSHIKIの日本的なメロディーは独特のものやし、おもしろいことは絶対おもしろいと思うのね。アメリカのロックバンドにはこれまで絶対なかったメロディーですから。アメリカでも「おもしろいな、これ」っていうヤツは絶対出て来ると思う。とにかくどんな形にせよ世界に出て行くっていうのは素晴らしいことだと思うんで、がんばってください。

速報 Xファン意識調査

エクサーのみんなもエクスタシー・サミットでのXのメンバー全員のお祭り騒ぎが見れて、お喜びのことと思います。TOSHIのソロ・アルバムも11月21日にリリースされたことだし。

さて、先々月号で大募集した、Xファン意識調査第2弾!! 「WE BELEAVE X」に、またまた、たくさんの御応募をいただきました。あんまり、たくさんのレポートが続々と届けられるので、今月号では紹介できなくなってしまうほどです。

と、いうわけなので、Xファン意識調査第2弾の特集は来月号で必ず行なうことになりまして、今月は、その速報版だよーん。

●Xファン意識調査第2弾!! 「WE BELEAVE X」の10月10日までに届いた1167通の集計結果です。

①N・Yの記者会見で、あなたのXへの想いに変化はあったか?

●変化あり・前より一層好きになった等――576人(49、3%)
●変化なし――471人(40、4%)
●変化あり・なんだか遠くへ行ってしまうみたいで悲しい等――57人(4.9%)
●無回答――63人(5.4%)

②世界デビューする次のXのアルバムは全曲英語になると思うか?

●思わない――762人(65、3%)
●思う――107人(27、5%)

③はたして世界デビューするのは一体いつ頃になると思うか? 待ってるか?

●すぐ――207人(17、7%)
●来年中には――189人(16、2%)
●来年以降――93人(7.9%)
●わからない――234人(20、1%)
●待てる――1077人(92、3%)
●待てない――0人(0%)
●聞くまでもない――90人(7.7%)

またもや、待つ人が100%だ!!



Impression

HEATH LONG INTERVIEW

今までやって来たバンドの中でも一番ラクかもしれない。それは空気なんですよね、一緒にいて違和感がないっていう。

――まずはやっぱり今回Xに加入することになったいきさつから聞きたいんですけど。

HIDEからウチに直接電話があって『状況は知ってるだろ?』、『知ってるけど』、『軽い気持ちでやってみないか?』っていうのがことの始まりなんですよ。

その頃Xはオーディションしてましたよね? でも俺はデモテープ送ってオーディションやらしてくれっていうのじゃなかったんですよ。昔からの知り合いで『じゃ軽い気持ちでセッションみたいな気分でやらしてもらうよ』っていうのを条件に行ったんですよ。そこで5～6曲やったのかな、Xの曲を。「ブルー・ブラッド」と「ジョーカー」「サディスティック・ディザイアー」「エンドレス・レイン」「スタンディング・セックス」かな? そしたらすごい気持ち良かったんですよ。それで家に帰ったらすぐ電話があって『みんなが気に入ったからどうだ?』みたいな話になって。

――HIDEとはいつ頃から?

僕は元々大阪なんですよね。で、3年半ぐらい前に東京に出て来て。その東京に出て来る半年前ぐらいに友達の紹介でHIDEに会ったんです。それでXの武道館2daysを観に行きました。それまでってXのライブを観たことなかったんですよ。

――その頃は自分のバンドは?

そのときはやっていませんでした。大阪ではやってたんですけど。

――東京に出て来てからは?

いくつかやってましたね。セッション的なものとかヘルプでやってたのもあります。

――自分がリーダーでやってたんですか?

そうですね。人集めたりするのは自らやってた方で。でもリーダー的存在っていうのにはならなかったですね。いつもバンドをやってもリーダーがいて、そいつの補佐役っていうか。いつも仲を取り持つ役だったんですよ。リーダーがいてメンバーがいて、その間を。バンド内でもめごととかあるでしょ? そういうのを聞いて仲裁する役とか。

――で、Xから声がかかったときは自分のバンドはどういう状態だったんですか?

行き詰まってはなかったけど、自分の中で『このままでいいんだろうか?』っていうのが多少なりともありました。メンバー4人で喫茶店とか行くでしょう? でもなんか溶け込めないというか空気が違うという。その辺すっごいはっきり出ちゃうタイプだから。合わないヤツとはとことん合わないんです。で、それを『俺に問題があるんじゃないか?』とか考え出してもう頭がパニックしてしまったり。

――じゃあXに誘われたときは光が見えた?

確かにセッションで音出したときに手応えみたいなのがありました。そのときは『よし、俺はXに入るぞ!』みたいな気持ちで行ったんじゃないからすごくラクに出来たし。だから気持ちとしては『鹿鳴館とかでセッションやらない?』みたいな感じで誘われてそれでスタジオで合わせたっていう感じですね。

――でもあのXですよ?

俺、そういうのないんですよ(笑)。Xだろうがインディーズの駆け出しのバンドだろうが一緒なんですよ、見る目は。だって気持ち的には一緒でしょ? Xだってバンドだし、インディーズだからっておろそかにやってるわけじゃないでしょ? だから鹿鳴館でライブやるのも東京ドームでライブやるのも意気込みは一緒なんですよ。ドームでやってて次の日シークレットで鹿鳴館でライブやるっていっても手を抜くわけには行かないでしょ?

――で、実際に合わせてみてリズム隊としてYOSHIKIのドラムはどうでした?

結構前ノリだと思うんですよ、YOSHIKIのドラムって。俺も前ノリなんですよ。その面では助かりました(笑)。

――じゃあいきなりスッと入れたと?

そうですね。ヘンに身構えもしなかったし。二日酔いだったせいもあるかもしれないですけど(笑)。前の日にHIDEと朝まで飲んでたんですよ。『じゃあ今日ね』とかいって朝バイバイして、それでスタジオ行ったら二人共目が死んでて(笑)。

――それで『入らないか?』っていう電話がかかって来てから決断するまでにどれぐらい期間があったんですか?

電話があって俺は『ちょっと待ってくれ』っていったんですよ。それから一週間ぐらいかな? でも考えてるうちに『気持ち良く音を出せるところのほうがいいな』って。ヘンないいわけになっちゃうかもしれないですけども、『Xでやりたいな』と思いつつ今のバンドをやるっていうのは逆に今のバンドにすごく失礼になるのではないか? って思って。

――そこで、音楽的にはさっきもいってたように気持ち良かったっていうのがあってもメンタルな部分ではXの中でのポジションていうか「いきなり入って自分の居場所があるのかな?」とかって考えませんでした?

逆にそういうのを考えないようにしてるんですよ。というのは、考えるとそのポジションに無理矢理入ろうとしちゃいますよね。そうなるとキツくなるんですよ、自分も周りも。だからそういうのって自然な形で出て来るのが一番いいと思うんですよ。

――端から見てると大変そうですけど(笑)。

結構ラクですよ(笑)。今までやって来たバンドの中でも一番ラクかもしれない。それは空気なんですよね、一緒にいて違和感がないっていう。なんかもうずっと前から知り合いのような感じなんですよ。

俺ってすごい人見知りするんですよ。その俺が気楽にしゃべったりメシ食いに行ったり出来るっていうのは自分でもたまに『えっ?』と思います(笑)。

――でも普通は4人いれば一人ぐらいはイヤだなって思うヤツいますけどね(笑)。

いてもいいんですけどね、普通(笑)。そういうのもないんですよ。

――時期的には返事をしたのはいつですか?

6～7月辺りだったと思います。

――それから一カ月ぐらいして海外に行くわけですけど、その間は何を?

リハーサルですね。

――新曲の?

いや、昔の曲です。

――どれぐらいのペースでスタジオに入ってたんですか?

詰まって入ってたときもあったしガバッと空いちゃうときもあったし。ペースっていうペースはなかったですね(笑)。



The First

Xの新ベーシストHEATHとは、どんな人間なのか!?
NEW YORKの記者会見ではじめて、その姿を表したHEATHは、10月29日のエクスタシー・サミットで日本のファンの前で、初めてXのベーシストとして紹介されたのだ。HEATHは、サミット終了後もしばらくは日本にいるという。と、いうことで、HEATHにコンタクトをとることができた。HEATHに、彼自身のルーツ、生い立ち、そしてX加入のきっかけ、そして、最も気になる今後のXの動向とレコーディングの様子を訊いた!!
HEATHにとっても、これがはじめてのソロ・インタビューとなる。

Photography **Mamoru Kitahara** Text **Yusuke Kato**

HEATH LONG INTERVIEW

The First Impression

——Xに入る前と入ってからではベース・プレイは変わりました？

基本的には全然変わってないですよ。

——新しく自分なりの味をXに吹き込もうっていうのは何かありました？

今までの自分をそのまま取り入れればいいなと思ってるから。Xだから誰々風にしようとかは思ってないし、逆に出来ないです（笑）。

——リハーサルしてくうちにメンバーの印象が変わったりとかはありました？

ほとんど第一印象のままです。みんな楽しい人ですよ（笑）。基本的には連れ感覚で、でも俺が一番年下だからフとすっごい優しい面があったり、全員。そういうときに兄貴的な存在に見えたり、仲いいですよ。みんなで飲みに行くこともあるし。

——そのときに音楽の話になると思うんですが、自分ではどんな音楽が好きなんですか？

俺ジャンル分けするとわかんないんですよ。一番筆頭にはハードロックですけども、ジャズも好きだしパンク系も好きだし。

——じゃあロックに入ったきっかけは？

きっかけは小学校のときにヴァン・ヘイレンの2回目の来日を観に行ったんですよ、兄貴とお母さんに連れられて。

——珍しい家族ですね（笑）。

母親が好きなんですよ（笑）。出掛けると言うからついて行ったらヴァン・ヘイレンだったんですよ（笑）。それを観ていきなり。始めはなんだかわかんなかったんですよ、いきなり暗くなってライオンみたいな人が出て来てガーッとやっちゃうでしょ？ でももう脳天杭打ちみたいな『うわーっ、何これ？』みたいな（笑）。それから変わっちゃいました。

——小学生で長髪だったとか（笑）？

いや、俺、幼稚園のときから長髪なんですよ（笑）。たぶん父親が女の子が欲しかったんだろうと思うんですよ。だから昔の写真見ると普通だったら坊主とか刈り上げでしょ？でも俺は子供の頃から髪の毛長くて。

——女の子物の洋服着せられて（笑）？

いや、それはないですけど（笑）。でも女の子によく間違えられてましたね。

——それから最初にバンドを組んだのは？

中学2年生のときかな？ 文化祭のために作ったっていう感じだったんですけどね。

——どんなジャンルの音楽をやったんですか。

ちょうどヘビーメタル全盛期だったんですよ。だからオジー・オズボーンとかマイケル・シェンカーとか。

——その頃からもうベースで？

そうです。ウチの兄貴がギターやってて、たまたまベースもあったんですよ、ドラムもあって。でもドラム触ると『うるさい！』って怒られるからベース触ってたんですよ。

——ジャズが好きだっていうのは？

ジャズを好きになったのは本当にベースを好きになってからですね。中学2年の後半にモトリー・クルーのニッキー・シックスを観ちゃって『もう足洗えないな』っていう（笑）。

それまでは『ベースは地味なもの』というのがあったでしょ？ それがニッキー・シックスを観てから変わっちゃったんですよ。その頃はいろんなライブハウス行ったりしてたんですよ、学校休んで（笑）。で、その周りとか歩いてるとベースの音ってすごく聴こえるんですよね。で、ジャズとかやってるライブハウスの前に行くと『これどうやって弾いてるんだろう？』って。

何でも解読するのが好きなんですよ（笑）。例えば今こうやって録音してるテレコでも『どうなってるんだろ？』ってすぐ開けちゃたりして（笑）。だからよく怒られてたんですよ、オモチャ買ってもらってもすぐ開けちゃってたから（笑）。

——じゃあ今の自分のプレイに一番影響を与えたのはやっぱりニッキー・シックス？

そうです。もう何から何までニッキー・シックスです（笑）。俺から見てニッキー・シックスっていうのはロックしてるんですよね、演奏してないときでも。常にロックしてるんですよ。こうやってタバコ吸っててもロックしてるんですよ。そういうとこがカッコいいと思って。あの人は死ぬまでロックしてるんだろうなって思いますね。

——生き方まで変えてしまった？

変わりましたね、人生が（笑）。未だにこうやってバンドやってますからね。昔一緒にやってたバンド連中はほとんど止めちゃいましたから。

——やっぱり「一生バンドで食って行くぞ！」みたいなのはあったんですか？

はい。もうバンドやり始めたときから。

——夢っていうか理想像とかあります？

理想は『こうなりたい』じゃなくて『ずっとバンドしてたい』っていうのが理想なんですよ、おじいさんになっても（笑）。

——無欲ですね（笑）

いや、もしかしたらすっごい大きな欲かもしれないですよ（笑）。

——で、新メンバーの発表がいきなりニューヨークでの記者会見だったわけですけど、緊張しませんでした？

全然なかったです。外人さんがいるから緊張するとかは全然ないし。昔そういうところで働いてたから、外人に囲まれて。

——えっ、どこで？

六本木でバーテンダーやってましたから。

——じゃあ英語もペラペラなんだ？

そんなとこで覚えた英語なんて使えませんよ（笑）。殺されちゃいますよ（笑）。

——でもなんで緊張しないんだろう？

逆に出たいっていう気持ちの方が大きいから緊張しないと思うんですよ。それに今やってることって全部楽しんでやってるから、その楽しさがあればヘンに緊張する事もないだろうし。

でも『緊張してない』っていうとただボーッとしてるように思われるかもしれないですけど、そういうのとは全然違いますよ（笑）。ビッと筋は入ってます。

——そしてこの前のエクスタシー・サミットが日本のファンには初のお披露目になったわけなんですけど。

結構自分としては温かかったと思いました。オープニングで出て行ったときも温かい声援を送ってもらったし。

——ファンレターとかもらったりしてます？

ええ。やっぱり応援してくれてるっていうのが大半ですね。

——TAIJIと比べられたりしません？

うん。『比べられるだろうけど、負けないでがんばって下さい』っていう感じですね。別に比べたければ比べてもいいし、そんなの人の勝手だから。文句いいたいヤツはいえばいいし、全然関係ないですね。

——なんかすごい自信ですね。

自信になるのかなぁ？ それを気にして解決策があるのかっていっても何もないでしょ？ そんなこと悩んでても仕方がないし。

——ところでレコーディングはどうなってるんですか？

ずっとやってます。

——どれぐらいまで進んでます？

どれぐらいまでなんでしょうね（笑）。よくわかんないんですよ（笑）。

——とりあえず「アート・オブ・ライフ」のレコーディングですよね？ 完成はいつぐらいになるんでしょう？

僕が聞きたいです（笑）。

——でもやっぱりXとしてライブをやりたいですよね。

それはサミットで一千倍ぐらい思いました（笑）。早くライブで観てもらいたいですね。

——こっちも同じ気持ちなんですけど（笑）。

もうしばらくお待ち下さい（笑）。

——じゃあ最後に今後の豊富を。

今までやって来たことを一粒残さず出したいですね。基本的には昔と変わんないんですよ。だから、ライブとかはいつになるかはわからないんですけど、そのときの俺が今までの俺だと思ってもらえれば。人に指図されるのはすごい嫌いだから、やりたいようにやらしてもらうから、ライブを楽しみに待ってもらえれば嬉しいですね。



親愛なる音楽ファン並びに
音楽業界の皆様へ

当職は、アーティストYOSHIKI、そのマネージメント・オフィスの
株式会社ジャパン ミュージック エージェンシー及びアーティスト「X」のマネージメント・オフィスの
株式会社エクセス・トゥエンティーフォーを代理して、以下の通りお伝えします。

1991年にあるレコード会社より1枚のCDが発売されました。このCDの収録楽曲は全て、YOSHIKI及び他の「X」のメンバー(以下まとめて「アーティスト」といいます)の作曲になる楽曲により構成された、オーケストラ演奏によるクラッシック調の企画CDです。これは、作家であるアーティストに対して、事前に了解を求める連絡もなく発売されました。このCDの発売後、アーティストは発売レコード会社に対し、作家としての立場から、こうした企画物CDを制作する場合には事前にアーティストの了解をとって欲しい旨の申し入れをしましたが、これは容れられず、さらに1992年にアーティストの別の楽曲を使用して同様のオーケストラ演奏によるクラッシック企画CDが発売されました。また、別のレコード会社からもオーケストラ演奏によるこれと同様の企画のCDが発売されます。楽曲の作家本人の了解なしにその意図していない形態でのCDの制作や発表が可能であるのは、わが国における著作権制度でこれが許されるからであり、これらのCDは、アーティストの著作権を侵害するものとはいえません。しかしながら、ここで皆様に訴えたいことは、これらのCD作品にはアーティスト自身、一切その企画や制作に関わっていないこと、従って、これらを御購入なさろうとする皆様におかれては、この事実を御認識のうえ、御購入いただきたいということです。
原曲をその原型とは異なる形で使用する場合、最低限、作家本人の了解を得たうえで進行されるべきである、というのが私たちの希望であり、著作権者である作家本人が当然に主張しうることであると私たちは考えています。
アーティストを含め多くの作家やミュージシャンの本質的な権利を少しでも確保していくために、以後機会ある度に私たちは主張していく所存です。
皆様の御理解を頂ければ幸いです。

1992年11月

株式会社ジャパン ミュージック エージェンシー
株式会社エクセス・トゥエンティーフォー
上記代理人　弁護士　内藤　篤

YOSHIKI単行本を執筆中の作家、小林信也(ヒーロー工房)に訊く!!

わずか半年の間にまたYOSHIKIは変貌した。見ているだけで、刺激的です。この本が、世界デビューへの序曲になれば、うれしいです。

ニューヨークでのXの世界デビュー記者会見をレポートしてくれた"空飛ぶスポーツ・ライター"小林信也氏の熱い文章は、未だに記憶に新しい。熱いのは文章だけではない。YOSHIKI、そしてXに対する想いも熱い。主にスポーツをそのフィールドにする作家、小林信也氏にYOSHIKIとの出会い、そして、何故、YOSHIKIを追うのか、この本で表現したいものは何か? を訊いてみた!!

——スポーツライターとして活躍中の小林信也さんがYOSHIKIと出会ったのはいつなんですか?

小林 三年前の夏、僕が秘密で借りている仕事部屋に、YOSHIKIが突然現われたんです。

——仕事部屋に?

小林 ええ。僕は眼の手術をした直後で、絶対安静にしてないと失明する、恐怖のどん底にいました。

——失明って、眼が見えなくなる?

小林 そうです。まさか自分が失明するなんて考えてなかったから、動揺しました。一応手術は成功したんですが、ショックでした。

——そこにYOSHIKIが?

小林 取材もできない、原稿も書けない、ただジッと眼をつぶってソファに体をゆだねて過ごすしかない。18歳で上京してから15年間、僕はガムシャラに走り続けて来た。世界一の作家になろうと決めてたから。日本一じゃなくて世界一の。だから必死。出版社や編集者とはケンカばっかり。"こう書きゃ売れる"なんて原稿、書いてたまるかってね。突っ張りすぎたお蔭で眼をやられた。これから一体どうしようか、途方に暮れてるところにYOSHIKIが現われて。いきなり僕の胸の中に手を突っ込んだ。「オイ、やめろ」、こっちは相手が見えないから、誰の仕業かわからない。ナイフで胸を差されたような、戦慄。ところがYOSHIKIは、僕にトドメを刺しに来たんじゃなかった。胸の奥にしなやかな指を差し入れて、しおれかけた僕の魂をやさしくさすってくれた。部屋じゅうに、冴えた和音の連なるピアノのメロディーが響きわたった……。

——Xの曲?

小林 最初はわからなかった。刺すようなボーカルも、人の声とは思えない。凄い曲だ、気持ちいい涙がとめどなくあふれ続けた。

あとでその曲が「エンドレスレイン」と知った。

——なるほど。で、その後は?

小林 YOSHIKIが、また現われたんです。二度目は僕の事務所です。今度は眼も回復してたから、美しいYOSHIKIの姿をこの眼に焼きつけました。月明かりに、ボワーッと映し出されたような不思議な光をYOSHIKIは放っていた。

——何しに来たんです?

小林 赤い糸で結ばれているとでも言うのか(笑)。僕の事務所は『ヒーロー工房』といって、作家である僕の事務所と、国際的に活躍する白石ひろしトレーナーのクリニックが合体したものなんです。そのクリニックに、首を傷めたYOSHIKIが治療に来ていたというわけです。

——偶然なんですか?

小林 まったく偶然です。それで僕は、自分とYOSHIKIの運命的な出会いを歴史的な必然なのだと秘かに確信しました。

——まるでゲーテとベートーベンのように?

小林 うーん、それには答えられない。僕とYOSHIKIの関係は、過去のどんな作家とミュージシャンが築いた関係とも違うし、もっと革新的な存在でありたいと思うから。

——ところで、今度の単行本で、小林さんは何を表現したいとお考えですか?

小林 心です。

——心?

小林 僕はホンモノを探していた。自分を激しく触発し、かき立ててくれる本物との出会い。虚飾に彩られたアイドルではなく、純粋な人間たちの魂を刺激し昂奮させてくれる本当のアーティスト。僕は理屈抜きに人を喜ばせ、体の芯から震えさせてあげたい。Xが、YOSHIKIが、ライブでそうしているように。

——YOSHIKIを描く本は、YOSHIKIの創る曲やライブを越えられますか?

小林 それは、YOSHIKIと議論になった点なんです。武道館でのフィルム・ギグが終わった夜でした。僕は「本なんて所詮、文字の世界、ライブを越えることはできない」と言った。するとYOSHIKIは「そんなことない」と反論した。僕が音楽を絶対視し、YOSHIKIが文学を擁護する。逆のような議論は平行線のまま終わった。

——小林さんは文字の力を信じていないんですか?

小林 作家だから逆に、文字のウソにうんざりしている。Xのライブにはウソはない。パワーがみなぎっている。本で表現することはできない。あれを言葉で表現できるなら、あんな苦労してYOSHIKIがライブをやる必要がない。

——そりゃそうですけど。じゃあなぜ、急に本を書く決意をされたんですか?

小林 アメリカ、かな……。世界デビューの記者会見に行って、僕は激しく燃えてしまった。僕はアメリカも好きだし、アメリカ人も好きだ。でも、どこかでまだ日本人はアメリカにカタをつけきれていない。それを思い知らされた。Xはアメリカで絶対、勝たなくちゃいけない。だから僕も一緒に闘いたいと思った。文章でXを越え、Xをかき立てるつもりでね。YOSHIKIやファンを僕の本で触発し、もっと凄いXの世界がほとばしったらうれしいと思う。

——小林さんは去年のツアーもほとんど全部同行し、ライブの前後もYOSHIKIに最も近いところに連れ添っていたと聞いていますが、小林さんから見てYOSHIKIはどんな人間ですか?

小林 遠い星、遠い時代から来た人だと思います。いくつもの魂を受け継いでYOSHIKIが生まれた。YOSHIKIはそれを否定しているけれど、YOSHIKIは何千年もの時代を超えて生きている"星"かも知れない。

——謎に包まれているYOSHIKIの過去へのアプローチも単行本の中ではしてもらえるんですか?

小林 YOSHIKIや僕のいるアーティストの世界では、過去・現在・未来という観念さえ消え去っているのです。僕らは時空を超えて自由に旅をするし、誰とでも話ができる。広い意味で、YOSHIKIのルーツに迫るのか、と聞かれれば答えはイエスです。今はその謎を探る、冒険旅行をしている真っ最中です。

——東京ドーム以後の最近のYOSHIKIについても、本の中では触れられますか?

小林 もちろんです。意識としては、それがすべてです。ニューヨークでも、ロサンゼルスでもYOSHIKIと会いました。わずか半年の間にまたYOSHIKIは変貌した。見ているだけで、刺激的です。この本が、世界デビューへの序曲になればうれしいです。

——ニューヨークでのエピソードなど、少し教えて下さい。

小林 記者会見を終えてYOSHIKIが外に出たのはもう夜の11時過ぎでした。出迎えのリムジンに乗り込む前に、YOSHIKIはふと振り返り、自分が主役を演じたロックフェラー・センターの65階あたりを見上げた。ずいぶん首を傾けないと見えないくらい高い場所をつくづく見上げて、「すごいところですよねぇ……」、YOSHIKIは言った。そして、「初めて東京に出た時みたい」、ポツリと呟いた。

「これでダメだったら、髪の毛も切って、名前変えて日本に帰らなくちゃ……」

それは清々しい言葉だった。アメリカでダメならまた日本でやればいい、とは思っていない決意の表われだから。YOSHIKIには世界で勝ってほしい。僕も勝ちたい。

YOSHIKI

単行本「夢の中にだけ生きて」(仮)

著者：小林信也(ヒーロー工房)

発売：ソニー・マガジンズ

世界を目指すアーティスト・YOSHIKI(X)と世界一の作家になろうと決めた作家・小林信也氏。
この本は、この二人の文字によるまさしく"真剣勝負"!!
"自分を激しく触発し、かき立ててくれる本物との出会い。純粋な人間たちの魂を刺激し昂奮させてくれる本当のアーティスト"
小林氏は探していたホンモノに出会えたのである。現在、YOSHIKIの謎を探るべく冒険旅行をしている真っ最中と語る小林氏。
まだ、闘いは始まったばかりだ……。

制作突入!! 詳細は次号にて!!

BY-SEXUAL 63



〝君が嘘をついた〟(←むっちゃ懐しい)や〝クリスマス・イブ〟みたいにドラマチックなことがあるわけでもないという君にも，そして私にもクリスマスはやってくるんや。そこで，そんな淋しい君に捧げるバイセクシャル・クリスマス秘話。どうやらルックスに似合わず，彼らも悲惨なクリスマスを送ってきたようである。それを読んで君も安心しよう。そして プレゼントに応募して一足早いクリスマス・プレゼントをもらおうではないか！

UNICORN 55



ユニコーンさんがバンドとしてのシングルを久々にリリースします。タイトルは「雪が降る町」でごんす。そうとなりゃ，この冬はユニコーンさんのニュー・シングル1枚でハッピーに過ごせるっつーもんです。♬きっときみはこな～い～，や，♬しぃろいぃクリスマスゥ～，のような冬の定番ソングを目論むユニコーンさんです。大好評の応募者全員サービス企画「セルフ・ライナーノーツ」も第2回目を迎えておりますし，やっぱユニコーンさんはパチ▶ロクね。

TERRE PIERCE 124



3部作の完結は「Dream is Over」もうすでに3枚のアルバムを出しているが，イマイチ知られていないのは超残念。一度だまされたと思って聴いてみてほしい。きっと彼らの音と世界が好きになるはずだ。

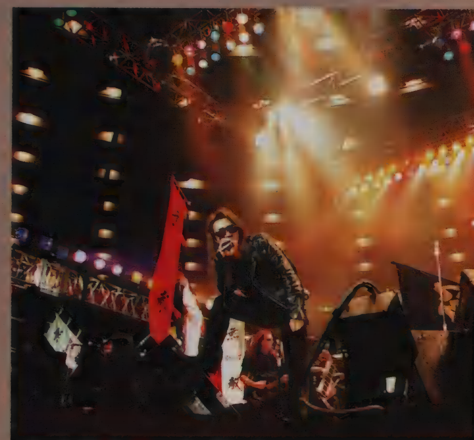
LADIES ROOM 126



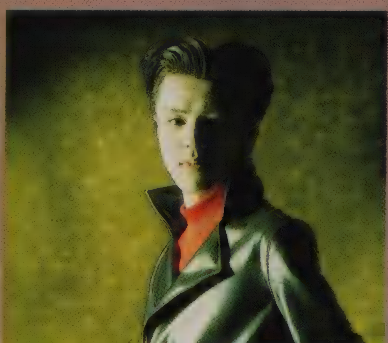
10月18日，日比谷野音のライブをレポート。気合い入っとりまっせ。

OPENING SPECIAL 4

X



今月のオープニング・スペシャルのXは，超X進行で締切りを大幅に過ぎています。もし，発売日が遅れてたら，このページのせいかも……。そのかわりと言っちゃあ何だけど，今月の内容は濃い。まず，HEATHのパーソナル・インタビュー。謎につつまれていた新ベーシスト・HEATHに迫ろうと思います。HEATHとは，一体どんな男なのか！ 何を語ってくれるのだろうか！ まだ取材してないので分かりませんが，本文でキッチリお届けしようと思います。
そして，10月29日・大坂城ホールと10月31日・日本武道館で行なわれたエクスタシー・サミット!! レコーディングの為，YOSHIKIは残念ながら大阪を欠席したが，武道館ではそのぶんパワー全開。年に一度のエクスタシー祭りをレポートしました。



BRAIN DRIVE 115

怒り，悩み，苦しんでいた先月号から一転して，ブレドラのお2人はやけにハイです。東京での初ライブがあまりに好評だったので気を良くしたのが，はたまたお友だちができたことによる孤独感払拭が原因なのか……なにはともあれ彼らは妙に元気です。こっちとしてはあまり面白くありません。(笑)でもいいんです。きっと来月は「元祖・自虐ソルジャー」振りに拍車がかかり，またこの欄に「先月号から一転して」と書けるはずですから。わーいわーい，ブレイン・ドライヴばんざい。

布袋寅泰 84

GUITARHYTHM WILDの手応えを訊く!!

電気GROOVE 72

まさか本当にやってくれるとは，の武道館。

氷室京介 68

11月7日にリリースされた「Good Luck My Love」と12月7日にリリースされる「KISS ME」のレビューを送る。もう，ツアーの日程も発表されたことだと思うが，'93年1月11日と12日の横浜アリーナから彼のツアーがスタートする。彼のアルバムが届くのは，そのちょっと前の1月7日になるらしい。来月号（12月27日発売）のパチ・ロクでは久々に，彼と彼のNEWアルバムを巻頭特集でお届けする予定である。約2年振りのオリジナル・アルバムに期待はたかまる。

JUN SKY WALKER(S) 111

新境地を見せたニュー・アルバム「STAR BLUE」をひっさげて，ジュンスカさんは全国ツアーに旅立ちました。パチ▶ロク取材班はその初日，11月13日浦和市文化センターを誌上速報すべく会場に向かったわけですが，なんと我々がそので目にしたものは!?…ムリにアオるつもりはないんですけど，かねてからのファンには「アッ!?」と驚く変化が渦巻いていたのでした。確実にグレード・アップしたロックンロール・ショウ。しかしその変化の陰に隠されていたものとは!? オォ～。

LOVE MISSILE 88

ひと足お先に Happy X'mas。

COW COW 54

アルタ前で行われたCDバラマキ作戦は…

SOY SAUCE SONIX 90

行ってきました。沖縄に。あー出張は楽しい

ORIGINAL ROCK'N'ROLL 95

リトル・クリーチャーズ／NOBODY／Deep's／THE 真心ブラザーズ／エレクトリック・グラス・バルーン／16TONS／スチャダラパー／NACK 5 REGGAE CONNECTION／ロッカベイビーズ／THE MAD CAPSULE MARKET'S／SION／THE BOOM／SOFT BALLET／ブースカ・バンド／etc…

Z BACK 92

Z-BACKはなんたってライブだぜぇ～!!

ZIGGY 103

スタッフから ZIGGY への熱いメッセージ。

LETTERS+COLUMN GO GO PARADISE 107

ダイエット情報 Thanx！ でもやせなかった。エヘッ。

LUNA SEA 118

RYUICHIパーソナルとスペシャル企画。

PRESENTS 128

すかんち 77



すかんち御意見番に投書してくれた読者さま方，本当にありがとうございました。応募は殺到しましたが，メンバー全員，ありがたく目を通させていただきました。選ばれた2名の方には㊙豪華プレゼントを贈らせていただきますので楽しみにしていて下さい。シングル〝恋するマリールー〟もリリースされ，2月にはアルバムも発売されるすかんち。ビッグ・スターになるためにも，これからみなさま方の貴重な御意見を随時受けつけます。

ROCK'N'ROLL

掲載
アーティスト
スペシャルグッズ
プレゼント

PRESENT RR SPECIAL GOODS
R²

MONTHLY パチ・パチ・ロックンロール
PATi▶PATi ROCK'N'ROLL

1
JAN. 1993
VOL. 67

第7巻第1号1993年1月1日発行
編集人:吾郷輝樹　発行人:吾郷輝樹　発行所:ソニー・マガジンズ
〒102東京都千代田区五番町6-2 TEL 03-3234-7906 (編集)
印刷：大日本印刷株式会社

EDITORS **Teruki Ago, Takashi Haga, Hideki Hayashi Miho Shimizu, Junko Hirahara, Miho Takeuchi, Rie Ohba Mizuho Chiba**
ART DIRECTIOR **Jin Ogawa**
DESIGN **Jin Ogawa, Masaru Yamachika** for ACCA International Ltd.
DESIGN ASSISTANT **Chieko Sasaki**

Contents



B-Tはこの1年の間に2つの集大成的作品をリリースしている。1つは昨年11月のヒストリー・ビデオ『BUCK-TICK』，もう1つは今年3月リメイク・ベスト『殺シノ調べ』である。オリジナル作品は『狂った太陽』以来，間もなく2年になるほどご無沙汰だが，ここにきて（おそらく最後の）集大成的作品が登場した。――その名は『Climax Together』――既にお伝えしたとおり，9月10，11日の横浜アリーナ公演を収録したライブ映像だ。我々はモチロンのこと，彼ら自身にとっても，それまでB-Tの足跡を再確認し，新たなる方向の確立を促す重要な作品と言えるだろう。今月号のパチ▶ロクはあらゆる意味で今後のB-Tを占う内容となっている。わかってもらわにゃ困るぜよ――。



パチロク初登場以来，約1年。DJ PEAHに始まり，OKAZAKI，MIYO-KEN，KOICHIROと続いたM-ageパーソナル・シリーズ最終回はKAJIWARAだ。ロンドン・レコーディングのことも含めた彼の近況のあれやこれや……

桜井君の隣に座っている可愛い女の子はモデルのナタリー。ブロンドに透けるような白い肌。たどたどしい日語で桜井君のことを"カジュ"（カズのつもり）と呼ぶ。メンバーの顔はニヤケっぱなし（田原君以外）。これもひとつの"Kind of Love"。



Buck-Tick
Climax Together
premium

Photography Atsushi Ueda Styling Tomoharu Yagi
Hair & Makeup Takayuki Tanizaki Painting Atsushi Ueda
Writers: Satoshi Kojima, Dai Onojima
Koh Imazu, Mitsuru Hirose, Tomoko Imai

12月2日に発売されるB-T久々のライブ・ビデオ『CLIMAX TOGETHER』を記念して、大特集を組んでみた。確かにビデオ発売はおめでたいが、その内容は皆さん自身が自分の目で確かめてもらうとして(ひと言申しあげるなら、仲々見応えのある秀作ですよ)、今回は彼ら自身による「B-T再評価」をメイン・テーマに取材を進めてみた。殺シノ調べツアー以降(大ゲサに言えば『狂った太陽』以降!?)しばしの休養、そして9月の単発ライブを経たことにより、彼ら自身が「B-T」というひとつのカテゴリーを客観的に静観できるだろう、と判断したからだ。ビジュアルに関しても、おそらく今まで皆さんが見たこともない〝強烈〟なものだろうと自信を持っている。まあ、ここでウダウダ言ってもしょうがない。とにかくその目でじっくりと〝体験〟してくれ。




Buck-Tick
Climax
Together
premium










Buck-Tick
Climax
Together
premium


Buck-Tick
Climax Together
premium




Buck-Tick
Climax Together
premium




BUCK-TICK


Buck-Tick
Climax Together
premium

逝く夏の歌、宿酔、修羅街輓歌。

～遠い夢、破壊工作～それぞれの「バクチク」論

かつて「バンドブーム」というものが本当にあったのだとしたら、その保守本流とされていた「健康的ビート・パンク」迎撃の任務を背負っていたB-T。それが事実か否かは別にして、彼らの特異なキャラクターと音楽性は、明らかに時代との同時進行を経験していない。「B-T」というブランドは、半ば歪曲されて増幅してきたが、今後の彼らには「正当」な可能性が無限に広がっている。

Buck-Tick Climax Together premium

彼らの音楽が，数字の増大によって薄められることはない。

小島智 Satoshi Kojima

これは何号か前の本誌に書いたことだが，僕が少し前にしばらく離れていたこのバンドをもう一度しっかり見てみよう，と思ったきっかけは単純なことだった。それはやはり本誌のインタビューで約三年ぶりぐらいに今井に会った時の言葉だ。「ジーザス・ジョーンズとかのイギリスのミュージシャンたちに，常に自分たちがやりたいと思っていることを先を越され，やられてしまうことが悔しい」などといった内容のものがそれだったのだが，ある意味でこうした，時代を象徴するような音楽と自分たちの音楽との距離をきちんと認識する，ということは案外今の若いミュージシャンたちにはできていないことなのではないだろうか。もちろん大好きなある特定の音楽を頑なに持ち続けるのはいいことだと思う。そして古き好き時代のそれを愛するゆえ，ここしばらくデジタルな音が，「人間味を感じない」という理由でどうして受けつけないミュージシャンたちの気持ちもわからないてはない。が，逆にそれゆえ，自分らのまだまだ浅いキャリアやサウンドの包容力の弱さみたいなものを妙なコンプレックスの裏腹のがむしゃらのみでフォローしたところで，オリジナルなものに到達するには長すぎる時間が必要なのは推して知るべしのことだ。その辺り，日本の彼らと同世代のバンドたちが持っているだろう、そして誰もが気づいているとは言い難いマイナス点をBUCK-TICKのメンバー，少なくとも今井個人は気づいていると僕はその言葉から感じたのだ。

そんなことがわかってからは，彼らの作品，特にステージに対しての楽しみ方が，僕にとっては随分と深くなったのは事実である。特にこの十二月に発売になるビデオ作品，『Climax Together』のシューティングのために行われたこの九月の横浜アリーナでのものは彼らのそんな今の状態をよく表した，とても印象深いものだった。サンプルとして渡されたビデオを観ても感じられたことだが，メンバー全員がそうした距離感を弁えたゆえ，自分らの作品の特性をも把握し，結果ステージのツボを押さえ，荘厳だったセットと見事に同化し，自己を無理なくアピールしていた。裸の自分を肉体を使って出すことはある意味でたやすい。しかし自らのレパートリーと正しい距離を取ることは意外と難しい。徒に客を煽るうなMCはしなかった櫻井の，そしてあまり定位置を動かずに堂々としたプレイを聴かせていいたフロントのメンバーたちのこの日の姿に，今の彼らに確実に，自分のステージでの表現力を各自がきちんと理解し，何をすれば最も有効か，という点を認識していることを僕は理解したのだ。

こういい切ってしまうと反論がある人もいるだろうが，僕は自己の音楽に対しての批評眼みたいなものがどれだけ鋭いかが，そのアーティストの資質を決める一番の基準になると思っている。デビュー当時はナルシスティックだった彼らも，ここしばらくの間で確実に鋭いそれを持ち始めている。彼らの音楽が，それを取り巻く数字の増大によって薄められることは当分の間は，ないだろう。

ここへきて彼らは，ルーツとセンスを作品に直結できた。

今津甲 Koh Imazu

初めてバクチクの音を聞いたのは4才から5才の頃だったと思う。場所は横浜の中華街。「中国の人はオメデタイ時には爆竹を鳴らすんだよ」と両親が教えてくれた。すいぶんとけたたましい祝い方に，ほのかなエキゾチズムを感じた。

それからかなりたって香港に行った時，再びその音を耳にした。おなじ頃，バクチクという名のバンドの存在も知った。HONG-KONGとBUCK-TICK。どこか似た響き…だからというわけではないけれど，彼等のメロディーにはアジア系歌謡曲のニオイをかいでいた。それがあの速いビートにのっかることで“日本”を感じさせもした。

女の子に対してでも何に対してでもめったにひと目ボレしないボクの前にBUC-KTICKはそんな印象をもって登場した。そしてデビュー後しばらくは，それ以上でもそれ以下でもない存在だった。新作が発表されるたび，アレンジの独自性がスパークした「ICONOCLASM」，音のやさしさと詞の痛みが出会った「LOVE ME」…と，新作毎に印象は強化されていったけどネ。

ボクがB-Tに夢見たい部分。それは，メジャー・シーンの中でどれだけ鋭いアンダーグラウンド（＝私的）感覚の花を咲かせられるか？　といった所だ。彼等はデビュー時期から多くさんのファンを獲得してきた。一方でバウハウスやテクノ系といった音楽的ルーツを持ち，並ならないビジュアル・センスを持っていた。この2つが出会った時，バンドの存在価値は思いっきり高まるような気がしていた。

そして出会いはやってきた。シングル「スピード」とアルバム『狂った太陽』の登場だ。「スピード」は一曲の中に少なくとも3つの世界を交差させた傑作だった。ドラッグを噛み砕いた所から始まるアッパーなイメージ。ポップに語りかけるサビ。両者を合体させたハウス的手法。それはセックス・ドラック・R&Rではなく，ポップス・ドラッグ・ハウス・ミュージックという見たこともない形を呈していた。

この「スピード」を冒頭に置いた『狂った太陽』は，とうぜん強力な1発だった。ノイズから真性のバラードまでカバーした幅広さ。そこから聴こえてくる言葉の極限のリアリティー。“ギター・テクノ”というコンセプトに恥じない楽器の追及度。

こういう作品を，作品を出せばチャートのトップに送り込めるバンドが発表した，というのはとても貴重なことだと思う（今の日本の状況を考えるとネ）。同時にここへきてB-Tはその音楽的ルーツとセンスを自分達の作品に直結できたような気がする。だから，『殺シノ調べ』という実験もしかっり両手で受け止めることが出来た。

個人的には1991年以降のB-Tのスタジオ・ワークには，なんの不安も抱いていない。この調子で突き進んでくれるんだったら，いつもその動作の登場を喜んでいたいと思う。これからもメジャー・シーンの中に，自分達が思うがままの花をまきちらせていって下さい。

バンド活動活性化のため，個人としての主張が有効作用。

小野島大 Dai Onojima

現在のバクチクは，セールス的にも音楽的にも安定状態にあると言えるだろう。

セールス的には『悪の華』がピークであったわけだが，その数字はバンド・ブームで水増しされたバブル客がかなりの割合を占めていたわけで，それが減った分『狂った太陽』のセールスは，ほんとうの意味でのバクチクの理解者に支えられていたと言っていいし，また質的にもそれに相応しい力作であった。特に櫻井敦司の歌詞は，『狂った太陽』でひとつの頂点，というか，突き抜けた高みに達したと見るのが衆目の一致するところだと思う。サウンド的には『殺シノ調べ』での精緻に組上げられたアレンジ・ワークと演奏が，今井寿の目指してきた音楽的方向性の，ひとつの完成型であったと断言できる。

それだけに，今後のバクチクはまったく新しい方向に足を向けざるをえないだろう。今号でのインタビューにある通り，今井寿の音楽的探究心は，まだまだ衰える様子がない。また彼の才能が枯渇したとも思えないから，『殺シノ調べ』での完成型をブッ壊して果敢に前進しようとする彼らに対して，不安じみた気持ちはまったくない。それは櫻井の歌詞に対しても同様だ。

むしろぼくが不安に思うのは，バクチクというバンドそのもののあり方だ。インタビューで櫻井の言う通り，バンド内での各メンバーの役割がハッキリしすぎてしまい，個人の意思や感情を表現するにあたっていささか窮屈になっていることはたしかなようだ。

櫻井敦司＋バック・バンドではない5人トータルの存在感を強固に打ち出してきたバクチクというグループのトータリティが，ひとつの転機に立っているようなのだ。

櫻井の言葉で印象的だったのが「バンドだからって（雑誌の写真などで）5人で写る必要はない」という一言だった。つまり，バクチクというバンドのパブリック・イメージは，『狂った陽』『殺シノ調べ』そして今回のビデオ作で，完全に確立された。だがそれだけに，この確立された強固なイメージに，逆に今後メンバー自身ががんじがらめになてしまう危険性がある。誤解を招くのを承知でいえば，バクチクというバンドの存在そのものが，今後各メンバーの自由な表現活動を制約・阻害する危険性も，ないとは言えない。もはや完全にステイタスを獲得した彼らは，今後より自由で率直な個人の活動を必要とする時期に差しかかっているのではないか。バンドの基礎を確立するまではそういった自由はむしろ弊害となっていたろう。だがいまのバクチクは，そんな段階にはいないはずだ。むしろバンド活動をより開かれたものとして活性化するために，各メンバーの個人としての主張が，有効になっているのではないか。『DANCE 2 NOISE』のような活動は，そういった閉塞状況を打破するのに有効な手段であるはずだ。かたくなにバンドとしてのまとまりを強調するより，むしろ個々のメンバーのパーソナリティを打ち出す時期に差しかかっているのではないかと，ぼくは思う。

もはや，実験を昇華させる許容量を彼らは持っている。

広瀬充 Mitsuru Hirose

●BUCK-TICKは美学を持ったバンドだ。どんなバンドにも美学はある。しかし，彼らほど美学が，世界観が明確に伝わってくるバンドは少ない。やりたい事，やっている事がハッキリとわかる。具体的に言葉にできなくとも，感覚的にわかる聴き手が多勢いた。だから大きくなった。言い換えればCDをたくさん売ることができた。

●デカダン，タンビ，ハイトク，タイハイ……形容はどうでもいい。ビデオ“Climax Together”でもわかるように完成された世界をBUCK-TICKは持っている。個性でなく世界。混沌として一寸先の読めない音楽シーンにあって，その存在を確立させ際立たせるには“表現に世界を持っている”ことが重要なのだと思う。

●感覚的にわかりあえるファンに支えられているということは，わからないファンも当然多くなる。だから，好きなアーティストの人気投票結果が高くとも，嫌いなアーティストの投票結果も高い。これはしょうがない。

●だから，今の音楽シーンにおける彼らの位置はゆるぎないのだ。アリ地獄のように独自の世界を張りめぐらせておけば，そこにスポッとハマる聴き手がいる。感性の変容によってアリ地獄から脱けだす聴き手もいる。そうして聴き手の新陳代謝をくり返し，生命力を得，シーンに自らのポジションを確立し，人気を保ってきたのがBUCK-TICKなのだろう。これを“美学アリ地獄の論理”という，わけない。

●そんな彼らの存在は貴重だ。影響力もある。圧倒的にカッコイイ。だから，本心では今のままでもかまわないと思っている。

●ビデオ評のところで“完結した”と彼らの世界を表現した。やはり，今後は音楽的に新たな展開を見せそうだと予想せざるを得ない。それも『狂った太陽』での進化（深化）よりもドラスティックな変化が期待できると思ってしまう。くどいようだが，このままでも充分とも思ってるんだけど。

★まず実験を！

●個人的に，先にリリースされたソフトバレエの新作に僕は最大限の賛示を贈った。彼らが新作で見せた変化の姿勢に対してだ。スタイルを発展させることも大切だけど，軌道修正する勇気は単なる刺激にとどまらないポジティブな作業だと思う。

●で，BUCK-TICKのバアイ。多くの曲を手掛ける今井寿が進化の秘宝（ドラクエのやりすぎで，すいません）を握っていると思う。これ当然。たとえば『殺シノ調べ』は，ほとんどリメイクというリミックスを越えた実験的作業だったと思う。さらに，ソフトバの藤井とのユニット作品や櫻井，星野のオムニバス『DANCE 2 NOISE』への参加も実験のうちだろう。ならば，いろいろ実験してみて欲しいのだ。それが型となり，作品として発表されなくてもよい。ノー・インフォメーションのまま，他のアーティストのライブに参加するなんてのも良いと思う。もはや，実験を昇華させる許容量を彼らは持っていると思うからだ。

書き換えられた過去に続く未来は，虚飾，それとも真実か。

今井智子 Tomoko Imai

「B-T集大成第3弾はLIVE映像だった!!」って，コレはビクターの資料のタタキ。あ〜あ。解散したバンドじゃないんだからさあ，こんなにマトメなくても，ねえ。

しかし実際問題，『殺シノ調べ』以来マトメに入ってるとしか思えないんだから仕方がない。あのアルバムだって，どんなに今井寿が「“グレイテスト・ヒッツ”っていうと，何十年もやってるバンドみたいで嫌だから」って“NOT”を入れたところで，マトメのひとつに捉えられてるし，それに続くクリップ集，それにこれ，と並んでは，もはや自虐的なほどの過去の総決算に見えてしまう。

違うのだろうか？　だとしたら，これらのモノが示す彼等の未来はどこに向かっているのだろう。私は，その未来が早く見たい。もう彼等の過去を眺め回すのは飽き飽きした。それが正直な感想だ。たとえ今回のビデオが，まったく新しい映像であっても。

フロイト流の心理療法は，徹底的に患者の過去を探ることで心的外傷（トラウマ）を発見し，それを克服させるというものだ。過去を徹底的に露出することで，バクチクというバンドが自らの心理治療にいそしんでいるように，私には見える。これまでは「前はこうだったから今度は」といったショート・スパンでしか見ていなかった自分たちの時間線を，ようやくロング・レンジで見るようになったのだろう。いや，見ることを自らに許したというべきかもしれない。

そうして彼等は，過去を現在に引き寄せた。分析し解体し再構築して見せた。

＊

だが，ここには巧妙なすり替えがある。誰だってのちのちカッコ悪く見える若気の至りは残したくない。それが甘い思い出として自分の中に定着るほど時間が経過すれば別だが，それまでは破って捨てたい写真や手紙やビデオが，ゴマンとあるはずだ。アルバムと言えども，そのようなものだろう。けれども，その時でなければ出来なかったこと，というのは必ずそこに残っている。それをリメイクすることで消滅させ，自分たちの歴史を改竄したのが，この集大成3部作なのではないか，と思うのだ。普通なら若気の至りは言葉でエクスキューズするか，それを上回る行動でリカバーする。彼等はどちらもせずに過去を書き換えた。

「同じファイル名があります。上書きしてもいいですか？」「YES」

書き換えられた過去に続く未来は，虚飾に満ちたものなのか，それともより真実味を増すのか。どちらにしても半端なものではないだろう。それがどんなものなのか，とにかく早く見てみたい。


video
Climax
Together
Buck-Tick



video Climax Together Buck-Tick

Photograhy **Taishin Aoki**

video

Climax Together

Buck-Tick

12月2日，B-Tにとっては久々のライブ・ビデオ『Climax Together』がリリースされることはもう皆さんご存知のことと思う。本作品は，先に行なわれた横浜アリーナ公演（9月10，11日）の演奏，構成を（ほぼ）忠実に再現した内容で，櫻井敦司がコンセプトを立て，この2 DAYSのみでプレイされたメニューが収録されている。それでは，この作品の「意義」について考えてみることとしよう。

Text **Mitsuru Hirose**

●シンセの反復フレーズが鳴り響く。ステージ上の終幕にはメンバーのシルエット。キャンドルを持つ櫻井。ドラムがリズムを刻むと同時に幕が上がり、壮厳な「JUPITER」の演奏が始まる。

▲このビデオ作品は〝B-T集大成第3弾〟だそうだ（だって資料に書いてあるんだもん）。昨年末のヒストリー・ビデオ、今春のアルバム『殺シノ調べ』に続く作品。『殺シ〜』収録曲は、このライブ・ビデオでも『殺シ〜』に準ずるアレンジで演奏されていて、映像版『殺シノ調べ』という雰囲気なきにしもあらず。そして何より、ビデオとしてリリースすることを最大限に念頭に置いて行なわれたショウであるから、メンバーの動きもいつになく大きい？　カメラが目線がバチバチ来ちゃうとこなんざ、意外性があって楽しい。でも、なんで今、ビデオなんだろう？

●天に向かって手をかかげる櫻井。美しい。パンキッシュな「地下室のメロディー」ではしゃがみこんでギターを弾く今井。エフェクター（WAVE STATION?）を駆使してシンセ・サウンドをプレイ。「TABOO」では手に花、「HYPER LOVE」では金アミ越しに歌う櫻井。なまめかしい絶叫を聴かせる「VICTIMS OF LOVE」で中盤のクライマックス。美しい。美しさココに極まれりなのだよ、ほんとに、もう。

▼だから完結しているのだ。〝うーん、いいねぇ〟と思わず口走る作品を前にすると、すぐ〝完成度が高い〟という言葉に置き換えがちな私だけど、今日は心底思いました。このビデオ、完成度が高いを飛び越えて〝完結度が高い〟のではないでしょうか。B-Tワールド、B-Tが描く世界観、B-Tの創るキラキラした金属細工。もはやガラス細工なんていう、強く触れると壊れそうな造形ではない。重厚な金属的構築美が完結しているライブ・ショウ。

◆ステージで出す音のほとんどは生身の人間が産み出すもの。打ち込みによって積み重ねられた音群ではないから、なおさら、何年もかけて自力でここまで構築した世界というイメージ。完結へ向かって進んできた彼らの演奏は本当にソツがない。曲順のメリハリも非常にいい。曲間をあまり置かず、メドレーとまではいかずとも、立て続けに演奏するスピード感。すばらしい。

●星野のカッティングが妙にエロティックな「ナルシス」で股間に手をあてがう櫻井。観客に背を向け、ステージ後方のカメラにピッタシの目線を送る「M. A. D」の櫻井。「悪の華」で盛り上がった後、ギターで鐘の音を出す今井。このメリハリ。押しと引き。その絶好さはラストのスローな「KISS ME GOOD-BYE」で爆発するギター・フレーズに象徴されている。この手の曲で、ギタリストとしての情念、メラメラ、ムラムラしたものはいちばん吐き出されているようだ。

●長いスタッフ・ロールが続きエンディングを思わせた後、アンコールの映像が2曲収められている。つまり作品としては「KISS〜」で完結。アンコールはボーナス・トラックという意識なのだろう。

▼これまでの彼らの歩みは完結への道のりだったかもしれない。このショウで、ビデオで、その完結度は臨界点に達した、のかもしれない。大切なのは自己完結ではなかったことだ。このショウもビデオも自己完結ではない。じゃあ何？　他己完結？　そんな言葉は聞いたことがないけど、そうかもしれない。メンバーと熱心なファンが築いてきた世界。アンコールで「スピード」をフル・コーラス一緒に歌ったファンと相互で完結させた世界。

◆何か、ひとつの大仕事、偉業とまでは言わないけれど、音楽したいという衝動にかられて走り出した若者たちが得ることのできたデッカイ仕事を、ひとつの世界観として見せつけられたようだ。これはストレートな感想。演奏はダレることなく進むけれど、感じる人はかなりヘビィな感情を抱くかも。

▼なんで今、ビデオなんだろう、と先に書いた。だから完結度高いライブ・パフォーマンスを記録を越えた作品として残そうという作業なのだ、と今思った。ならば、B-Tは新たなる一歩を踏み出そうとしていると考えるのが世の常。新曲中心のアルバムもなかなか出ないし。

■金属細工は時とともにサビついてしまう。このビデオによってサビる前に封印された世界は、しっかりとファンの手元に届けられた。完結されたB-Tワールドをじっくり味わいつつ、未来のB-Tに思いをはせる。そんな楽しみ方もオツなもの、かもしれない。

●アンコールでは、いつになくブッちぎった、きまくってる演奏が聴ける。とくに「スピード」で肩を組んでプレイする今井&櫻井のあまりのカッコ良さには圧倒される。カメラへバッチリ目線が来ている今井。その先はどこを見ているのか？



1. JUPITER
2. Brain, Whisper, Head, Hate is noise
3. LOVE ME
4. 地下室のメロディー
5. MY FUNNY VALENTINE
6. TABOO
7. HYPER LOVE
8. VICTIMS OF LOVE
9. MISTY BLUE
10. ナルシス
11. M•A•D
12. 悪の華
13. 太陽ニ殺サレタ
14. KISS ME GOOD-BYE
15. ICONOCLASM
16. スピード

video Climax Together

Self Linernotes Video Monologue

今回の特集のキッカケにもなったB-T久々のライブ・ビデオ（12月2日発売）について，彼ら自身のコメントを掲載しよう。各々の思い入れはあるにせよ，全員がこの作品に対して自信を持っていると伺える内容だ。

Atsushi Sakurai

選曲はおれがやったんですけど，通常のコンサートにはしたくなかったですね。いままでの曲の中でなるべく自分たちの持ち味を出せる曲を選んでみました。みなやりたい曲が他にもあったかもしれないけど，とりあえずミーハーに，（笑）おれ個人が好きな曲を選んで，その世界観をビデオにしたかった。いままではアルバムを出してそのツアーていうのが通常だったんで，そのアルバムの曲を中心に，ていうのがあったんだけど，今回はまったくそういうのはなかったし。で，映像が残るっていうのがあったんで，だったら自分たちのバンドのイメージをひとつハッキリされたいな，というのがあったんです。表面的には抑えたクールな感じで行きたい，でも映像だから，いろんな表情が見えて，そこからなにか，内面的な情熱とか，伺えるかな，と思って。コンサートでドーンとやるんじゃなくて，映像として残ったもので，エネルギーみたいなものを多くの人に拾って欲しいなと。

Text **Dai Onojima**

Hidehiko Hoshino

今回はライティングとかが結構素晴らしかったと思うんですよ。で、ステージ自体が結構豪華だったし、曲順なんかもわりと凝りましたよね。まあ演奏はいつも通りだったけど、だからそれを忠実に映し出そうっていう、カメラワークとかはすごい基本的なものにしたんですね。で、仕上がりにはあんまり余計なものは入れずに。今回はいかにもライブビデオっていう、本当にBUCK-TICKのライブをそっくりそのまま、充分に楽しめるようなものになってるんで、これをじっくり見てもらえば僕らのステージがどういうものかすごいよくわかってもらえると思うんです。やっぱりツアー随分廻ってても、結構ライブ観にこれない人もいるらしいですね。で、このビデオはそういう人たちにとってもいいんじゃないかな。初めて観る人でも素直に受け入れられるもんだと思いますし、まあ、観方はいろいろあると思うから、とにかく手に取ってソンはないって感じですよ。

Text **Satoshi Kojima**

Toll Yagami

今回シンプルなの作りたかったんですよ。前の『SABBAT』の時とかって、海外ロケしたカットとかをインサートして、結構イメージっぽく仕上げたんだけど、そうでなくて生っぽさを出したかったわけ。だから、撮るシチュエーションをきちんとして、いい絵を撮って、そのあとの処理はあんまりしないっていうやり方で、その辺は結構いい感じにできたと思ってます。まあ俺のドラムに関しては…、音質がちょっとアレですけど、そんな意味でわりと気に入っていますよ。だから俺たちのコンサートがそのまま撮れたっていう感じだから、観る人はできたら部屋を真っ暗にして、ある程度ボリューム上げててね、まあヘッドフォンなんかで聴いてもらうのもいいし、そうやって楽しんでもらえば実際に俺たちのコンサート会場に来てるんだって錯覚するんじゃないかな。まあ、どう楽しんでもらってもいいけど、それだけ入り込んで観てもらえれば嬉しいですね。

Text **Satoshi Kojima**

Yutaka Higuchi

トータル性があるビデオっていうか，ただ単なるライブっていうんじゃなくて，もっとおれたちの色っていうか，そういうのが明確に出たライブ・ビデオを作りたかったんですよ。コンサートでの客との一体感とかいうんじゃなくて，もっと，いまおれたちがやりたいことを明確に人に伝えるビデオを作りたかったという。コンサート自体も，ビデオをとるためのライブって感じでやったから。やっぱり緊張しましたよ。リズム隊がボロクソになっちゃうとそのまま行っちゃう可能性があるから，そればっか注意して。差し替えとか一切ないですから。あとは普通のライブのように出来ればいいなと。結構トチってるところもあるんだけど，本当にワァーッ！　っていう（ような，ひどい間違いをした曲）はなかったから。

もう，全部が見所ですよ。（笑）セットも結構派手に作ったけど，イヤミになってないし。みんな見てください。（笑）

Text **Dai Onojima**

Hisashi Imai

エフェクト処理とか、そういうのはナシで、ライブでやったそのまんまのところを。よくある、お客さんがバッーって盛り上がって、ていうのとは違うようにしようと。(アンコールを除いた) 本編だけでひとつの世界ができているような……暗いライブ。(笑) いままでそういう静かな曲で始まるライブってほとんどやったことがなかったから、もう、最初は必ずドカーンっていって、で落として、また盛り上げて、で終わりになだれ込むっていう、そういうパターンじゃなくて、どんどん沈み込むような感じ。それが今回すごく出したかったところで、アッちゃんが曲順を決めてきた時点で、もうそういうところは見えてたし。ドカーンってところが一切ないっていう。それがBUCK-TICKらしいっていうか、BUCK-TICKらしさをすごく誇張してみせたって感じですね。アレンジとか演奏とかは特別なことはやってないです。あの曲はあれで最終型というつもりだし。

Text **Dai Onojima**


ようこそ終末の舞台へ
待望のライブ映像完成!!
Climax Together
BUCK-TICK
1992年9月10日・11日横浜アリーナでの「Climax Together」本編14曲を完全収録。
LIVE VIDEO
1992・12・2 ON SALE
VHS:VIVL-91 LD:VILL-72/全16曲/各¥6,800(税込)
予約・購入特典:リバーシブルFACE[6]ポスター〈B全サイズ〉
BUCK-TICK単行本12月2日発売
BT8992
BUCK-TICK'S METAMORPHOSIS 1989-1992
¥3,000(税込) 260頁 A4サイズ 著者:BUCK-TICK+市川哲史 発売元:ロッキング・オン社
INVITATION

Atsushi Sakurai 櫻井敦司

人前で切々とやっていれば同じことなのかと。そうやったらどうなるかなと。だから……だんだんずるいヤツになっていくんじゃないかなと思います。

高校の友人同志でスタートしたB-Tも、いまや押しも押されぬビッグ・グループとなった。変わらぬ友情が5人を結びつけているとは言っても、そうした環境の激変がバンド内部の状況にまったく無関係であるはずもない。フロントマンでありバンドのオピニオン・リーダーである櫻井敦司は、B-Tの新たな方向性に向けて、当然ながらもっとも自覚的であった。

——今回のビデオはいま現在のB-Tというバンドのイメージをハッキリさせたかったということですが、具体的にはどんなイメージなんですか。いま現在のB-Tのイメージなのか、結成以来現在までのB-Tの集大成なのか、それとも未来に向けて新しいステップを踏み出したB-Tのイメージなのか。

櫻井　一番最初の、"現在のバクチク"のイメージですね。

——では、櫻井さんにとって現在のB-Tはどのような状況にあると考えてますか。新しいものに立ち向かおうとしているのか、ちょっと立ち止まって自分の足元を確認している段階なのか。

櫻井　やっぱ……消極的になってるのかなって思いますけど。いままでやったものを確認……しようとしている段階じゃないかと。自分がそういうふうに思う要素は結構あるんですけど、ひとつは自分たちの音が……同じエンジニアの人、同じスタジオで2枚ぐらいやって、ひとつの音として固まったみたいな感じがあるし、個々の音色みたいなものもハッキリ……(各メンバーが)わかってるみたいだし。個人的にはやっぱり詞の世界も一個完結したような、自分の中では一段落ついちゃったみたいな、『狂った太陽』で。……知らず知らずのうちにあるかなと。

——完結しちゃったみたいな?

櫻井　いや、完結じゃないですね。

——ぼくはむしろ、あれが出発点なのかなと思ってたけど。

櫻井　うーん、そういう言い方もできると思うんですよ。ただもう……これ以上なにもないみたいな感じになって。そっからまたなんかやろうとする。

——出し尽くした。

櫻井　ゼロっていう感じ。1じゃなくて。

——なるほど。消極的って言葉が出ましたけど。

櫻井　……うーん……なんか……まぁ、勝手にこう、いろんなこと考えますけど……自分たちがやってることとか、個々のやりたいこととかが5人集まって反映していまの音が出てる……すごく、いままで自然な流れで来れたっていうのがあります。うん……そこでひとりひとりの役割分担が暗黙のうちにできてきたっていう。それがいいか悪いかは全然わかんないんだけど、そういうものをそろそろ壊してもいいかなとは思います。

——これからの方向性とか頭の中にあるんですか。

櫻井　……うーん……いや、それは全然ないですね。……やっぱり……うーん……難しいのは……段階を踏んでいくときにひとりじゃないっていうのがあるから……どういうやり方でやっているのがいいのかなって。ものごとを作るという以前に、やり方として。

——ひとりで動いた方がやりやすいってこと?

櫻井　……ていうか……ひとりじゃないって意識でやってますから。だから、5人がやってでやりやすいやり方を考えなくちゃならないから。

——役割分担が決まってきてそれを壊したい、というのは、5人で動くという前提が櫻井さんの中で一種の制約になってるんじゃないか、と?

櫻井　いや、制約とは考えてないですけど。それはもう、あたり前のこととして。……なんかこう、……バンドって、個人作業するのはご法度みたいな印象があると思うんですよ。(笑)もしそういう考え方がひとりひとりにあったとしたら、それはつまんないなと。たとえばおれが、ここをこうしたいと思ったら、ほんじゃあおれはこういうやり方でなんかこう、そっと後ろに回ったりとか。そういう余裕が欲しいと思うんです。音楽的にとかじゃなくて、取材とか、スタッフに対しての姿勢っていうか。そういうのにもっと余裕が出せればなと。

——具体的には?

櫻井　……バンドなんだから変にリキんじゃって、こう、(雑誌の写真なんかでも)5人が写んなきゃダメだ、とかね。ボーカルなんだから、しゃべんなきゃダメだとか。(笑)でも、そういうのが暗黙のうちにあると思うんですよ。レコード会社の人とか。おかしいなぁと思うのは……おかしいっていうか、自然にできればいいなと。しゃべりたいヤツがしゃべればいいなって。……もっとやりたいなと思うことは、これからもっと基本的なことで5人のコミュニケーションを、もっととっていかなくちゃって。

——足りなかったって実感あるんですか。

櫻井　うーん……それが自然だったらいいんですけどね。でも……うーん……具体的な話になると、レコーディングなんかでももっと今井が主導権握ってもいいと思ってるし。まぁ今井がやりたくないんだったらしょうがないけど……まぁ各個人がやりたいことなんかを、黙ってわからせるっていうんじゃなくて……。次、もし新しい音を出すんであれば、こういうものをやりたいってものがあったら、5人が知っておくべきだと思うっていうか。ひとりだけが把握してるんじゃなくて。だったらすごく強力なものができるんじゃないかなと思って。

——曲作る人以外は無関心だってこと?

櫻井　いや、そうじゃなくて、だから、個人個人にすごいウエイトが置かれてるってわかるんです。ただ、その個人個人がホントに個人個人になっちゃってるって感じで。つまり、役割分担がハッキリしすぎちゃってるっていう。

——今井さんが曲書いて櫻井さんが詞つけて、他の人が演奏して……みたいな役割が固定化しすぎてる。

櫻井　うん。……でも、おれが知らないだけかもしれないけど。ただ、ベスト盤にしても、時間がないって騒ぎになって、なぜ時間がなかったのか考えると、そういうコミュニケーションがなかったからじゃないかと。

——今井さんひとりに負担がかかりすぎた。

櫻井　"今井、それはもういいよ"ってヤツがいなくなっちゃうでしょ。今井ひとりでブースに入っちゃえば。こっち側では終わった人がただ見てるだけで。

——なるほどね。櫻井さん、『DANCE 2 NOISE』でやってたみたいなソロ活動を、この休み期間を利用して本格的にやるという考えはありますか。

櫻井　具体的にはなにも考えてませんけど、想像ぐらいはしてます。

——どんな?

櫻井　……でも、根本的にひとりでコツコツやるのが嫌いなんですよ。だれかが作って、それを自分でチョコチョコといじって、"どうだ、これスゲエだろ"みたいな。(笑)

——全部オレがやったんだ! みたいな。

櫻井　(笑)うん、デコレーション・ケーキのイチゴですからね、私。スポンジ作るの嫌いなんです、地味で。(笑)

——よーくわかります。(笑)

櫻井　まぁ、あまり凝り固まらないでやりたいなぁと思って。

——このあとはしばらく曲作りということですが、次のアルバムについてなにか考えているところがありますか。

櫻井　うーん、これはいってはないですけど、ボワーッと、もう、なんか、一生懸命やってもらえなくても、なんか同じなんだなって感じ。それを詞にしたらどうなるかなと。

——え?

櫻井　うーん……たとえば、あんまりいい言い方じゃないですけどね、こう、切々と歌いあげることは簡単だと思うんですよ。だから、その前の時点で切々となっていてもしょうがない、人前で切々とやっていれば、もう同じことなのかなと。だから……だんだんずるいヤツになっていくんじゃないかなと思います。

——エンターテイメントとして割り切っちゃうということ?

櫻井　まぁ、そういうことですかね。

——切実な自己表現よりは、エンターテイメント。

櫻井　うん。ショウマンですかね。

——(笑)ショウマンねえ。そういう意識になってるわけ?

櫻井　いえいえ、そういうふうにやったらどうなるかなって。

——ああ。ただ、『狂った太陽』ぐらい切実で切羽詰まったもの作ったあとは、なまじなもの作ったら全部ウソ臭くなっちゃいますよね。

櫻井　そうですね。

——どんなバンドでもイメージ作ってるところあるけど、ウソに見えないゴマ化し方っていうと言葉悪いけど、どうせ騙されるんだったら、完璧に騙されたいっていうのがありますよね、聴く方としては。それがどれだけうまくいくか、ということですね。

櫻井　そういうことですよね。

——じゃあ華麗なる騙しのテクニックをひとつ、味合わせていただきましょうか。

櫻井　簡単にバレたりして。(笑)

Text **Dai Onojima**

Hidehiko Hoshino
星野英彦

リズムだとか、ギターのアレンジだとかはその都度変化しますけど、メロディだけは最初から自分たちだけのものっていう気持ちが強い。

普段はフロントの二人の派手な動きの後ろ側であまり露骨な自己主張はなく、黙々と自分のテリトリーを守ったプレイを続けているこの人の存在が僕の中に強く印象づけられたのは、やはりこの前に観た横浜アリーナでの『CLIMAX TOGETHER』のコンサートの時からだったろう。どんどん拡散する櫻井と今井、そしてひたすら底辺を守り続けるヤガミと樋口。この両者が妙に掛け離れたものにならずにきれいに融合し、一つの調和の取れた世界を作る結果になっているのは、ちょうどバンドの真ん中にしなやかに存在する彼のリズムギターゆえだ。僕がこれまで何度も本誌で述べてきたBUCK-TICK独自のバランス感覚というもののキーは、案外この星野が握っている面もあるんじゃないだろうか。バンド内でのそんなポジションを無意識のうちにも認識してか、彼の態度はとてもクールだ。

——この前の『CLIMAX TOGETHER』を見て僕がいいと思ったことは、バンドの存在感があの日のステージの装飾などととてもきれいにマッチしてて、その辺りがすごい全体の世界を広げる結果になってたってことだったんです。この辺で最近はもう、メンバー全員が徒に肉体で自己主張をせずとも結構自分が思ってることを楽に表現できるような状態になってるんじゃないかと僕は思ったんですけど。

星野　昔はがむしゃらだったですからね。演奏も未熟で、まあそれは今もそうなんですけど、当時はどうしても何とか自分のプレイに集中しなきゃなんなかったって感じで、ステージ全体のことを考える余裕もなかったんですけど…。そうですね。最近はやっとリラックスできる部分もあれば、攻撃的になれる部分も出てきたって感じかな。まあそれも自然にそうなれたわけだから、今回の横浜アリーナみたいな、ああいう装飾を使ったものも無理なくできたわけですけどね。

——そういう状態になるまでには、結構時間はかかった感じですか？

星野　かかりましたね。やっぱり場馴れっていうか、ステージ馴れって大きいですから。まあでも、今のそういう馴れっていうのはわりといい感じのものになってると思いますよ。変に馴れてしまうとマンネリズムに陥ることもありますよね。そこは今はないみたいですからね。

——その辺はやっぱり今井さんたちが持ってくる新鮮なアイデアによる所が大きかったりする？

星野　ああ、それは大きいかも知れない。

——BUCK-TICKの場合、そういう部分でのバランス感覚って絶妙ですよね。少し馴れた状態になって、これ以上行くとマンネリズムに陥るかなって時には今井くんなんかが新しい要素をすかさず持ってきて、なおかつサウンド面ではそうやって新しい要素が入ってきても、リズム隊の二人や星野さんたちが頑なにボトムの部分は支えてて。僕はそういったバランス感覚があるからこそ、BUCK-TICKの音世界はどんなにアバンギャルドなものが入ってきても変わらずにポップな響きを保っていられると思ってるんですが、星野さん自身はそういったことは感じませんか？

星野　いや、確かにポップだと思いますよ。で、曲に関しては何でそうなのかっていうと、やっぱりメロディが変わってないからだと思うんです。それ以外のリズムだとか、ギターのアレンジだとかはその都度変化してますけど、メロディだけは最初から自分たちだけのものっていう、そこは大事にしたいって気持ちは強いですから。その辺は…、日本人なんでしょうね。（笑）やっぱり歌は大好きだし、作ってく時ってどうしても歌を中心に考えちゃいますよ。もう、生まれながらにっていう感じになってるみたいですね。

——星野さん自身はリスナーとして好きになる音楽もそういう感じなんですか？

星野　そうですね。でもそれと平行してそうでない、新しい要素を持ったものを聴くこともありますよ。例えばハウス的なものだとか、自分が影響を受けようっていう感じで聴くものもあるし、その反面、自分が好きで聴くってものもあって、僕はその両面を持っていたいと思ってるんですね。

——今井くんは最近、自分のサウンドコンセプトがどんどん拡散していく方向にあるわけですけど、彼がそうなっていく中でもう一人のギタリストである星野さんは、バンドの中で何か特別に心がけてることはありますか？

星野　まあ今井くんに影響された部分って結構あって、それによって多少の変化はありましたけど、だからってある程度計算して、こういう風にギターを弾こうだとか曲を作ろうみたいなことは考えてこなかったですね。まあ無意識のうちにはバランスも計算してるんでしょうけど、それを妙に意識しちゃうとね、そういうバランスも崩れることがあると思うんですよ。だから今の所は、妙に計算せずにそうなれてるってとこがいいんじゃないですかね。僕は今までもずっと好きな音色出して、好きなギター弾いてきましたから。

——メロディ以外のサウンドだとか、アレンジの面に関しては、今よりももっと変化していきたいって気持ちはありますか？

星野　ありますね。

——例えばいろんな要素を取り入れていってサウンドがどんどん変化していく拡大期と、ある程度見付かったスタイルを研いていく咀嚼（そしゃく）期とがバンドにあるとしたら、まだ拡大期でいたいって感じなんでしょうか？

星野　それは分けられないですね。自分としては変化していきたい部分もあるし、デビュー当初から築いてきたものを大切に研いていきたい部分もありますんで。だからその二つがうまく混ぜ合わされてる状態が一番いいと思いますけど……、でもどっかにガラって変わりたい部分も実はあったりするんですね。

——ほう。ガラっと。

星野　具体的にどう変わりたいとかは言えませんけどね。例えば突然レゲエとかアフロとかが入ってきたりとか…、まあ、どうなるかはわからないですけど、たとえそれが自己満足の変わり方でも、やってる本人がそれを楽しめればいいだけの話ですからね。その辺はどうなってもいいんじゃないかと僕は思ってますね。

——今回、この十二月にリリースされるその『CLIMAX TOGETHER』のビデオと、昨年のヒストリービデオの『BUCK-TICK』それとリアレンジのアルバムの『殺シノ調べ』の三作は、BUCK-TICKの集大成の作品だってことをレコード会社は伝えているそうですが、星野さん自身は今、バンドが集大成する時期に来ている、何かしらの転機を迎えている、なんてことを感じてるとこはあるんでしょうか？

星野　それは特別ないですね。単にそういうものを出す時期が重なったってだけで、まあ、レコード会社としてはいろいろと都合もあったんでしょうけど、（笑）こちらとしてはフルアルバム出す前に少し時間が欲しかったっていうのがあって、それがそういう都合とうまく合ったってことですからね。ただ…、『殺シノ調べ』の試みはすごいいいタイミングでできたっていうのはあって、あのあとは結構新しい展開もしたくなったっていう気持ちは自分も含めて、各自で持ち始めたみたいですからね。そんな意味じゃあ変化を望んでたっていう、一種の転機だったのかも知れないですけど。

——星野さん自身は今後のテーマは見えました？

星野　漠然とは見えているんですけどね。言葉で表すのはすごい難しいんですけど。まあ、強いて言えばギタリストとして自分を出していくっていうよりも、バンドの一員としての意識をきちんとしていきたいっていうか…。

——ほう。星野さんもバンドの一員としての意識が強くなってる。ヤガミさんも同じようなことを言ってましたね。

星野　そうですか。確かに僕もコンビネーションとかアンサンブルを中心に考えるようになりましたね。でもそれは自分で曲作るようになってからそうなったって感じなんですけど。今はそういう意識が随分強くなってるっていうのはありますね。

——今回の横浜アリーナのコンサートも盛況でしたけど、いつも好セールスを記録してるってことに関しては何か思うことはありますか？

星野　その辺はまだ客観的には見えないんですね。自分としてはこれから先もおそらく見えないんだと思いますけど、例えばいろんな一般の人とかの話を聞いて、それを参考にして今の自分らの位置を意識してもねぇ。やっぱり基本としては自分たちの音楽を作ってくだけのことだから、それに関しては敢えて意識しようとは思ってませんね。

——でも、例えば過去の東京ドームだとか、今回の横浜アリーナとかのステージに立つと、そんなことも意識せざるを得ないでしょう。

星野　う〜ん、それも人から見ればすごいことなんでしょうけど、やっぱり客観的には見れないっていうのが本音ですね。ただ、売れるにこしたことはないっていう、それによってレコード作ることなんかに対して随分、融通が利くようになりましたから。でもそれも今まで自分らが好きでやってきたことが認められてすごいラッキーだったってだけのことで、もし逆に全然売れなかったとしても、それは別にハンディにはならないと思うんですよ。確かにそういう部分に関しての不安なんかもないことはないですけど、ここでもし仮に落ちたとしても結構仲間意識は強いバンドですから、続けていく自信はありますよね。

Text **Satoshi Kojima**

Toll Yagami
ヤガミ・トール

俺が調子がいい時って大体いいんですよ。でも俺がダメだとダメっていう。何かドラマーの重要さってわかりましたね。個人の力量がしっかりしてなきゃ。

そういえば彼とはしばらく前、僕の大好きな近藤等則・IMAのライブ会場でばったり会ったことがある。このバンド、本誌の読者の皆さんにはそれほど馴染みのない存在かも知れないが、簡単に言えばロックやジャズ、そしてヒップホップからワールドビート…と、今、世界中に氾濫している強力なエネルギーを持ったサウンドをメンバー五人のこれまたアクのあるフィルターを通して練り上げた、かなり〝進化〟したサウンドを聴かせ、日本のみならずヨーロッパでも支持を集めているバンドなのだ。彼はここのドラマーである山木秀夫の緊迫感のあるプレイに最近、心酔しているとのことだったのだが、七十年代ハードロックに相変わらずハマり、インタビュー中にもことある度にジョン・ボーナムへの敬愛の念を隠さない彼の中にも結構柔軟に、新しい音にも積極的に身を寄せていく姿勢を僕はこの辺に見、少し嬉しい気分にさせられたりもした。が、こんな風に懐はどんどん広くなっている最近の彼も、自身のバンドに対しての評価は、意外にシビアーでもある。

ヤガミ　最近毎回ライブはハンディカムでビデオに撮ってるんですよ。で、ホテルに帰ってから観るんですけど、本当に良かったなって思えるのは、殺シノ調べツアー二十何本かあったけど、そのうちの二本ぐらいでしたね。

——たったの二本！ それは随分少ない。

ヤガミ　きちんとグルーブが出てるのはそれくらいですよ。他はどうしてもズレとかが気になっちゃいますね。で、このスリーツアーぐらいはそうやって観てるんですけど、それで一つわかったのは俺が調子いい時って大体いいんですよ。でも俺がダメだとダメっていう。それで何かドラマーの重要さってわかりましたね。よく〝五人一体になってどうの〟とか言うけど、あんなのきれいことですよ。もっと個人の力量がしっかりしてなきゃ。

——〝ノリ一発〟とか〝思い入れたっぷり〟みたいな感じだけでなくて、技術的な正確さなんかに対してもシビアーになってきた？

ヤガミ　もちろんそうなんですけど、例えばジャストでビート刻めたからそれですべてがいいわけでもないから難しいんですよね。ジャストだからグルーブが生まれるかって言ったらそうでもない。でも時々はあるんですよ。〝ウワ〜、いいじゃん〟みたいな時って、一時間のステージの中でほんの数秒ですけど。その時の感覚って言葉ではうまく説明できないけど、ほら、川上（哲治）が言ってたじゃないですか。〝ボールが止まって見える〟って。あんな感覚に近いと思うんですけど。

——そういう、すべてがピタっと決まらない時ってどんな意識で演奏してるんですか？ ロックっていうのは自分を素直に出すべき音楽だから、ダウンの時はダウンの気持ちをそのまま出して、ハイな時はハイな気持ちをそのまま出すって考え方もあるし、その反面、プロなんだから、常にクォリティの高いものを提示しなきゃいけないって考え方もあると思うけど…。

ヤガミ　俺はいつもベストのプレイをしようと思ってますよ。でもそれがなかなかできないんです。常にパーフェクトにっていうか…、単純に自分で最高のノリを出して、全員で決まったアンサンブルに酔いたいっていうのがあるから。もう、ずーっとそういう感覚味わっていたいって感じなんですけど、それが続いたらヘタしたら死んじゃうかも知れないですけどね。（笑）そういう、悟りの境地みたいな所にすごい行きたいけど、今の所行けるのは一回のステージで三秒だけですよ。よくクラシックの人なんかが海外で演奏してて、すげえいい演奏した時にはその作者が降りてくる、とか言うらしいんですよね。演奏してる目の前にベートーベンが降りてきた、とか。俺もちょっとはそういう感覚味わってみたいですよ。

——そうやって自分のポジションに対しての責任感を強く感じるようになった、イコール自分のポジションが明確になったっていうのは、やっぱり『殺シノ調べ』みたいなリアレンジって試みを通過したからこそ、って感じなんですか？

ヤガミ　う〜ん、明確っていうことでいうとどうかな。俺ね、本当にリズムの部分をディレクションしたのって「JUST ONE MORE KISS」のシングルぐらいまでだったんです。まあ『TABOO』はプロデューサーがいたんでその人に任せたんですけど、『悪の華』辺りからはリズムのディレクションは全部ユータに任せてるんですね。結構自分では客観的になれない部分ってあって、そこを敢えて人に委ねてみようっていう、ベースなら同じボトム支えてる人間だから、信頼できる所は大きいですからね。

——それは妙に自我を出すことよりも、バンドの中の一員だって意識が強くなったことの現れでもあるようですね。

ヤガミ　そうでしょうね。それと…、俺、凡人だからジョン・ボーナムみたく叩くドラムに格差ないんですよ。あの人って海賊版なんか聴くとどれもすげえテイク違うでしょ。俺は例えばスリーテイクぐらい録ったとしても、差って微妙なんですね。だから極論言っちゃうと、俺にとっては〝どれでもいいよ〟って感じだから、それならば任せた方がね、客観性出るわけだし。

——しかしいくらそうやって他人に任せるって発想が出てきても、メンバー五人の範囲を越えないっていうのは結構強いこだわりでもある、と。

ヤガミ　そうですね。っていうかプロデューサーとか言ってもねえ、日本の場合って人によって妙にカラーが明確じゃないですか。同じプロデューサーで同じエンジニアでやると全部音が同じになっちゃって。特にドラムの音なんかそれがあからさまだと思うんですよ。俺って音質にはすごいこだわりあるから、スピーカーから出てくる音が自分の思い通りじゃないとイヤなんですね。生のタイコのニュアンスみたいなものが出てないと。結構あるじゃないですか。シンバルの音が本当は〝パキーン！〟って鳴ってるはずなのに〝ジャリ〜ン〟みたいな。だから今回のビデオも実は…、思ってる音じゃないんですよね。

——ここまで来てもまだ不満はあるわけだ。

ヤガミ　結構ありますよ。レコードに関してもいつも不満だらけですからね。でもそういうのはいつも次で解消したいって気持ちは持ってますよ。でもいまだに気に入ったプレイって少なくて、今回もビデオ観てて〝あ、ちょっとシンバルに行くの早かったな〟とかそんなのばっかで。まあ、コンマ何秒の世界なんですけど、どうしてもそれが気になっちゃいますね。

——自分に対しては相当シビアーですね。いつもそんなことを感じてると辛くはならないですか？

ヤガミ　そう思っちゃうんだからしょうがないですよ。〝もう少しタメて入ったらすごいのにな〟ってわかっちゃって。そういうノリの空間って本当に作るの難しい。山木さんなんか見ちゃうとなおさら思っちゃいますよね。あの人って〝来るかな、来るかな〟って時に必ず来るし、もうその上でお客と対話してるっていうのかな。イっちゃったドラマーって皆そうですよね。だから本当にああいうレベルになりたい。

——今回横浜アリーナの『CLIMAX TOGETHER』も盛況に終わって、最近のB-Tは簡単に言っちゃうとセールスの面と音楽的な充実が結構両立してきたって状況がありますよね。ヤガミさん自身はそういう、今のB-Tのポジショニングみたいなものはどう見てます？

ヤガミ　その辺はよくわかんないですけど…、わりと最近までは〝勝てば官軍〟っていうか、売れないと自分たちが追い込まれるんだろうなって思ってた面はあったんですけど、今現在は正直言ってそういう意識はなくなりましたね。もっと自己満足っていったらアレだけど、自分たちが格好いいと思えるものをやりたいって気持ちが強くなって。まあ今は例えば周りにいるレコードメーカーの人たちが思うものと、自分が格好いいと思うものとのギャップはなくなってますからすごくいいと思うんですけど、殆どそういう邪念みたいなものはなくなったっていうか。だって…、日本の音楽ビジネスの限界も見えちゃいましたし。

——ほう。限界が見えた。

ヤガミ　昔エーちゃん（矢沢永吉）の『成り上がり』とか読んだ時は〝ホントに儲かるんだな〟とか思ったんですけど儲かんないしね。（笑）まあソロだったら別でしょうけど、バンドやってる奴が家建てたって話聞かないでしょ。一億円ポンって出した、みたいに。ましてレッド・ツェッペリンみたくロゴ入りの飛行船なんか飛ばせないですよ。（笑）だからそういうロックンロール・ドリームみたいなのはなくなりましたよ。だって…、一時期休業してる時なんかには結構ひどい目にもあってるし、そういうこと体験しちゃうと…。

——もう失うものはなくなっちゃう感じだ。

ヤガミ　そうそう。ただ、客が一杯入ってることに関しては中三でドラム始めた頃、キッスのライブ・アルバムのジャケットに客がワーって写ってる写真があって、〝俺もこんな状況で演奏したいな〟って思ってた感じに近づけてて、それは嬉しいんですけど、でもそれが何を意味するのかははっきり言ってわかんないわけだし…。それよりも俺は今、ドラム小僧でいるのが楽しいんですね。俺んちって今、スネアが五台もあるんですよ。手作りの、オールドのものとか含めて。で、それを毎日チューニングいじって叩いてるって状況がすごく楽しいんです。今はそうやってドラム小僧を満喫してるので充分って感じなんじゃないかな。（笑）

Text **Satoshi Kojima**

Yutaka Higuchi 樋口 豊

やる以上“売れない”とは思ってない。自分たちがいいと思ってやってるわけで。“売れるハズなんだけどなぁ”……って。(笑)そう思ってやってますよ。

実を言えばこの日ユータとの会話で一番盛り上がったのは『ドラクエV』の話題だった（業界関係者の9割はドラクエ発売後2週間は極度の睡眠不足に陥ったという話である）。われわれの目下の最大の関心事は、12月に発売される『ファイナルファンタジーV』である。次回のユータの取材テーマはすでに「わたしのお気に入りファミコン・ソフト」で決まっているのでよろしく。

─現在のB-Tが置かれている位置について、どのように考えてますか？

樋口　ウチですか？　うーん……やっとだんだん雰囲気っていうか、こう、明確にバンドってわかるようになってきたなぁって。簡単にいうと、これはウチっぽいな、これはウチっぽくないなっていうのがハッキリ言えるようになってきたっていうか、だんだんと分かってきました。……昔って結構いろんなことやってたから、てんでバラバラだったところがあるから、そういうところがだんだん絞り込まれてきたのではないかって。

─昔はやりたいことが多すぎて、結構とっちらかっちゃったことがあったと。

樋口　「こういうことやらしたら結構、バクチクしかいないね」って言われるぐらいにはなってきたんじゃないかなって少しは思うんですけど。

─たとえばどういう部分で？

樋口　今回のビデオ作って思ったんだけど、そういう感じっていうか、ライブの感じをうまく出せるようになってきたなって感じはするんですよね。ビデオを見た雰囲気とかに。

─あのビデオはB-Tにしか出せないものである、みたいな自信が。

樋口　出てきましたね。

─他のバンドとの比較論において、B-Tっていうのはどういう存在だと思います？

樋口　……あんまり比較しないからなぁ。他のバンドは他のバンドでいい部分を持ってる人もいると思いますね、やっぱり。

─あんまり気にならない？

樋口　うーん……。

─樋口さんは休み中なにやってました？

樋口　友達のライブ行ったりとか。レピッシュ、行きましたね、ZIGGYも行きましたね。うーん……あと、だれ行ったかな。結構行ったんですよ。そんなにすぐポンポン出ないほど。(笑)

─て、どうでしたか。レピッシュもZIGGYも全然B-Tと違うけど。

樋口　うーん……レピッシュすごいなって思いましたけどね。

─以前人のライブを見にいってたときと、見方とか変わってきました？

樋口　いやー、そうでもないですけど。いい部分を見ようって感じになってきましたね。悪い部分を見ようじゃなくて。ライブ見るときに、このバンド、どういうところがイイんだろうって。これがやりたいこと、明確にいま出したいことなんだなぁ、とか。自分自身で解釈しちゃって。

─なぜそういう見方になってきたんですかねぇ。

樋口　そうだなぁ……。ま、けっこう自分たちもそういうふうにしようかな、とか、要するに自分たちの味っていうのを求めて自分たちでできることっていうのを考えてたから、だから逆にそういうふうに見れるようになったんじゃないですかねぇ。だから、自分たちがそういう方に一生懸命考えてたから、これは自分たちのものっていうのを個性とか、他の人たちのライブとか見ても、そういうところを見ようとしてたのかもしれませんけどね。そのバンドでしかできないことって何だろう、とか。まぁ、そんなエラそうなこと言えないんですけどね。(笑)ただ、人には言わないけど、そういうふうに見たりとか。

─その、B-Tでしかできないことって、具体的にいうとどういうことですか？

樋口　ビデオみたいな感じ……あんまり、これがこうだってとこまではまだわからないですけどね。

─なるほど。若いバンドも一杯出てきてますけど、自分たちの存在が大きな影響を及ぼしているって自覚がありますか。

樋口　どうかなぁ……若い人達ってあんまり真剣に見たことないし……。音的な部分で俺たちに似てる人って、あんまりいないような気がするんだけど。

─そうですか。じゃぁ、完全に自分たちの存在っていうのは独自なものだっていう？

樋口　はい、それはあります。なんか、良い方向に行ってるんじゃないかなぁ、っていうか。

─なるほど。でもフォロワーみたいな存在がたくさん出ることは、そのバンドのステイタスみたいなところがあるとは思いません？

樋口　うーん……あんまりそうは思わないですね。自分たちでしっかりしてればいいなと思うし。イベントとか、昔よくやってたけど、ああいうの出ると特にわかるでしょ？　全然もう、考え方自体根本的に違うから。ほかのお客さんから見ると妙に目立っちゃうし、全然ノリが違うから拍子抜けしちゃう人もいるだろうっていうか。

─音楽的にシーンの中で孤立してるって感じ？

樋口　ええ、音楽的には一緒にやって面白そうな人って数えるほどしかいないし。

─そういう状況、寂しいとは思わないですか？

樋口　別にそうは思わないです。イベントでも、同じトーンのバンドでやってみたら面白くなるんじゃないかと思うんですけど。

─B-Tと同じトーンのバンドというと？

樋口　ソフトバレエとか、似たトーンじゃないですかね。全然やってること違うけど。

─ソフトバレエぐらいしかいない？

樋口　あと、マッド（・カプセル・マーケッツ）。

─じゃあ、そういう孤立したような状況でも別に構わないって感じで。

樋口　うーん、そうですね。周り気にしてもしょうがないし。まず自分たちのことを気にしないとっていうのもあるし。

─でも、まったく周りと関係ないってわけにもいかないでしょう。情報社会だし、周りの情報をすべて遮断して自分の好きなことだけやるなんて不可能だと思うし。

樋口　ああ、そうですね。ただ俺が知らないだけなのかもしれないけど。

─もっとアンダーグラウンドな次元で出てきてるのかもしれないね。

樋口　そうですね。

─すると、B-Tの音楽って、本来そんなにメジャーなものじゃないのかもしれませんね。

樋口　うーん……。

─音楽的なクオリティじゃなくて。たとえて言えば、バウハウスがマイケル・ジャクソンみたいに売れてる状況なわけでしょ、いまのB-Tっていうのは？

樋口　(笑)でも、やる以上“売れない”とは思ってないですよ。自分たちがいいと思ってるから、それが売れたらいいなと思ってやってるし。

─いいモノは必ず売れるって信念で？

樋口　……うん、“売れるハズなんだけどなぁ”……って。(笑)そう思ってやってますよ。

─たとえば、同じようなことやっててアンダーグラウンドなままのバンドと、B-Tの違いとどこにあるんだろう？

樋口　……うーん、やっぱりそのバンドの持ってる雰囲気と、曲なんじゃないですかねぇ。

─やっぱり曲なのかな？

樋口　うーん……結構マイナーな曲のイメージがあるけど、実はポップだと思ってるしなぁ、俺、ウチらの曲って。いい歌やってるなと思いますし。

─ええ。じゃあ、アングラな人は、曲がポップじゃないと。

樋口　なんか……なんていうのかな、ポップじゃないっていうか、チャンとした核っていうか、その曲の中のアレがないんじゃないかなって思って。たとえ全部マイナーコードで押してもいい曲はいい曲でしょ？　だからそういうことだろうと思うんですよね。

─なんでしょう、その核というのは。

樋口　……それがわからないから、いまバンドやってるんじゃないですかね。(笑)

─なるほど。それを探し求めてって感じ。

樋口　ええ。それがわかってやってたらすごいつまんないと思うし……。答えがわかってる計算みたいなもんじゃないですかね。全然つまんないですもんね、そんなのって。

─なにかを表現しようとしている人って、そういう核を求めてやってるものなのかな。

樋口　そういう姿勢がないとやっぱり……。

─多少はそれが見えてきました？

樋口　形は見えてきたなってイメージ。その核にあるものは、っていうとまだ全然わからないですけど。

─それがわかったら、B-Tが終わるとき、音楽やめるときって感じ？

樋口　うーん、でもなにかひとつわかっても、また次の問題が出てくると思うから。

─いままで、なにか見つけたなって瞬間は？

樋口　形が見えるだけでもすごい重要だと思うんですよね。始めたころって、どういう形なのかってこともわからないわけだし。

─じゃあ、次のアルバムあたりで、それがより明確になってくるって感じなのかな？

樋口　ええ。そうなるとまた次のなにかを探して、遠くに薄い明かりが見えてまた行って……っていう感じです。

Text **Dai Onojima**

Hisashi Imai 今井寿

新作はもうちょっと意識しないところでシンプルにできたらなと思ってます。……ストレートというのとはまた違うけど、すっきりまとめてみようと。

「現時点でのバクチクの位置づけ」というのがインタビューのテーマだったわけだが、B-Tのメンバーは全員、そういうことにほとんど関心がないようだ。特に今井寿は、いい意味での音楽バカ。いいメロディ、カッコいいビート、イカしたサウンド……そんなものを作りだすことしか考えていない。以下のインタビューも、今後のB-Tのサウンド的な方向性についての話がメインになってしまった。

—今回のビデオというのはいろんな意味あいがあると思うんですけど、今井くんにとってのビデオでのB-Tというのは、"現時点でのバクチク"という感じなのか、今までのバクチクの集大成なのか、これからのバクチクを予見させるもの、どれでしょうか。

今井 うーん、もともと持っていたそういうカラーで……集大成っていうより、"いまのバクチク"ですね。

—じゃあ、"いまのバクチク"というのは、デビュー前、デビュー当時とかに比べて変化してると思います?

今井 ええ。音的にも変化してるかもしれないけど、やっぱりバンドに対するみんなの取り組み方とか考え方っていうのが、やっぱり成長してきてると思います。

—たとえば、どういうふうに。

今井 うーん、アンサンブルにしても。ん、特におれだけなのかもしれないけど。むかしは全然そういったことは、ほとんど意識できなかった。で、ここ最近でバンドの音っていうのにすごい、……うーん、やっぱ、一番最初に土台として考えるってこととか……。

—それが"むかしのバクチク"と"いまのバクチク"の一番大きな違いだっていう。

今井 そうですね。あんまりむかしはバンドの音っていっても……ま、いまもあんまりよくわかっていないけど、ほとんど全然理解できてなかった。バンド・サウンドとかって言われても。

—今井さんが考えるバンド・サウンドとは、どういうものなんですか。

今井 人間……まぁ、うちに関していえば、打ち込みとかやってないから、人間で合わせるっていう。5人で。で、それが、うん、ぴったり合うっていう。

—それは、5人の人間性が合うということではなくて……。

今井 いや、音としてです。

—言葉をかえて言うと、お互いが出す音というのが、はっきり固まってきたという。

今井 そうですね。

—それを、お互い理解できるようなってきたという。

今井 うーん……まぁ、いまは固まってると思います。

—それを音にして、イメージとしてビデオに定着してみたと、そういうことですか。

今井 ええ、それはそうですね。そういうような気がします。

—それは、今井くんが考えるB-Tの完成型に近づいてきたっていう実感があるんですか。

今井 いや、全然それはないです。考えてないですね。

—もっと理想が高いということ? 完成というものが、そもそもありえないと思ってるのか。

今井 ええ。もっとほかにできることもあると思うし、やりたいこともあるし。うん……まだ完成されてないです。

—完成されるときって、あると思います?

今井 ……うーん、いや、ないと思います。

—それは、完成させたくない、ひとつの型にはまりたくない、という気持ちですか。

今井 ええ、そういう気持ちもあるし。うーん……つうか、もう毎年毎年、レコード作る時期になって、今回も前の路線で行こうとか、そういう気持ちにはまだなったことがないんで。

—ああ、なるほど。

今井 こういうこともできる、ってそういう気持ちが、もう自然に出てくるかぎりは、やっぱりちょっとずつ変わっていくんじゃないかと。

—もうそろそろ次のアルバムの曲作りに入るんですよね。なにか具体的に方向性みたいなものは考えてますか。

今井 いや、まだ……そんなにしゃべれる感じじゃないですよね。

—漠然としている。

今井 ええ。

—前のベスト盤がそれまでの総決算的な意味あいがあるとすれば、次は当然新しい展開みたいなものを期待されますよね。

今井 ええ。あの感じにはしたくないと思ってます。

—あの感じとは、機械的なビート、プラス、ダークな感じ?

今井 うん。もうちょっと意識しないところで、シンプルにできたらなと思ってます。

—というと?

今井 普通に聴いた感じ。曲を聴いてムリヤリ、この音はちょっとハズそうとか、そういう感じじゃなくて、普通にアレンジしてみんなで合わせてみて、……ストレートっていうのとはまた違うけど、スッキリまとめてみようと。

—出てくるものを素直に。

今井 ええ。

—前の2枚のアルバムは、どういう位置づけなんですか。

今井 あれはもう、すごい大胆にしようという。

—そういうものをとっぱらって、もっと自然体でいこうと。

今井 そうですね。でも本当に普通のロックンロールっていうか、そういうのはやりたくないです。

—できないし、やりたくない。

今井 うん、どっかすごいヒネくれてるところとか。やっぱりそれは雰囲気だけでも欲しい。

—なるほど。B-Tの魅力というのは、一種の不自然さだと思うんですよ。それを取っ払って自然体でやることで、B-Tらしさが維持できるものなのか。

今井 えー、それはどうだろうな。でも曲を作るときは、最後の最後まで考えちゃうからな。

—人のレコードとか聴いてインスパイアされる部分は?

今井 それはまぁ、フレーズとかそういうことより、バンドとかアーティストの曲に対する考え方とか、そういうところが大きい。

—最近気になるバンドは?

今井 最近ないなぁ……。でもやってみたいなって思うのは、レゲエのビート。

—へえ〜、なんで? 何を聴いてそう思ったの?

今井 いや、これは古いんですけど、PIL。

—ああ。まぁ、レゲエって言ってもすごく整形されたヤツね。

今井 そうです。もちろんそのまんま温度の熱いレゲエっていうのはやりたいとは思わないですけど。(笑)

—つまりリズムですか。

今井 ええ。

—B-Tのセールス・ポイントはメロディだったりしたと思うんですが、ここになってリズム表現に目が向いてきたって感じ?

今井 最近……『狂った太陽』あたりから……もちろんメロディも重視してますけど。

—なぜそう変わってきたんですか。

今井 まぁそのリズムとかベース・ライン、そういうのでやっぱり聴こえ方も違うし、ノリとか。で、テンポ遅くてもそういうところでまた違ったスピード感っていうのも出せるし、PILとか。

—それは今井くん自身の考え方が変わってきたのか、やりたかったけどいままでのB-Tでは技術的にそこまでのニュアンスが出せなくて、やりたくてもできなかったのか。

今井 もう、おれが曲作るときから、もうテクニックがなかったから。

—速い曲やるのは簡単ですからね。ある意味では。ゆっくりしたテンポの曲をチャンとやるのは難しい。それができるようになってきた。

今井 そうですね、ええ、できるようになってきたと思います。

—ビデオも冒頭3曲、スロウな曲だったでしょ。なかなかコンサートの冒頭にああいう曲を続けるのは、勇気がいることだなと。

今井 ええ。まぁ、スロウな曲だけど別にバラード系じゃないし、踊る気になれば踊れる曲だから。

—でもレゲエとは面白いですね。

今井 まだどうなるかわかんないですけど。

—まだ全然、曲とかは手をつけない状態?

今井 ええ。

—まったく1から考えるの、大変ですよね。

今井 うーん、そうですね。気持ちがそういう曲作りについていかないのが一番イヤだから。

—気持ちを切り換えるのも大変ですよね。どうやって切り換えるんですか。

今井 もう、ずっーとウダウダと。(笑)フロ入ってみたり。

—あんまり出歩かない方ですか?

今井 曲作ってるときは出歩かないですね。あと夜中とか朝方散歩に行ったりとか。

—あとは、酒ですか。

今井 ええ。(笑)

Text **Dai Onojima**

RR▶SPECIAL GOODS PRESENT

Climax Together 直筆サイン入りフォト・アルバム

応募方法&あて先

9月10、11日の横浜アリーナ公演でしか入手できなかった豪華フォト・アルバム（ほとんど素顔のメンバー写真満載の内容）に5人の直筆サインを入れて5名様に。▶右下の応募券をハガキに貼り、住所・氏名・年齢・電話番号を必ず明記したうえ、〒156-91世田谷区千歳郵便局私書箱25号　ソニー・マガジンズ　パチ▶ロク『スペシャル・グッズ・プレゼント』B-T係まで送ってください。12月20日消印まで有効とします。▶グッズ自体が仲々貴重なものです。皆さんふるってご応募ください。

5名様



次号予告 今井寿・凌辱

パチ・パチ・ロックンロール2月号 12月26日(土)発売

次号のパチ▶パチ・ロックンロールには、ファン待望の「今井寿／独占ロング・インタビュー」を掲載します。今井寿が目論む今後の方向性、音楽的変化の示唆etc.…。これからのB-T、ひいては93年春以降にリリースが予定されている『ニュー・アルバム』のイメージを先取りするための、観念的かつ抽象的ながら非常にＤＥＥＰな会見結果を報告できる予定です。皆さん大変お待せしました。遂に次号にて実現です。お楽しみに。

Buck-Tick Climax Together premium

CLIMAX TOGETHER——直訳すれば「一緒に絶頂」ってところだろうか…?! なるほどB-Tらしいと言えばB-Tらしいタイトルではある。しかし「一緒に絶頂」を迎えるのはまだ早い。確かに今回の作品はスンバラシイ出来栄えだし、ファンならずともゼヒ一家に一本おススメしたいものだ。しかし、それでも「一緒に絶頂」を迎えるのはまだ早い。どうせなら、とんとご無沙汰の新作に触れた瞬間に「絶頂」を迎えたいものである。まあ、とりあえずその日はそう遠くはなさそうだし、まずはこのビデオで一本。ね。

パチ・パチ・ロックンロール号外新聞

平成4年11月27日発行　ソニーマガジンズ　Text Miho Shimizu

COW COW

CDバラマキ作戦敢行す!

11・1事件が起こるまで

新宿アルタ前の日曜日、歩行者天国になる新宿通りでは通常であれば、アルタのスクリーンからはコマーシャリズムに乗っとった脳天気な音楽が、アナウンスが流れ、買い者客達を始めとする歩行者達の健全な賑わいをみせるのであるが、事件当日の午前中から辺りには不穏な空気が漂っていた。その周辺はいつもとさして変わらぬ情景なのに、新宿駅東口に設けられたステージを取り巻く連中は…

そう、そこにたむろしていたのは多数のパンクス達だったのだ。普段、朝からパンクな人には会ったりしない。会う機会があるならば、それは朝帰りのパンクスなのだ。パンクの人に早寝早起きは似合わない。健康なパンクは足の太いメタル兄ちゃんぐらいイヤだ。しかし、何故、中途半端な時間帯にも関わらず、そこにはパンクスが?

疑問は仮設ステージに張られた白い布の文字を解読することによって一挙に解けた。そこに染め上げられた〝COW COW〟という文字がキーワードだったのだ。そう、COW COWとはあのCOBRAのPONとYŌSU-KŌのユニットである。その彼らが一体、何を行おうとしているのか?

まさか……

そのまさかは的中した。かねてより、彼らが11月1日には新宿アルタ前で、11月8日には大阪三角公園にて共に午後1時よりCDバラマキを敢行するとの予告文が配布されていたからだ。まさか、そんな暴挙が実現するとは夢にも思っていなかった。しかし、ここにはPONとYŌSU-KŌの復活を信じて待っている人達がいる。そして、CDをばらまくための準備が実に着々と進められているのだ。



やっぱりパンク?! PON（右）とYŌSU-KŌ（左）

11・1事件、白昼のアルタ前にて勃発

正午を過ぎたあたりからパンクスの数は膨張し続けた。パンクスだけじゃない。ロック少年少女達にまぎれて、好奇心旺盛な通行人達も何が起こるのかと仮設ステージを取り囲み始めていたのだ。その数は3000人を少し欠けるといったところだろうか。

午後1時5分前、拡声器からパンクス達に向かって事前に警告が発せられる。その内容の不穏さ加減に急いでいたはずの人々の足も止まる。

何かが起こる……

そして、午後1時ちょうどに流れ始めたSEと共にしびれを切らした群衆のざわめきがいっせいにあがる。PONとYŌSU-KŌがそこに姿を現わしたのだ。

2000人のパンクス達の雄叫びが轟く

2人の出現によって、アルタ周辺を流れていた軽やかなメロディがイッキにかき消されてしまうほどの歓声が轟いた。狂乱狂喜する彼らの姿は穏やかな新宿の日曜日を切り裂いた。そこには、かつて田中星児が高らかに歌い上げた〝ビューティフル・サンデー〟的ファクターは何ひとつ含まれてはいなかった。

次々に挙がるパンクス達の拳、そして雄叫び、そしてヘッドバンキングの嵐、嵐、嵐…

そんな彼ら流の最大限の歓待によって迎えられたのが、〝TOKIO RIOT〟だ。この曲こそ、彼らに捧げられてしかるものであろう。この愛すべき暴徒達に……

COW COWサウンド、パンク以外の何者でもなし!

そもそも、COBRAを活動休止に追いやったのには〝ハウス〟というものがキー・ポイントだったという話を聞いていた。PONとYŌSU-KŌが初めてパンクに触れた時のインパクトを90年代のハウスに見い出したのだと。

実際、COW COWの1stアルバムのサンプル・テープを聴くと、全曲打ち込みである。しかし、譜割りにはパンク時代の名残りが漂っているし、サウンドも〝ハウス〟と呼ぶにはハードだ。敢えてジャンル分けをするならば、〝ハード・コア・テクノ〟と呼ぶのが適当なのだろうが（実際、〝東京CITYハード・コア〟という無茶苦茶カッコイイ曲もある）、イケイケ系のT99やS・U・Nなどとは大きく趣が異なる。

しかし、だからと言ってここでプレイされているのは何だ? 確かに打ち込みであることには違いない。が、さすがにPONのベースもYŌSU-KŌの歌声もデジタルなものにはできないのだ。特にPONのチョッパーはテクノ系のサウンドにはあまり聞かれないものだと思う。しかも、2000人のパンクス達の歓声によって打ち込み音はかき消されてしまっている。

結論は〝何だ、パンクじゃないか〟である。

しかも、今、パンクと呼ばれているものの大半はファッションと形式だけだ。それでは様式美というひとつのジャンルを確立してしまったヘヴィ・メタルやプログレッシヴ・ロックと大差はない。そういうものはここでは〝様式美パンク〟と呼ぶことにしよう。

そこでCOW COWのこのサウンドである。

もう一度言おう。

〝彼らはパンクだ。どうしようもなくパンクなのだ……〟

押し寄せる群衆、阻止する警備隊と激突!

プレイ前の警告は何らファン達には効果がなかったらしい。みんな、PONとYŌSU-KŌに少しでも近づこうとものすごい勢いでステージめがけて突進しようとしていた。

冷やかしの通行人達はさすがに本気に燃えている彼らには近づけず、遠巻きに事の成り行きを見守っている。



場内大パニック　押し寄せる人、人、人

「押さないで下さい。押さないで下さい!」

ただいま、大変危険な状態になっています。

パンクス達も真剣なら、警備員達もそれに負けじと拡声器を片手に、そして押し寄せる彼らを抑えつけるのにヤッキになっている。

両者の間には何らCOW COWのライブというものを通さなければ確執があるわけでもない。しかし、枠から飛び出そうとする者と、それを押さえ込もうとする力の対比は、危険を冒した上で敢えて言うならば、理想郷の実現と自己の権利の擁立のために体を張った学園紛争時代の学生達とそれを阻止する機動隊の姿と何故オーバー・ラップしてしまう。

事実、日曜日のアルタ前を通行する、今では良きパパで中間管理職あたりになって家庭の顔と会社の顔を器用に使いこなす中年のオヤジ達がところどころで立ち止まって、その模様を凝視していたりしている。

2000人のパンクス達の快楽と、警備員達の〝安全の保証〟という名のもとでの対立。

両者の間には立派に、そして秘かに、イデオロギーの対立は存在する。

それを、今では〝社会の良識〟という枠に閉じ込められてしまっているオヤジ達が、その光景を遠目に眺めている。

そう、かつての〝TOKIO RIOT〟達、それを嘲笑うかのように、その時、アルタから〝パパの歌〟がかすかに流れてきたのはとても印象的だった。

まさに暴挙、バラまかれた2000枚のCD

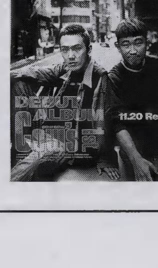
暴徒達を更に挑発するかのように、ステージの上からさんざん煽りまくったPONとYŌSU-KŌは約5分間の演奏が終わると嵐のように去っていった。そして、二度と彼らはステージに戻ってきはしなかった。

それから、約束されていたCDの配布が行われた。その数、約2000枚!

ロック・バンドと呼ばれているものが、日本でもマーケットを獲得していって以来、レコード会社や事務所の作るマニュアルに動かされた揚句、無難なバンドが増えてしまっている時代こそ、COW COWのとったゲリラ的な行動は本当にみんなが待ち望んでいたものじゃないだろうか?

その証拠に、最近、めっきりライブ・ハウスやコンサート会場で見かけることが少なくなったロック少年達が、あんなに生き生きと目を輝かせて、CDの配布の順番を待って、たのだから。

RR GOODS PRESENT



COW COWポスター　5名様にプレゼント
官製ハガキに応募券を貼って〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ㈱ソニーマガジンズ　パチロク　スペシャルプレゼントCOW COW係まで。締め切りは12月20日消印有効。

unicorn



雪が降る町

究極（?）の“年の瀬ソング”遂に登場か!? いや，そんな気負いはまったく無いようですが…。ユニコーンさんがバンドとしてのシングルを久々にリリースします。タイトルは「雪が降る町」（カップリングは「お年玉」だそうです…）。12月2日には全国のレコード屋さんに並ぶのでひとつヨロシク。あくまでも，“クリスマス・ソング”よりは賞味期限が長くなってますんで，ご注意を。（笑）

Photography **Atsushi Ueda** Text **Satoru Kanai**
Styling **Kumiko Hara** Hair&Make-up **Hiroshi Kunisawa**



unicorn

雪が降る町

皆のソロをリリースしたあとだったから、いかにも〝全員で作ったげ〟なヤツをね。（笑）
冬の定番になってくれれば。FMの方はちゃんとサビまでオン・エアしてください。（笑）



ついに出るぞチミチミ！　何がって？　とぼけなさんなよおまいさん。そう、ユニコーンの待望のニューシングル『雪が降る町』だよアンタぁ！

メンバーのソロシングル連続リリースが終了して、ようやく5人が結集して作った最新の音源。〝S・F・W〟ツアーでも御披露されたのでご存じの方も多いかもしれないけど、仰々しいオープニングから一転して、ミディアムテンポのビートにブラスが絡むという、円熟期のビートルズ的感覚の強い演奏に乗せて、曲名にも如実に表れているような年の瀬の情景を描いたタイトル曲。季節柄クリスマス・ソングなるモノはいっぱい出たけど、コチラはもうちょっと賞味期限が長い。こりゃ言うなれば〝年の瀬ソング〟か!?

一方のカップリング曲は、アコースティック・ギターとハーモニーが良い雰囲気を醸し出してる阿部&川西共作による『お年玉』。そうさ！　今回のシングルはユニコーンからのささやかなクリスマスプレゼントであり、まさにお年玉なのだよ。

というわけで、メンバーにこのシングルのことについて話を伺ってみたので、読んでみてくれたまえ。しかも連続取材とグラビア撮影のミックスという、お互いトランス状態（？）だったので、無理な意気込みもなく、いわばきわめてリアルな自然体でのコメントとでも申しましょうか。精も根も尽き果てた（笑）ルーズでアンニュイな状態の中、進められたのだった。

☆

――というわけで、ホントに久々のユニコーンとしてのシングルなわけですけど。

奥田「まず〝雪の降る町〟は、1回曲作ったのがボツになって、そのおかげで休みが取れたんで、そのときにできてしまったのがこれだったんですけど。皆のソロをリリースしたあとだったから、いかにも〝全員で作ったげ〟なヤツをね、〝全員参加げ〟な。（笑）ソロを出したことで、別に心境が変わったということも全然なくて、別にソロで成長するようなこともなかったし。詞は曲に合わせるだけなので、別に意味は考えてないし。いつものことですけど」

堀内「ソロもシングルで2、3曲を1週間で録ったんで、あんまりバンドに反映することもなかったですね。ソロのあとバンドでやる間に時間があれば話は別ですけど、ソロからの流れですよね」

阿部「2曲目の〝お年玉〟は西川クンと詞を共作して、曲はボクで。曲がどういうところで生まれたかというと…、家で（笑）これも〝全員でやったげ〟な路線を狙って、シングルの選考会でコレを出したんですけど今イチだったから、レコーディングのときにもっとシンプルにしたの」



堀内「けっこう泣きの展開とかもあったんだけどね」

阿部「それをカントリーっぽくして」

西川「歌詞のところは、2人でストーリーを考えて、どんどんそのテーマに沿ったコトバをハメていくとけっこう出てくるよね、いろいろと。まァ、そんなカンジで作ったよね」

阿部「何か〝悩む〟って言うよりも〝言い合う〟ってカンジだからね」

堀内「神戸のホテルで、2人で言い争ってた中で生まれたんですよ」

西川「オイコラァ何じゃこの単語はァ！ 字が汚い（笑）とか、いろんなことを言ってたんですよ」

——奥田さんなんかは『お年玉』を聴いてどう思われました？

奥田「えーっ、シンプルで…、シンプルだと（笑）」

——ユニコーンの方向性として、こういうシンプルなことを演りたいというのはあったんですか？

堀内「というか、1曲目が1曲目なんで、2曲目は何にしようかと選曲のときに考えたところの結果で」

——レコーディング時に、何かエピソードとかありました？

阿部「総じてレコーディング期間が短かったんで、あまり深く考えることもなかったんですよね」

奥田「エビくんのコーラス事件があったじゃない」

——何すか、それ。

堀内「えっと〝雪が降る町〟の方はコーラスでブワーッと広がるっていうイメージだったんですけど、失敗（？）して山下達郎さんみたいになったと。（笑）でもユニコーンとして作品を出すのって今年はコレだけなんですけど、久々に出したってカンジはしなかったですね」

——そんなにユニコーンの久々の作品というようなプレッシャーもなかったと。

手島「1回目の選曲会のときはそういうのはあったけどね。勝負を賭けなければいいかんのではないかとか、今までカッコ良いことばかりやりすぎたんじゃないかと。で1回目でもう1回書き直しってことになって、そこでクリスマスソングみたいになったと」

——じゃあ、読者の方々に今回のシングルの聴いてほしいところがあったらどーぞ。

奥田「やー、大体いつもないですからねェ。（笑）とりあえず、毎年この時期になったら聴いてみるというのも良いんじゃないでしょうかね」

——じゃ、続いて手島さん、どーぞ。

手島「共に良い曲なんで、これは世にはばかってほしいなという気がしてます。…ちょっとはね。（笑）地味って言や地味だから、爆発的とまでは行かなくても、そこそこはびこってほしいなァとは思ってます。どう考えても、例えば渋谷の街を買い物してるときに、雪もちらつきーのという中歩いていて流れると、単純に嬉しいじゃないですか」

——西川さん。何か要望もあればお願いします。

西川「冬の定番アイテムになってくれれば良いと思います…。（笑）ただFMの方には、ちゃんとサビまでオンエアしてくださいと。長いけども、途中で喋らずにということを切にお願いしたいと（笑）」

——続いてアベさん。今までみたいに激しくない分、ちょっと大人しくなったかな？ なんて思われる曲ですけど。

阿部「っていうか、あんまり激しいのは演りたくなかったんですよ、今回は。ソロ出したあとにバンドだぁってカンジの、バンドの何とかビートでこれだぁなんて盛り上がっていくのはあんまり好きじゃないんで」

——あとEBIさん、どーぞ。

堀内「そうですね、いつまでもボクたちは若くないと（笑）」

——例えば今回のシングルが次に出る、ユニコーン久々のフルアルバムのヒント（もしくはパイロット）になってる的なことはないんですか？

奥田「全然ないです。毎度のことですけど、曲ができてからなんで。できてから曲をシャッフルにすると」

西川「それでボツになる。（笑）ま、とりあえずツアー終わってからですね。レコーディング自体は来年の1月の半ばぐらいから準備にとりかかろうかと思ってますからまだまだですよ」

奥田「今までの粋を結集した最高傑作にすると。で、シャッフルにすると（笑）」

手島「次こそヘビメタかな。（笑）」

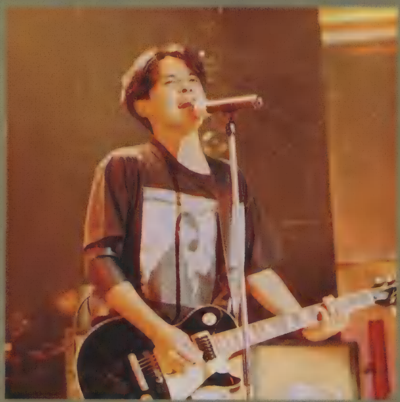
西川「ヘビメタやったことないですからね、挑戦したいですねェ（笑）」

奥田「やはりシャッフル（笑）」

西川「じゃ、テクニカル・ヘビィ・シャッフルで（笑）」

unicorn

RR▶SPECIAL GOODS PRESENT



直筆サイン入りツアー・グッズ

6 名様



応募方法&あて先

ユニコーンさんのツアー・グッズ（パンフレット、ポスター2種、トランプ、帽子、文具セット）に5人の直筆サインを入れて各1名様に。▶右下の応募券をハガキに貼り，住所・氏名・年齢・電話番号を明記のうえ，〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ソニー・マガジンズ・パチ▶ロク『スペシャル・グッズ・プレゼント』係まで送ってください。12月20日の消印まで有効です。応募者全員サービスの応募券とは別ですので，くれぐれもお間違いのないように。ひとつ頼んまっせ。

さ〜て、来月のユニコーンさんは…



▲こちらの写真は「今月」のユニコーンさん

噂のミニ・アルバム『UNICORN』徹底検証

こんにちはマスオです。いやあ，最近はめっきり寒くなりまして。クリスマスも間近かに控え，心はウキウキワクワクってかんじですね。さて来月は，①噂のミニ・アルバムの全貌 ②セルフ・ライナーノーツ最終回の2本です。――来月もまた見てくださいね。ジャンケンポンッ!! エへへ。

パチ▶パチ・ロックンローン 2月号／12月26日(土)発売

応募者全員サービス!!

短期集中連載第2回目

先月号よりスタートしましたユニコーンさんの『セルフ・ライナーノーツ』。いやはや第1回目から大反響ありがとうございます。この企画，3ヵ月の短期集中連載でして，その3号分の応募券を集めて応募くださった方全員に，この『セルフ・ライナーノーツ』を保管できる特製ファイルをプレゼントしちまおうっつうものなのです。ですから，点線に沿って切り離し，大切にとっておくのと同時に，右にある応募券も大切に保管しといてくださいね。詳しい応募方法は，次号最終回にてお知らせいたします。お楽しみに!!

この応募券を大切に保管すること▶

応募券
RR
①
unicorn

こちらグッズ・プレゼントの応募券→→→→→→→

スペシャル・グッズ
プレゼント
RR 1
UNICRON



服部

①ハッタリ ②ジゴロ ③服部 ④おかしな二人 ⑤ペーター ⑥パパは金持ち ⑦君達は天使 ⑧逆光 ⑨めずらしく寝覚めの良い木曜日 ⑩デーゲーム ⑪人生は上々だ ⑫抱けるあの娘 ⑬大迷惑 ⑭ミルク

33DH5253 ▶ 1989.6.1 RELEASE

SELF LiNERNOTES Koichi Nishikawa

①ハッタリ（編曲：笹路正徳）
笹路サンに依頼したんですけど、いろんなメロディを映画音楽というかミュージカルのように組合わせてて。レコーディングに立ち合ったときに何がおもしろかったかと言うと、弦楽器のプレイヤーの持つ竿、じゃなくて弓ですか、（笑）それが大量に波打つサマが奇麗でした。ビデオに録っておきたかったですよ、弓の動くサマを。（笑）

②ジゴロ（作詞：奥田民生／作曲：川西〝西川〟幸一）
別に子供に歌わせてるイメージというのは考えてなかったんですけどね、録るときに回転数を間違って録っちゃったんですよ。（笑）それがそのままになったんで、じゃ子供だ（笑）という。まあ①のあとだから何にしても刺身のツマ的な存在ですよね。（笑）でも何かを感じさせます。（笑）

③服部（作詞・作曲：奥田民生）
これは日本ハードロック界の古典になってますよね。（笑）ライブで演っててもおもしろいし。あの〝楽勝〜〟ってクダリが良いですよね、（笑諸っぽい言い回しで）〝ルァックショウ〟ってカンジで。（笑）

④おかしな2人（作詞：川西〝西川〟幸一／作曲：奥田民生）
けっこうこれは良い詞だと思いますよ、自分でも。詞だけ独立してもけっこうイケるんじゃないかと。女の人が聴くと、良いなぁって思うんじゃないでしょうかねぇ。
詞のモチーフは、前のアルバムに入ってる『ペケペケ』の男女を膨らませたその後みたいなカンジで考えまして。ちょっと女々しいですけど。最初、民生クンがこの曲を持ってきたときに仮タイトルが「NEEDS OF FAN」って書いてあったぐらいなもんで、（笑）ライブには欠かせないナンバーになっておりますねぇ。

⑤ペーター（作詞・作曲：堀内一史）
ドラムスのアレンジでどうしようかを悩んでね、〝ズンバッパズンバッパッ〟っていうのもアレだなあと思って。昔の、ヨーロッパの街を流してたような大道芸人とかチンドンマンをイメージしてアレンジしようって皆で決めてこういう風になったという。

⑥パパは金持ち（作詞・作曲：奥田民生）
これは『服部』が出てたころの時代背景ですよね、何となく。まだバブル崩壊前の[illegible]ですよね。当時の世間がこうだったですし。社会性を問わないんだけど、当時の状況を反映してるような。で、コレに⑦をEBIが書いてきたから続けようということで、途中にSEで白々しい拍手入りーのと、考えられてありますよね、いろいろ。（笑）

⑦君達は天使（作詞・作曲：堀内一史）
当時、民生クンと奥居香がデキてるって噂が流れたんですよ、ファンの間で。それが詞に反映されているんですねェ、〝ブリブリ〟おしりと甘い〝カオリ〟と。そのあとであげく〝アミーゴ!〟って言ってるのが香の声なんですよね。（笑）そんなにはファンはあまり気がつかなかったみたいですけど、バカですねェ。（笑）EBIくんの曲ってけっこうラテンっぽいのが多いですけど、ホントのラテンってできませんから。例えばジャズが手だとしたら、ロックは足で、ラテンは右半分なんですよ。アレはラテン屋サンじゃないとできないですから、それっぽくなる雰囲気で。東京の広島〝風〟お好み焼きっていうのと一緒ですね。（笑）

⑧逆光（作詞・作曲：阿部義晴）
曲的にも詞的にも、彼のイメージからしてもらしからぬという。（笑）ドラムは基本的にはエンディングのところだけですけど、でも〝感動した風（ふう）〟な終わり方っていうのをやってみたかったのね。阿部クンが参加して初めて提供した作品ですけど、単純に良い曲だなと思いましたよ。
あとアタマから入ってくるスチール・ドラムたいな〝カッコンカッコン〟って音、民生が演ってたんですよ。でっかいスタジオの一番奥で。それ見てたら、民生の目がだんだん寄っていくんですよ。（笑）それを覚えてますね、今だに。

⑨珍しく目覚めの良い木曜日（作詞・作曲：手島いさむ）
これってけっこう凝ってるんですよね。マルチを引っ張り出して皆でグチャグチャにして、それをひっくり返して逆回転させたり。あと、皆で卓のところに並んでそれぞれのテリトリーを持って、スイッチのオン／オフとかフェーダーの上げ下げとかやってたんですよ。そうやって、トラックダウンのときに遊ばせてもらったのはおもしろかったなあ。
曲調はレゲエですけど、あんま本物を意識してもねぇ。そこまで精神的にノメりこんでるわけでもないし、本家の方に申しわけないですからね。でもね、最近やっとわかってきたんですよ、レゲエの三連系のオカズっていうのが。でも当時は全然わかってないから、全然そんなテクニックを使ってませんよね。だから今ならもっとおもしろくできるんじゃないかと。これってほのぼのしてて、曲に間があって良い曲ですよね。でもその分ライブで再現するのは難しいですけど。

⑩デーゲーム（作詞・作曲：手島いさむ）
聴いてわかるとおり、中近東っぽいアレンジを意識しましたよね。ビートルズって今でも好きなんですけど、リンゴ・スターの持ってるビートっていうか、そんなに大したこと演ってないんだけど、ハイハットがちょっとハネてていいな、というのも意識してたと思うんですけどね。

⑪人生は上々だ（作詞：川西〝西川〟幸一・阿部義晴／作曲：奥田民生）
阿部クンと2人で詞を作ったんですよね。男と男の友情を描いた、でもちょっと友情より違うところに行っちゃったかなというヤツですけど。（笑）民生クンが曲を持ってきたときに『人生は上昇だ』っていう仮タイトルだったんですよ。最後の方が転調してって、どんどん上がっていくでしよ?それを実際の歌詞を付けるときに〝上々だ〟に変えて。ドラムに関して言うと、デモテープの時点ではヤオヤ（※注・銘機と呼ばれるリズムマシン）っぽい音が入ってたんですよ。で、この曲でドラムを生で演るとフツーっぽくなるからヤメようということになって本番でもヤオヤを使ったと。

⑫抱けるあの娘（作詞・作曲：奥田民生）
昔ロックだった人が、ちょっと大人になったカンジの音ってヤツで、こーゆーリズムをユニコーンの中で演ったのは初めてなんですよね。曲調はスローなんですけど、遅い分ムズカしかったです。ほかの曲と比べたら、割と時間がかかりましたね。

⑬大迷惑（作詞・作曲：奥田民生）
スゴく速い曲ですけど、ただ突っ走るだけなんで演りやすかったですね。特にこういう体力勝負の曲は、最初のテイクでキメないとできなくなっちゃうんですよ。そういう意味で、けっこう緊張しましたね。
でも本当はね、転勤とかそーゆーシーズンになるとバカ売れする、季節モンをネラったんですけど、ダメでしたねー。（笑）

⑭ミルク（作詞・作曲：奥田民生）
ビートルズの『ホワイトアルバム』の最後みたいなカンジですよね…、ちょっと違うか。（笑）ファンの子なんか〝子供ができたんだー〟とか言ってましたけど、ホントにできたんなら、こーゆー詞は書けないですよね。

《総評》
これ基本的に、海が近い観音崎マリンスタジオで演ったんですよね。当時は、バンドに勢いがありましたよね、「何かしたい何かしたい、でもフツーじゃイヤだ」みたいな欲求が。レコーディングも充実してましたしね。今でもときどき聴いたりしますけど、良いアルバムですねこれ、よくできてますよコレは。曲もそれぞれ良いし、流れも良いし、完璧ですよね。あげく、服部という世の中をバカにしたタイトルの起用といい、群を抜いてますよね。この作品からじゃないかな、世の中でヘンなタイトルとか日本語のタイトルが増え出したのは。
この作品だけ、タイトルがまず最初に決まったんですよ。『PANIC ATTACK』のツアーの最後の打ち上げのときにあーでもないこーでもないって話してて、日本語でってことで出てきたと。リズミカルな響きとか絶妙な位置にありましたよね。そのときレコード会社の人も来てて「次のアルバムのタイトル決まりました、『服部』です」って言ったらシーンとなったんですよ。もーその瞬間、イケるなと思いましたよ。（笑）あのときにこのアルバムはできてたんですね、きっと。

応募者全員サービス!! 詳しくは右下を

キリトリ線



ケダモノの嵐

①命果てるまで ②フーガ ③ロック幸せ ④ケダモノの嵐 ⑤エレジー ⑥自転車泥棒 ⑦富士 ⑧リンジューマーチ ⑨スライム プリーズ ⑩CSA ⑪いかんともしがたい男 ⑫夜明け前 ⑬働く男 ⑭スターな男

CSCL 1518▶1990.10.1 RELEASE

SELF LiNERNOTES Yoshiharu Abe

①命果てるまで～第三の男～命果てるまで（作詞・作曲：奥田民生）

最初はもっとヘビィなロックンロールだったんです。そのイメージじゃないものにしようと思って、ウクレレを導入した時点でハワイアンになったという。（笑）それでスチール・ギターも登場してきて。これがリハーサルに入ったときの1曲目で。だから意欲的にアレンジに取り組んだというか、いろいろやってみようと。ま、最初ですから真剣に考えてましたよ。（笑）

②フーガ（作詞・作曲：堀内一史）

これもまだ最初の方ですから、（笑）だいぶ変わりました。原曲はもっとミミッチィカンジだったんですけど、EBIクンが歌うからゴージャスにしようと。で、メロディに童謡チックなところがあったんで、実はこのころからサブリミナル効果を使いまして。（笑）イントロでAメロを演ることで歌に入ると「何か聴いたことあるな」って、イントロですでに演ってるから当たり前だ（笑）と思わせる効果をネラいました。

③ロック幸せ（作詞・作曲：川西幸一）

これはリハの時点で悩みました。けっこうストレートなロックでしょ!? かと言ってメロディも単純だし、ヘタすると幼稚になってしまうというのがあって。それを隠すために難しくしようと、例えばドラムのバスドラから入る〝ドンバドドンパッ〟を、スネアから〝パンドパパパッドン〟という逆転の発想をしてみたり。（笑）ボクは盛り上がってたんですけど作った本人から「あんまりじゃないか」って言われて。（笑）それが今だに悔やまれますねェ。あと注目すべき点は、ギターを入れることは頭になかったけど、どうにか手島クンのギターを入れたかったんで、この曲のカゲでずっとギターソロを弾いてもらってる。CDでは聴こえてないけど。（笑）それが壁となり厚みとなって（笑）ストレートなロックにより深みを出したという。

④ケダモノの嵐（作詞：川西幸一／作曲：奥田民生）

レコーディング中にこの曲を持ってきたんで、何も考えずに録ったから、そんなに時間がかかってないんです。あと専門的な話をするならば、この曲からリミッターというエフェクターを本格的に使い始めたんですよ。後に『ヒゲとボイン』で、リミッターを強くかけてフェイドアウトするという、誰もやらない荒ワザをやるようになるんですけど、その前兆となった曲ですね。この曲のときに、レコーディングテクニックで一つ進化したと。

⑤エレジー（作詞・作曲：奥田民生）

渡辺満里奈ちゃんがコーラスで参加してるんですけど、それは民生の案で。この曲ってラジカセなんかで聴くとやたら生々しくて、その辺にいるようなカンジがしますよね、小っちゃい演奏家がいるような。（笑）

⑥自転車泥棒（作詞・作曲：手島いさむ）

元の曲がちょっとフツーすぎたんですよ。だから周り（の演奏）をグチャグチャにしてもいいかなと思って、メチャクチャなコードを付けたり。ま、メロディが良ければ、ほかは何をやってもいいかなってカンジで。トラックダウンでも非常に実験的にしてて。レコーディング作業中に、XTCが『オレンジ&レモンズ』を出した時期で、個人的には前作の『スカイラーキング』が好きだったんですよ。その影響も大きいですね。前作の影響はあるけど、新作の方はムリして聴かないようにしてたのを覚えています。

⑦富士（作詞・作曲：阿部義晴）

曲ができたきっかけは…何となく。（笑）当時は同じ音がずっと鳴ってて、上の方でコードが変わってくフワフワしたモノが好きだったんで。あげくベースも抜いて、かつ田舎クサいカンジを入れるということで、マンドリンとか起用しつつ。バタ臭いスペイシー・ミュージックですね。（笑）

⑧リンジューマーチ（作詞・作曲：奥田民生）

比較的『服部』路線というか…、リズムは一緒だからねェ。（笑）でもリズム隊は単調だし、ホントにスパッと録ったんで、あんまり覚えてないんですよ、正直なハナシ。ただ、キーボードはやたら入れたのを覚えてますね。このころはドラクエⅢが流行ってたんですよ。（笑）その中の洞窟の音楽があって、それに影響されて作ったという。（笑）あと機材的にもやたら凝ってましたね、人が避けるような使い方をあえて起用するみたいなノリで。（笑）

⑨スライムプリーズ（作詞・作曲：堀内一史）

まずバンドでやることはやめよう、（笑）というところから始まって、実際そういうノリもあまり出せなかったし。で当時、猫も杓子もジェームス・ブラウンのブレイク・ビーツを使うのが流行ってて。それをヒントに、（笑）昔の『Fa―――n' Night』って曲のマルチを持ってきて、リズム隊とかコーラスとかシンセあたりを最初に入れて、そこから作り始めようと。（笑）それを土台に、（笑）テープの元のテンポを落として、それにベースをかぶせていって。マルチの素材をまるごとブレイク・ビーツにするという、豪快なことをしましたね。（笑）

⑩CSA（作詞・作曲：阿部義晴）

本当はもっと長かったんです。でもやっぱりパンクは短くなきゃいけない、（笑）というコトバが飛び交って。とにかく1分で超速い曲と決まったんですけど、歌詞がなかったんです。そこで、ウチのマネージャーの原田公一クンの名刺を読むという。（笑）

⑪いかんともしがたい男（作詞・作曲：奥田民生）

それは何ちゅうか、民生らしいですよね。だからデモテープのカンジを壊さないようにそのまんまで録ったんです。あとはジョージ・マーティンとかフィル・スペクターのようなカンジでやたら重ねて。

⑫夜明け前（作詞・作曲：阿部義晴）

ピアノと歌というのが最初に決まってて、でも弾き語りだと今イチで、メロディはそのままでもっと残るような曲がいいなあと思ってたんです。歌とピアノしかないから、じゃピアノをナシにしてみようということで。（笑）これなら歌が伝わっただろうって。（笑）このころ、某歌手の人が女の子を口説くときに耳元で自分の持ち歌を囁くという噂があって、その手法を取り入れた。（笑）

⑬働く男（作詞・作曲：奥田民生）

TVですでに使われてたわけで、1番までは完成されてたんですね。で、その1番までのテイクをコピーしてそのままくっつけて2番を作ったと。（笑）もう1回録り直すと、音がどうしても違うでしょ? スタジオも違うし、だったらいっそのことくっつけちゃえと。あとフェイドアウトもいちばんオイシイところで、〝また最初っから聴いちゃおうっかなァ〟なんて（笑）気にもなるように考えてですね。あとイントロも思いつかないんで、2小節あるからメンバーでそれぞれ勝手に演ってくれ（笑）ってことで、あんなヘンチクリンなイントロになったという。（笑）無理に無理を重ねてる作りなんですけど、これを音楽的に分析する雑誌が〝この展開はスゴい〟とか書いてあって、確かにそりゃそうだわなァ（笑）と。

⑭スターな男（作詞：阿部義晴／作曲：奥田民生）

…う―ん、勢いはありましたよねェ。（笑）詞の面では、総じてボクは得意じゃないというか進んでしないというか。（笑）だから詞に関して言えば、毎回苦労しますよ。とにかく曲を殺したくないですから、ヘンな詞をつけたら曲が死んじゃうわけで。

《総評》

このアルバムはね、とってもバンドとして充実してた時期なんですよ。皆でやろうという気持ちがあったというか、今ないというわけではないですけど。（笑）皆が徐々にレベルが上がってきて、方向が一つの方に向いていたから、バンドとして新鮮だったし、いろいろ試そうとしてた時期ですね。

今だと個人の考え方がしっかりしてるんだけど、その前の時期の柔軟さというか、自分の感覚がそんなに固まってないという。このアルバムでいろんなことを発見したり、助け合ったりしてたという。女性で言うと18～20才ぐらいのピチピチしてて柔軟性があって何でもトライしたがる好奇心の固まり、という年頃。



おどる亀ヤプシ

①初恋　②ママと寝る人　③12才　④ボサノバ父さん　⑤PTA 光のネットワーク～　⑥俺の走り方

CSCL 1546▶1990.11.1 RELEASE

SELF LiNERNOTES Kazushi Horiuchi

①初恋（作詞・作曲：堀内一史）

ほとんどこのアルバムはアレンジなんかはお任せだったわけですけど、唯一この曲と④だけはボクたちが編曲したと。

この歌詞にミドリガメが出てきますけど、最近の子供たちにはミドリガメは普及してないみたいなんですよね。そこで"バミコン"を入れて（笑）ちょっと魅き付けようかと。ま単調な曲で、5分以上あってけっこう長くて、ダラダラしたカンジで。で、中に入った"ゲチャ"（※注・バリの民族音楽）っぽいコーラスを笹路さんとかと演ってたんですけど、迫力がありましたね。アレって複雑で、けっこうハマっちゃうからタイヘンでしたよ。

あとゲストにウッド・ベースで弾いてもらったんですよ。元のフレーズ自体はボクが作ったんですけど、それをウッド・ベース向きにアレンジして弾いてもらうと、すごくニュアンスも変わってくるんで、すごく勉強になったなぁ。

②ママと寝る人（作詞・作曲：阿部義晴）

この曲は全然絡んでませんね。（笑）でも、一応レコーディングは立ち会うというか、見てはいましたよ。（笑）ですんで1リスナーとして言うならば、歌詞なんかは、やっぱりおもしろい視点ではないかと。発想としては非常にニクいものがありますよね、"パパとママが一緒に寝てる"みたいなオイシイ観点でね。

ベーシストは①と一緒の方で、この曲ではジャズベースで、軽快に弾いておられましたよ。他人がベースを弾いてるのを見る方がおもしろいですよね。（笑）

この曲ってけっこう怖いでしょ、Bメロというかサビというか。アレが子供心に痛烈に響くところがあるのではないかと思うんですよね。ボク、小さいころに夜、オジさんに神社に連れて行かれたんですよ。オバケが出るようなね。そういう、子供にも恐怖心を抱かせるネライも働いてるんじゃないかと。

③12才（作詞・作曲：手島いさむ）

これも怖い曲ですよ。（笑）何というか"大正ロマン"みたいなね。（笑）これも立会いだけでして。

アレンジが矢野（誠）サンっていうすごくパンクな人で、セックス・ピストルズ全盛期のときに、ロンドンでシド・ヴィシャスと一緒に寝た（笑）というか、語ったことがあるというハナシを聞いて「エーッ！」って驚いたという。（笑）外見はフツーのオジサンっぽいんですけど、そういう人から"シドがどーのこーの"なんてハナシが出てくるから（笑）エラくビックリしたっていう思い出がありましたけど。

歌は奥田クンなんですけど、キーが高かったみたいで、でもそのギリギリのテンションが出てるのではないかと思いますね。

あと、デモテープの選曲会のときに手島クンがこの曲のテープを忘れてしまって、家から電話越しにカセットを流してもらって、それを電話のモニターで聴いたんですよ。そのときのこもったカンジがすごく良かったんですよ。でも、そのときに聴いた曲の印象と、実際のレコーディングでの大正エロチカを使ったレトロっぽい音っていうのは偶然なんですけどね。

④ボサノバ父さん（作詞・作曲：奥田民生）

奥田クンがほとんど楽器を演ったのかな。彼のデモテープを作ってるカンジがしますよね。実際、この曲はほとんどデモテープに忠実な作りなんですけど。

これは良い曲ですよ。お父さんの哀しいカンジが出てて。でも、よくこういう歌詞が書けますよね、20代なのに。40~50代のお父さんのイメージで、なんか泣けますよ、中年エレジーっていうカンジで。オチもついてて、なかなか味わい深い詞ですよね、曲とあいまって。

⑤PTA~光のネットワーク（作詞：奥田民生、阿部義晴／作曲：奥田民生、阿部義晴、小西康陽）

この曲はね、奥田クンと阿部クンの合作なんですよね、2つを合わせたカンジで。詞の方も役割分担してセクションごとに作ったのではないかと。それに作曲と編曲でピチカートVの小西康陽サンを迎えて。多分レコーディングを一緒にしたのは初めてでしたね。けっこうマジメな方ですよね。

これは2人の歌ってるサマが印象的ですね。一応、踊りを加えて歌ってました。振り付けアリの。（笑）この当時は光GENJIが流行ってて、ウチもその恩恵にあずかりたいということで。（笑）

曲として見るならばホントに楽しくってローラースケートで駆けずり回るようなカンジだし。ぜひこれをTVで演ってほしかったんですけどね、振り付のカラオケで。（笑）TVの画面で見たかったのになぁ。

あと、これで生まれて初めてチョッパーを入れたんですよ、できないのに演ったと。（笑）小西サンも、もともとベーシストだったそうなんですけど「EBIクン、ここでベース入れてよ」って言われたんですよ。特にフレーズとかは指示されないでこちら任せで、ただチョッパーで演れって言われて。今までやったことなかったから困ったなぁ。（笑）

⑥俺の走り方（作詞・作曲：阿部義晴）

最近の子供たちの間で一輪車が流行ってるらしくって、それを入れとけば受けるだろうということで、さっそく歌詞に当てはめたと。（笑）

この曲のゲストで参加してた、仙波（清彦）サンがヘンなビニールパイプみたいなのをいろんな長さに切って、それをスリッパでポンポーンと叩いてたという思い出がありますねえ。とにかくスゴかったですよね。はにわ隊ってことで多くのメンバーでやられる姿がすごく良くって、音楽の原点というか、皆で楽しく演奏するのがすごく新鮮でしたね。

最初のデモテープの時点ではシンセ・アレンジしてあって、いわゆる坂本龍一サンっぽいアレンジのサウンドだなあと思ったんですけど、仙波サンが入ったことによってリズムが出てきましたよね。あと、小川美潮サンが間奏でコーラスを演ってるんですけど、ほとんどアドリブに近いものだったんでスゴかったですね。

《総評》

このアルバムをなぜ作ることになったかという話からしますと…、確かですね（笑）『ケダモノの嵐』のとき、当時たくさん曲が出てきたんで、もったいないということで…、あっそうだ！　当時は『ケダモノ～』を2枚組にしようかという話もあったんですけど、あまりにも曲が違い過ぎるから別の機会に出しましょうということで。それでさらに、企画モノっぽいこのアルバムとロックンロールモノの『ハヴァナイスデー』の2つに分かれて。でもどうして子供向きになったのかなぁと思うんですけど、ま、何となくの流れでこうなってしまったんでしょう。

このアルバムに関してはホントに超絶なゲストの方々を招きまして、その姿を目の当たりにしたことが大きいですよね。ちょっと自分たちが休んでというか、冷静な目で作ったと。自分たちのアルバムではあるんですけども、何か違うというか、客観的に見てしまうというノリのアルバムなんですけどね。ユニコーンのアルバムのはずなのにそうでもないというか、ま、何かこうラクした（笑）ってカンジのアルバムなんですけどね。（笑）

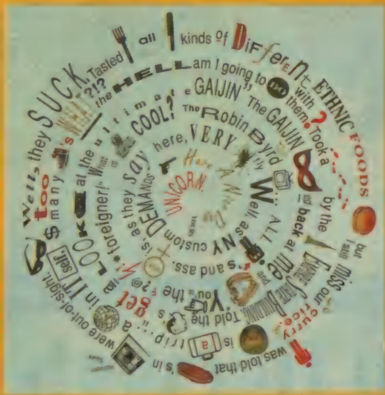
このときは楽器もほとんど演ってなくって、メンバーは曲と詞と歌だけで関わっていたんですよ。歌詞の内容とかは、ホント子供向けにというか、わかりやすくして。コンセプトアルバムというかテーマが唯一あったアルバムじゃないでしょうかねえ。

このアルバムのトラックダウンは『ハヴァナイスデー』と同じくニューヨークでやったんですよ。エンジニアがジョー・ブレイニーっていう、アメリカ人なんですけど日本的というか、非常におとなしい人で。でも笑うと奇っ怪で恐いという。（笑）彼って実は、クラッシュの『コンバット・ロック』とか、キース・リチャーズのソロなんかを録ってる人なんですよ。音も良いし、そういった、けっこうマニアックな部分もあったりするところもオイシイかなと。

とにかくパッケージが凝ってて良いですよ。（笑）小さなお子さんをお持ちのお母さん方にもね、ぜひ1枚～と言っても、もう売ってないとは思うんですけどね。（笑）ユニコーンの歴史に残るモノではないかと思います。（笑）

キリトリ線

点線に沿って切り離し、大切に保管しましょう。



ハヴァナイスデー

① Have A Nice Day（ハヴァナイスデー） ② I Fell In Love With A Fish Brain（魚の脳を持つ男） ③ Milkphobia（鼻から牛乳） ④ Rebel Without A Cause（レベル） ⑤ May-flower Madam（＄2000ならOKよ） ⑥東京ブキウギ

CSCL 1568▶ 1990.12.1 RELEASE

SELF LiNERNOTES isamu Teshima

①ハヴァナイスデー（作詞・作曲：奥田民生）

この作品ではね－、向こう（ニューヨーク）の楽器を全部使ってレコーディングしたわけですけど、その理由というのも、ただ運ぶのがメンドくさかったという。（笑）この曲ではグレッチというギターを使ったんですよ。何やら由緒正しいギターのようで、向こうの伝統的なギターを使った代表的な曲でね。ギターはね、全編民生が弾いてて、バックでチョコチョコとアクセント的なのと、あとソロをワタシが弾いてるのですが。

ま、これは何か〝愛すべきロックンロール〟ってカンジですね。ヒジョーに良い曲だと思います。詞も良いし、ホント良きロックンロールじゃないですか？ そんなに、聞いたカンジも古くないし。ま、消去法でいくんじゃなくて、積極的にコレは演っていきたい曲の一つですね。

何て言うか、時代の流れっていうのがあるじゃないですか。例えば1枚目の『Maybe Blue』を演るのはちょっと恥ずかしいじゃないですか。（笑）ま別にいいけどね、オレが歌ってるわけじゃないからというのはありますけど。この曲とかは長きに渡って演奏できる。普遍的なモノがありますよね。別に肩に力入っているわけじゃないし、かと言ってそんな自堕落でもないし、絶妙のユニコーン路線（笑）を行ってるんじゃないでしょーか。いわゆる〝王道〟みたいなね。

②魚の脳を持つ男（作詞・作曲：奥田民生）

これはね、向こうのオールドのストラトキャスターを使ったんだよね。'58年モノっていうスゴい良いヤツで。向こうのオールドで何がスゴいかって言うと、ちゃんとしてるんですよ。何かただ古けりゃ良いっていうのでなくて、いつも使ってある状態なんですよ。それが良いなぁと思ったなぁ。

曲的に言うと、また「ハヴァナイスデー」に似たコメントになりそうですけど、絶妙なんじゃないでしょーか。（笑）ギターのリフに関しては、民生が作ってきたデモテープの時点で、ブサイクというか不器用というか、一人で演っている分、ベースもギターも雰囲気があって、それをどういう風に再現しようかと思って。

いつも国内でレコーディングするときは、民生の持ってるデモテープの雰囲気を越えるのが大変なんだけど、海外行ってからはワケわかんなくて、「まーいーや」（笑）っていう免罪符みたいなところがありまして、私が弾かせていただきました。（笑）〝不器用な美しさ〟を表現するっていうのはホントに難しいんですよ。でもそういうのが海外行ってからブッ飛んじゃったの。別にイケナイ事やってるわけじゃないんだけど、（笑）何か考えなきゃいけないというのが一切なかったと。「弾きたいように弾きなさい」と。

プロデューサーが外人で、言葉も通じないから逆に、一丸となれないのね。プロデューサーの方からも、〝もっと軽く弾け〟とか〝リラックスしなさい〟っていう言い方でしかアドバイスが来ないから。より良いプレイを引き出そうというのが上手いですよね。ま、コトバが通じないから本当は何を考えてるのかわからないけど。国内のユニコーンの内輪ノリじゃないというところが、この2曲には良く出てますね。

③鼻から牛乳（作詞・作曲：堀内一史）

この作品はトータルで〝ロックンロール・アルバム〟ってことだったんだけど、リズム的にもコッチンコッチンやってるだけですし、けっこう難しかったですね。ワタシね、これで生まれて初めてレスポールを弾いたんですよ。どーもダメでね、あのカタチは。（笑）何かおデブさんってカンジじゃないですか。でも実際弾いてみると、やっぱり芸術品ですよ。どっちかというとストラトがパーツを取っ替え引っ替えできるのに比べて、レスポールは完成度の高いバイオリンってカンジですよね。

曲的な内容で話すと、これは雰囲気イッパツでソロ的にもグアーッと埋まってればというカンジだったんですが、ワタシとしてはなかなか良いソロが録れたんじゃないかと。このアルバムって総じて、ギターソロとかバッキング・パートとかは気に入ってるんですよ。洗練されて力が入ってなくてかつ効率良く弾けていると。

④レベル（作詞・作曲：川西幸一）

これは何回も弾かされましたね。いっぱい弾いたのをうまく編集してあって「さすが、向こうのひとはやり方を知ってるなぁ」ってカンジ。ヘンな例えをするとアイドルの歌録りみたいなもんで、いっぱい録音した中から良いところをつまんでいったという。余っているトラックに全部入れた中から2～3テイクをつまんでいったと。

曲の個人的感想ですか？…こんなモンじゃないですか!?（笑）…歌唱力でしょ、問題は。（笑）ヘタややヤツが歌ったら曲になりませんからね。詞的にも、メロディとか楽曲として見ても、歌い手が良くなければ全然良くないですよね。

⑤＄2000ならOKよ（作詞・作曲：阿部義晴）

うーん、特にこれは話すこともないですけど、黒人のお腹の大っきい女の人が3人来ました。（笑）ゴスペルの本物の人が。

曲はねー、ヒューイ・ルイスですね。（笑）ヒューイ・ルイスの2枚目を聴くと多分納得いただけるのではないかと。（笑）阿部クンは上手ですから。（笑）メロディをバーッと変えてるんだけどモノが見えるっていうのが。（笑）原点が薄いっていうか、そこにパックリとリアルに見えるという。（笑）

フツー考えさせるじゃないですか、この曲は何かに似てるけど、実は裏があるんじゃないかっていうモノが。でもそんな裏読みができない〝直結!〟っていうのが良いですよね。（笑）

⑥東京ブギウギ（作詞：鈴木博／作曲：服部良一）

やっぱ曲が素晴らしいし、詞もね「ハヴァナイスデー」とかに通じるっていうか、この詞に影響されたんじゃないかな？ とか思うんですけどね。

時間的にもそんなに根詰めてなくて、リラックスして録りましたね。で、オレが弾いたはずのギターが出てるのか出てないのかわからないという。（笑）ベースラインと同じこと弾いてるんだけど、CDを聴いても判断できない。（笑）

あと民生が全編グレッチを弾いてたんですよ。ワタシはこの曲だけ、日本から持ってきていた自分のイバニーズで弾いてたな。

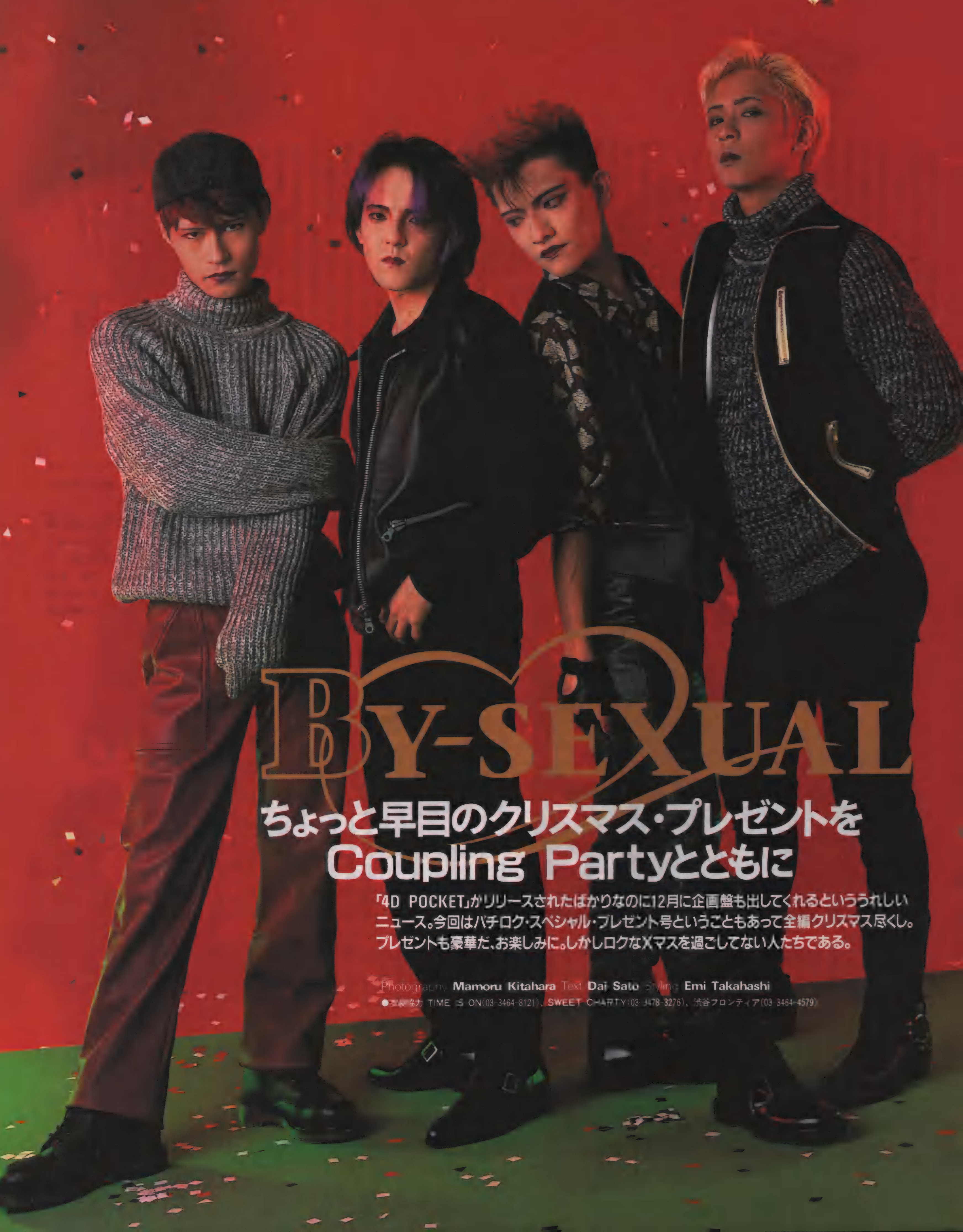
《総評》

全体的に言うと、海外で初めてレコーディングということでしたけど、従来のレコーディングと比べたらスゴいテキパキしてましたね。時間がキッチリ決められてて、朝入って、夜終わるっていうカンジで。やはりプロデューサーの方はスゴいなと。

さっきも言いましたけど、まずプロデューサーが外人だからコトバが通じないというのが一つあって、あとコミュニケーションが今イチ、ズレてるっていうのがオイシイですよね。（笑）だからコッチは〝演れ〟と言われてハイハイってカンジで。向うはね、コイツはこういうのを弾きたいんだろうなっていう意思は何となく通じているんだろうけど、コミュニケーションの点でスレ違ってるから、そこで出てくるモノっておもしろいですよね。「文句言ってもコイツはコイツだからな」っていうのもわかってるの、向こうは。例えば日本だと誰々のマネをして弾いてくれみないな、見本を出してコレっぽく弾かないとダメ！ ということがあったりするんだけど、向こうはコイツの持ってるモノを引き出すようなプロデュースだったと。演る側としてはありがたかったですよね。いわば楽器とアタマのコミュニケーションというか、いわゆる精神論といったモノではなく、（笑）マネゴトでもないという。

連続リリースの最後の作品だったわけですけど、どこで出ても別に良かったんじゃないかな、コレは。ミニアルバムで価格も2200円ということでカンベンしてもらって。（笑）2枚組を作ろうと思ったのを3枚にしたのね、ってノリでも良いし。

とにかくプレイヤーとしての参加度が大きかったですから、自信をつけた1枚ではありますよね。と同時に、最近のアルバムでは初めてワタシの曲が入ってないんですけど、その分、詞を書かなくて良いからラクだったという。（笑）



BY-SEXUAL

ちょっと早目のクリスマス・プレゼントを Coupling Partyとともに

「4D POCKET」かリリースされたばかりなのに12月に企画盤も出してくれるといううれしいニュース。今回はパチロク・スペシャル・プレゼント号ということもあって全編クリスマス尽くし。プレゼントも豪華だ、お楽しみに。しかしロクなXマスを過ごしてない人たちである。

Photography Mamoru Kitahara Text Dai Sato Styling Emi Takahashi

●衣装協力 TIME IS ON(03-3464-8121)、SWEET CHARTY(03-3478-3276)、渋谷フロンティア(03-3464-4579)

クリスマスの思い出といっても、結構4人で一緒にいる場合が多いから、話のネタが同じになってしまうんだな。だから、デビューする前の話に必然的になるのだが、それでもやっぱりDENがゲロを吐いたクリスマスの夜の話になってしまうな。

その時は、友達に家でクリスマスパーティーをやろうという話で集まったのだけど。ただ集まって酒を飲むだけじゃなんとなく寂しいという話になって飾りつけをする事になって、じゃあという事に夜中にデパートに行ったんだな。当然デパートは閉っているから、別に飾りを買いに行ったというワケではなくて、デパートの玄関のところに10mぐらいはあるクリスマスツリーがあったんだな。そのツリーから飾りを盗って家に持って帰ろうという事なんだが。そのツリーは本物のモミの木が大きな植木鉢に入っているというヤツだった。何人かが登って残ったヤツは誰か来ないか見張りと、植木鉢を押えているヤツにわかれていた。でも遠くから見たら不気味だったと思うな。大きなツリーが風もないのにグラグラと揺れてたんだから。

それで普通のツリーについている豆電球が白熱灯の大きさ、テッペンの星なんて人間の一人が両手ひろげても追いつかないくらいのヤツを外して下のヤツめがけて落として拾っていたのだが、誰かが拾いそこねたんだな。一瞬の沈黙の後、それこそ街中に響くぐらいの大きな音で「ガッシャーン」となって見張りはもちろん鉢を押さえていたヤツもパッとその場から逃げ出してデパートの影に隠れてしまったんだな。木に登っていたヤツらはジッとしていた。するとデパートの横にあった派出所から警官が見に来たけど、誰も見えなかったし、落ちた電球のツリーの影に隠れていたらしくてみつからなかったな。で木に登っていたヤツらもサッサと降りて大きな電球と星を持って家に帰った。で、じゃあって玄関から入ろうとしたら星の角がひっかかって部屋に入れなかった(笑)。しょうがないから星は玄関に捨てて、電球だけ持って部屋にいって付けてみたんだけど、まるでパチンコ屋か何かみたいな明るさでチカチカと光って全然クリスマスって感じじゃなかった（笑）……。あれはツリーが大きかったからキレイに見えたんだろうな。で、それもチカチカうっとおしいから窓から外に出してたらまるでその家だけお祭りでもやってるみたいに見えてたな……。まあ、クリスマスと言えばこの話かな。でその後にDENがゲロ吐いたんだな(笑)。最近はライブになっている場合がほとんど

BY-SEXUAL

久しぶりのフル・アルバムが発売になったばかりだというのに、もうバイセクのニューアルバムが届いた！　といっても、これはいままでシングルのカップリング（昔はB面だったよねそういえば）曲＋クリスマス・ソングという企画盤。デビュー当時からいつかカップリングだけのアルバムを出したいと計画していたらしいんだけど、この度やっと曲が溜まってリリースということらしい。ツアーが始まる前のある日の取材。バイセクからの1月早いクリスマスプレゼントと洒落れての撮影&インタビューのハズだったんだけど。インタビューの方は、なんだかみんなクリスマスっていい想い出がないみたい。でも、そんなヤな想い出を楽しそうに話してくれました。特に注目してほしいのは、DENくんとRYÖくんの想い出話。中学時代の同じ日一緒に過ごしたクリスマス・パーティーの事を話してくれたんだけど……これが全く違ってて面白いんだな。乞う御期待！



SHÖ

ライブでみんなと過ごすのが最高のプレゼントで、ファンのみんなへのプレゼントはオレたちの曲だな

クリスマスソングといえば、アレですね。「真っ赤なお鼻のトナカイさんは〜」でしょう(笑)。あのメロディが心に焼きついていて……今でもクリスマスが近くなると思い出すというヤツですね。この間もいつだったかな。クリスマスと全然関係ない時に、NAOとかにカラオケに誘われていったんですよ。でちょうどその曲があったもんで「おっこれは歌うしかないな！」って全然季節関係なく歌ってみんなに白い目で見られていながら独りで盛り上がりましたね(笑)。

サンタはですね。物心ついた時にはいないってわかってましたね。あんまり夢のない子供だったんで……(笑)。でも、オヤジに何かをねだってもいい日という事だけで喜んでましたね。サンタとかクリスマスなんていう細かい事情は関係なくてオヤジがプレゼントをくれるという感覚でしたね。だからクリスマス自体にはあんまり思い入れってないんだけど。その日までの雰囲気は好きですね。12月になると街とかキレイに飾ったりして何となく盛り上がって、シャンシャンシャンなんて聞こえてきていい感じですよね。でクリスマス当日はもうヤなんですよ。終わりって感じで、あとは年末ってあの何だかあわただしいの大嫌いなんで。クリスマス前まででですね。楽しいのは。

で、よくみんなが話してる女の子とどうのこうのっていう話がですね。ないんですよ全く。浮いた話しが。デビューしてからは、……そうだ。最初のプロモビデオの撮影がクリスマスだったんですよ。『BADBOY』っていう曲のビデオクリップ。『諸行無常』とか出るヤツです(笑)。12月24日に朝の8時から延々一日中ずーっとロケでした。アメ横で撮影したんですけど。ビデオを見てもらうと解るんだけど革のジャケットにTシャツだけという姿。それだけでも充分寒いのに、最後に自分が死んだという感じで道に倒れて血が流れるという場面があってですね。これが背中に血ノリを入れて倒れるんだけど、アスファルトが冷たいのなんのって凍ってるって感じの上に血ノリがまた冷たい！　もう一瞬でも耐えられないっていうのに死んだっていう設定だから動いちゃダメ。震えてもダメ。という地獄のクリスマスでしたね。それが今までで一番印象に残ってるクリスマスだな。で撮影が終わってからスタッフが近所のケーキ屋で安くケーキを買って来てくれたんで打ち上げの時にみんなで食べました(笑)。寂しいなあとか言いながら祝ったんですよ。メリークリスマス……。

あとは、ホント、クリスマスを女の子となんてなくって寂しいですよ。今年もライブなんですよねえ。それは嬉しいんですけどね。特に今回は地元大阪ですし……でも、プライベートがね寂しい(笑)。まっ。ライブでみんなと過ごすというのが最高のプレゼントという事で、ファンのみんなへのプレゼントはオレたちの曲だあ……という事ですね(笑)。

RYÖ

だからな。でも、そういえば、前に一度だけ他のメンバーにプレゼントをあげた事があったな。でも誰も俺にはプレゼントをくれなかったから次からヤメた(笑)。

クリスマスというイベントは、何だか1年のうちですごく特別な日の様な感じでみんないるのかもしれないけど、俺にとっては毎日が特別な日だから特に想いはないな。



俺にとっては毎日が特別な日。でも前にねデパートのツリーの飾りを盗って帰ろうとして…その後DENは…

DEN

中2の時、女の子もいっしょのクリスマス。ベロベロになってミカン30個以上も食ってゲロゲロになって…



クリスマスの思い出はですね。全く記憶がない(笑)。というのもですね。クリスマスから正月までずっと飲み続けるんですよ。だから、クリスマスがそろそろ来るなあと思って気がついたら正月も終わっているというヤツなんですねえ。もう繋がってる10日間ぐらいずっと。まあ、しいて思い出といえば、クリスマスパーティーで急性アルコール中毒で倒れたという(笑)……それぐらいかな。

それが中2の時なんですけどね。それまでは女の子のいるクリスマスパーティーなんてなかった。もちろん酒を飲めるのも俺ぐらいしかいなかったし。だから、それまでのは、クリスマスパーティーとか言っても近所の男たちでワァーという感じのものでしかなかったから盛り上がらなかった。で中2ぐらいになると周りも酒が飲める様になってきて、じゃあパーティーだ。女の子も呼ぼうって感じで盛り上がって、場所はどこにしようかなって考えて。じゃあ、いつもたまり場になってるヤクザの事務所の2階が自宅という友達の家にしようって事で決まり。当日の夕方になって、酒買い係を俺が引き受けて自動販売機に買いに行って、買ってるそばから道ばたで飲み始めて、もう友達の家についた頃にはもうベロベロになりつつも記憶は残ってたんだけど。コタツにみんなで集まって飲んでてミカンが山の様にあって「ミカンが食べたいな」って食べ始めたあたりから記憶があいまいになって、それでも酒を飲み続けて……急にパッと記憶がなくなった。で気がついたら外にほおりだされてヤクザの兄ちゃんが俺の口にホースを突っ込んでた。で俺はミカン色の液体をゲェーゲェー吐いてた。あんまりゲロゲロ吐いてて苦しいから気がついたんだけど、もっと苦しくなってまた気をうしなった。で次に気がつくと友達の家のベットに転がってた。でも、そのベットはシーツもマットもなくなっていた。で、俺は上半身裸で下も誰のか解らないジャージ姿。「あれ」とか思って頭を掻いたらパラパラって白い粉が落ちてきて髪はガチガチに固まってた。部屋のはじにはゴミ袋が積んであって「こんなに人間の胃にモノが入るんだなあ」なんて感心するくらいのミカン色のゲロが入ってた……。その時の事を自分では全然覚えてないんだけど。見てたヤツの話を聞くとベロベロになった俺はバカみたいにミカンを喰ってたみたいコタツの上にあった30個以上全部一人で喰ってた。でそれまでヘラヘラ笑ってたのが突然ポンプみたいに吐き出したんだっていう話で。それ以来半年酒が飲めなくなった。この時は本当にヤバかったみたい。救急車にも乗らなかったんだけど下がヤクザの事務所でこういうのは慣れてたから助かった(笑)。もし病院まで待ってたら死んでたかもしれない……。せっかく初めての女の子との楽しいクリスマスだったのに……記憶はそれしかない(笑)。

まあ、今年はライブで終わったらまた打ち上げで終わりでしょう。そんな感じですか。

NAO

18の頃、オヤジの車で六甲の夜景を見て、いいムードになったから彼女とホテルへというはずだったのに



BY-SEXUAL

ちょっと早目のクリスマス・プレゼントをCoupling Partyとともに

　クリスマスですか。……パッと思いつくクリスマスの思い出ってあんまりないんですよ。でも、幼稚園がキリスト教関係のヤツだったんでクリスマス会みたいなものはありましたね。親たちが見に来て子供たちが劇をやるというのがあってから、その後にサンタさんが来てプレゼントを配ってくれるというポピュラーなイベントでした。……そういえば、あのサンタ……誰だったんだろう？　普通は園長先生とかなんだろうけど女の人だったし。アレ？　誰だったんだろう。今考えると謎だ。誰かなんて考えもしなかったから……。当時はもちろんサンタの存在を信じてたからなあ。で小学校2年の時だったかな。クリスマスイブで早寝していて、たまたまパッと起きたらプレゼントを持って来るオヤジの姿を見てしまった。それで「ああサンタは居ないんだな」と知ったんですよ。結構ショックでした。そういえば、うちがまだ団地に住んでいた頃の隣りの家の子供が小学校5年ぐらいだったんだけど。その子はその歳でも信じてましたね。何の根拠も無いのに(笑)。でもサンタっていい加減な存在だよな。だってオーストラリアなんて夏の時期だからサーフィン乗ってくるんだもんな。でも、日本だけでしょ。なんか宗教とか関係なく、ただ自分たちの都合のいい様にイベントものにしちゃうっていうの。なんかもうそういう日本人のいい加減なところが……好きだなあ(笑)。そういう事に関して一番アバウトな国じゃないかな。

　でクリスマス得意の甘い関係の思い出はですね。免許とってすぐの頃だから18ぐらいだったと思うんですけど。その頃はちょうど彼女がいたから、クリスマスにオヤジの車を借りて六甲にいったんですよ。地元が大阪ですからね。六甲に夜景をなんですよ。で夜景を見たらいいムードになって……「しょうがない。今日はホテルでも泊ろうか」状態になってですね(笑)。で探したら、もう満車満車なんですよね。どこも空いてない。で探しまくっていた時に1箇所だけ満車のランプがついてないホテルがあったからパッと入っていったんですよ。で入ったらその駐車場がすっごい狭い。そしたらスピーカーから「満車になってしまいました」なんて聞こえてきちゃって。「ダメだこりゃ。帰ろう」ってことになって、バックで駐車場から出ようとしたらガンガンってぶつけちゃったんですよ。でヤバイってダッシュで逃げて、もういいムードなんて全くなくなっちゃったんで真っ直ぐ帰って、オヤジに凄い怒られてっというヤな思い出しかないですね。まさに「泣きっつらにハチ」ってヤツですね(笑)。

　でデビューしてからは、なんだかんだでライブがあったりするから女の子関係のいないクリスマスですね。ずっと。もう男ばっかのツアースタッフと打ち上げいって酒飲んで騒いでおしまいですね。今年もライブで大阪なんで地元だからね。また男ばっかで騒ぎますねきっと。寂しく(笑)。



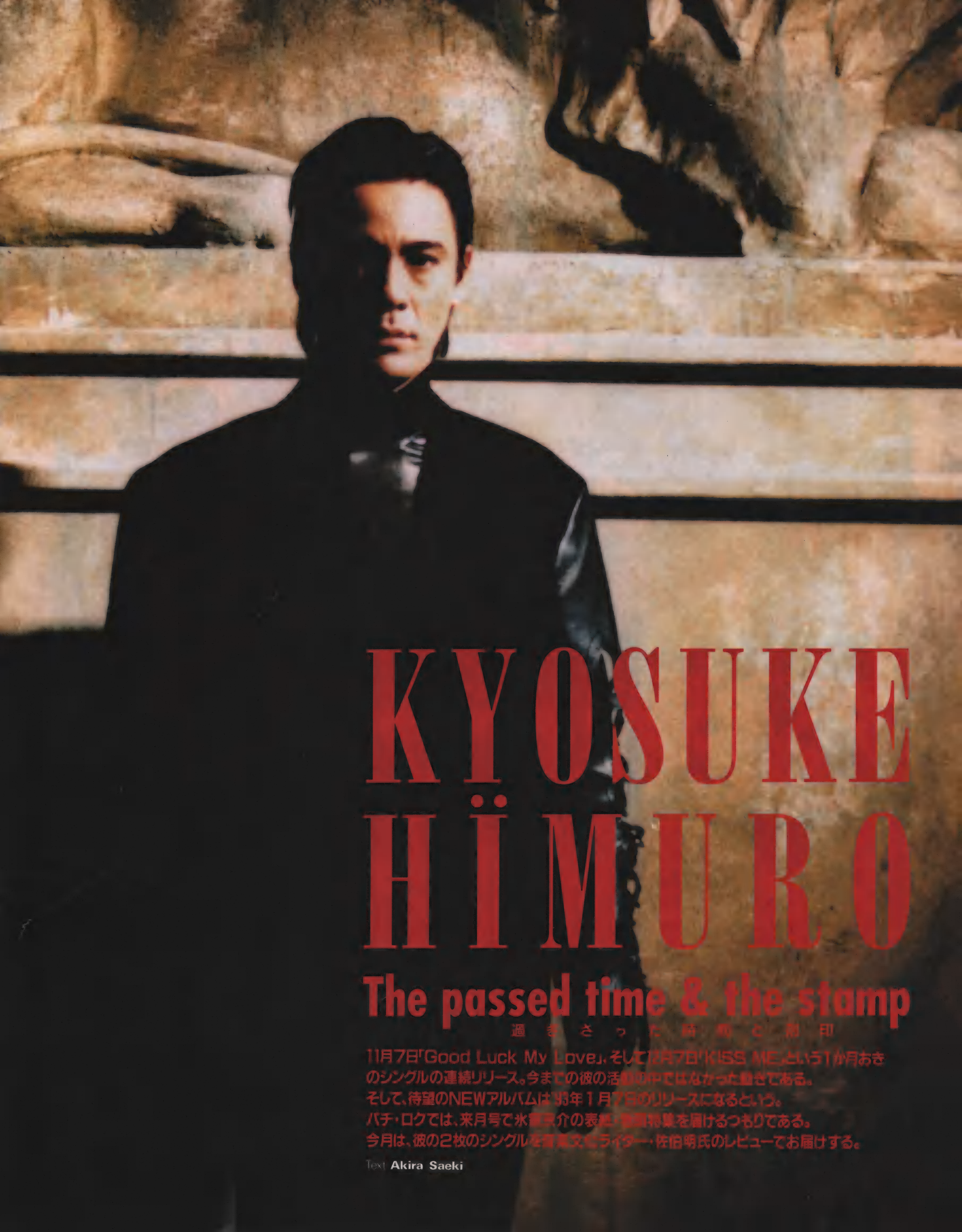
RR GOODS PRESENT

PRESENT RR SPECIAL GOODS

- DENの着ているTシャツ1名
- SHÖがしているマスク1名
- SHÖが持っている香水入れ1名
- RYÖがかぶっている帽子1名
- RYÖが持っているペンケース(ペン2本入り)1名
- NAOが羽織っているバスタオル1名

恋人がいる人でもいない人でもクリスマスはやってくる。官製ハガキに応募券を貼って〒156-91　世田谷区千歳郵便局私書箱25号　㈱ソニーマガジンズ　パチロク・スペシャル・プレゼントバイセク係まで　締め切りは12月20日消印有効です


世の中一体どうなってるんだ？
話題騒然!!
エッどうなってるんだ！
遊べや夢のないスズメ？
虚々実々
感涙
珠玉
を遊び倒すか
BY-SEXUAL
クリスマスソング2曲
不滅の裏ベスト盤＋α
COUPLING PARTY
不屈の裏読み
スポーツ誌バイスポとカップリングで
絶賛発売中！
PONY CANYON
Coupling Party/BY-SEXUAL
PCAA-00411 税込定価¥2,600(税抜価格¥2,524)
NOW ON SALE
★1. WELCOME PARTY
2. BE ANXIOUS
3. WET DREAM
4. GLOOMY
5. DOLL'S HOUSE
6. TAKE AWAY
7. 幕末純情伝
8. SEXUALITY(BORE UP VERSION)
9. Q2
10. PERMANENT VACATION...
★11. WHITE CHERRY
★NEW SONG/PONY CANYON STEREO MADE BY PONY CANYON INC., JAPAN



KYOSUKE HÏMURO

The passed time & the stamp

過ぎさった時間と刻印

11月7日「Good Luck My Love」、そして12月7日「KISS ME」という1か月おきのシングルの連続リリース。今までの彼の活動の中ではなかった動きである。
そして、待望のNEWアルバムは'93年1月7日のリリースになるという。
パチ・ロクでは、来月号で氷室京介の表紙・巻頭特集を届けるつもりである。
今月は、彼の2枚のシングルを音楽文化ライター・佐伯明氏のレビューでお届けする。

Text **Akira Saeki**

何度もモチーフにされ洗い晒しになっても朽ち果てることのないラブ・ソングの感覚。その感覚を生むための心持ちが散逸せぬように、氷室は間合いをとる。

何[illegible]にし[illegible]も何[illegible]でみ[illegible]捌い[illegible]れない[illegible]のがある。その[illegible]る例が、過ぎ去った[illegible]間[illegible]だろう。[illegible]は、作品にし[illegible]取り戻そうとしてもい[illegible]んともしがたい。捌い[illegible]れない。

[illegible]れども、置き[illegible]にし[illegible][illegible]に降り積もれは降り積もる[illegible][illegible]の"がある。"より確かに[illegible]もある。[illegible]は優し[illegible][illegible]あ[illegible]たりするの[illegible]そんな何でもないことにい[illegible][illegible]ろうと[illegible]時、表現が[illegible]れる[illegible]音[illegible]け[illegible]り[illegible]危機感の[illegible]なもの[illegible]自[illegible]中に[illegible]れが"旅に出たい"という衝動を生み出す[illegible]の[illegible]しれない。[illegible]のうちに[illegible]か[illegible]外国に出て自分自身を確認[illegible]自分[illegible]失いそうで[illegible]だ

氷室[illegible]はこ[illegible]しい旅は[illegible]間[illegible]め[illegible]や大切な[illegible]面を持[illegible]一方[illegible]過[illegible]した時間[illegible]味を探ること[illegible]す[illegible]氷[illegible]の[illegible]っ"[illegible]けも[illegible]実際に日本を離れ[illegible]れの[illegible]した時間の意味を探[illegible]も[illegible]の時間の流れがこの旅の中にあることは明白[illegible]

[illegible]ロになって[illegible]枚目のア[illegible]Higher S[illegible]がリリースされ[illegible]か[illegible]I[illegible]間[illegible]経過し[illegible]途中'92[illegible]の春にma[illegible]Pi[illegible]ces[illegible]がり[illegible]れ[illegible]区切りの[illegible]にも[illegible]っ[illegible]は[illegible]新[illegible]気持[illegible]する[illegible]声明にも[illegible]た作品だ[illegible]のかしない。

そし[illegible]い[illegible]ングルが何の前[illegible]れ届[illegible]た。聞け[illegible]月置[illegible]リリースす[illegible]とい[illegible]最初に届けら[illegible]のがGood Luck My L[illegible]Me[illegible]r[illegible]es of Blu e だった。

いつものようにカセット・デッキのホ[illegible]ーに試聴用カセットを落とし[illegible]室京[illegible]の新作を初めて聴く時は、なぜかいつも[illegible]を意識する。毎回何十本もの音源を一[illegible]で[illegible]いているのに二人を意識[illegible]まうの[illegible]て聴くことが[illegible]と言うべきだろうか?[illegible]ロと[illegible]には あ[illegible]気配か[illegible]して[illegible]

[illegible]ップ[illegible]とシンセが聴く者に広い[illegible]界を運[illegible]Lu[illegible]M[illegible]L[illegible]e[illegible]ョン[illegible]ギターのお[illegible]ィング[illegible]タッチで、心[illegible]の声は[illegible]っていると[illegible]というか[illegible]Day[illegible]に答えたう[illegible]るのはやめて[illegible]前シ[illegible]

[illegible]ニカルなメロディを聞[illegible]た彼は「Good Luck My L[illegible]e」では他意をメロディーに[illegible]ていない。僕にロ[illegible]そう[illegible]。詞は松[illegible]五郎、氷室[illegible]介の共作。[illegible]レンジ[illegible]ント[illegible]西[illegible]Higher[illegible]elf[illegible]いされ[illegible]陸続の感触が訪[illegible]

[illegible]が[illegible]フ[illegible]も[illegible]斤面を[illegible]スしはじ[illegible]邪[illegible]いエ[illegible]ト[illegible]ート。サ[illegible]語気[illegible]強[illegible]思いき[illegible]さり気なさに染まったまま[illegible]サ[illegible]ゆく。

何度も[illegible]チーフにされ[illegible]も朽[illegible]果[illegible]ることのな[illegible]ン[illegible]の[illegible]これが氷室京[illegible]のうたの特[illegible]ある[illegible]感覚を生むための[illegible]散逸せぬ[illegible]に、氷室は間[illegible]いをとる。[illegible]して、シ[illegible]ルの連射。[illegible]うたの素地が見え[illegible]バント[illegible]通[illegible]ロの時間を重ね[illegible]み[illegible]ンフルにし[illegible]つ[illegible]いうたの素地であ[illegible]真髄を見[illegible]こ[illegible]も[illegible]メロディーを[illegible]・リズムを[illegible]ること。[illegible]れ[illegible]っ[illegible]



"Good Luck My Love"

恋でも仕事でも
未だ実行されぬ意志でもいい。
譲れないものを一つ持っていると、
そこに彼のうたはこよなく響く。

新しく購入したデスクに向かって本稿を書いている。机を買ったのは小学校に上がる時と高校に入った時であったから17年ぶりくらいになろうか? 3度目にして初めて、自分のお金で求めた。新しいギターやピアノ、あるいは（誰かミュージシャンの）ニュー・アルバムではなく新しい机を自分で買ったということは、自分に対するある意味で“刻印”のようなものだと思った。つまり、言い訳を奪うようなところがあるのだ。

文章も好きだったけれど、それ以上に音楽が好きだった。だから、書き始めた頃は、どこかで音楽の一助になるような文章を書きたいと思っていた。だが、文字を記す僕はいっこうに音を出せない。そんな決まり決った事実を自分なりに克服するためには、文章の中にもっと入ってゆく必要があった。音楽の傍らにいるばかりでなく、文章そのものが“歌うように”する必要が僕なりにあったのだ。平たく言えば、持ち場をはっきりさせることだったのかもしれない。

新しい僕のデスクは広い。そして、その上には教科書も参考書も置かれてはいない。目の前に好きなミュージシャンのポスターも貼ってない。幾種類もの辞書と何十本かのカセットやCD、最新動向を知らせる資料、僕は、音のすき間を縫って言葉を紡ぎ出さなければならない。もう音楽に寄りかかれない。自分を規定する不安と背中合わせになった身の引き締まる思い。

背後にセットされたステレオ・コンポーネンツから氷室京介の声がこぼれてくる。彼のシルキー・ボイスが「KISS ME」で“思い出まで捨てたら許せない”と歌い伝えてくる。

“歌うこと”に己れを規定しながら、サラリと受けて立つ“成長する声のニュアンス”が表れ出てくるようだ。恋でも仕事でも未だ実行されぬ意志でもいい。譲れないものを一つ持っていると、そこに彼のうたはこよなく響く。テープがリバースする。しっとりしていながら片時も緩まないエイト・ビートが再生される。カップリング・ナンバーの心音。

“ひとりで生きるために痛みを許す気持ちが欲しい”だなんて、まるで開花しない宿根草のような願いにも似た……。

僕らは、時間を重ねている。同じことを何度も繰り返し、同じうたを何度も聴く。時には疲弊もし、また体勢を整えて動き出す。そこにほんの少し以前にはなかった羽風が吹く。氷室京介は、それをキャッチし運んでくる。キャッチしないと散り散りになってしまうからだ。

一か月のインターバルを置いて2枚のシングル。こんなペースは以前の彼にはなかった。自信の表れととるか挑戦と読むか、一種の意気込みか? 幾つかの推量を飲み込んで曲を聴くと、その平生なうたの表情に驚く。吟味をしたり振り返ってみたり、揺れるプロセスを刻み付けず検討もしない。

もしも、うたに成長があるとするなら、それは聴き手を巻き込む。熱望というほど強くはなくても“潮待ち”のような思いはある。2枚のオリジナル・アルバムと1枚のベスト。その連なりは、氷室京介を音楽人としてより深いところへ連れて行っているのだろう。少なくとも2枚の新しいシングルは、バンドからソロとなり前駆してきた所労を宿してはいない。

遮二無二何かを為そうとして摩擦を生むことすらもよしとした時機を経て、無為といってももちろん出た所勝負ではなく、自在にしぶとく自分を高めていく兆しが「Higher Self」にあったとするなら、氷室京介の楽曲は然有らぬ態度でその流れに乗っているようにも感じられる。

スタジオに籠りきりの生活が、どんなニュー・アルバムを形成したのか?

僕は、あれこれと検索せずにその時機を待ちたいと思う。



“KISS ME”

KYOSUKE HÏMURO
The passed time & the stamp



Photography **Hirohiko Eguchi**
Text **Yusuke Kato**

電気GROOVE in 武道館

さ〜て、お待たせしました。ついにこの日がやって来た、11月2日、われらが電気GROOVEが武道館にて、全国鼻毛あばれ牛ツアー東京公演を行う日が！
われわれ取材班は10月号で入手した情報をもとに電気GROOVEの足取りを追った。
以下、お伝えするのは実際にわれわれがこの目で確かめ、耳で聞いてきたことなのでぜーったいに確かな情報である。証拠写真だってある。
だからこれは、本当のことである。写真週刊誌や某誌や某音楽雑誌B誌も取材に来ていた。
だから電気GROOVEが武道館でやったのは、嘘じゃない。本当の話。

ファンチェック

嗚呼！馬鹿っファン!!「本当にいたとは……」瀧も沈痛な表情で

はい、みなさん、こんばんわ。まぁ、ついに来ましたねぇ、電気グループ「全国鼻毛あばれ牛in武道館」。すごいですね、怖いですね。はい、あの電気グループ、石野卓球・ピエール瀧・まりんの3人が武道館のステージに立つんですね。信じられないですね。

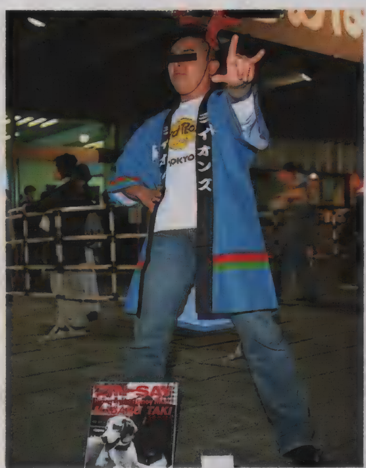
電気グループいえば、みなさん覚えてますか？ 10月号でお伝えしましたね、正しいファンの身だしなみ。男の子は鹿の角に日本刀を指して、女の子は乳首を結んで内臓を出してシャチを背負ってましたね。すごいですね、怖いですね。わたし、まさか賢いみなさんがそんな恰好して来るわけがないと思ってました。でも、はい、本当にいたんですね。はい、じゃあ電気グループ特製はっぴを着てる男の子にちょっと話を聞いてみましょう。

「オラ、匿名希望のダルタニアン鈴木だっぺ。年は34だっぺ。秋田で宮大工やってるだっぺ。今日は神社の瓦葺きがあったんだども、電気の武道館だもんで親方に内緒で来ちまっただっぺ。この鹿の角け？ これは裏山でとっつかまえた鹿のだっぺ。ン？ この鹿サどうしたかって？ そっただこたぁ聞くまでもね、きりたんぽ鍋に入れて食っただ。ンマかったど。おっさんも一緒にきりたんぽ食うけ？」

はい、すごいですね、怖いですね。でもきりたんぽ鍋はおいしいですね。はい、じゃ女の子にも話聞いてみましょうね。

「は〜い！ わたし千葉のキャサリン、17歳で〜す！ 今日は電気の武道館でもう超ハッピ〜って感じ！ このシャチは鴨川シーワールドの人気者シャチ之介クンで〜す！ わたしたちと〜ってもなかよしなの！ シャチ之介クンも電気の大ファンなんですよ！ 今日のファッションのポイントはこの将棋の駒かな？ まりん大好き！」

はい、すごいですね、怖いですね。こんなファンがいっぱいいっぱいいるんですね。はい、もう時間が来ました。それではまたあとで。





全国鼻毛あばれ牛TOUR

①マイアミ天国　②スネークフィンガー　③BASS　④TWIST OF THE WORLD —MC—　⑤Hi-Score
⑥俺の体の筋肉はどれをとっても機械だぜ　⑦Monkeyに警告　—MC—　⑧力医師　⑨人事をつくさず天命を待つ　⑩ちょうちょ
⑪どかーん　—MC—　⑫BINGO　⑬MAD EBIS　⑭D.S.MASSIVE　⑮CAFA DE 鬼　⑯電気ビリビリ







楽屋チェック

悲鳴、赤面「人間ワザとは思えません」その時、卓球が手にしていたものは……

はい、みなさん、こんばんわ。わたし、今度は武道館の楽屋にやって来ました。みなさん、こちらも覚えてますか？　10月号で極秘タイムテーブルを紹介しましたね。まず8時にカヌーで器材を搬入して、それからバーベキュー大会・わんこそば大会・フルマラソン・入院・退院、いろいろありました。すごいですね、怖いですね。ひとつコンサートやるだけでもこれだけの準備が必要なんですね。わたし今日初めて知りました。

ところで、今はちょうど10時12分なんですね。タイムテーブルでは潮干狩りの時間なんですね。あ、ピエール瀧がスコップ片手にやってますね。ちょっと話聞いてみましょ。

「いや〜、今日は潮の調子がイマイチなんでなかなか取れないっスよ。それに俺どっちかっていうと潮干狩りよりも女に潮吹かせる方が得意スから。でもお客さん全員に焼きコー○ン……じゃなかった、焼きハマグリ振る舞わなくちゃいけないんでがんばるっス！」

はい、ピエール、がんばってコー○ン……じゃないですね、おいしいおいしいハマグリたくさん取って下さい。

はい、そしてみなさん、こちらは17時からそろばん塾に通ってるまりんですね。ちょっと話聞いてみましょ。

「え〜、ゴワサンで願いましては、16円なり48円なり25円なり引くことの31円なり足すことの74円なり63円では……2万6千とんで8円！　あ〜あ、また間違えちゃった！　ボクそろばん苦手なんですよ。もう18年も通ってるのにまだバイエル終わらないし……。才能ないのかなあ？　また石野さんと瀧さんにいじめられちゃうよ……」

はい、みなさん、まりんクンはそろばん苦手なんですね。がんばって下さいね。

でも、はい、まあ、みなさん、そんな一生懸命のまりんクンをよそに卓球はひとりお食事の時間ですね。うまい棒を食べてますね。すごいですね、怖いですね。いったい今日のうまい棒は何味なんでしょうね？

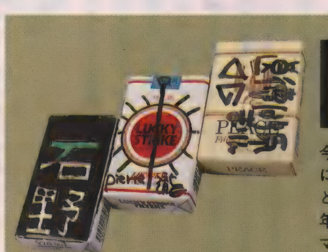
「今日のうまい棒？　そんなのチーズ味に決まってんじゃん。カレーとかコンソメとかいろいろあるけど全部ダメ！　うまい棒はチーズが一番うまいボウ！　なんちゃって（笑）。いつもは250本ぐらい食うんだけど、今日はライブがあるから少し減らして300本ぐらいにしとこうかな。ひとついかがですか？」

はい、いただきましょう。はい、なかなかおいしいですね。

はい、みなさん、これが電気グループの楽屋風景なんですね。すごいですね、怖いですね。なお、某Bパスにも今日の楽屋レポートが載ってるみたいですが、こちらが正確なレポートですから間違えないで下さいね。

さ、このあと電気の3人はステージへ行くわけですが、どんなライブになるんでしょうね？　怖いですね、恐ろしいですね。

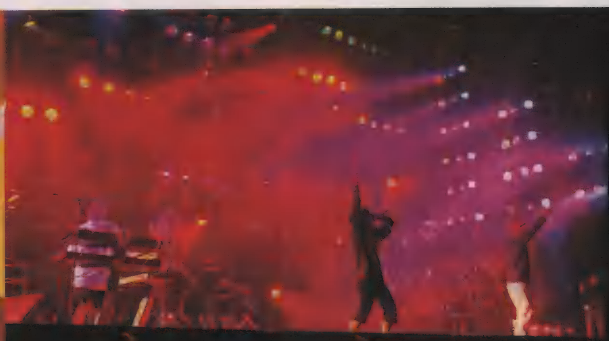
はい、時間来ました。みなさん、サヨナラ、サヨナラ、サヨナラ。



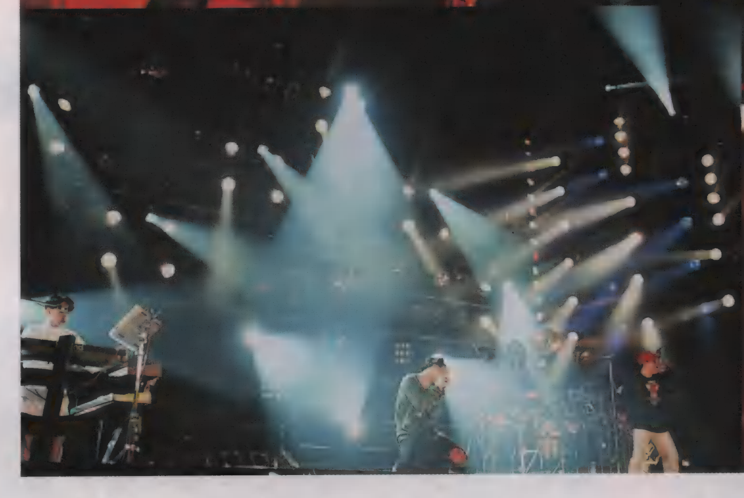
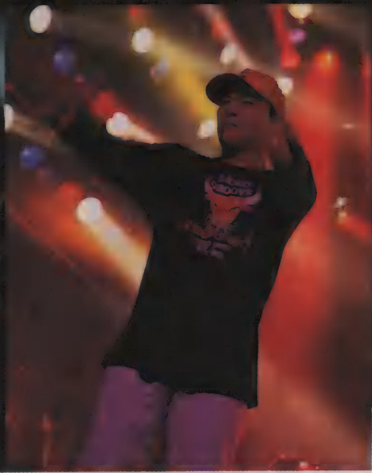
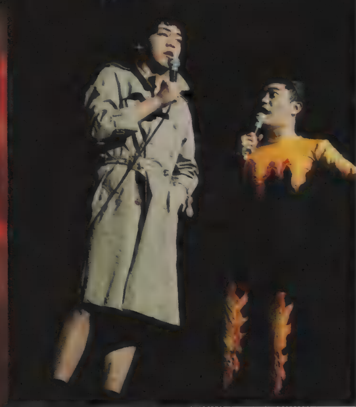
RR GOODS PRESENT

今回はメンバーが常用しているタバコにそれぞれサイン入りで3名にプレゼントだ。アナタの〝3人は何のタバコを吸ってるのカナ？〟という疑問も解決さ。官製はがきに応募券を貼って、住所、氏名、年齢を書き、〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ㈱ソニー・マガジンズ　パチロクスペシャルプレゼント・電気グルーヴ係まで。誰のが欲しいか書いてね。締切は12月20日消印有効だよん。

武道館の伝説は今や、音をたてて崩れ去ったのか、それとも今、まさに生まれ変わったのだろうか……



ごぞんじ浅草キッドのお二人だ。楽屋では衣装にイロイロ悩んでいたよ(笑)

千代田区は北の丸公園にあるこの六角形の巨大な建物。ここから数々の伝説が産まれた。ビートルズはドリフターズを前座に従えてたった30分のライブを行った。チープ・トリックはここで録音されたライブ・アルバムで全世界的な成功を手にした。爆風スランプは「大きな玉ネギの下で」と歌った。ザ・ぼんちはここで漫才ブームの終焉を迎えた。

日本武道館。いつしかここはロックの殿堂となり、ここでライブをすることがミュージシャンにとってステイタスとなった。

だが、しかし……。

1992年11月2日。今日、その武道館伝説に新たな1ページが書き込まれようとしていた。いや、正確にいうならば、今日をもってその武道館伝説は崩壊しようとしていた。

それらの輝かしい伝説は巨大な6枚の壁によって支えられていた。そこに集う若者たちはその扉をくぐった瞬間に名前も住所も年齢も国籍も血液型も星座もない匿名者となった。舞台に現れたアーティストたちはその1万の匿名者に向かって叫んだ。ある者は「ラブ&ピース!」と。またある者は「デストロイ!」と。その叫びは巨大な6枚の壁にこだまして建物を満たしたが、決して壁の外へは出ようとしなかった。誰も壁の外へ向かって叫ぼうとはしなかった。大音量と大歓声で壁の存在を無理矢理忘れようとはしても。徹底的な予定調和。巨大な6枚の壁がもたらす幸福な幻の夢の中でアーティストも観客も酔いしれた。

それが武道館伝説だ。

電気グルーヴは自らを〝ドリーム・クラッシャー〟と呼ぶ。彼らは気がつくとあちこちからひょこひょこ顔を出すヘドが出そうな予定調和の幸福な夢をモグラ叩きのように叩き潰して来た。大枚はたいてエステに通うデブには「堂々めぐりでブーちゃんだ!」と教えてやり、思い悩んでいるハゲには「ちいさいこと気にすることねぇじゃん」とハゲまし、十七歳の地図を彷徨う若者には「バイクを盗んじゃいけません」と人生を説きながら。電気グルーブはそんな巨大な6枚の壁の中だけで機能する夢を叩き潰すために存在している。

お笑い界のドリーム・クラッシャー、浅草キッドの前説。ピッタリ体に張りつく全身タイツの水道橋博士とコートの下は全裸の玉袋筋太郎が今日の注意事項を告げる。

「今日はオナニー・SM・浣腸すべて可です」

「マイアミ天国」からライブがスタートした。まりんがキーボードを叩き卓球と瀧がマイクに向かって叫ぶ。スクリーンには〝Everybody sampling〟の文字。「人にばれなきゃオリジナル」数々の伝説を彩ったいかさまバンド野郎のバケの皮を剝ぐ。「スネークフィンガー」はここに集まったデブへのレクイエムだ。「BASS」から「TWIST OF THE WORLD」へ。スクリーンに映し出された〝魔王〟の文字。すべての男が魔王になるのはブスな女がいるからだ。

卓球のMC。「お前らクラスで友達いないでしょ?」予定調和を求めてやって来た夢見がちな少年少女に鉄槌を食らわす。

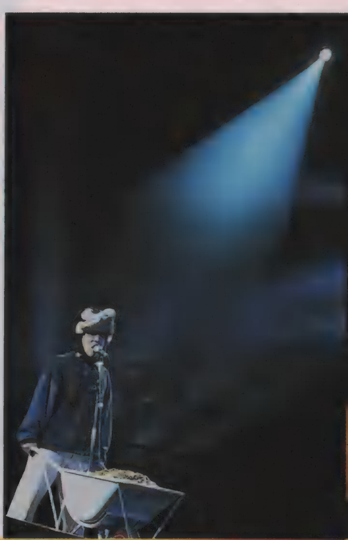
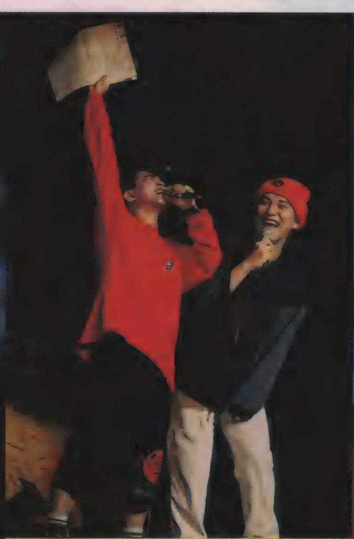
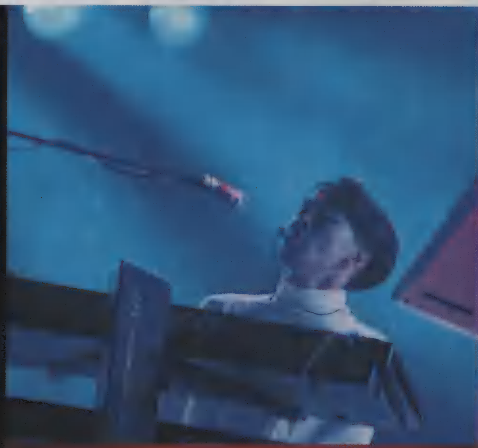
「HI-Scorg」のゲーセン魔王と武道館伝説はどこが違うのか? 「俺の体の筋肉はどれをとっても機械だぜ」「モンキーに警告」のニヒリズム&ダンディズム。MCのあとは「力医師」。まりんが奏でるYOSHIKIばりの生ピアノに乗って鵜のかぶりものをした瀧がネコマイクに山盛りのカレーライスをパクつく。しかもゲップ交じりで。今や風前の灯火となった武道館伝説。得意顔のプチブル教祖を地獄に落とす「人事をつくさず天命を待つ」。ブラボー小松のギターが吠える。スティーブ衛藤も加わった「ちょうちょ」が巨大な6枚の壁を突き破ってストリーキングを始める。真心ブラザースがカバーしている「どかーん」。勝てば天国・負ければ地獄「BINGO」。ダメ息子・バカ息子の「MUD EBIS」がもらった奥さんは美人だ。ヤツが通った後ハンパじゃないぜ、武道館伝説一本残しゃしねぇ「DS MASSIVE」。「CAFE DE 鬼」「電気ビリビリ」でライブが終了した。その瞬間、武道館の巨大な6枚の壁は音を立てて崩れ落ちた。そして、新しい武道館伝説が産まれた。卓球・瀧・まりんが去ったあとには胸にしっかりとそれぞれの名前と住所と年齢と国籍と血液型と星座を刻み込んだ名札を付けた1万人が立っていた。彼らはそれぞれの顔と名前で本当の夢を探すためにそれぞれの場所へと帰って行った。

肝心の電気グルーヴはといえば、途中だったモグラ叩きの全国行脚の旅へと戻って行った。まだまだ全国には予定調和の幻の夢がひょこひょこ顔を出している。それらすべてを完璧に叩き潰すまで、彼らの旅は続くのだ。

そう、鼻毛あばれ牛のごとく。

電気GROOVE in 武道館

全国鼻毛あばれ牛 TOUR






ロックンロールをお求めですね。
すかんち
SCANCH
でしたら、こちらがおススメです。
NEW SINGLE NOW ON SALE
「恋するマリールー」
C/W 恋人はアンドロイド
●CD:SRDL3575 税込定価¥800
「情熱のツアー！オペラと踊りの11日間!! 15万8千円'93」
1/25(月)大阪 厚生年金会館 サウンドクリエーター06-361-9900
27 名古屋 愛知勤労会館 (問) 052-936-6041
2/12・13 東京 渋谷公会堂 03-3857-9999
3/16 新潟 PHASE (問)キョードー北陸025-240-2633
18(木) 仙台 仙台市青年文化センター (問)G I P022-222-2093
23 札幌 札幌市民会館 (問)WESS011-613-9000
26 福岡 福岡電気ホール ミュージック092-791-0999
29 広島 アステールプラザ中ホール (問)キャンディプロモーション082-249-8334
すかんちファンクラブ発足！
〒150 東京都渋谷区神宮前2-4-12
«IT'S BP» information
(Invitation To SCANCH Backstage Party)
「恋するマリールー」を購入すると先着で"IT'S BP Ten Cards"がレコード店店頭でもらえます。Ten Cards に付いている指定応募ハガキを使用して、友達2人とNew Albumを予約して下さい。レコード店で予約確認印を応募ハガキにもらい、ソニーレコードに申し込むと抽選で各会場5組15名様をSCANCHのコンサート及び、バックステージパーティーにご招待致します!!
詳しくは"IT'S BP Ten Cards"をご覧下さい。
Sony Records
SONY



好評連載中!

すかんちの BOYS be AMBITIOUS!

第4話:すかんち御意見番アンケート殺到する。そのココロは…

すかんちをビッグ・スターにすべく始まったこの連載。まずは己を知ることとみなさまから募ったアンケートの反響はすさまじかった。おハガキをくれたファンの方もそうではない方にもお礼を申し上げます。これからも随時あなたの貴重な御意見を受け付けますのでビシバシおハガキをお出し下さいませ。さて今回はお楽しみアンケート集計です。見事グランプリに輝いた神戸の中村クンと29歳の看護婦のアナタには豪華商品プレゼント。これからもすかんちを応援してやって下さいませ。シングル「恋するマリールー」もグーよ。

Photography **Michihiro Ikeda** Text **Kyoko Sano**

ローリーのヘソ毛がイヤ↔そういうキミかて生えてるやろ、でも自分じゃ気に入ってるんよ

〝ずかんち御意見番〟へ、たーくさんのお便りありがとうございました。

これが予想を上回る反響で、すかんちのメンバー、スタッフ共々ありがたく一枚一枚に目を通しました（コレ、本当）。お便りを頂いた読者の80パーセントがすかんちのファン、あるいは好意的に思っている人であったが、中にはキツ〜イ内容のものも当然あって、イヤ、イヤ、みなさん正直に書いてくれました。

すかんちはおそらく、音楽界一熱心にファンレターを読むバンドである。つまり、すかんちはファン・レター読みのプロといってヨイだろう。何事につけ、〝極める〟ことを人生最大の目標として生きるすかんちのことだ。〝御意見番〟はすかんちをどう変えるのか!?はたまた、変えないのか!?

寺西「非常に意外なことなんだが、正直な人が多いね。〝ずかんち〟を好きな人も嫌いな人も、僕の言うことを素直に受けとめているみたいやね」

アバタもエクボじゃないけれど、好きなスターの言うこと、やることにはけっこう盲目的なのは日本人の特徴ではあるまいか？

寺西「〝ローリーさんばっかり喋っている。もっと他の3人にも喋べる機会を与えてほしい〟という意見も多いね。僕チン、そんなつもりはないのにな。でも、それもみんなが純粋に〝ずかんち〟のことを好いてくれてるからかな」

ここで、〝御意見番〟レターの中から、いくつかをピック・アップしてみよう。

〈名前がカッコ悪い〉

寺西「これは好き好きやね。たしかに取っ付きにくいバンド名かもしれんけど」

今さら…という気がしないでもないが、ワケのわからぬ英語のバンド名ならカッコエエというものだろうか？

〈ルックスや雰囲気になじめない。でも、曲はわりかし好き〉

寺西「この意見はすごく多い。曲を聴いてみると〝ずかんち〟の音楽を心の底からキライという人は案外少ないんじゃないだろうか？」

ちなみに、バクチク、ソフト・バレエのファンの意見だっただけにこれはポイント高し。

田中「好きキライに地方別な特色があるかと思って調べてみたんだけど、そうでもないね。わりと全国的に好かれてたり、キラわれたりしているようで（笑）」

〈ローリー寺西がYOSHIKIのマネをしているのがムカつく〉

寺西「その件についてはヒヤカシのつもりは全くありません。Xはシアトリカルなロックをやっている点で好感を持っています」

YOSHIKIとローリーの共通点って…ロング・ヘアーなところだけでは？

〈ローリーのヘソ毛がイヤン。ポンプさんのヒゲは似合わない〉

寺西「僕らのことを好きな人でも、それだけはちょっとカンベンしてくれという人はいるね。けど、そういうキミかて生えてるやろ…と言いたいけど、僕の最大のファンである僕から見るとけっこうグーなんよ」

ローリーのSEXYショットに関しては好き30%、キライ70%？そこら辺の好みはやはりまだ欧米化への道は遠いということか？

小畑「僕のヒゲも評判悪いな。ただ剃るのが面倒クサかっただけなんやけどなあ」

〝優しそう〟という好印象のオバリンだから、ヒゲはちょっとコワモテに見えて損なのかも。

〈音楽をパクっているとバラしすぎのように思われる〉

寺西「僕達が才能がないからパクっていると思っているのかな？」

田中「日本のバンドの大なり小なりがパクリなんだってことを知らないんだと思うよ」

小畑「僕らはただ正直に言うてるだけ」

問題はそこに愛情があるかないか。〝ずかんち〟の場合、好きで好きでしゃあないというあふれんばかりの愛情表現であることをどうかおわかりいただきたい。そのツボを押さえるともっと〝ずかんち〟が見えてくるし、おもしろくなることウケアイである。

〈最近、曲がつまらなくなった。初期のB級っぽさが薄くなった〉

田中「これがまた多いねんなあ」

寺西「前回、前々回のシングルで一般的に認知されるようになって特に増えたね。〝ずかんちが単なる売れセンに走った〟というような危機感もそこには含まれているような。けど、それは心配無用や」

田中「次のアルバムを乞御期待！」

〈良い曲だと思うが、だんだん飽きてきた〉

寺西「ウ〜ン、それはあるな（笑）」

認める？認めてどないすんねん？

田中「けど、飽きへん音楽ってすごく少ない



と思うよ」
〈メンバー内で〝田中〟とか〝武内〟とか苗字で呼び合うのは他人行儀すぎないか?〉
小畑「そんなんちゃうやんな、ドクター」
田中「やめてくれよ、ポンプ」
小畑「何か言ってくれよ、ローリー」
武内「イヤヤー、気色ワルゥ〜!」
親しき仲にも礼儀あり。決してファーストネームでは呼び合えないシャイな性格が〝すかんち〟のまっとうなところなのだ。
〈クラスで〝すかんち〟のファンが少ない。そこでベスト・テープを配ったらファンが急速に増えた〉
小畑「キミのように、フランシスコ・ザビエルのような布教活動をしてくれる人はありがたい。この場を借りて感謝します」
寺西「音楽を聴く以前に止まってしまってるのは悔しいね」
〈筋肉少女帯やソフト・バレエやXが人気を博している今の世の中で、〝すかんち〟が受け入れられないはずはない〉
一同（大いにウケル）
小畑「説得力のある意見やね（苦笑）」
寺西「そうや！ そやからもっと売れたら、ヘンな目で見られへんようになるんや！」
今の世の中って一体……?
〈ローリー寺西が自信過剰で鼻につく、もっと謙虚な姿勢でいてほしい〉
寺西「なぁぜ、それがイケナイ!?」
→馬の耳に念仏である。
〈バンドがネバっこい気がする〉
田中「関西弁がかもしだすもんかもしれん」
寺西「それはあるね。たしかに、グラム・ロッカーに関西弁は似合わへんかもしれない」
しかし、関西弁だからこそ、そのギャップ、ミスマッチが独特だともいえるのでは?
〈チャラチャラした衣装自体キライなのに、ポンプ小畑までもがあの衣装を着るなんて〉
小畑「オレ、もっとオレが太りすぎやという意見が来るかと思ってたんやけど、みんなけっこう遠慮してるね」
寺西「衣装が過剰にハデでキライ。オバカさんに見えるというのはわかるけど、僕はそれを目指してるからなあ。風当たりが強いのんも覚悟の上やもん」
田中「アクの強いのは認めましょう（笑）」
〈シマチャンはカワイイから許す〉
寺西「武内の評価がかなり高いのにはちょっと驚いたね」
武内「あたし、もっと個人攻撃があるかと思ってヒヤヒヤしてた」
小畑「キライな人も武内だけはスキやという人が多いもんな。トクやなあ」
寺西「ちょっと気になったのは、〝カワイイけど最近メイクが濃い〟という意見（笑）」
武内「アハハハハ」
寺西「けど、基本的に好かれているよね。今のキャラクターで非常に好感を持たれている。そこいくと、僕は威張っている、デシャバリという印象が強いようだ。この男（小畑）の〝優しい〟はダマされているにすぎないが」
小畑「田中さんは神秘的に見えるらしい」
田中「フッフッフッ」
小畑「一般的にも太った男が優しそうに見えるのはあんねんよ」
武内「太った人がりえちゃんと結婚する時代やもん。あっ、ちょっと違う?（笑）」
個性もバラバラ、イメージもバラバラ。それでこそ〝すかんち〟やーッ！ 結局のところ、それが言いたいだけだったりする。
寺西「考えたら、バンド好きになんのもキライになんのも自由や。僕らは常に自分らがカッコイイものをやり続けるしかないもんね。特に僕なんか僕自身がイカスと思うことしかようせんねん。こっそり、リサーチをしながらもね（笑）」
こっそりリサーチ（笑）。誌面でこんなに堂々とリサーチしておきながら。
小畑「音を聴いてみたらけっこう良かったという人が多いのはうれしかったわ。まだまだライヴの数も少ないし、ステージを観てくれたらもっと気に入ってくれそうやしね」
田中「〝すかんち〟のバンド・イメージが定着してきたんだと思った。そういう意味では賛否両論もほぼ予想どおりかな」
寺西「僕がSEXYだという意見が少ないのが僕としてはやや残念でもあったが、〝パチロク〟にはバンドとしての〝すかんち〟ファンが多いということやろね」
武内「あたしは正直言ってホッとした」
寺西「ふざけたバンドやというのは当たってるよ。ふざけてるもん、大マジメに！」
この企画自体がふざけてる? チッ、チッ、エンターテイメントとお呼び。
では、最後に〝御意見番〟大賞を発表する。〝すかんち〟の民間伝導に力を注ぎ、なおかつ貴重な参考意見を寄せてくれた、〈神戸の中村ゆうすけ〉に決定！ アナタには世界に一本しかない〝すかんち〟の生メッセージ・テープをプレゼント！ そして、アンチ・すかんち・ファンの29歳の看護婦のアナタには、〝すかんち〟のCD&ビデオをまとめて送りましょう。クーッ、太っ腹！

すかんちの BOYS be AMBITIOUS!



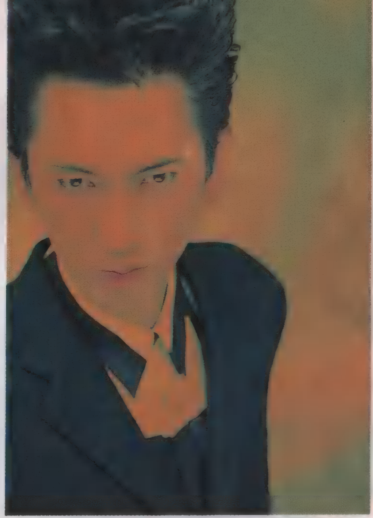


M ağe

パーソナル最終回！ KAJIWARAの巻

メンバー5人の中で一番ウサン臭く、一番強がりの多い、それでいて、したたかさに欠ける何とも言葉に尽くしがたいキャラクターを持つKAJIWARA。彼のキャラクターに〝バーディ〟的なものを感じるのは私だけだろうか？　そんな彼の魅力が少しでも伝わればいいと思う

Phtography **Kiyoto Takahashi** Text **Toshio Nishikubo**



TOMOYASU HOTEI
GUITARHYTHM WILD
EXCLUSIVE INTERVIEW

…10月30日、福岡サンパレスホールはガンガンに盛り上がっていた。2人、3人と連れだってきたグループが各々の反応の仕方でハジケて、そこがとてもうれしい雰囲気を作り出していた。彼等はライブが終わるといったん布袋グッズを買い求めるためにワイワイと長蛇の列を作り、さらに、メンバーの乗った車とコンタクトをとるべく自転車や原チャリで追っかけに走っていった…。

翌日、福岡での2日目の公演を前に、ホールの楽屋で布袋と会った。新たなツアーが始まったーそのタイミングの中で彼が思っていること、感じていることを聞くために。ゆえに、今回のインタビューは92年10月31日の時点での話、ということになる。そこのところをふまえつつ、ツアー渦中、リアルな本人の言葉に触れてほしいとおもう。

＊

——新しいツアーが始まっての感想は？

布袋　渋谷公会堂での初日は、やっぱり演る方も観る側にもすごい緊張感があったと思う。でもその後はズーッと昨日（福岡・初日）みたいなカンジかな？　きのうって、それぞれが自分のバイブレーションで盛り上がって、それが広がっていくみたいなノリだったでしょ？　そういうパターンか…あとは宇都宮とか仙台みたいに全員が一個になってしまうカンジか、どっちかだネ。こっちとしては「さァ、今日も盛り上げよう！」と思ってステージにのぞんでるわけじゃないんだけど、とにかく自然と自分の気持ちが盛り上がっちゃうから、それが皆んなにも伝わるんだろうネ。

——昨日のステージとか、のっけから思いっきり声を張り上げてたでしょ？　ベース配分無視、みたいなカンジで。

布袋　へへ。（笑）どうも気持ちの盛り上がりを止められなくて。前回のツアーでは、特に歌の配分が見えなくってビクビクしたこともあったけど、今回はそういうの全然ないの。初めから飛ばしたせいで一番高いキーが出なくなっても、そんなことはちっぽけな問題だなって思えるようになったんだよネ。

——そうした問題より〝全開の自分〟の方がはるかに重要だと？

布袋　うん。なんか本当に自然とその方向に行っちゃうんだよネ。ハッと気がつくとギター弾きながら「バカヤロー!!」とか言ってたりもして。

——声に出して？

布袋　そう。野村監督じゃありませんが。（笑）

——それは何に対しての〝バカヤロウ〟なわけ？

布袋　別にオーディエンスに対して怒ってるわけじゃないし、自分たち自身に対してでもない。もっと漠然とした、姿の見えないものに向かって言ってるんだよネ。そういうモノーオレらが見つめてる一点とオーディエンスが見つめてる点が限りなく近づいてきてるような気もする。

——今回のツアーの盛り上がり方のある部分には、そういう向い方があるのかもネ。

布袋　うん。あと、ライブのメニュー自体がそうした方向を作り出してる、というのもあるかもしれない。

——今回のプログラムはどんな風に決めていったの？

布袋　これまでは1つのストーリーを作るような選曲をしてきたんだけど、今回はその辺、あんまり考えなかった。あんまり起伏をつけ過ぎないようにして、いったんスベリ出したら最後までまっしぐら、っていうカンジにしようって思ったぐらい。最後に「I'M　FREE」を持ってくる、っていう所だけ考えたけどネ。

——アレはどういう含みで？

布袋　今までガシッと幕を閉じて終わってた所を、今日はさらに幕を広げて終わりたかった。「I'M　FREE」っていうのは最後に自分を全放出するのにふさわしい曲だったんだよネ。アレを演ったあとはもう自力では立ってられない。（笑）逆に言えば、あの曲を終えるまではちゃんと立ってられないと意味がない。最初はネ、体力的にどうしてもつらそうだったら1〜2曲へらそうかとも思ったんだけど、それをやるとオレの考える今回のステージからは遠くなっちゃうような気がして。やっぱライブのメニューって、その時期に自分でやりたい曲を並べてみるわけじゃない？　それをへらすっていうのは階段から段を間引くようなもので…。

——実際、ステージの進行って階段にたとえられたりもする？

布袋　それ、あるよネ。1曲進むと汗が出て、もう1曲進むとバンドの一体感が増して、オーディエンスとの関係も深まって…。だから、ステージ上で次の曲に行くっていうのはすごく楽しみなことでもある。一段ー1曲のぼるごとに何かが高まっていくんだから。で、最後は頭の中が真っ白になってその日のステージが終わる、と。

——頭の中が真っ白で終われるから、また新たなステージにのぞむことが出来る？

布袋　絶対そうでしょうネ。その日のステージはそこで100パーセント消化できないとやっていく意味がないから。ま、そこら辺は人によって様々なんだろうけどネ。そういえばこの間、S A S（サザンオールスターズ）の桑田さん、高橋ユキヒロさんと酒を飲む機会があった。結局3人で12時間も飲んじゃったんだけどさァ。（笑）その時、桑田さんは言ってた。自分は例えば横浜アリーナで2日間公演をやるとしたら、1日目は翌日のためにちょっと力を残しておこうって考えると。

——その理由は？

布袋　2日目も1日目も同じように何万人もの人が見にくるんだから、って。オレとかはどうしても「今日は今日のために」ってなっちゃうんだけどネ。ま、その時は、「お互い芸風が違いますからネ」ってことになったわけですが。（笑）

——ちなみにユキヒロさんはその辺、なんて言ってたの？

布袋　2日続けてやると腰が痛いって。（笑）皆んな自分達の名前でコンサートやってんだから、色んな人がいて当然だと思うけどネ。そこでオレはその日のためのステージをやっていく。ツアーとかになるとどうしても「30カ所で1本のツアー」みたいな考え方になりがちだけど、オレはそうじゃないと思うんだよネ。30カ所で1本、ではなく1カ所〳〵が30回ある、っていう考え方。だから福岡に来ても、仙台に行っても気分は同じなんだよネ。

——ツアーで1単位とするか、コンサート×公演数でツアーとするか。これはアーティストによって意見の別れるとこだネ。

布袋　全体で1本ていうのはあくまでやる側から見た意見だと思うんだよネ。だって全公演を見るお客さんなんていないんだから。それが出来るのはツアー・スタッフぐらいのもんで、普通のお客さんはその一晩ー2時間のために賭けてくる。オレとかもインタビューとかでデカイこと言ってる手前（笑）言った以上はその日のステージに賭けている。そういう〝勝負なカンジ〟、今回のツアーにもあるよネ。

——うん。勝負なカンジ、ネ。

布袋　オレの曲自体、そういうのが多いじゃん？　だから必然的にそんな気分になるのかもしれないけど。コンサートのプログラムにしてもそういう曲が並んでる。そうするとやっぱ張りつめた方向に行くよネ。ただ、オレの曲っていうのは自分に向けて歌ってることがすごく多い。ステージで、何千人、何万人を相手にしてようが、結果的には自分に対している。

——そこに〝勝負〟という言葉を持ち出すなら、それは布袋が布袋に向けた勝負をどう受け止めるか、ということになるネ。

布袋　ま、なにをどう受け止めるかは自由だけどネ。でも、こんなオレの生き方、存在の仕方を感じて、感じたものを頭の中、心の中に持って帰ってくれれば、ネ。そこに皆んなと出会えた意味があるかな？って思う。今回は新しいファンも多いみたいだけど、そういう連中にも何かを持って帰って欲しいよネ。

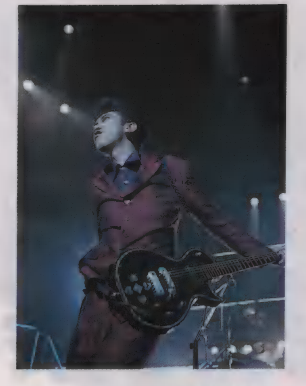
——お客さんのリアクションと言えば、いい演奏に的確に反応できる人が増えたようにも思ったけど。

布袋　それでかな？　ギター弾いてても気持ちいいのは。そういうのって空気の動きで伝わってくるんだよネ。フワッと自分が浮く、みたいなカンジで。たしかに今回って、そういう時間がすごく多いツアーのような気はするネ。

——じゃやってて気持いいよネ。

布袋　その分、ステージがない日が困るの。どうしていいのか、何をしたらいいのか分かんなくなっちゃって。（笑）このツアーの流れは止めたくない、みたいな気分がいつもあってさァ。と言いつつもどんどんコンサートは終わりに向かっていく。なんか、すでに寂しいってカンジだネ。





すべての若きロックンロールボヘミアンに捧ぐ



布袋寅泰
ギタリズムIII
NOW ON SALE

TOCT-6658 ¥3,000 (incl.tax)

"LONELY★WILD" [Single Version] Now On Sale ("BOUTIQUE JOY" TV-CF Song) TODT-2881 ¥930 (incl.tax)

GUITARHYTHM WILD

10/12·13	渋谷公会堂	SOLD OUT!	Disk Garage	03-5704-3200
10/16	群馬県民会館		Flip Side	0286-33-1009
10/18·19	日本武道館	SOLD OUT!	Disk Garage	03-5704-3200
10/22	大阪城ホール	SOLD OUT!	Yumebanchi Osaka	06 -341 -3525
10/25	宇都宮市文化会館	SOLD OUT!	Flip Side	0286-33-1009
10/27	仙台サンプラザ	SOLD OUT!	G.I.P	022-222-9999
10/30·31	福岡サンパレス	SOLD OUT!	Brains	092-771-8121
11/ 6·7	渋谷ON AIR	SOLD OUT!	Disk Garage	03-5704-3200
11/13	静岡市民文化会館	SOLD OUT!	Sunday Folk Shizuoka	0542-84-9999
11/14	京都会館/第1ホール	SOLD OUT!	J Ongakukikaku	075-231-7776
11/16	岡山市民会館		Yumebanchi Osaka	0862-31-3531
11/17·18	名古屋市民会館	SOLD OUT!	Sunday Folk Nagoya	052-320-9100
11/20	広島厚生年金会館		Yumebanchi Hiroshima	082-249-3571
11/24·25	札幌ペニーレイン24		Wess	011-613-9000
11/27	札幌市民会館		Wess	011-613-9000
12/ 2·3	大阪W'OHOL	SOLD OUT!	Yumebanchi Osaka	06 -341 -3525
12/ 7	イムズホール	SOLD OUT!	Brains	092-771-8121
12/10	名古屋クラブダイヤモンドホール		Sunday Folk Nagoya	052-320-9100
12/12	鹿児島市民文化ホール		K&M Corp.	0992-23-7710
12/15·16	大阪厚生年金会館	SOLD OUT!	Yumebanchi Osaka	06 -341 -3525
12/19·20	横浜アリーナ		Disk Garage	03-5704-3200
12/25	静岡市民文化会館		Sunday Folk Shizuoka	0542-84-9999
12/26	神戸国際会館		Yumebanchi Osaka	0862-31-3531
12/27	神戸国際会館 [追加公演]	SOLD OUT!	Yumebanchi Osaka	0862-31-3531

Tour Total Information : 03-5466-1325 IRc2 CORPORATION

EASTWORLD TOSHIBA-EMI LIMITED

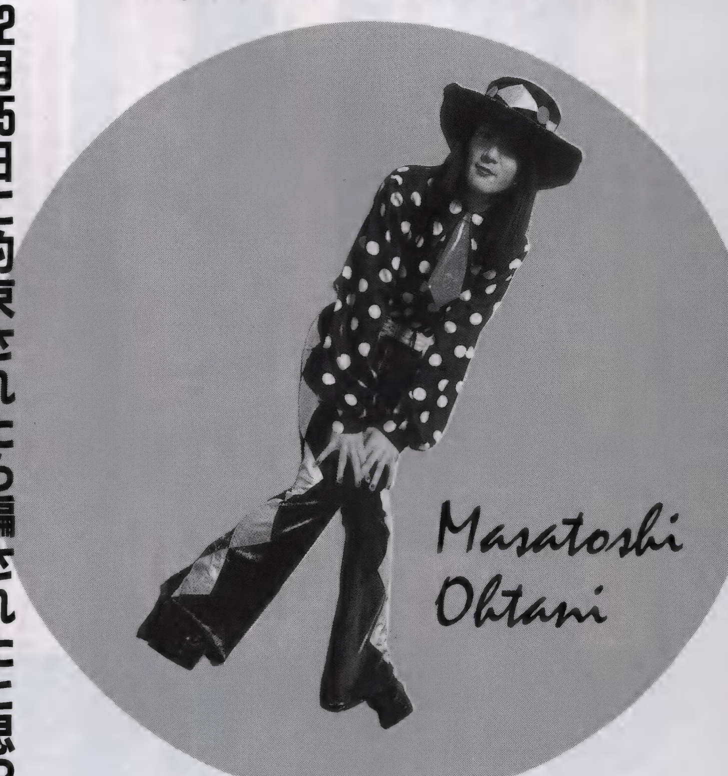
LOVE MISSILE

Happy X'mas

ひと足お先にX'masネタでございます。
メンバー各自のX'masの想い出。
そしてX'masのノウハウまで伝授してくれたぞ。
あと、LOVE MISSILEをよりよく知るための
コーナーも設置。まず第１弾はルーツを探る。

Photography **Motoko Sashi** Text **Yūsuke Katoh**

12月25日に約束されたら騙されたと思って下さい。彼には他に本命がいます。（笑）



テレビ朝日『ザ・ゲーム・シティー』のエンディング・テーマ「この胸のときめきを」が好調のラブ・ミサイル。そのカップリング曲「特別な夜　特別な君」がクリスマス・バージョンということを聞きつけたパチロク竹内は「じゃあ季節もんだしここは一発メンバーにクリスマスの想い出でも語ってもらいましょうか、そーでなくて」と超安易に今回の企画を立てたのだが……。

栗田「一昨年のクリスマス・イブの日に強力に金がなくて……」

青木「いつもだろ。（笑）」

栗田「友達の所に借りに行くような金もなくて。100円なかったのかな？　しかも家の中に食い物がまったくなくて、酒もなくて最終的にタバコまでなくなって来てメチャクチャ悲惨なイブを過ごしたことがありました。もうひとりで延々テレビ観るしか他にすることなくて。友達に電話しても虚しくなるだけだから、みんないないから。（笑）」

青木「それで？」

栗田「それだけ」

青木「オチがないじゃないかよぉ！」

栗田「だからオチは貧乏だっていう。（笑）その年は年越せなかったですね。（笑）その状態が春まで続きましたからね、借金が借金を呼んで。（笑）」

大谷「僕はですね、クリスマス・イブって特番じゃないですけどアニメやるじゃないですか、『スノーマン』のアニメを。それで去年のクリスマスはひとりで部屋で飲んでたんですよ。そしたらちょうどそれが始まって観てたら昔の幸せだった頃の、家族に囲まれて過ごしたクリスマスを思い出してウルウル来てジーンとしてました。（笑）あとはやっぱりバンドやってるとイベント絡みが多いんで、ライブやったりとか友達のライブ観に行ったりとかですね」

麗香「僕は小学生のときまではクリスマスってすごいワクワクしていたんですけど、最近はもうあんまり意識ないですね。で、こんな僕にも人生の中で1回だけ楽しく過ごしたクリスマスがあったんですけど。（笑）」

青木「出た！（笑）」

麗香「普通にみなさんがするように恋人とイチャイチャするっていうパターンのやつでしたけど、それ1回だけやったことがあります。でもそんないちいちクリスマスだからってあえてその日にそういうことしなくてもいいじゃん？　って感じしますけどね。クリスマスだからって便乗するのは好きじゃないですね。僕も昔は〝クリスマスだから早く彼女を作んなきゃ〟とかって思いましたけど、最近はそういうのにはあんまり興味はないですね」

青木「僕はクリスマスは基本的に嫌いなんですよね。別に他の宗教やってるとかそういうのはないんですけどね。（笑）あれいつだったかなぁ？　本命の彼女がいないときがあったんですよ。でも遊ぶ女の子はいたっていう状態で、クリスマスを誰と過ごすかということを悩みまして、結構優位な立場にいたんですけど。（笑）でも決めかねているうちにみんな相手が出来ちゃってひとりで過ごしたっていうことがあったんですよ。それ以来クリスマスは徹底的に嫌いになりました。（笑）だからふたまたかけてる人が問題なんですよ。24日に逢うのか25日に逢うのかでその女の子からしてみれば自分のランクがわかってしまうという。そこをうまく調整しないとね。（笑）読者の女の子のみなさん、25日に約束されたら騙されたと思ってください。（笑）彼にはあなた以外に本命がいます。（笑）それは仕事だろうがなんだろうがそんなことは関係ない。（笑）気をつけてください。（笑）」

栗田「でもさ、みんな赤プリとか高いホテル予約したりしてるけど、結局はヤリに行くだけなの？」

麗香「そう。だからクリスマスのメイン・イベントが赤プリの夜なんですよ。（笑）」

青木「街中が演出してくれるからね、ふたりの恋を。街中でキスしてても誰も何もいわないし」

栗田「世間が認めてるわけだ、〝この日はヤッてもいいよ〟って。ヤッちゃっていい日なんだ。（笑）」

麗香「ヤッちゃっていい日。（笑）」

栗田「正月じゃいけないのかな？」

青木「これは違う雑誌でいったんだけど、正月は昼間にヤルのがトレンドなのね。クリスマスは夜なの」

大谷「なに、それ？（笑）」

栗田「除夜の鐘聞きながらっていうのはどうなの？」

麗香「足掛け2年ていうのはどうですか？　大晦日の11時半ぐらいからおっぱじめて元旦の零時何分に終わるっていう。（笑）」

青木「それは大谷に聞いて。（笑）」

大谷「なんで俺なのよ？　でも気をつけないといけないのは晴れ着とか着て髪結ってるのにそういうことしちゃうと後でピンチになりますからね」

青木「いや、ちゃんとホテルで着付けやってくれるらしいよ」

栗田「着物関係の成人式の日もね」

大谷「なんかワイ談になって来たなぁ。（笑）」

——じゃあ理想のクリスマスの過ごし方を教えてくださいよ、ワイ談じゃなくてラ



LOVE MISSILEをより知るために❤lesson① ROOTS

✪ HIDEKI AOKI



『ベスト』ルベッツ
これはもう僕の理想形のバンドで、50年代のポップスのテイストを70年代の音でやってるっていうね。完成度も高いしサウンドも綺麗だし。「ラブ・ミサイルとどこが違うの？」っていう感じですね。（笑）



『氷の世界』井上陽水
これはみんな知ってると思うんだけど、内向的っていうか内に向かってるパワーはすごいですね。僕は本質的にこういう人間なんですよ。もし僕が音楽をやっていなかったらこういう世界を追い求めていたんじゃないかな？

✪ REIKA HIRONO

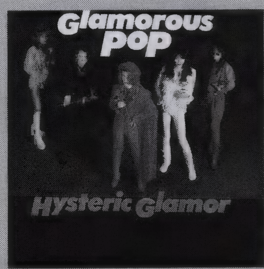


『リボンの騎士』サントラ
主人公のサファイアは女の子なんだけど男の子として育てられたんですよね。その中性的な感じが好きなんですよ。彼女の華々しい雰囲気がラブ・ミサイルとオーバー・ラップするところがありますね。



『ベスト』キャロル
矢沢永吉はソロでもカッコいいですけどキャロルもいいですね。一見革ジャンにリーゼントで不良ぽい恰好してるんですけど実は歌詞がすごくナンパで、このアンバランスさが好きです。あとやたらテンションが高いとこも。

✪ MASATOSHI OHTANI

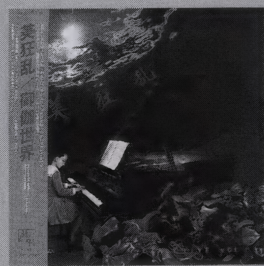


『グラマラス・ポップ』ヒステリック・グラマー
自分のプレイが最初に形になったということで持って来たんですけど、もうてめぇのヘタさ加減には父ちゃん情けなくて鼻から納豆出て来るわ！って感じでショックを受けた。（笑）



『ソリッド・ステート・サバイバー』YMO
最初はスネークマン・ショーの方が好きだったんですけど、段々曲の方も好きになって来て。YMOってミステリアスな雰囲気があったでしょ？ジャケットもインパクトがあったし。そこが好きだったんですよね。

✪ TACKTEN KURITA



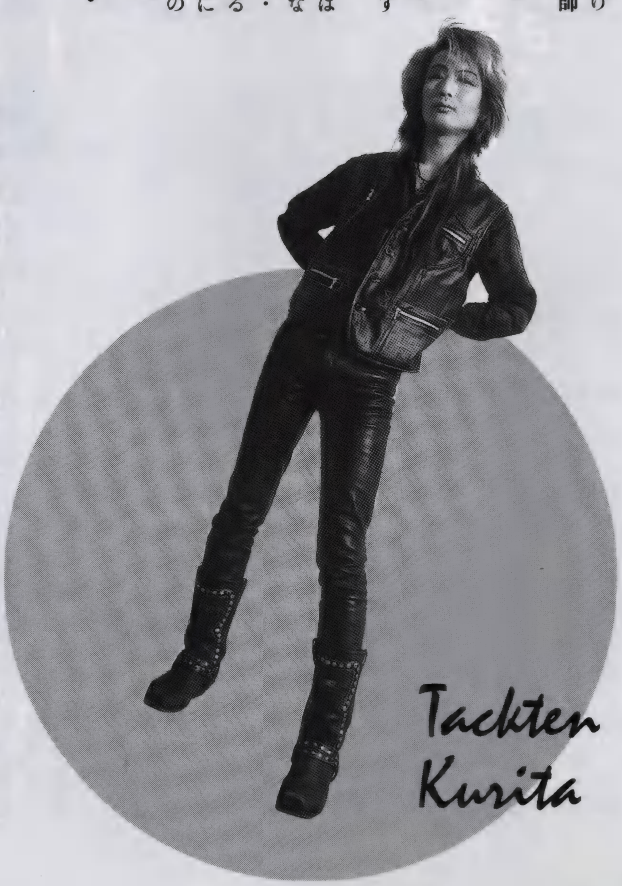
『御伽世界』美狂乱
僕、ラブ・ミサイルやる前にここのドラマーの佐藤まさるさんのボウヤをやってたんですよ。バンド自体は無茶苦茶アンダーグラウンドのプログレなんですけど、やっぱ一番影響受けた人ですから挙げてみました。



『アライブ』キッス
一番最初に買ったロックのレコードなんですけど、未だにこの世界から抜け出てないから衣装がこうなんですよね。（笑）とにかくこれを買っちゃったから今ここにいるっていう感じですね。これとの出会いがすべてでした。



ブ・ミサイルらしくスィートでゴージャスなのを。（笑）
麗香「僕はキリスト教徒じゃないんですけど、1回教会でやってみたいですね。牧師さんの話とか聞いたりして」
――ドリフの聖歌隊みたいな衣装着て。（笑）
麗香「そうそうそうそう。（笑）」
栗田「俺は貧乏だけは避けたいなぁ。（笑）ひとりでも金さえあればなんとかなりますからね。（笑）」
青木「僕の理想のクリスマスの過ごし方は新しいシングルのカップリングの「特別な夜 特別な君」っていう曲がクリスマス・ソングだったからそこですべてを語ってるんですけどね。朝までまぶたにキスを髪にキスをして、キャンドルに照らされた君の横顔に。でも避妊はちゃんとしましょう、ということで。（笑）」
――結局ワイ談になっちゃってるなぁ。（笑）





RR GOODS PRESENT

POPなセンス、あふれまくりのバッヂを、15名様にプレゼントします。カバンにこのバッヂをひとつつけただけで、ホラもうPOP。応募方法は以下の通り。官製ハガキに、あなたの住所・氏名・年齢・希望アーティスト・希望グッズ名を書いて、左下の応募券を貼り、〒156-91 東京都世田谷区千歳郵便局私書箱25号㈱ソニー・マガジンズ「パチロク・スペシャルプレゼント／LOVE MISSILE」係まで。締め切りは、12月20日当日消印有効です。モノクロだから色がわかんないだろうけど、PRETTYなピンクだよ。

スペシャル・グッズ プレゼント RR 1 LOVE MISSILE



左から、さとる(vo)、小林(b)、石井(g)、よしろう(ds)

SOY SAUCE SONIX



街を歩く彼ら。しかし、なぜ浴衣で…

お醤油軍団沖縄へ行く

これからリリースの続くゴッタ煮和風ロック軍団。そんな彼らを応援すべくパチロクでは何回かにわたってフューチャリングしていく。記念すべき第1回目は沖縄の南国の香りに包まれながらレポートしよう

Text **Miho Shimizu**（編集部）

'92年5月、吉田美奈子プロデュースによる「NUDEZILLA」を引っ下げてデビューしたソイ・ソース・ソニックスのセカンド・アルバムのレコーディングが沖縄で行われた。レコーディングと言えば、東京でなければLAやロンドン、国内であれば川口湖とか山中湖なんてパターンが多いのだが、なぜ彼らは今回、沖縄という地を選んだのだろうか？しかもリズム録りは観音崎の海の傍というシチュエーションで行われている。海とロックの融合…ゴッタ煮和風ロックを身上としていた彼らの音楽性がまさか、日本のビーチ・ボーイズへと変貌を遂げたのでは？ そんな疑問を彼らにぶつけてみると、

「こういう所だとレコーディングの後とか遊びに行けるでしょ。東京だと終わると帰っちゃうから親睦を深めることができない」（石井）と、どうやらスタッフとの交流を深められる環境作りということに重点を置いた選択だったようだ。

「今回はね、南の島というのが影響しているかも知れないけど、もっとラフでライブっぽいんですよ。まあ岡野サン（今回のプロデューサー）の場合、作り方がロックだから」（さとる）

「テトリスとかやってて、僕らが〝どうでした？〟って聞いても〝わからない〟って言われたからな。（笑）本当、ノリ的にロック」（石井）と、本人達が語ってることからもうかがえるようにこの段階で聴かせてもらった音も、ずいぶんライブっぽく、生の彼らの持ち味がストレートに伝ってくるものだったのも事実だ。

この別名〝日本の音楽史上、類いまれなるハードさと、頭と肝臓の痛さを含んだアルバム（単なる飲み過ぎだという噂もあるが）のリリースはまだ先の話だが、その前に何と彼らは11月21日にはビデオと1月、2月、3月と3ヵ月連続シングルリリースも敢行する予定だ。しかもシングル3連発のテーマは〝正月〟、〝節分〟〝ひなまつり〟と現在の日本人が失くしてしまった季節感を万年真夏的なノリのソイ・ソース・ソニックスが取り戻そうとでもしているのだろうか？

「ま、日本の行事バンザイ!!といったところでしょうか」（さとる）

ほとんど「お料理バンザイ」のノリと同じようである。

しかし、それよりも彼らのハチャメチャさ加減がいち早く楽しめるのは、ビデオ〝それ

シングルのテーマは〝正月〟〝節分〟〝ひなまつり〟。ま、日本の行事バンザイといったところです

いけ、パンツマン!!〟の方だ。しかし内容はタイトル以上のもので、さとるが成金、石井がホモ、小林が女泣かせのマドロスさん、よしろうがベースドラムを持ったサラリーマンで山手線を降りた途端にズボンが脱げるといった役割り分担まであるという手の込んだものだ。その意図は普段バラバラな生活を送っている人達が集まってクアトロでライブをするといったものらしいのだが、私は凡人なのでつい、そういった内容のものに意味を見い出そうとしてしまう癖があり、彼らの1stアルバムの時のインタヴューを思い出して、〝それは元々の音楽のルーツがバラバラなところを比喩してるわけ?〟などと、大真面目に尋ねたら、

「いや関係ないです。パンツだからなあ。ずっと、センター街をパンツ一丁で走ったし」(さとる)

と、ニベもなく言われた。あーあ、彼らのすることをマジメに受け留めた私がバカだった。まったく。でも、そんなベタベタな感性、私は好きだな。

「もっと面白いシーンがいっぱいあったけど全部入れたら2時間になるからな」(よしろう)

「ノーカット盤の裏ビデオを流すか(笑)」(さとる)

「あっ、ビデオと言えば、今回、万座ビーチに行ったんですよ。いや、それは遊びじゃないんです(と言いながらずいぶん苦しそうだ)太郎さん(担当ディレクター)が営業所の挨拶用のビデオを撮るからって無理矢理。本当はレコーディングがしたかったのにね(段々尻すぼみになってくる)そう、そのビデオのために海の砂場に大きな穴を掘ってそこに太郎さんが入って砂で女の人の形にしておっぱいとか作って首だけ出てんの。そこを大マジメに〝え、これからソイ・ソース・ソニックスの紹介をします〟って後ろでオレ達遊んでんの(笑)。いや、これはあくまでも仕事で本当はレコーディングをしたかったんです!!(もうええって!)」(さとる)

と、メンバーもメンバーなら、スタッフもスタッフのようである。しかし、どうやらスタッフともに楽しもうとする姿勢こそが彼らの原動力であり、彼らのバラエティに富んだ楽曲の血となり肉となるものだろう。

「クックック、ヘビ食ったんです。海ヘビを!」(石井)

「イカ墨汁とか、あっ! そういえば女の人、5千円でエッチできるって話…」(小林)

「5千円か…考えるなぁ…」(さとる)

「5千円か…うーん」(石井)

前言は撤回させてもらおう。こんないい加減でアホでスケベでハチャメチャな彼らだが、敢えて彼らの名誉のために付け加えるならば、このインタヴュー直後に行われたライヴ(その割りにはメンバー達全然緊張感なかったなあ)では、沖縄地元のヒップポップ・バンドや黒人混同のバンドの南国特有なパワフルな演奏の後でも決してそのパワーにひけを取るわけでもなく、さとると小林は懸命に地元の人と解け込もうと沖縄話のMCに花を咲かせ、地元の人もそれに応えるという微笑ましい場面を入り混じえながら、ソイ・ソース・ソニックス独自のグルーヴを炸裂させていた。

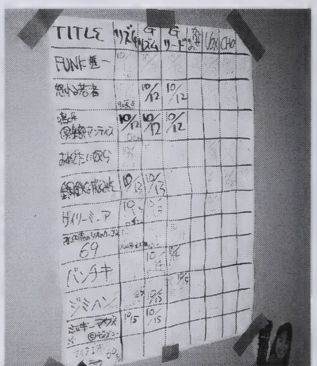
出来たてほやほやの新曲を含めた彼らの最新ライブが12月に東京、大阪、名古屋でも観ることができるので御期待を。



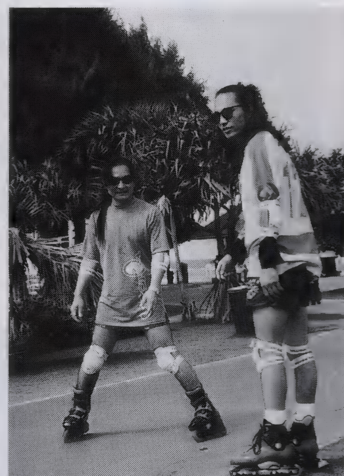
日本人は浴衣や! 何に乗ろうと浴衣でええんや!



これさえ録り終われば泡盛が待っているぜの図



レコーディング進行表、編集者で言えば台割りといったところでしょうか? 大事です



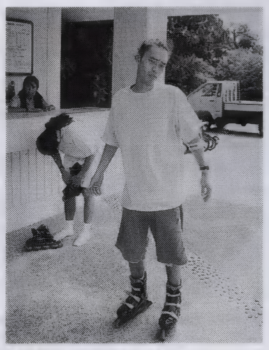
ローラースケートに挑戦、ギターの石井(右)とプロデューサー岡野氏



サックスを吹くさとる(vo)、ちゃんと聴いてあげなさいよ、よしろう(ds)の図



JAVYにてライブ、ちなみに彼らのコピーは東京生まれのファンキー・グルーヴや



何だか不安気な小林(b)

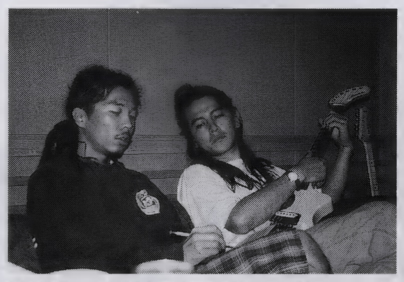
RR GOODS PRESENT



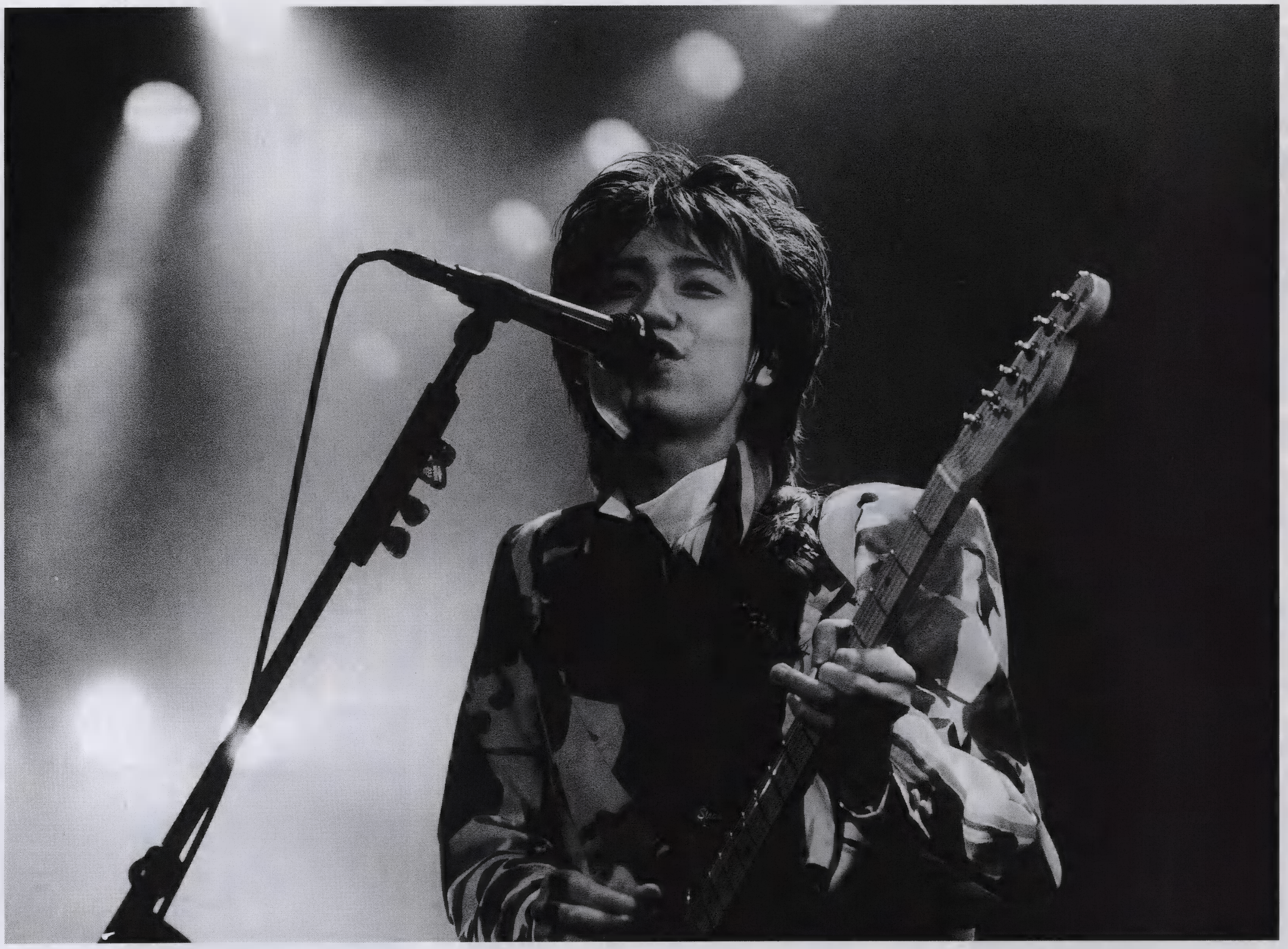
Made in OkinawaのTシャツ 2名

全員のサイン入り。官製ハガキに応募券を貼って〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ㈱ソニー・マガジンズ パチロクスペシャルプレゼントソイ・ソース係まで。締め切りは12月20日消印有効。

RR SPECIAL PRESENT GOODS



歌詞のチェックでもしているのでしょうか!? さとる(vo)とディレクター高橋氏(右)



Z BACKのススメ PART THREE



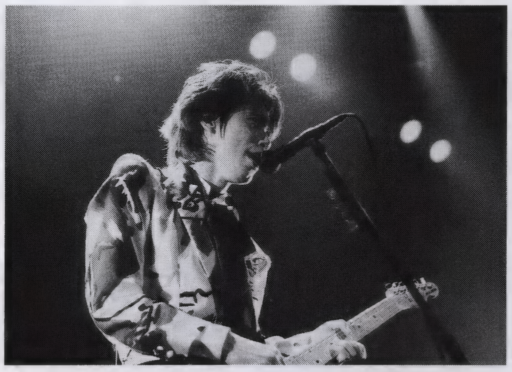
彼らはいま背伸びをせず、ありのままの現実を歌い、打ちひしがれた愛を奏でる。

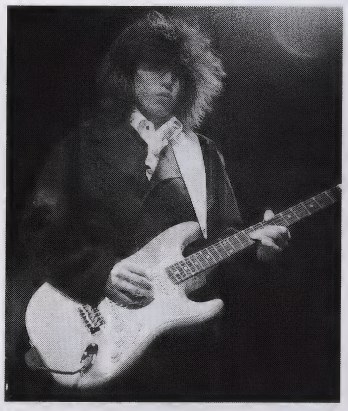
最近とんと見かけなくなったよなあ……。こんなにも正直で純粋で…それでいてイキがいいロックンロール・バンドなんて。しかも、メンバー全員イイ奴で真面目だなんて…いやあ貴重だ。もったいない。そんなひたすら「もったいない」ライブの模様をお届けしよう。時は10月26日、新宿パワーステーションでの「すべくたくるぅ」。

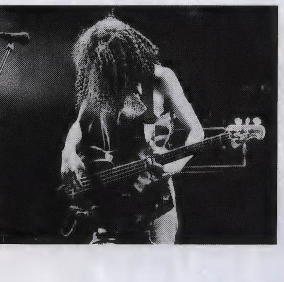
Photography **Taishin Aoki** Text **Makoto Simomura**

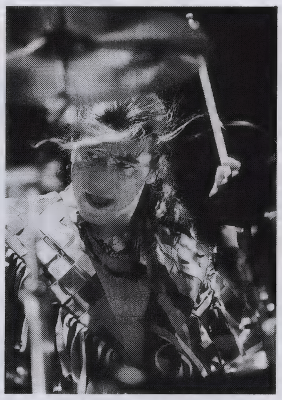
Z-BACK

等身大の自分の姿が自然に出てくる。それが歌であり、ライブだと思うんですよ。（南澤時正）









心の林を掻き分け入ってきて、奥の奥の感動の涙の栓までひねってしまう音楽なんてそうあるわけがない。でも…時たま正にこれだ！ っていうのがあるんだな、これが。Z-BACKの南澤時正という男は、暴走し始めると自分勝手に遠くまで行ってしまうクセがあるものの、とことんピュアな兄ちゃんで、僕はよく彼と共に下北沢あたりで「いいちこ」のロックをガンガン飲りながら、音楽から政治、社会現象、恋愛に至るまで、これまた力の篭もった論争を繰り広げるのだが、そんな他愛のない場面がとてもROCKしていると思ってしまう時がある。あの夜もそうだった。

1992年10月26日。この夜…Z-BACKのワンマン・ライブ（彼らが北九州市から東京に出てきて3度目のワンマンだと時正がMCで語っていた）が日清パワーステーションで行なわれた。6時すぎにはガラガラだった会場も開演間際の7時には満員になってひと安心。7時10分。アルバム『二枚目』の1曲目の「OVERTURE」（この曲が民族音楽ぽくってまさに何かが始まるという感じなのだ）が流れるとゲストのkey奏者を含む5人がステージに登場した。萩原平祐のルーズなエレキ・ギターのイントロにのって時正が歌い始めたのは「雨の街」。この曲は『二枚目』の2曲目に入っているナンバー。時正の艶っぽいボーカルは絶好調で1曲目から非常にテンションが高まってる様子だ。続く「EGOIST」「ゆりかごから墓場まで」「抱きしめたい」と、実に安定した演奏が繰り広げられる。今回、衣装もエライ派手なスーツ（まるでビートルズが『サージェント・ペパーズ・ロンリーハーツ・クラブ・バンド』の裏ジャケットで着ていたような王子様の服のようにキラキラしてる）を着ていてそれぞれがいつも以上に緊張しているのだろう。前半は丁寧で安定した演奏になっている。この辺りの演奏及び時正のボーカルに関してはちょっとレコードを再現するかのように綺麗すぎてつまらない…という声もあったが、"ジョー"を演りたいという彼らの目標のレベルには達していたように思える。確かに斬新ではないのだが、それなりにインパクトはあったし、初めて見た人には好印象を与えたにちがいない。そんなオープニングであった。

「俺からみんなにラブ・ソングを贈ります。聞いてください」、という時正のMCのあと歌われた「ANGEL」そして、6曲目の「HAPPY」から10曲目の「東京cityインディアン」まで続いた、アコースティック&センチメンタル・コーナーとも呼べそうな6曲はこれまでの2年間（上京から現在まで）の時正の心の奥の物語を聞いているようでなんか痛ましくて切なくてジーンときた。

大事な女性に「おまえだけいればなんにもいらない」と告げる約束の歌「ANGEL」。東京に住み初めて落ち込んだ夜。後ろ前に着たセーターのようにぎこちない日々をすごす彼が「幸せの瞬間」を思い描き書き上げた「HAPPY」。大事な人に対し（自己に対して）"信じることって辛いだろ"と問いかける言葉が痛々しい。九州のシンガー源之助が書いた「春望」はカバーなのだが、今では完全に時正のものになってしまっている。"春の湯気の中で風邪をひいている、子供みたいなお前がとても欲しくて"という一行が印象的なブルース。春の訪れを女性のぬくもりに例えた秀作だ。時正のしぼりあげるようなボーカルがいい雰囲気を醸し出している。「下北2丁目風のバラード」は愛する人との暮らしと別離をうたった曲。"甲斐性なしだけど、夢の中も、きっと逢おうな"という一節が泣ける。続いて演奏された「だんだん」はまるで仲井戸麗市のような（笑）萩原平祐がボーカルをとる「だんだん」。この曲は平祐のゆったりとした暮らしぶりが織り込まれていて、微笑ましくもあり心地良い。あまりの心地良さに一瞬眠ってしまった。アコースティック・センチメンタル・コーナーに入れてもいいかどうか迷うのだが、この曲も充分に切ない。10曲目の「東京cityインディアン」である。この歌は東京に住む孤独な青年（＝時正）をインディアンになぞられて書かれたものなのだが、エンディング間際で繰り返される"明日に向かって狼煙をあげた"という一節がなんとも切なく胸に迫ってくる。10月26日、ちょうど後半の盛りあがりの直前、爆発寸前の緊迫したムードの中でうたわれたこの歌は、いつになくスリリングで、直線的で良かった。後半はそれこそエキサイティングなナンバーがずらりと並び、当然のように会場は大きく揺れた。北九州市の方言でわきめ散らすようにうたわれるコミカルなR&R「なんかしらんけど今日は上機嫌」。暗く落ち込んだ奴を罵倒し、勇気づけるエネルギッシュなR&R「マウンテンボーズ」。ベースの岩井英吉が高校の悪ガキになりきって絶叫するR&R「気持ち」。今回のみの特別バージョン（佐川政治家ワイロ事件を歌詞に導入）で歌われた「やってられねえ」では時正の"金丸のバカヤロー"発言まで飛び出し、臨場感が増した。そして「いいことないかな」では時正の心情が吐露され、東京に来て初めてプロを意識して書かれた名曲「ナチュラルBABY」にってコンサートの幕は閉じられた。

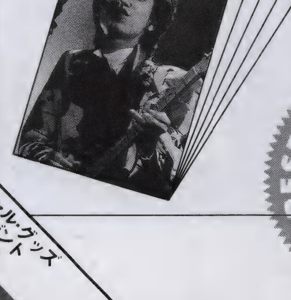
アンコールは全員黒いスーツを着て登場。「決して葬式ではありません」という時正の外角に大きくはずれたMCのあと演奏されたのはちょっとエッチなR&R「MILK SHAKE」。そして最後はアルバム『二枚目』のラスト・ナンバーでもある「ピロードの少年」。この曲はドラムの末松孝久の作曲によるナンバーなのだが、時正の"あの日の少年、今も胸の中"というまさにZ-BACKの原点と言えそうなピュアな精神が音楽化された秀逸なバラッドである。そして暖かい拍手と歓声に包まれ舞台から去っていく彼らの姿にかぶさるようにして流れたのは「東京cityインディアン」のインストゥルメンタルSEだった。後半の演奏がバテぎみだったという反省点はあるにせよ、この日のライブはとてもいいライブだった。僕がこれまで見た彼らの8回のライブの中でも1、2位を争う出来だった。メンバーもこの夜の酒はうまかったにちがいない。そして、僕と時正の例のごとく下北沢で朝まで飲み明かした。

なんかしらんけど、いまの日本は"不景気"という暴風雨が吹き荒れている。Z-BACKはそんな風の中に立つ1本の枝かもしれない。実も花もついていない、根っ子だけの小さな枝だ。でも彼らは彼らにしかないロック・スピリッツがある。それはZ-BACKのROCKにしかない独自のロマンチシズムと言い換えることができるかもしれない。メンバー全員揃って北九州市から東京に移り住んで1年と8か月。Z-BACKはいま背伸びをせず、ありのままの現在を歌い、撃ちひしがれた愛を奏でる。「やっぱり等身大の自分の姿が自然に出てくる。それが歌でありライブだと思うんですよ。そうすることで時折"弱さ"をさらけ出しちゃったりすんですけど、自分に正直になることが今いちばん大事かなと……」。飲みながらそんな事を語る南澤時正のことをこれからも信じて追い続けていきたいと思った。そんな一夜だった。

RR GOODS PRESENT

直筆サイン入りフォト

今回掲載のライブ写真6点にメンバーの直筆サインを入れて各1名様にプレゼントします。▶ハガキに左下の応募券を貼り、住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25ソニー・マガジンズ パチ▶ロク「スペシャル・グッズ・プレゼント」Z-B係へ送ってください。12月20日消印まで有効です。



PRESENT RR SPECIAL GOODS

スペシャル・グッズ プレゼント RR 1 Z-BACK

CDエイジのミュージック・マガジン

ワッツイン

WHAT's IN?

12月号 創刊5周年記念スーパー特大号

スペシャル増ページ 定価そのまま 290円(税込) 好評発売中!

FEATURING▶

永井真理子/CHAGE&ASKA
Dreams Come True
徳永英明/森高千里
工藤静香/大江千里

●スペシャル・セッション

小室哲哉(TMN)meets **キース・エマーソン**(EL&P)

●3号連続企画 中とじ保存版スペシャルBOOK②

X'masミュージック・ブック

[人気アーティスト50人のクリスマス読本]

▶**LINDBERG**のX'mas三段活用法

究極のコラム・マガジン

『スーパーコラム』第3号は
ロックの大特集!!

12月12日発売予定!!

A5判(文芸誌サイズ)/240ページ/予価1200円

●巻頭アーティスト特集/カルトに楽しむ

『アクセル・ローズの真実(笑)』

●評論家・ミュージシャンが選ぶ

『名盤・名曲100選』

●超保存版

『ロック・キーワード大全』

●幻と栄光の5年間

『1968〜1972年』

●著名人の新訳でおくる

『ロック・ソングブック』

●海賊盤の現場を徹底追跡——「すすめ!パイレーツ」

●懐かしや、ベイ・シティ・ローラーズ——美形ミュージシャンの系譜

●混迷する男女問題の真実を赤裸々に描く——週刊「ロック自身」

●ロック版『死者の書』●ネオ・アコースティックとは何か?●「ジャズもロックだ!」

●カバーか? 盗作か? etc.

怒濤の240ページ! ロックを愛する若者にお届けする 歳末記念・愛と幻想のロック大特集!!

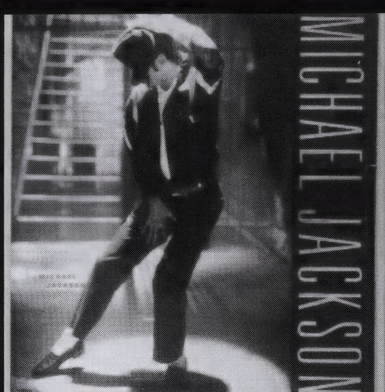
MICHAEL JACKSON

DANCING THE DREAM

[ダンシング・ザ・ドリーム]

マイケル・ジャクソン 著　湯川れい子 訳

152ページ/予価4200円(税込)/12月1日発売



12月来日記念出版

マイケル・ジャクソン自身の詩と写真、イラストを満載した『ダンシング・ザ・ドリーム』。マイケルの真実の祈りがこの本に込められている。乞御期待!

ROLLING STONES

STONE ALONE

[ストーン・アローン]

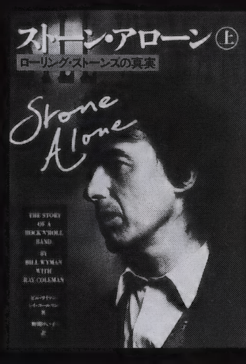
—ローリング・ストーンズの真実—

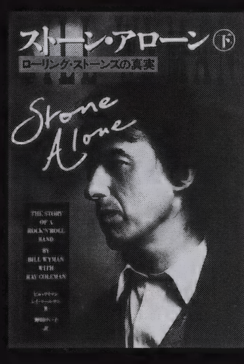
ビル・ワイマン 著　野間けい子 訳

A5判/400ページ/上・下巻各2800円(税込)

好評発売中

ローリング・ストーンズのオリジナル・メンバー、ビル・ワイマン自身の書いた決定版伝記。





ソニー・マガジンズ　〒102 東京都千代田区五番町6-2 TEL.03(3234)5811

NO VOTE, NO VOICE



Little Creatures

そのクオリティには定評が固いリトル・クリーチャーズ
英・米・日，3ケ国に離れながらも，アルバムは完成された。
"進化のために，ルーツをさかのぼる"という彼らの音楽は
単純にセンスというだけでなく，"志の高さ"まで感じられる。
「若年寄り」と呼ぶなかれ（笑）素直にGood Musicである!

Photography **Hirohiko"Charlie"Eguchi** Text **Kyoko Sano**

よりオリジナルなものに、惹かれるようになってきた
直接、ルーツに触れてそのパワーを取り込みたい

メンバーの3人中2人が留学中ではあるけれど，3枚目のアルバム「NO VOTE NO VOICE」を完成させてしまったリトル・クリーチャーズ。今回は青柳くんの留学先，イギリスでレコーディングを敢行。インストのジャジィなナンバーやトラッド色も出てきて，若いながらも渋い芯のある音楽性が開花したかのような仕上り。インタビューには一時帰国中の青柳くんと唯一の国内在住メンバー栗原くんが出席してくれた。

青柳「ロンドンではまかない付きのスタジオに住み込みでレコーディング。ミュージシャンの人材とエンジニアがやっぱりロンドンだと揃えやすいんで」

エンジニアはU2やエルビス・コステロを手掛けたケビン・キレンなる人物で，生音の録りかたには定評があるとか。

栗原「録った音を加工すると，どうしても自分達が欲しい音じゃなくなるんで，生音にはこだわりましたね」

以下，話は〝サウンド&レコーディング・マガジン〟化するので省略するが，彼らのデリケイトな音像が過不足なく発揮されている。

青柳「音楽の指向がまだ動いている時期だし，同じ所にはいられないみたいですね」

お互いに海を隔てて離れていても指向のベクトルは似ているのだとか。

青柳「各自がよりオリジナルな音楽（もの）に惹かれるようになってきたと思う。オリジナルをロンドンで加工して，それをまた東京で加工するとどんどん大元から音楽が離れていっちゃうでしょ。そうじゃなくて，直接ルーツ・ミュージックに触れて，そのパワーを取り込みたいという志向になってきた」

ロック／ポップ・ミュージックが加工と洗練の過程から進化または深化を遂げてきたことは明白ではあるけれど，彼らは進化のためにルーツを溯ろうとしているようだ。

青柳「そこにはワールド・ミュージックと呼ばれるものも入ってくるけど，情報を集めるんだったら東京は世界一便利かもしれない。ただ，リーズ（イギリス）ではいろんな人種の人達がいたから視野が広がったと思う」

ルーツ・ミュージックを聴きながらも最新の音楽が自然と耳に入ってくるような環境。それこそアンビエント・ハウスもブラジル音楽も同次元にとらえることができるのが東京を含めた今の都市の音楽環境といえる。かといって，イギリスに留学したからって，今様の流行りの音に彼らは様変りすることもない。むしろ，青柳くんが次に行きたいのはニューオリンズだということからも，〝ルーツ発見の旅〟はこれからが面白くなりそうな予感。

栗原「前はよくロンドンっぽい音だっていわれたけど，それってイメージだけだと思う」

〝イカ天〟に出場したのが高校生のとき。今やっと21歳という若さ。けれど，その若い芽はブームの嵐を回避してすくすく発育の盛り。

青柳「消耗してしまうことを恐れてた。デビューした後このままこの業界にいたら，そう長くはないと思った」

栗原「焦りがないと言えば嘘になるけど，2人が留学しても悪い方向には変わらないだろうと。プラスにはなっても」

ボストンのバークレイ音楽院に留学中の鈴木くんを含めたこの3人の付き合いはもう9年来にもなるという。

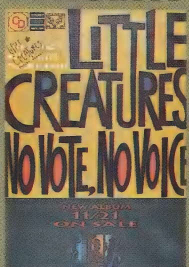
栗原「音楽や考え方もみんなで少しずつ成長していったし，離れてみて再確認したところは大きかったですね」

青柳「イギリスでいろんな奴と会ったけど，センスの面でスゴイなと思える奴はいなかった。この2人のほうが刺激がある」

東京は確かに刺激はある。けれど「音楽が物になっている気がする」と青柳くん。それぞれが探究肌のミュージシャンだから，私なぞむしろ今後彼らがどんな音楽を吸収し，作っていくのかがすごく楽しみだ。しかも，世界行脚も厭わぬ覚悟が頼もしいではないか。

青柳「ジャズは一生ものとして，その土地からなぜそういう音楽が生まれたのかを知りたいですね。ミュージシャンとしてというより一個人として。自分の可能性をまだ決めつけたくないし，自分を試してみたいんですよ」

RR GOODS PRESENT



サイン&イラスト付きポスターを5名様に。官製ハガキに応募券貼って〒156-91世田谷区千歳郵便局私書箱25号　ソニー・マガジンズパチロクリトクリプレゼント係まで。締め切りは12月20日消印有効です。デザイン渋いっス。

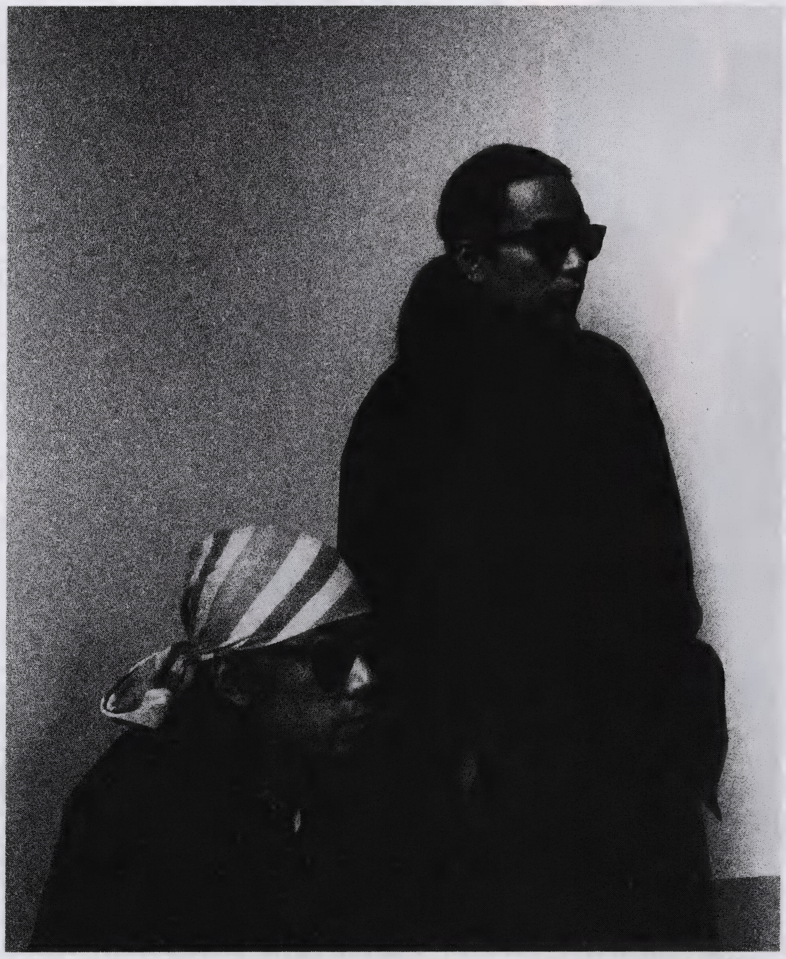
リトクリ・ライブ情報→来日公演のお知らせです（笑）。1月9日渋谷ON AIR　夜6時オープン　7時DJ　7時30分スタート。チケットぴあ／セゾンで発売中！　めったに観られないので要チェックね。

スペシャル・グッズプレゼント
RR 1
Little Creatures

NOBODY

BAD RHYME

今年10年目を迎える彼ら。言わずと知れた「さよならは8月のララバイ」「六本木心中」などを作った才能ありまくりの人たちなのだが，今度世界デビューするとか。世界デビューって，そんなに簡単にできるもんじゃない。そのへんをインタビュー。



10年選手の貫禄は黙っていても周囲を敬礼させる。トレードマークのサングラスに渋い風貌，渋い声。本物のロックをやり続けてきたという説得力が両氏の身体に染みついているかのようだ。相沢行夫，木原敏雄のコンビは多くのヒット・メイカーとして，さらに古くは「ゴールド・ラッシュ」時代の矢沢永吉のメンバーとして活躍した頃から端を発する。バンド NOBODY としても既に10年。これまで出したアルバムも12枚。今さら説明するまでもないだろう。

そんな両氏が今回，「BAD RHYME Ⅰ」「BAD RHYME Ⅱ」という全曲英語詞と全曲日本語詞で構成された2枚組オリジナル・アルバムを発表した。英語詞の方の「BAD RHYME Ⅰ」は来春には全世界発売（なんと40カ国以上だよ！）も決定しているという。英国の WEA レコードの本社から話が持ち上がったんだそうだ。スケールでかいぜマッタク。というわけで今回お初にお目にかかった NOBODY だったが，硬派な風貌とは裏腹にくつろがせてくれる自然体な人達。（それをいいことにケーキまで食べてしまった我々。彼らはビールを飲んでいらっしゃいました）決して自分達のキャリアにあぐらをかいたりしない……だから NOBADY の音楽が常に鋭く尖った新鮮さを保ち続けられるわけだな。と，妙に両氏の人柄に感銘させられたり。以下はそんな両氏の発言の一部であります。

木原「元々は日本語のだけのつもりで，6月発売の予定で作ってたんです。それがレコード会社の事情で4カ月遅らせることになった。で思い切り時間も空いちゃったんで英語のもやってみようかと4曲録ったんですよ。いつもそうだけど1枚作り終わった時っていろいろ反省が出てきて，それを次のアルバムに反映させることになる。ここを押し進めれば良かったなとかね。今回の日本語のってバリエーションがあって，ソリッドでハードなものからミディアムの少し柔らかいものまで入っているんだけど，じゃあ次は今感じてるオレ達のソリッドな部分を思いっ切りやってみよう，と数曲，英語の方に取り掛かったんです。そしたら評判が良くて WEA の本社から話がきたという」

相沢「だから作る時に世界進出なんて意識もなかったんです。ただ英語はオレ達1枚目は全曲，2枚目も半分そうだったし，曲作る時もいつも全部英語だし，普通の感覚なんですね。中学の頃からずっと聴いてきたのも洋楽だったし。ドメスティックな感覚が元々あまりないというか。別に気取ってるわけじゃなくて」

木原「日本語しか話せないくせにね。（笑）だから世界っても，別に日本人らしさとかは全然感じてもらわなくて結構だし，何人（なにじん）と思われてもいいと思ってる。その辺 NOBODY って名前と合ってるんじゃないかな？」

相沢「ま，世界ツアーってことになったら MC 喋んなきゃいいんだけで。（笑）まだ具体的にはツアーなんて考えてませんけど，イギリスあたりで地味にパブを回るってのとかは自分達に合ってるかなとは思いますね。だけど単に発売されるってだけだし。どうなることやら」

——詞の内容は？

相沢「日本語の方と落差はないです。いちおう友達に英詞を付けてもらってるけど綿密に打ち合わせしてるから。多少，社会批判なんかを織り込んだ曲も多いかな」

木原「〝SUCH A SHAM〟って曲は，SHAM ってのがまやかしでね。世の中まやかしが多いんじゃないか，と歌ってる」

相沢「日本語の方の〝BLACK HOLE LAND〟って曲も，これを作ったのは今年の夏頃だったんで共和汚職を歌ってたんだけど，お陰様で佐川急便というまた新しいテーマでも聴けるようになって」（笑）

木原「なんかいつでもあるよね，日本は…」

相沢「定期的にね，あーゆー汚いことって」

木原「あとオレ達結構，現実逃避も多くない？」

相沢「今の世の中を2人だけでフール・オン・ザ・ヒル（ビートルズの名曲）じゃないけど，ちょっと遠くから見てるって感じでね。だから他のアーティストなんかはどっちかというと男女関係の歌とか多いけど，僕らは少ないかも知れませんね」

——サウンドについては？

木原「1～2枚目の頃のように今回はベースも自分達で録ったんですよ。ギタリストが弾くベース，というインチキ具合が適度にいいなと思って。片方が歌う時は片方がベース。ベースで歌うってできないから，歌う人がギターで。そこにドラムを入れて3人で，イキのいいところをスパッと録った。今回は結局キーボードも全然入らなかったし」

相沢「いたずらに音を厚くしたくなかったんですよ。だからコーラスも入れない曲があったし」

——ギター・サウンドにこだわってるぞと。

木原「そして，ロックにね」

RR GOODS PRESENT

RR SPECIAL GOODS PRESENT R²



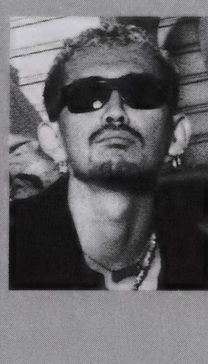
ZIPPOのライターです。さすがに本物は違う，ってとこでしょうか。これを5名に。官製ハガキに応募券を貼って〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ㈱ソニー・マガジンズ パチロクスペシャルプレゼント NOBODY 係まで。締切りは12月20日消印有効です。彼氏へのプレゼントにしてもいいかもね。

「世界といっても日本人らしさとか感じてもらわなくても，何人と思われてもいい。NOBODY って名前と合ってるんじゃない？」（木原）「ツアーってことになったら MC しなきゃいい（笑）」（相沢）

Photography **Masaaki Mochida** Text **Masako Miura**

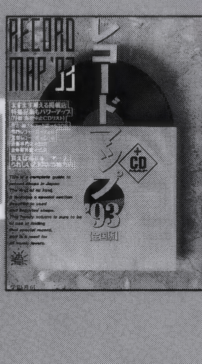
NEWS BEAT

●CRAZY・A



初めて聞く人もいると思うので，まずはプロフィールから。82年，原宿ホコ天でブレイク・ダンスチームを結成。89年，ZOOのオリジナル・メンバーとして活躍，テレビ出演など多々あり。91年，ファイルレコード企画のイベント〝WATCH ME！〟にレギュラー出演。そして92年アルバム『PLEASE』でデビュー。BGBの「WON'T BE LONG」含む，メロウ&ハードのヒップ・ホップ・ナンバーがずらり。

●レコードマップ'93



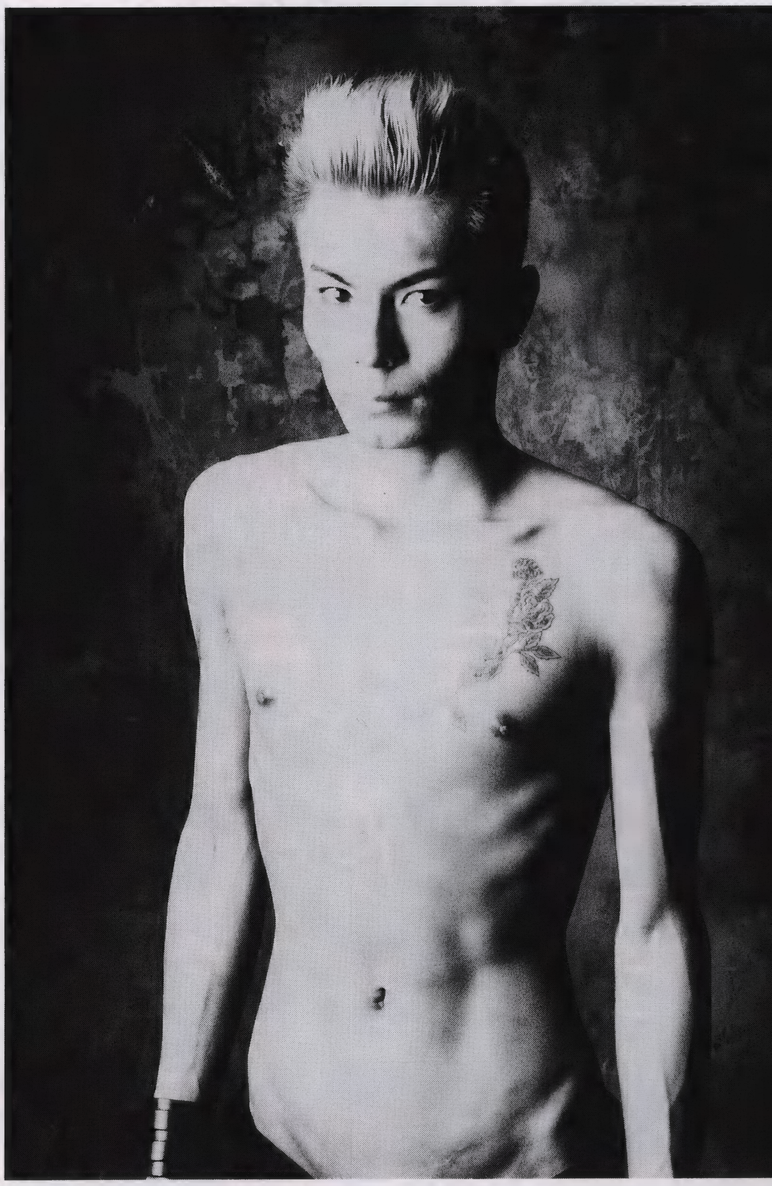
ヤァ，今年もやってまいりました〝レコードマップ'93〟のご案内。なんたって掲載レコード店が中古・輸入盤店⇩530店，専門店⇩72店，大型店⇩60店，通販店⇩31店，音楽資料館⇩16店という充実ぶり。Oh！ イックレイジ～。こりゃ編集がさぞかし大変だったことだろうよ。学陽書房エライ。お値段1280円ポッキリ。

ますます塩化ビニールが貴重な今日この頃，DJ野郎にも重宝なこの一冊。これからはジャーズ（⇧笑トホホ）！

スペシャル・グッズ プレゼント RR 1 NOBODY

DEEP'S

SETSUNA AIZAWA



混沌とした日本の音楽シーンに突如現われた気鋭のニュー・カマー。
DEEP'Sの威光とサウンドは,「近未来」と「普偏」の臭いがプンプンだ。
あくまでリアルに，そしてミステリアスに接近してきたこのアーティスを,
我々は無視することも，回避することも不可能にちがいない。

Photography **Taishin Aoki** Text **Satoru Kanai**
Hair&Make up **Kohki Taishima**

自分と共感してくれるヤツ、関わってくれる連中すべてがメンバーみたいなものです。

日本のロックシーンに，新たなクリエイターが誕生した。その名はDEEP'S(ディープス)。藍澤殺那を中心としたアウトサイダーの集合体として12月16日，ミニアルバム「Deep'S IS DEAD」をリリースする。スリムな姿態に鋭い眼光，そしてそのサウンドはサイコビリーからパンク，メタル，デステクノなど，ありとあらゆる音楽の要素を詰め込んだ〝クロスオーバービート〟を志向しているとか。そこでDEEP'Sを率いる藍澤に第一種接近遭遇を試みてみた。

☆

――パチ▶ロク初登場ということで，最初に自己紹介をお願いします。

藍澤「中学生のころからインディーズで京都や大阪のライヴハウスで活動してました。それから6年前に上京して，3年ぐらい前に〝MAGIER SEXUALIS〟っていうバンドを結成した後、今に至りました」

――インディーズのころはパンクバンドだったそうですけど，具体的にどんなスタイルのモノ？

藍澤「パンクってそれぞれの価値観があって，初期パンクにも影響を受けましたけど，僕にとってはもっと精神的なモノで。それこそ打ち込みパンクっぽいのも演ってたし」

――最初にDEEP'Sを聴いたときにね，本当に幅広いというか，もちろんパンクの要素もあればサイコビリーもハードコアテクノもあるし，ボーカルはむしろハードロックに近いかな？ なんて思いましたけど。

藍澤「音楽のジャンルには全然こだわりがないですね。僕はアーティスト・ミーハーな部分というのが皆無で，本当に曲を重視して聴いてますから。曲そのものとか，あと歌詞とか生き方の部分で共感するみたいな。例えば音楽じゃないですけどジェームス・ディーンは大好きですし」

――じゃあ，そういった生き様みたいなのを表現しようとすると，ああいうバラエティに富んだサウンドが必要になった？

藍澤「極端なことを言ってしまうと，音楽って言うよりもまず第一に生き方とかスタイルの方が大切なんです。それが上手く音楽に反映できるのなら手段を選ばないというか。例えばマンチェ系の音楽が好きだったら，メンバーがそのフォーマットに合わせるじゃないですか，クラバーのカッコしたり，それっぽい編成で音的なスタイルも同じにして。僕の場合は，僕のような太く短く生きたいと思ってる奴が演る音楽というのはどういうものができるのかという。とにかくDEEP'Sは，自分と共感してくれるヤツとか，自分に関わってくれる連中すべてがメンバーみたいなものがありますね」

――好きな曲になるポイントって誰にでもあると思うけど，藍澤さんの場合はどのへんにまず興味を持ちますか？

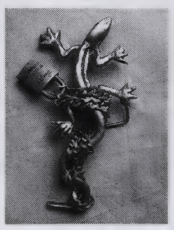
藍澤「欲張りなのかもしれないですけど，例えばテクノ系ならシンセのカッコ良さとか，サイコビリーならベースがすごい好きなんですよ。ボーカルものを聴くんだったら，歌謡曲がいちばん完成度が高いし。僕の一番の原点は〝絞れない〟っていうところにあるんじゃないですか。あえて好きになるポイントを挙げるのなら暴力的でワイセツでクールなものですね。これが柱になってます」

――今までバンドを組んでた人が一人で打ち込みスタイルを導入して演ろうと思ったの？

藍澤「バンドを演ってたとき，けっこう僕ってワガママだったんですよ。(笑)自分が演りたいことがあっても再現できないこともあったんで。だから自分で納得できるモノを作るんだったら，いっそのこと自分で全部演ってしまえと思って。もちろん，打ち込みスタイルにも全然こだわりがないです」

――将来的に，何か目標があれば教えてください。

藍澤「とにかくライブを演りたいですね。そんな意味も含めて，やっぱり将来的にはバンド形態にしたい。あと同性，つまり男の人に共感を得られたら嬉しいです」

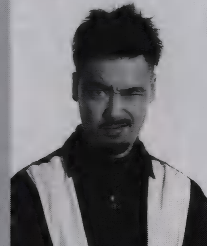


RR▶GOODS PRESENT

SPECIAL GOODS

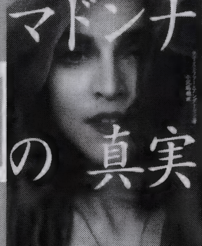
藍澤殺那本人からいただいたチェーン・ネックレスと，バックルにサインを入れて各1名様に。ハガキに左下の応募券を貼り，住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上，〒102 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ソニー・マガジンズ「パチ▶ロクDEEP'Sグッズ」係へ送ってください。12月20日消印まで有効です。待ってるぜっ!!

NEWS BEAT



●JAZZY UPPER CUT

下山淳ら60／40やGLASSのワールド・パーティーが、総合インディ・レーベル、PSYCHOを結成。9月20日に60／40が、10月5日にはGLASSのアルバムがリリースされた。今後も、藤沼伸一など、続々とリリースされる。そして、JAZZY UPPER CUTも、来年4月20日にアルバムをリリースする予定。また、12月26日には、DJのKRUSH、ゲストにGAS BOYSを迎え、渋谷クラブクアトロでライブをやることも決定している。圧倒的なライブ・パフォーマンスで定評のある彼ら。これは見逃せない！



●マドンナ

超過激写真集の輸入の是非について話題をふりまいているマドンナだが、11月12日、福武書店から『マドンナの真実』という'91年アメリカで大ベストセラーになった翻訳本が出版される。内容的には500人の証言に基づき、事実のみに信をおくものになっている。間違いなく80年代を代表するスーパースターであり、90年代も話題を提供してくれるであろうマドンナ。その生き様にはやはり興味が尽きない。定価￥2，300。

16tons get one's skates on!!

「自信満々，恐いものはない（井上）」という久しぶりのニュー・アルバム完成
より自由なアプローチによる「正体はギターバンド」的'90年型サーフ・ロック!?
「恐いのはチューニングが狂うことぐらいかな（JAKE）」←オイオイ（笑）
ともかく，全世界規模の精神病に挑む16TONSの『SKATERS WALTZ』GO/

Photography **Mori-Q** Text **Misato Konda**

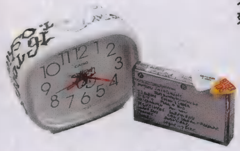


16TONS流サーフ・ロック。ニュー・アルバム『SKATERS WALTS』は，「デジタル＝時代の音」という彼らのアプローチが効を奏し，奥行きのあるサウンドに仕上がった。それまでなんとなく付いてまわっていた〝アコースティック・バンドとしての16TONS〟との偏見は，この一枚で完全に払拭されたといえるだろう。

※

——アルバムを作るにあたって，まず，どんなことを話し合ったんでしょうか。
井上　的を絞ろうっていうか，幹を作ろうって。今までは枝はいっぱい生えてたんだけど幹がなかったからね。で，そこから曲を集めていったと。
——かなりデジタル寄りのサウンドですけど。
井上　最初の時点では踏ん切りがつかなかったのね。アコースティックに行こうか，デジタルな方に行こうかって結構悩んだ。悩んだ結果，思い切ってやってしまおうってことで，こうなりました。でも，おかげでより自由なアプローチができるようになったかな。アコースティックに縛られることがなくなったし。
荒木　選択の一部として，まだアコースティックは残ってるけどね。
井上　そう。だから，一番いいアコースティックのアプローチができるようになった。必要なら使うっていう素直な感覚でやれたし。
——デジタルなものに惹かれる理由は？
井上　時代の音だから。でも，デジタルでもまだ遅いかもしれない。
——サーフ・ロックを取り上げてますけど，その魅力とは何でしょう。
井上　起爆力と16ビートじゃないってこと。あと，パンクのサウンド的アプローチの根源であり，ガレージ・サウンドの根源であるってこと。例えば，ラモーンズもビーチ・ボーイズなしでは語れないしさ。ルーツのルーツに戻ってるっていう。それを90年代にどう聴かせるかっていうのが，今回のアルバムの核ではあるんですけど。
——今回のレコーディングに関して，それぞれどんなことを考えてたんでしょーか。
押田　自分らしくやろうと。なんとかっぽくやろうと思っても，自分のプレイはプレイだからね。
井上　僕が押田に対して思ったのは，素直にプレイしてほしいってことでしたね。リズム隊で雰囲気出ちゃうんで，押田の味とJAKEの味をリズムトラックでガーンと出したいっていうのがあったんで。そういう意味じゃ自由に叩いてたと思う。
JAKE　リズムトラックとか，今までの中で一番ヘタに聞こえる（笑）。ミックスの仕方もあるけど，今回は実力以上のものを録ってないからね。そこを逆手にとって，自然なノリが出てていいんじゃないかと思う。
荒木　俺は今回，久し振りにギタリストに戻った（笑）。
井上　今までアレンジャー的要素が強かったからね，ケンちゃんは。
荒木　うん。いろんなとこに目を向けてたからね。それが今回はギターに集中できた。
井上　そのへんの感じ，出てるよね。俺も今までで一番そういう意識は強かった。だからTONSの正体はギター・バンドだと（笑）。
荒木　何気にギタリストの我のぶつかり合いとかも出てるしね，おもしろいよね。
——詞を見ると，サイバーパンク的というか近未来的な感じがしたんですけど。
井上　未知なるものへの興味っていうかね。でも，世の中も超能力とか，そういった未知なるものに救いを求めてるよね。テレビとかそういう番組多いし。だから，幻想的なものを書いてるつもりでも，逆に現実的なのかもしれない。
——不安感みたいなものも強く出てるよね。
井上　不安は感じるなあ，俺は。みんなそうだと思うよ。だって，セックスすること自体に不安があるわけじゃん？　セックスするだけで死んじゃうかもしれないんだよ？　それって人間を信じられなくなっちゃうようなことだしさ，エイズが克服されない限り，不安は続くと思うよ。

RR GOODS PRESENT



押田君→時計／井上君ケンちゃん→ピック／JAKE→自選曲カセット

16TONSからは超豪華品!!応募券を貼って〒156－91世田谷区千歳郵便局私書箱25号ソニー・マガジンズパチロクTONS係まで。締め切り12月20日消印有効

NEWS BEAT

●えび



結成4周年を間近にひかえ、第1期えびは終わりを告げ、第2期えびがスタートする。その第1期終了のセレモニーが今終わった。
華丸のプチ切れたおたけびで始まったこの儀式は、自分でも「どうかなってしまうのでは」というほどのハイテンションで行われた。機関銃のような選曲、全く息をつかせない構成、ステージ上も客席もクル2パー状態、まさしくそれは第1期えびの「勢いのみでつっぱしれ」戦法にふさわしい最後であった。
そして今日、小五郎が去っていく。明日のことを気にして、いつもおびえているぼくにとって、むこうみずで自信家の彼はある種の憧れであった。最も身近なMr.R&Rだ。彼はやはりそのキャラクターのとおり、あっさりとえびを去り、自分のバンドをつくると言う。やるからにはがんばってほしい。彼に送る言葉はそれだけだ。
華丸、TSURU、そしてぼく。これからは3人で爆進だ。勢いプラスアルファの第2期えびは11月22日、代々木チョコレートシティから始まる。まず初心にかえる。そして、偉大なる歴史をつくっていくつもりだ。我々の気合はビッグバン前夜のようににえたぎっている。みんなの一撃を待ってるぜ。
追伸：ぼくは今CMのナレーションをやっています。キリンウーロン茶、トヨタの日、東海銀行イバリ犬、ニッセキハウス、ソニー8ミリビデオなど。もし見たら「なるほどねー」とつぶやいてみてください。よろしく。
（加藤健）



「暇な一日送ってると、老後みたいだな〜と思って」倉持
「体力のピークを過ぎたっていうのが、デカイ(笑)」桜井

the 真心ブラザーズ

善意の第三者

コーサクスルロージントコドモノキモチ

**お待たせ！ 真心のニュー・アルバムの登場であります
ライブでお馴染みの曲チラホラで，全14曲⇨お得!!
桜井君遅刻のため，インタビューは別々になっちゃったけど，あんま気にしないでね〜♪
のっけから老が炸裂，その名も『善意の第三者』（意味深）**

Photography **Mori-Q** Text **Misato Konda**

「耄碌はやってくる」「老後」「ねたきり老人」「92歳のおじいさん」と，老人４連発から始まる４作目。

「それはキツイだろって意見もあったけど(笑)桜井が「一曲一曲味が違うから大丈夫だ」って言うからさ，いいかなって思って」

「耄碌〜」は桜井君の曲だが，残り３曲は倉持君の作品。「もともと俺がおじいちゃん子だという，人格形成における根源的な性が出てきただけですよ」と説明されちゃあ納得せざるをえないけれど，ホントにそれだけかあ。

「ヒマな一日を過ごしてると，老後みたいだなと思って。「老後」の中に“今でも老後だよ”っていうフレーズがあるけど，そんな感じがしたの。忙しい時は思わないんだけど，ヒマな時に。年金どうしようかな，とか」

24歳にしておくには惜しいほどジジむさい考え方である。ちなみに「ねたきり老人」では，「どんなふうになっても生きるんだ！という生きる力」を表現し，「92歳〜」では自分のおじいちゃんをモデルに，ほのぼのとした日常のひとコマを描いている。「俺のおじいさん，元気なんだよ。100まで生きるって言ってタバコやめようかな，だって」——ええ話や。

さて，そうかと思うと，郷愁を誘うスタンダードな曲も，しっかりいい味をだしている。

「あんまり個人くさくない，普遍的な歌詞を書きたいっていうのがあって。輪廻とかね

風の音　土の匂い　ゆるやかな陽差し
ずっと遠くまで　いろいろ忘れて続くよ
さまよう　さまよう　旅の夢
ただよう　ただよう　旅の夢
（「旅の夢」より）

こんなフレーズが出てくるなんて，倉持君の新境地開拓ってところだろーか。他には「幼児虐待をテーマにした」歌もあり，なんの統一性もない曲作りは，なかなか興味深い。

「オムニバスみたいだな，確かに（笑）でもいいと思った曲を入れたら，こうなっただけ。あとはもう，詩的テクニックとか関係ないと思うわけ。言いたいことがあったらバーンといかなきゃダメなんだよ。絶対」

ルー大柴か，キミは。

レコーディングではアレンジャー的な立場にいる桜井君。「でもね，アレンジなんかどうでもいいんだよ，実は。ようするに服みたいなもんだから，歌さえしっかりしていれば」

だが，そういうわりには「老後」では雅楽を織り込み，「のこりカス No 5」では山下洋輔ニュートリオを迎えてジャズ的アプローチを試み，「毎日」では何を思ったのか強引にブレイクビーツを取り入れたりと，今までにない攻めの姿勢がうかがえる。

「ブレイクビーツのやつはカンベンして(笑)あれはシャレでやったつもりなんだけど，なんか冗談に聴こえなくて（笑）だからあれは右に振るとフォークの弾き語り，左に振ると♪ジュリアナ〜〜〜♪になるという（笑）細かい配慮してるんだよ」

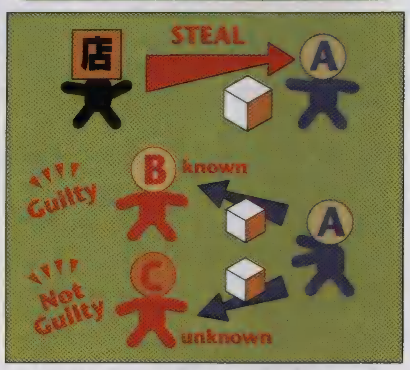
ストレートな面もある反面，こうした遊び心いっぱいの曲が目立つため，かなり雑多な印象を受けないでもない。

「作った方としては，一枚のアルバムとして聴いてほしいけどね。段落作って並べたって感じで作ったつもりだし。アレンジとかミックスのせいで，企画物っぽく思われてもしょうがないかなっていうのはある。それは少しふざけすぎたから。ていうか，スタジオで「これ面白いじゃん」って笑いながらやってることが，そのまんま出ちゃったっていうところがあるからさ。それを聴く人が「カッコイイ」って思うレベルにまで持っていくには，僕たちはまだ若いと（笑）」

今回桜井君が書いた曲は４つ。「真夏といえども」では「小さな幸せでも，ちゃんと感動できる心を持っとかなきゃね」と歌い，「死にゃあしない」では「ただ生きてるっていうことへの感動」を新しいメッセージ・ソングとして提示し(笑)，「耄碌はやってくる」では「おっさんに嫌悪感ではなく親近感を覚えるようになった自分」をモデルにし，「のこりカス No 5」では「クラーい気持ち」を表現した。

「今回のテーマとしては，体力のピークを過ぎたっていうのがデカイ。もうパンクじゃいられない自分っていうか（笑）かといってオトナじゃない。だから，少年とジジイの間を揺れ動く男心を歌ってみました，と（笑）」

ミニ・解説　善意の第三者とは



「善意」＝法律用語としては問題となる事情が存在する事を知らないでする行為者の意志。
例えば Ａという人が店から商品を盗んだとする⇨その商品を Ａは Ｂと Ｃに売ったとする⇨ Ｂは商品が盗品であることを知っていた。Ｃは盗品であることを知らなかった⇨この場合，Ｂは有罪となり，Ｃは無罪となる。Ｃは“善意の第三者”である，と，いうこと，らしい。よくわからないが……多分ね。

NEWS BEAT

●NEW ROTEeKA

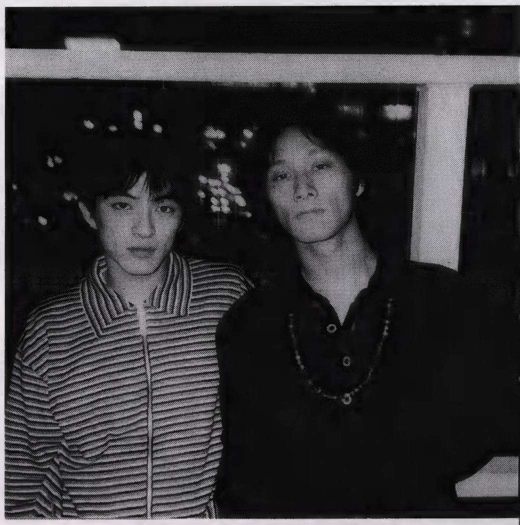
“全国ライブハウス10000人斬りシリーズ”も今年の8月に達成。“ロフト10000人斬り”も，12月の4DAYSでファイナルを迎えることとあいなりました。その目標達成を記念してキャプテン時代の音源全てに未発表曲をプラスして3月21日にベスト盤をリリースすることになりました。インディーズ時代のものということもあり，ファンにも参加してもらおうという彼らしいアイデアから，ジャケット・イラストを一般公募することになりました。プロ，アマ，年齢，性別一切問いません。B3サイズの大きさなら紙質はどんなものでもOK。水彩でもコンピューターグラフィックでもなんでもかまいません。イラストの中にアルバムタイトル『ニューロティカ』とバンド名は必ず入れて下さい。締め切りは1月10日必着。採用された方には謝礼とおめでとうの言葉をプレゼント。注意事項としては，1人何点でも応募可能。未発表の物に限ります。応募作品は返却できません。もっと詳しいことを知りたい人は03（3584）8305〜6まで。応募の宛先は〒107−11 東京都赤坂4−14−14 ㈱日本コロムビア「ニューロティカのジャケットだよん」係まで。

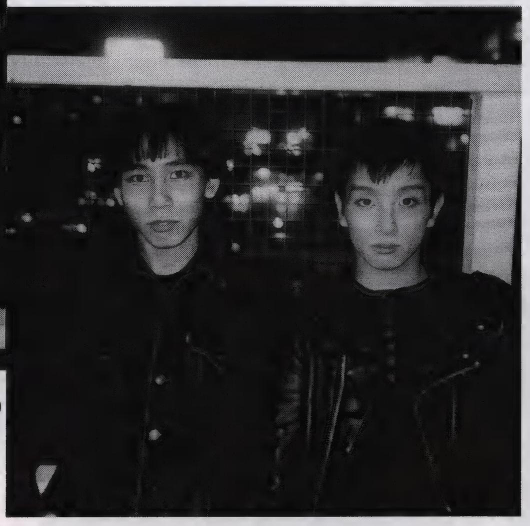
●花田裕之

もはや「元ザ・ルースターズ」という冠頭も「何をいまさら」というくらいに感じられるほど，独自の音楽を切り開いてゆく花田裕之。どうやらソロ・アルバムの第2弾が発表されそうだ。

東京録音，サンフランシスコ・トラック・ダウンの作品は，花田自身のプロデュースによるというから，相当個性の強いものになりそう。ゲストにいまみちともたか（exバービーボーイズ）をむかえているところをみると，ギター・サウンドが全面に出るのか？

うまくいけば年内シングル，来年早々にアルバムが聴ける。乞う御期待。





L to R ⇒ Eiji Sugiura(Vo.G) Yasunori Okuno(B) Tomoya Tsutsui(G) Harushige Maruyama(D)

The electric glass balloon

Le Grand Chaier

いよいよ寒くなってまいりました。こんな毎日は，表の喧騒をはなれて一人読書、なんつーのもオツなもんです。と，いうわけで，今月はエレクトリックスのアンファン・テリブル Vo.&G の杉浦君をむかえて絶対推薦図書 6 連発だ。さぁ今すぐ本屋さんへ走れ!

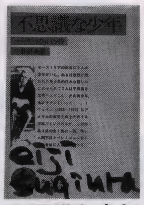
杉浦君からのプレゼント⇩「感想文送ってくれたら嬉しい」とのこと。サイン入りを一名様。〒156-91世田谷区千歳郵便局私書箱25号　ソニー・マガジンズパチロク egb プレゼント係まで。締切り12月20日消印有効

「ボクが出会う人々や物事は，ボクがそれを必要だと思う欲求が生み出した幻にすぎない。世界の全てはボクの想像がつくりだしたもの。過去も歴史も，何もかもボクの頭の中だけの出来事なんだ」

高3の時ぐらいに，そんな風に考え始めたんですよ。で，ある芝居をやっている人と飲みにいった時にそのことを話したら「オマエ，あれ読んだんだろ」って言われて。その「あれ」っていうのが『不思議な少年』だったんです。

驚きましたよ。特に，最後の3ページ辺りを読んだ時にはゾッとした。「ボクとまったく同じことを考えているひとがいた！」　この本で人生観が変わった，というより確立しました。

やっぱりNo.1。金字塔です。これほど凄い本は，今までなかったな。



不思議な少年
マーク・トウェイン
岩波文庫

平和なオーストリアの田舎――ぼくたちの村は退屈だが信仰にあふれていた。そこへある日忽然と現われた不思議な美少年。彼はさまざまな魔法と巧みなお喋りで，村に混乱と狂騒をもたらす。「すべてはありもしない幻だよ」――その美少年の名前はサタンといった。

はっきり言って前半はかったるかったなー。でも，後半はどんどん飛ばせるようになってきます。

最初ビリーは凄く弱い存在。でも，24の人格がひとつに統一されて“教師”と呼ばれるビリーになると，話がめちゃめちゃカッコイイんですよ。

(人格の内のひとつの)レイゲンは怒りと憎悪の感情を管理し，アドレナリンの分泌を自由にコントロールする。電気関係の管理者トミー（これも人格のひとつ）は，電動カミソリに細工をして性的暴力を受けた継父に復讐をはたす。そういった生い立ちが明らかになっていくんですよ。背筋にクルよ（笑)。

最近キョン²とかが出た多重人格のTVドラマあったでしょ？　あれ観て喜んでる人はこれ読んで戦慄すべきですね。



24人のビリー・ミリガン
ダニエル・キイス
早川書房

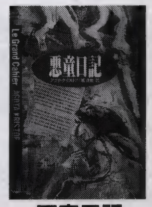
連続強盗・レイプ事件の容疑者として逮捕されたウィリアム・ミリガン。事件はあっさり解決するかに思われたが，やがてミリガンの“中”に国籍，年齢，性別，知能の異なる24もの人格の存在が明らかになる。彼らはなぜ生まれたのか？多重人格者は有罪か無罪か。

この本はねー，ビックリしましたよ。ここんとこ読んだ中では1番のヒットかな。もう，めちゃめちゃクールなんですよ。主人公が双子の兄弟なんだけど，これが“感情”とか“良心”を切り捨てて平然と生きてゆく。でも，それがいちいち正しい行動だったりするんだな。

言葉もね，凄くカッコイイ。まず固有名詞がでてこない。自分達のことを言うときも「ぼくらが言う」「ぼくらのうちの一人が……」って具合。終始同じテンポでクールさが徹底してる。

これシリーズで全3巻なんです。で，2冊目までは凄いカッコイイんだけど，3冊目はねー，読まなきゃよかった(笑)。

もう二人がジジィになってて。年取るとダメだ。だからボク、30になったら音楽やめようかなと，最近思ってます。



悪童日記
アゴタ・クリストフ
早川書房

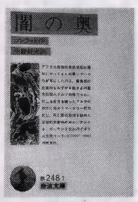
戦時下，双子の“ぼくら”は魔女と呼ばれるおばあちゃんの家に疎開してくる。荒廃した周囲の環境に適応するため、“ぼくら”はいろいろな訓練をしてゆき，その様子を大きなノートに書き留めることにした。やがて戦争は終わり，お父さんと再会を果たしたが……。

これ，お父さんの本なんですよ。最近ボクの歌詞読んで「お前，これ絶対好きだろ」って貸してくれた。父さんめちゃくちゃ本も映画も観る人で，『地獄の黙示録』も何回も連れてってくれたし，公開リアルタイムで『時計じかけのオレンジ』観れたのはラッキーだったなー。

こないだまでインド行ってて，香港でお母さんとデートして，今は中国のどっかにいる(笑)。凄ェ自由に生きてる人ですよ。

映画と原作では，これに関しては映画のが良かった。でもスピード感とか思想面とかでは，ケルアックの『路上』なんかよりぜんぜん上だと思ってます。

ボクの好きな本には，必ず醒めた人物が出てくるんですよ。世界には醒めてないと分からないことも，絶対ある。



ハート・オブ・ダークネス
ジョーゼフ・コンラッド
岩波文庫版

邦題『闇の奥』。F.コッポラ監督『地獄の黙示録』の原作。60年代ヒッピーのカルト本。――象牙採集会社に就職し，アフリカの奥地へやってきた船乗りマーロウ。任務は音信を絶った腕利きの社員クルツの救出である。行く手に待ち受けるジャングルの闇と恐怖。

この本はねぇ，台詞が凄い好き。

ジョバンニが牛乳屋さんにもう少ししてから来てくれって言われたときの返事が「そうですか。ではありがとう」っていうんだけど，「ではありがとう」なんて普通言わないよー。他にも「ああぼくはきっとそうします」とか「ぼくはもう，すっかり天の野原に来た」とか，いちいち台詞がめちゃめちゃ気に入ってる。

言葉遣いが必要以上に紳士的なのがかえってクールで，その辺は『悪童日記』に同じと思う。列車の中のカンパネルラが一瞬の幻だったところは『不思議な少年』に通じるかなー。

小学校ンとき読んで，何か感じるじゃない。で，中学で読んで今度は違った感じかたをする。その時々で違った感じ方ができるのは，音楽と一緒ですね。



銀河鉄道の夜
宮沢賢治
角川文庫版

年に一度の星祭りの夜。広場に集まる楽しそうなみんなをよそに，ジョバンニはお母さんのミルクをもらいにでかけた。途中，天気輪の柱の下で休んでいると，いつの間にか銀河を走る列車の中にいる自分をみつける。隣には友だちのカンパネルラが静かに座っていた。

これ読んで面白いなと思ったのは「自殺と他殺のちがい」について書いてるところかな。

例えば「中小企業の社長が借金で首が回らなくなり自殺した」とか，「恋人にふられた青年が悲嘆のあまり自殺した」なんていうのは自殺じゃないんだって。それは実は「資本主義構造」や「恋人」に殺された「他殺」だっていうんだな。

こんなこと，思いついても文章に出来るなんて凄ェよ（笑)。

ボクがここに挙げた6冊は，一見バラバラに見えるけど，感じ方は同じなんですよ。例えば，良い音楽だと感じるのには一貫性があるよね。めちゃめちゃポップで狂ってるとか。本もそれと同じ。

あとこの本，いろんな“自殺機械”のイラストなんか載ってて，面白いです。



青少年のための自殺学入門
寺山修司
土曜美術社

詩人，歌人，小説家，劇団主催者，脚本家，写真家，映画監督，競馬ファン，ボクシングファン etc.さまざまな顔をもって70年代青年の精神的カリスマを生きた寺山修司。「少年時代の私は自殺機械をつくるのに熱中していた。」――死への憧憬に満ちたエッセイ集。

NEWS BEAT

●ハッピーアワークリスマス



さてさてこの時期になるといやがおうでも目につく，耳に入るクリスマスアルバムです。入ってる曲は定番モノの「ジングルベル」「赤鼻のトナカイ」などに加え、モータウンの名曲も紛れ込んでます。もちろん，オシャレにアレンジされてて(ちょっと南国風の雰囲気アリ)大人のムードばっちり。参加しているのはローズ・アンリミテッド、原マスミ、ムーンライダーズの岡田徹、ロータス・エンド、レモン・セックス・セインツなど。

●レイジー・ルーズ・ブギー

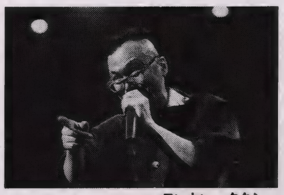


11月16日にセカンドアルバム（6曲入り）を発表したレイジー・ルーズ・ブギー。テレビアニメの「YAWARA!」のテーマソング「いつもそこに君がいた」もおさめられています。バンド名はルーズ（なまけもの）とボーカルのLOU（ルー）とを引っかけたそうだけど、彼女が全曲を作詞、作曲しています。夢を捨てないいちずで前向きな歌詞と、グングンと力強いサウンドに、なんだか勇気づけられるような気にさせられるよう。

スペシャルグッズプレゼント RR 1 the electric glass balloon

NACK 5 REGGAE CONNECTION

レゲエの3バンドがパワステでイベント。



ランキン・タクシー

ゲストも含め、3時間以上に含んだ。

レゲエも10月末となると野外というわけにもいかず、パワステで行われた。チエコ・ビューティ。相変わらずちょっぴりのエッチさかげんを含んだキュートな、レゲエ風味のソウルチックな音、とでもいうのだろうか。ランキン・タクシー。現地で作ったという袈裟風の衣装をまとい、それだけでサスガ!と思わせる。歌もダテに年くってない説得力。あくまで社会を風刺した詞に、深い、と若輩者の私は感じ入ってしまう。PJはどーしてもトシちゃんを連想させる。イケイケ風のお姉さんがディスコノリだったのが印象的。(笑)ゲストも含め3時間以上。やっぱ夏に野外でだらだら観たい。



チエコ・ビューティー

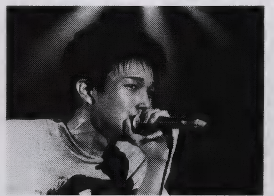


PJ

Photography Masaaki Mochida

ロッカベイビーズ

マンスリー・ライブ開始。



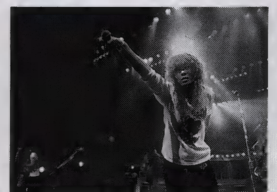
Photography Kenji Sugazawa

説得力のある詞の世界。

青春をメッセージする奴らROKKA BABYS'の、マンスリーライブが、10月29日より恵比寿ギルティでスタートした。誰もが共感を覚える説得力のある歌詞とメロディラインには定評のある彼ら。この日も観客達は彼らの歌の中に自分の青春を感じていた。

THE SILVER DOGGS

10月14日、日本青年館。



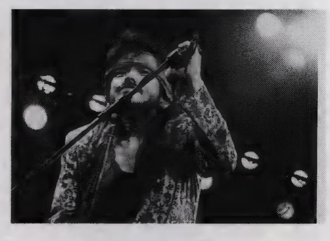
Photography Kenji Tsukakoshi

より自然に、よりラフに。

さすがにそれぞれがキャリアを持っているだけある。ステージ全体に余裕があった。それに加え、みんながとてもラフに演奏しているように見えた。年末には川崎クラブチッタのライブも決定。さらなる躍進に期待。

SION

今年最後のライブ。



圧倒的な存在感。

SIONのツアー最後であり、今年最後のNHKホールでのステージが行われた。「今年いっぱいの力を入れて唄います」のMC通り、パワフルなものが感じられた。途中アコースティックで4曲唄ったが、SIONの存在感そのものだけで鳥肌が立つ。詞の世界にどんどん引き込まれてゆき、気が付いたらステージが涙でくもっていた。その後どんどん盛り上げて、全22曲、一気に突っ走った。本当にSIONに会えてよかった。

THE MAD CAPSULE MARKET'S

タイトル本文に含んでみました。



毒のあるポップ。

マス・メディアに操作された俺達は所詮チェスの駒でしかない。そこから特出するには権力の犬になるか危険分子の道を選ぶかのどちらかだ。アンダー・グラウンド・フェイスを以てシステム・エラーの虚を突き、パブリック・レボリューションを謀るならDディは近い?マッド・カプセル・マーケッツの新作『SPEAK!!!』はジャンキー向けのポップ・ミュージック。

THE THRILL

2nd アルバム、リリース。



夜をイメージさせる。

お待たせ、ア・ミリオン・ダラー・バンド〝ザ・スリル〟のセカンドだ。16人の大所帯、大音圧のホーンセクションは何かとスカパラに比べられがちだが、スリルの場合ここにマッド・コンダクターが加わってより演劇性指向が強い。早い話が圧倒的に夜のイメージ(クール・アンダーグラウンド)だということ。

アルバムはN.Y.のカルト・ギャング小説『トカゲを喰った男』に捧げられている。本邦未訳。著者は現在失踪中、生死も知れないとのこと。

SOFT BALLET

完全予約限定。最後のチャンス。



Photography Kazuhiro Kitaoka

写真集予約〆切り迫る!

完全予約限定販売となる『ソフトバレエ写真集』ですが、いやはやトンデモナイシロモノになりそうです。製作スタッフの感覚は既にマヒしており、果たしてこの平和な日本で、こんなの発売していいんでしょうか!? てな状態に突入しております。詳しい注文方法は今月号の133ページを見ていただきたく、締め切りも迫っておりますので、これが最後のチャンスですから皆さま後悔のないように。

別にこれはオドシでもスカシでもないのですが、とにかくこの写真集…一般の雑誌等では決して見られないビジュアルの連続。どうか買ってください。お願い。

ブースカ・バンド

中谷ブースカの LEEDS SHOW。



Photography Hisashi Mori

ブースカのあらゆる魅力を発揮。

10月22日新宿ロフトで盛大に行われた〝LEEDS SHOW〟は、中谷ブースカ結局出ずっぱりのイベントだった。

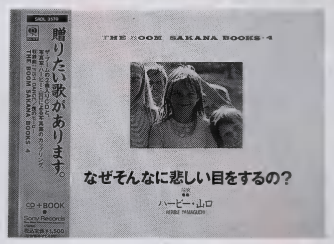
デルジベットのリズム隊をサポートに迎えてのTHE LEEDSを中心に、ニュー・ロティカのあっちゃんの三戸華之介完全コピーが反則ワザと言われたアンジー・パロディ・バンド(中谷はベース)、元ポテトチップスの森くんとの超変なユニット50cc。ロフト一杯に集まったファンを前に、ある時は渋い面を感じさせ、アーティストとしてのあらゆる持ち味を惜しげもなく披露してくれた。

本人にとっても大きなワン・ステップと思われるこのイベント、見逃した人は、署名集めてでももう一度やってもらって見るべきだ。

(星野京子)

THE BOOM

2曲入りCD写真集11月21日発売。



個性的な写真が詰まっている。必見!

11月21日に発売された2曲入りCD写真集〝SAKANA BOOKS〟は買ったかな。5人のブームに縁のある写真家の人たちが彼らの曲を2曲セレクトして、そこからインスパイアされた写真(ブームは写っていません)を集めた5冊の写真集。それぞれの個性ある写真がつまっているので、ぜひご覧あれ。そして、もうひとつ。沖縄限定発売のシングルが12月12日にリリースされます。「島唄」のウチナーグチ・バージョンで、歌詞が一部沖縄の言葉に変わっているのだそう。沖縄以外の地域の人はレコード屋さんで取り寄せてもらうことが可能です。

NEWS BEAT

●VISION



ヴァージン・ジャパンからメディア・レモラスというレコード会社に改名はいたしましたが、旧ヴァージン・ジャパン邦楽のアーチストのみなさんは健在ですのでご安心くだされ。11月20日にセカンド・アルバム『Vision II』をリリースした彼ら。これには10月21日にリリースされたシングル「明日へのロングウェイ」も入っています。これってデビューの時のビデオクリップに入ってたんじゃ…。そう、その時にもうできてたんだよ。しかももう3rdも作り出してるとか。

●THE DEAD POP STARS



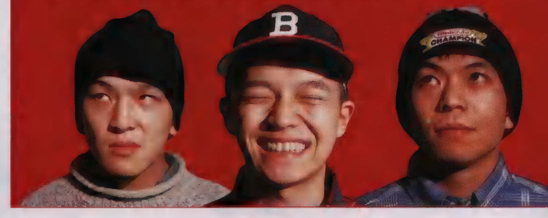
元かまいたち、そしてSisters no Futureでお馴染みの、CRAZY DANGER NANCY KENchanが、新バンドを結成。アルバム『THE DEAD 4 DRUGS』をリリースする。ハードコア・パンク的なノリを多分に含んだサウンド。過激で、とても一筋縄ではいかないという感じ。やりたい放題にやっているというような(詞を見ても、そういった感じが表れている)、勢いがとても感じられるアルバム。



X'mas Party with スチャダラパー

場所　後楽園ホール
日時　12月25日
ゲスト　モダンチョキチョキズ, クレア 吹越満, 梅垣義明, A.K.I.他

クリスマスはスチャダラパーと遊ぼう！　チケットを50組100名にプレゼントします。右の応募券を官製ハガキに貼って下記の住所のソニーマガジンズ　パチ▶パチ　スチャダラパー　サンタスティック・パーティー係まで応募してね。12月16日必着です。発表など詳しくは12月9日売りのパチ▶パチを見てね。チケットはぴあでも発売します。



スチャダラパー X'mas Party RR 応募券 '93.1

スチャダラパー
Santaful World

冬と言えばクリスマス!?　オチャメなスチャさんたちがやってくれました。山下達郎もビックリのムーディーなクリスマスソング（?）を。ご心配には及びません。ちゃーんといつものスチャダラ節でしたから。

Photography **Hisashi Mori** Text **Kyoko Sano**

久かたぶりのニューシングル「SANTAFUL WORLD」で新境地開拓，ついでにクリスマス商戦に殴りこみといきたいところが，ニューアルバムのレコーディングがディープに進行中のスチャダラパー。MCボーズ「タイアップ取れた試しなし」のいつもながらのスーダラ・ペースだけど，〝ドラクエ〟〝マリオ・カート〟に忙しみながら，「20歳の約束」「アメリカン・グラジエイターズ」にチェックを入れずにおられぬインドアな行動派ぶり。

ANI「あとヤなのは伊藤みどりの牛乳のCM(笑)」

シンコ「と，松坂慶子の親父にとびきりウサン臭いミュージシャンのダンナ」

しばらくゴブサタしてたけれど，「NBAのユーイングのイベント」に出演したり，

ボーズ「お得に使えるストリートにレベルで地道に活動してたっス」

アメリカではますますお子様化がススムヒップ・ホップではあるが，日本はなぜだか〝BOON〟に集結するあのテのブーム。伸び伸びになってるレコーディングもやっと3分の2の行程が終了。

ANI「その合い間にもライヴという名の余興が入って裏では大活躍っス」

TV「RCカー・グランプリ」にまで出ていたなんて知らなんだ。

ボーズ「〝コロコロ〟の連載企画はおもしろいけど。子供と対決したりして」

子供の〝文芸春秋〟「コロコロ・コミック」（スチャダラ星人）で，気を吐くSDPだが，小学生と〝バーコード〟対決がはたして，どんなプロモーション効果が？

ANI「そんなヤラシイこと考えてちゃダメっスよ。子供とのフレアイを大切に」

いわく「楽しくやってりゃそのうちいいことあるだろう」の植木精神健在なり。「ノーライフ・キング」じゃないけれど，頭の元気な子供文化はあなどれない。今さらスーファミを始めた大のオトナのワタシも寝食忘れてゲーマーと化す始末だからあな恐ろしや。そんなわけで，〝パチパチ〟〝コロコロ〟主催のライヴ&ゲームのイベントが決定　byハドソン。

と，ここ最近の動向からすると，次のアルバムは〝コロコロ〟世代を狙い打ちか？

シンコ「ところが，ワケわからず」

ボーズ「子供相手に商売するほどゴーマンにはなれない」

しかし，伝え聞くところによると〝コロコロ〟の主題歌（?）をあのゴダイゴ以来手掛けるというウワサもあり。という一方で〝ビック・コミック・スピリッツ〟の，〝ミス・イオナ〟コンテスト at〝ジュリアナ〟とか，オトナな活動もボチボチ。

ボーズ「なんか，スレっからしになってません，ボクら？（笑）　それもこれも芸のコヤシにしたいと思います（苦笑）」

芸のコヤシにするべく，大阪ではアメリカ村にて〝突然ライブ〟を決行。あのダウン・タウンの松ちゃんがそれを秘そかに目撃していたと聞き，どよめくSDP。

いつもながら，あっちゃ飛びこっちゃ飛びの話題に苦笑まじりの3人だが，この地道な〝給料手取りで10万〟ライフのキビってやつがアルバムにどう反映されるのやら。

ボーズ「セルフ・プロデュースでディレクター不在のゼイ肉を剥ぎ落したレコーディングですからね」

おおいに不安かつ期待したいところ。リリース前のツアーもあるし，なんたって，「SANTAFUL WORLD」もあるし，「営業もいっぱいある（苦笑)」。

ANI「メチャメチャ気合入ってまっせー」

かどうかは，よかったら〝パチコロ〟Xマスイベントでおたしかめあれ。

シンコ「『SANTAFUL…』はあくまでも変化球っスから」

というからには，SDPの直球ストレートの快打戦が炸裂するのか否か？　芸のコヤシもたっぷり仕込んでのSDPの'93年のシーズン幕開けは近い。



RR GOODS PRESENT

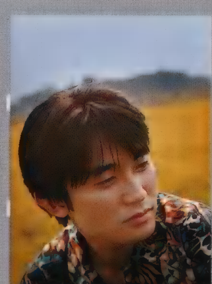
PRESENT RR SPECIAL GOODS R²

応募方法は　官製はがきに右下の応募券を貼り，住所，氏名，年齢を記入のうえ〒156-91　世田谷区千歳郵便局私書箱25号　ソニー・マガジンズ　パチロクスペシャルプレゼント　スチャダラパー係まで。締切は12月20日消印有効です。1名なので競争率は高いが，祈って待て!!

小学生と誌上対決。プロモーション効果は？
「そんなヤラシイこと考えちゃダメっスよ」

NEWS BEAT

●小川清史



アコースティックの静かな，それでいて何かが心を揺さぶるようなサウンド。アルバムタイトルは『今』だ。言わずと知れた元レッドウォリアーズのベーシスト，小川清史だが，こんなに歌が上手かったとはちょっとびっくりというのが正直な感想だ。タイトルどおり『今』考えていることをストレートに出しているからだろう。元同僚，木暮〝シャケ〟武彦も一曲を提供している。等身大の彼があますところなく出ている。〝自然〟を感じさせるアルバムだ。

●THE BRIGHTS



THE BRIGHTSとは「光輝くものたち」という意味をもつ。ファイター石田&GYMというバンドネームから，バンドイメージをもっとストレートに表現したいという思いを込めて改名した。つまりリデビュー，ということ。そしてその再出発のデビュー曲が「薔薇になろう」。ボーカル，ギター，ベース，ドラムスというシンプルな構成から，ビートに乗せて前向きな歌詞が飛び出してくる。リデビューにふさわしい曲だ。TX「歌謡夢図鑑」オープニングでOA中。




ZIGGY

衝撃の脱退 NEWS の興奮も冷めやらぬ ZIGGY。
今回は、ZIGGY をとりまいてきた人に、ZIGGY の思い出話や、
今後の ZIGGY に対する期待などを語ってもらいました。

Photography **Takeo Ogiso**




ZIGGY

最高のR&R BAND

●パブリック・イメージ
営業企画本部長　田村克也氏

ZIGGYは日本で最高のR&RBANDだと思う。バンドのメンバーから発せられる様々なアイデアやコンセプトがメチャクチャ面白く、それを聞いたり、一緒に考えたりする作業が一番面白かったと思う。たとえば〝それゆけ！　R&R　BAND〟というタイトルがあったり、〝俺たちはキラわれ者だから、バンドのシンボルは蛾にしよう〟とか、初めての武道館をやる時に〝LA　MAMAの追加公演として発表しよう〟と決めたり……等々、とてもHAPPYに仕事ができたと思います。

一番印象深いライブの思い出は、初のホールライブでもある後楽園ホール。森重が初めてステージでPianoを披露し、「6月はRainy　Blues」をやった時、Pianoを間違えてやり直しするというハプニングがあった。ところがそのハプニングでその時の会場の雰囲気が、メンバーとファンの一体感へつながっていった。それは今までのライブでは見た事がなかった暖かい一体感だった。その時、ZIGGYというバンドが〝キラわれ者のバンド〟から〝愛されるバンド〟へと変わりつつある事を感じた。

ところがその後も相変わらず〝キラわれ者のバンド〟の姿勢を崩さず、一向に変わらぬ態度をつらぬき通してきたZIGGY。そんな姿が、本当にあきれるくらいカッコイイ。やっぱり日本で最高のR&R　BANDだ！

思い出なんて無縁

●革新系無所属ディレクター
KOZY　KING・K

こうして考えてみると、奴らとはデビュー前からのつき合いだから、もう7年ぐらいになる訳です。その間、本当にいろんな事があったハズなんだけど、改めて思い出をなんて言われると、実はな〜んにも思い出さないんだナァーこれが！　いや、正確に言うと、思い出にしているヒマがなかったと言う事ですネ。そしてたぶんこれはZIGGYがZIGGYとして続き、奴等が奴等でいる限り、僕には思い出なんて無縁でしょうね。

まだまだ感傷に浸る余裕なんてなくなるくらいバリバリ活動して、僕を忙しくさせてください。そして何十年後かに、渋いお茶でもススリながら、ケバイ爺い達と入れ歯が外れるくらい思い出話で盛り上がりたいもんです。それともまだ現役で活動してたりして!?　バンド名は〝ZIZIY〟。

ああ、こんなくだらない事を書いているとまたオイちゃんに怒られるからこの辺にしといて、とにかくそんな日を迎えられるように、さぁこれからも頑張らなくっちゃ!!

全く違う発想・行動

●ZIGGY元マネージャー　竹田明弘氏

今思い起こしてみると、ZIGGYというバンドと付き合った事で、何とまあ、自分自身のバンドというものに対する考え方が変わった事だろう。4月のレコーディング作業も後半の頃から、マネージャーとしてスタートしたので、比較的短い間の付き合いだったが、僕が今までロックバンドに求めるカッコ良さとは全く違う発想や、行動に驚いた。まさか今回の『YELLOW　POP』のアルバム・ジャケットが、デンキ侍になるとは思わなかったし、ステージがメンバー全員がネコの耳をつけ演奏するとも思わなかった。

でも、音に対するこだわりや、ファンに対する気持ちはとてもまじめで、押さえるところはしっかりと押さえるし、やらなければいけない事はちゃんとやる。しかし時々カッコ付けてもズッコケもある。

なんか、通常のバンドでは、同居できない、認められないはずのものが、ZIGGYでは逆に魅力になってしまう。個人個人は妙にバラバラのイメージがあるのに、バンドとしてみれば、ちゃんと統一感があったりして、不思議なものがいろいろあったけど、今までガンコ者との付き合いが多かった僕としては、非常にリラックスして、楽しく仕事ができたと思います。でも3年前から、毎年この時期にやってくるバンドの事件は、自分自身ちょっとショックだったなあ。

本当に音楽に対してまじめな彼ら

●ZIGGY元マネージャー　寺本領社氏

ZIGGYの思い出と聞かれると、なぜか昔の事ばかり思い出してきます。娘を嫁に出した、父親の心境でもあり、女性と別れた時の男の心境のようでもあります。ひとつのくぎりの時は、皆同様の気持ちになるんだなぁと思わされています。

酒を飲んではあばれ、常に自分の中の矛盾とたたかっていた森重。

黄色のシティー（パンプキン号）に楽器を乗せ、まったくメンテをしない戸城。

機材車LIVE　TOURで、運転を変わってくれたのはうれしいけど、サービスエリアから高速本線に速度不足で入れず、一度バックして本線に入った松尾。

メンバーの中では一番体が弱く、ライブ終了直後などは楽屋で死んでいるのに、夜お酒を飲み始めると、メンバーの中で一番体力のあった大山。

まだまだ思い出はたくさんありますが、それよりも今後の彼らの活動に注目したい。なぜなら彼らは、本当に音楽に対してまじめだから……。

BEST ALBUM “ORDER MADE” 12.4 RELEASE

ファン投票によるベスト・アルバム『ORDER　MADE』が、12月4日にリリースされる。ファン投票の最終結果は左の通り。中間発表で1位を取っていた「I'M　GETTIN'　BLUE」がそのままキープした。「GLORIA」が4位というところで見ても、ライブでよく演奏され、みんなの馴染みの曲に人気が集中したようだ。全15曲、ZIGGYの王道路線の曲……といってもいいかもしれない。ちょっとマニアック路線の曲は、なかなか入らなかったというのは、残念だけど。（笑）

皮肉なことに、森重、戸城、松尾、大山の4人による最後のアルバムとなってしまったこのベスト・アルバム。4人によるZIGGYの集大成といっていいだろう。改めて、森重・戸城のメロディー・メーカーとしての才能や、ZIGGYならではの曲のバラエティーさなどを知ることができる。また、初期の頃から比べて、彼らがいかに進展してきたかも聴き比べてみてほしい。

余談ですが……この結果を見ながら、ZIGGY賞、パチロク賞のチェックもお忘れなく!!

ファン投票最終結果

1.	I'M GETTIN' BLUE	97,289
2.	ONE NIGHT STAND	96,301
3.	SING MY SONG	92,282
4.	GLORIA	91,967
5.	DON'T STOP BELIEVING	89,524
6.	午前0時のMERRY-GO-ROUND	80,626
7.	LET'S DO IT WITH THE MUSIC	78,521
8.	それゆけ！R&R BAND	71,163
9.	BURNIN' LOVE	69,122
10.	BORN TO BE FREE	66,180
11.	HOW	61,485
12.	La Vie en Rose	60,048
13.	WHISKY R&R AND WOMEN	54,489
14.	TOKYO CITY NIGHT	43,387
15.	I'M JUST A ROCK'N ROLLER	41,106

大山正篤脱退！・結婚!!　その時、根田美聡嬢は…

平成4年9月24日。日刊スポーツに、〝ダレント戸川京子（28）が年明けにもZIGGYの大山正篤と結婚することが明らかになった。二人が結婚を決意したのは、30歳までには結婚したいという戸川と、身を固めてミュージシャンとしてさらに飛躍したい大山の気持ちが合致したため〟ってことが載っていた。でね、ここまではいいの。おめでたいじゃんって思うわけ。同じ誌面に載っていた〝野口五郎、13歳年下OLと来週結婚〟とか〝ガズ、田中を蹴り設楽に絞り込む〟とか、同じくらい幸せそうなわけ。問題はね、ここよ、ここ↓〝一方、ZIGGYは分裂が決定的。大山はソロか、他のグループに入るかの選択を迫られており、結婚によって仕事に全力投球する態勢づくりを願っていた〟スポーツ新聞にまで心配されちゃう大山君の立場は。ああ、心苦しいわ。こうなったら京子にすべてを託すしかないわね。まっ、第二の人生のスタートってことで頑張って下さい。お幸せに。

ZIGGY

4人の個性が融合して成立した稀なバンド

●音楽評論家　森内　淳

ZIGGYがZIGGYであるためには、「四人のキャラクターがあってこそ」というところがあった。バンドという組織について考えてみると、ワンマン社長パターンであったり、もしくは、社長とやり手の専務といった二人の体制といったところが多い中、ZIGGYというバンドは四人平等にスポットが当たり、その四人それぞれの異なるキャラクターの融合があって成立していた稀なバンドだった、といえる。つまり、ZIGGYは誰か一人欠けてもZIGGYとは呼べないような、そんな雰囲気が常に漂っていた。そして、我々リスナーもそういうZIGGYを素直に受け入れていたし、ZIGGYはそういうものだと思い込んでいた。

実際、ZIGGYの四人はそういう運命共同体的なところで結びついていた。ZIGGYにリーダーの存在はなく、四人はいつも平等だった。それは例えば、ステージのスポット・ライトから金銭的な部分や作品の内容を論じるところまで全てである。だからこそ、ZIGGYは一枚岩を保っていられた。

ところが、である。皆さんもすでにご存じのように、この度、ZIGGYが分裂・再編成という事態に陥ってしまった。新しいZIGGYには森重樹一と戸城憲夫が参加し、松尾宗仁と大山正篤はそれぞれ独自の活動をすることになった。これは92年のロック界でも五本の指に入る大きなニュースだと思う。

これには少々、面食らってしまった。なぜならば、これは前述した意味でいくとZIGGYはZIGGYではなくなってしまうからだ。当の森重もインタビューの時に「これからのZIGGYの活動を思うと無茶苦茶不安だ」と語っているくらいだ。

ならば、なぜ、そんな思いまでしてZIGGY再編成に踏み切ったのか？　そういう疑問が湧いてくるのは当然である。

そこで、僕はメンバー一人一人に会って取材をした。（先月号のパチロク参照）その所感を述べると、バンドを続けていくということは、かくも大変なことなのか、ということになる。そういう究めて単純明快な、しかも百も承知な〝答え〟に僕はぶつかってしまったのだ。

「結局、四人が平等といいながら、それは不平等の上に成り立ってたんだね」（森重）

つまり、ZIGGYの（平等の名のもとにおける）究極の方法論とは、全員で曲を作って、全員でアレンジして、全員で意見を出し合って、全員がスポット・ライトを浴びて、云々ということである。ところが、四人はいつしかそれぞれの役割分担（例えば、森重と戸城が曲を書く係。他の二人はそれを再現する方法を編み出す係。レコーディングにおいてはそれぞれががんばれば後は口出ししない等々）のもとに〝平等〟を演じるようになっていたのだ。

それは一見バランスの上において一枚岩ともいえなくもないが、その一枚岩は実はとても冷ややかで、とてもモロいものだということは明らかだ。つまり、平等を固辞していくうちに平等のように見えて平等ではないものを各人が手に入れてしまったというわけだ。

なんとも皮肉な話だ。ZIGGYが一枚岩であり続けるために固辞した方法論が最後には各人の思惑によって裏目に出てしまったというわけだ。ZIGGYの長所は一転して短所となり、ZIGGY再編成は傷口に血小板が癒すかのごとく、自然発生的に訪れてしまったのだ。もし、ZIGGYが誰かのワンマン・バンドだったら、逆にこの四人のZIGGYは続いていたかもしれない。それを思うと、バンドはまことに複雑である。

今回のZIGGYの再編成で僕はそれを痛感してしまった。ロック・ミュージックの原稿を書きはじめて、もう14年になるけれど、バンドということについて、こんなに考えたのも初めてのことだ。僕の今の心境もまことに複雑である。

一緒にやるには最高の人たち

●パブリック・イメージ　マネージメント
原　賢一

ZIGGYの担当になって10か月。この短い期間にも、さまざまな思い出がある。

初めてメンバーに会った時に、「僕たちの担当になるなんて悲惨」「早く転職したほうがいいよ」などといろいろ言われ、頭の中で〝不安〟という文字が、クルクルと回ったものだった。

しかしここまでやってこれたのは、やっぱりメンバーのおかげだと思う。仕事でも、遊びでも、何かひとつやるのにアイディアが豊富だったし、パワーもある。一緒にやるには最高の人たちだと思う。

でも、自分の中で一生忘れないのは、『YELLOW POP』のレコーディングの時につけられた〝アダナ〟だろう。〝地獄男〟と書いて〝ヘルオ〟と読むという、うれしいのかメイワクなのか、よくわからないアダナだ。今では、すっかり定着してしまい、変えるに変えられなくなってしまった。名の由来は……まあ、わかる人にはわかるということで……。

今までいろいろありましたが、これからもいろいろやってもらいたいし、まだまだ一緒にやりたいので、これからもよろしくお願いします。

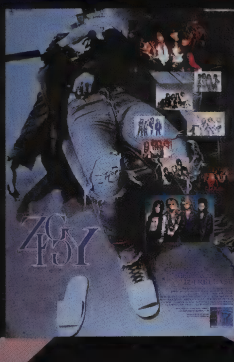
応募方法・ファンクラブ&問い合わせ

衝撃のNEWSの興奮もまだ冷めやらぬ今日この頃、いかがお過ごしでしょうか。ZIGGYさんからのプレゼントは、ポスターでございます。ご希望の方は、官製ハガキに左下の応募券を貼り、住所・氏名・年齢・希望アーティスト・希望グッズ名を書いて、下記の住所まで送ってください。〒156-91　東京都世田谷区千歳郵便局私書箱25号　㈱ソニー・マガジンズ　パチパチ・ロックンロール「パチロク・スペシャルプレゼント／ZIGGY」係まで。〆切りは12月20日消印有効。ZIGGYファンクラブの問い合わせは☎03(5423)4665です。

RR GOODS PRESENT

RR SPECIAL GOODS PRESENT

5名　ポスター



LIVE VIDEO "COME ON EVERYBODY"



すでにリリースされているビデオ『COME ON EVERYBODY』。もうすでに買っている人もいることと思うけど、まだ未チェックの人のために、ちょっと紹介しておきましょう。

8月17日に行われた、日本武道館ライブの模様を収録。その中から、全14曲が収められています。収録曲は、1. Hot girls in black leather 2. ROCK THE NIGHT AWAY 3. 眠らない25時の街で 4. 訪れる夜だけに 5. 午前0時のMERRY-GO-ROUND 6. CLASH! CLASH! SLASH! 7. I CAN'T STOP DANCIN' 8. EAST SIDE WESTSIDE 9. WHISKY R&R AND WOMEN 10. WASTED YOUTH 11. DON'T STOP BELEAVING 12. のらねこのKUROくん 13. La vie en Rose 14. LET'S DO IT WITH THE MUSICとなっています。

アルバム『YELLOW POP』からの曲が、たくさん収録されているので、なかなか耳新しいのではないでしょうか。残念ながらツアーを見逃してしまったという人には、ぜひ観てもらいたい1本です。

なんの飾り気もなく、そのままのライブの模様が収録されているので、ライブの雰囲気や、迫力が、そのままダイレクトに伝わってきます。

あとポイントとしては、アンコールの「のらねこKUROくん」に突入する前の、戸城氏によるMCでしょうか。（笑）

とにかく、まだ買っていないというアナタ!!　今すぐ走って買いに行こう。観なきゃソンだよ!!（自信満々）



ZIGGY

12.4 BEST ALBUM RELEASE

ORDER-MADE

15 NUMBERS SELECTION

CD:TKCP-30718 ¥3,000(税込)/CA:TKTP-20275 ¥2,800(税込)

ファン投票最終結果発表

1. I'M GETTIN' BLUE	*97.289*
2. ONE NIGHT STAND	*96.301*
3. SING MY SONG	*92.282*
4. GLORIA	*91.967*
5. DON'T STOP BELIEVING	*89.524*
6. 午前0時のMERRY-GO-ROUND	*80.626*
7. LET'S DO IT WITH THE MUSIC	*78.521*
8. それゆけ!R&R BAND	*71.163*
9. BURNIN' LOVE	*69.122*
10. BORN TO BE FREE	*66.180*
11. HOW	*61.485*
12. La Vie en Rose	*60.048*
13. WHISKY R&R AND WOMEN	*54.489*
14. TOKYO CITY NIGHT	*43.387*
15. I'M JUST A ROCK'N ROLLER	*41.106*

●当選者の発表は商品の発送をもって替えさせて頂きます。

NEW VIDEO NOW ON SALE

COME ON EVERYBODY

(1992.8.17 日本武道館にて収録) VHS:TKVA-60467 ¥5,800(税込)/LD:TKLA-50079 ¥5,800(税込)

1. Hot girl in black leather 2. ROCK THE NIGHT AWAY 3. 眠らない25時の街で 4. 訪れる夜だけに 5. 午前0時のMERRY-GO-ROUND 6. CLASH! CLASH! CLASH! 7. I CAN'T STOP DANCIN' 8. EASTSIDE WESTSIDE 9. WHISKY, R&R AND WOMEN 10. WASTED YOUTH 11. DON'T STOP BELIEVING 12. のらねこのKUROくん 13. La vie en Rose 14. LET'S DO IT WITH THE MUSIC

TOKUMA JAPAN COMMUNICATIONS CO., Ltd.

PUBLIC IMAGE

PUBLIC IMAGE RECORDS

Letters ● Column

Go Go Paradise



Illustlation **Norie Kadokura**

去年の 12 月 24 日は会社の人達とスキー場で迎え，その夜は東京で別の仕事の人々とドンチャン騒ぎ。翌 25 日人の服を借りて出勤。今年のクリスマスは…

●初めてラブレターをもらったS君が授業中に見ようとしたら、いきなりオルゴールが鳴りはじめ、自分が読む前に先生にとられていた。（チョビ）
○S君大ショックぅー

●ドラえもん、知られざる秘密。その1 ドラえもんに出てくるスネ夫には養子に出した弟がいるらしい。その2 のび太の部屋にあるトロフィーはあやとりでとったものらしい。BY ラジごめII（みお）
○通（つう）すぎる内容です。



●104の番号案内で名前を言って「どういう漢字の方ですか？」と言われて「明るくて楽しい人です」と答えて案内の人をずーっと笑わせた……。（TOSHI……LOVE♡）
○そりゃ聞き方が悪い。

●なさけない話ですが……ある日新しく買った時計を時間どおりに合わせようと思い、正確な時間を知ろうと117に電話しようとして、間違えてなんと110にかけてしまった。驚いた私は何も言わずに電話を切ってしまった。でも電話が鳴るんです。2、3回切りまくってもまだ鳴るので、私は素直に「間違えました」と言って電話を切りました。本当にはずかしかった。（山口真琴）
○公共モノネタでした。

●入学当時からずっと好きだった先輩に「だれかすかんちのカセットもってない？」ときかれたのでチャンスだと思い、持ってないのに「ダビングしてきます」なんて言ってしまい、わざわざレンタルで借りてダビングした。しかし次の日私は何も知らず別のテープを貸してしまった。あとで「なかなか上手いんだね」と言われてしまった。それは私が歌っているテープで、それから口をきいていない――。（ハラホロヒレ貼れサロンパス）
○ふつう自分の歌入りのカセット持ってるか？

●この間モスバーガーに行った。女の子が「アイコ15」と言ってアイスコーヒーを買っていった。次のババアは自分の年を言うものだと思い込んだみたいで「梅62」と言ってしまった。ウソのようだがマジな話である。その直後お店の中は大爆笑。ババアがかわいそうだが僕もバーガーをはき出して大笑いした。（Xなんて大きらい）
○モスはおいしくて大好きさ。

●私があるデパートのトイレに行って、一番右のトイレのドアをコンコンとたたいたら中から「どうぞ」という返事が返ってきた。「どうぞ」と言われたってね……。（私困っちゃう。）
○それはなあ、中にいる人も困るハズだぞう。



●バクチクの今井さんが、巨大なかたつむりのからにまたがって、私を「フフン！」と見くだしたんです。夢の中で……。目を覚ました私は思わず「マイマイ……」とつぶやきました。（うにゅうにゅ）
○ウマイッ！ 午前4時半にぴったりなシュールなネタだわ。昨夜4時間しか寝てなくて、もう21時間も起きてるのよ。どうして毎月……（涙）

●ジュンスカ&ユニコーンのライブに行ったときのこと。私の席はメンバーが豆粒くらい（ちょっと大ゲサ）にしか見えないとこだった。ふと、後ろのカップルの話を聞くと、彼女の方が「民生くんカッコイー♡」と叫んだら、彼氏が「カッコイーって顔見えねーじゃんか」と一言。カッコイーと百連発していた私の友達はいったい……!?（瞬間の美学）

●この間ライブハウスに行って、左に男の子がいたんですよ。もー一人で盛り上がってて、その隣にいた（たぶん彼女）女の子がかわいそうに、一人でどうしたらいいのかわからないような顔をして男の子の方見てた。（南条瞳）
○デートでライブに行くのは考えモノですな。嗜好が態度に出るからねぇ。

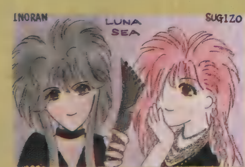
●私の友人ーさんと沖田ヒロユキ、柳生ヒロシはなんと同じ誕生日だ。笑う～。（1月7日だよ）
○来たー。沖田ネタだーっ！

●私は小学校2年生の時から真田広之の大ファンで真田さんが婚約を発表したとき倒れてしまいました。そして数日後私は友人の家に遊びに行って帰りが遅くなって怒られるかとビクビクして帰ったら家族がショックで自殺したかと思って心配していた。父なんて「海に浮いてるんじゃないか」と言って海に探しに行ったそうです。（毛雷太）
○そんなに愛していたなんて……あなたに負けたわ。

●11月号の中日VS巨人戦のエピソードに対して、巨人VSヤクルト戦のラジオ中継で、ヤクルトの秦が巨人に強いという話をしていて、アナウンサーは「秦は巨人戦になるとハタッと自分のバッティングを思い出すのですかねぇ」とギャグをとばしたのに、解説者はわか

君もイラストレーターだっ！ 第3回

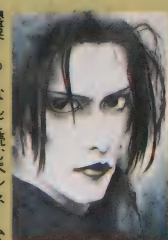
ここに応募してくれるみなさま、くれぐれもエンピツ描きはダメよ。このコーナーの存続をかけて、いっちょ本気出して描いとくんなまし。そこはかとなく似てるだけでも面白きゃいいからサ



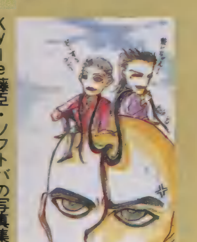
れいち・なんかカワイイんで選んだが野音を見たあとではチト？だな



Lovely DENちゃん・ちょっとペンネーム長し。よって評なし



罌粟・も一なんて読むペンネーム？ふりがな振ってくれるとウレシイ♡



Kyle藤臣・ソフトバの写真集作ってる人に見せたら面白いから採用だと



へぶん・〝Xの復活を祈って〟だって。地下鉄のポスターみたいだよね。



奥Bーまりんさみ・だからーエンピツはダメだって。「さみ」の意味不明



ホラ吹き小僧・やっとアタシの気に入るPN（？）木根さんに似てるかもね

らなかったらしく「そうですねぇ……」とサラッと流していた。私はかわいそうで笑ってしまった。（サイレントシキ）

○野球中継の時ってダジャレ出るねぇ。

●友達と二人で食事に行った帰りのこと。レジの人に「分けて下さい」と言ったのにレジの人は「負けてください」と聞き違えて店長に言いつけに言った。おかげでハジをかいて料金は全部私が払った。

○素直に「ワリカン」と言っとけば。



●大阪人は「な」を使わずにおしゃべりすることは出来ます。わたしはバリバリの大阪人ですが「な」ではなく「や」です。少々ガラが悪くなってしまいますが。（TOSHIーラブラブ）

○や、や、や……「ヤンキー」？

●山形弁です。例えば人に同意を求める場合「〜だよね」というのが、「〜だよにゃあ」と言います。まるで猫のようですね。「何かあったかなあ」は「何かあっけがあ」です。田舎丸出しでおはずかしい。今度ユニコーンの阿部さんにもきいてみて下さい。（おがくずっこ）

○私、電気グルーヴやブームの編集担当をしているので、ユニコーン阿部さんに質問できるのはいつの日かわかりません。あしからず。

●津軽弁だ！ 津軽弁と言えば「どさ？ 湯さ。」と言うみたいに短縮するんですよ。あと「〜だんず」とか、いろいろありますよ。（津軽の子）

○「ダンスだんず」とか？ 失礼しました。

●こっちは讃岐弁や！ 讃岐というから松本明子がおるんやけど……皆がみな、あーいう人とはちゃうんやけどのォ。うちはXに命かけとるけん。これからも「パチパチ」にXが載るんを思い切り期待しよるけんのォ。

○うちは「パチロク」なんやけどのォ。

●みんなは知らんかもしれんけどなァー奈良弁ってごっつすごいねんでぇ。大阪弁より汚いねん。なんやーわからんけど、天理方面なんてもっとすごいねん。一回大仏見に来た時にでも奈良人としゃべってみー。おもしろいでー。（JUNA）

○「ナラ!?」（©フロムA）失礼しました。今月の方言講座はこの辺で。

●そこのあなたもそっちのきみも、みんなみんなスターライトYOSHIKI買おうぜ!! みんながひそかに思ってること……「脱がしてみよ。」（よ）

○それよりなにより、地下鉄のマナーポスターにびっくりしたよん。どーいう基準で選ばれたんじゃろか……？

●この間、テレビの某音楽番組のクイズで「今度、布袋寅泰が出すアルバムの名前は？」とかいう問題があったの。そしてこの問題は3択なんだケドこれがまた笑えるっ！
①ハナモゲラⅢ
②ギタリズムⅢ
③キタナイヨーキミー
もー大爆笑してた。（気合いれていけよっ！）

○ハナモゲラってどんな意味？

●この前、私の通ってる学校の校庭で女の子10人くらいがセーラー服で踊ってたんです。うちのティーチャーに捕まってしまい調べたところ近くのS高校の仮装部の男の子たちでした。うちの学校は女子しかいないので男が来てみんな興奮してました。（PN不明）

○えーっ仮装部って一体なにー？しょっちゅう仮装してはいろんな所に出没するの？ なんて楽しそうなんでしょ。



●先日SOFT BALLETのチケットをとるのに並んでいるとおまわりさんが近寄ってきて「なにやってるんダ」と言ったので「そ、SOFT BALLETのチケットをとるのに並んでいるんです」と答えた私。それに対しておまわりさんは「あーあの川合俊一のやつだろー」おもわず私はおまわりさんに「それはビーチバレーでしょう」とつっこみをしてしまいました。アハハ（みゆき）



○おまわりさんだってフツーの人よ。あたし、おまわりさんとか駅員さんの制服姿に弱いんだよねぇー。ポッ

●私の学校の先生は妖怪の絵がすごくうまい。なのでばかにしたら「お前は妖怪を侮辱してんのか」と怒られ、教科書写しをやらされた。きわめつけには「池袋は妖怪が多いから、出かけた時は気をつけろ」と言っていた。（青山紀子）

○気をつけよう。でもどうやって？

●おはようナ○ス○ーでB—Tの曲、たまに使われてるけど、変な事件ばっかり。親子ひき逃げとか母、息子殺害とか、でも一番むなしかったのは、若人あきら失踪で使われてたことです。（ジェームス・パチョレック）

○わたしにも覚えがあります。大好きなアーチストの妖しいミリョクの曲が怪しげな犯人の所で使われてた……。ワイドショーってやつぁ……。

●ポッキーとかプリッツのCMやってる人ってかじったあとにもぐもぐしないけど、「カット」って言われてからかみくだくのかな？ なんかきたないっぽくない？（亀はカメん）

○「きたないっぽい」っちゅうのは正しいニホンゴなのだろうか？ あたしも使うけどさ。

●この前、優雅な（？）女子高でのランチタイムの時間、パンを食べながら友達と話してたら、なぜか「スネーク・フィンガー」がお昼の放送でバカデカイ音が流れていた。クラスの超デブのコが食べるのをやめ、泣いた。変な気分だった。（ドラえもん）

○私も人に歌われたことがある「スネーク・フィンガー」。〝やせないやせないやせないよー そんなに食べてちゃややせないよー♪〟

●うちのトイレにはB—Tのポスターとか切り抜きとかをいっぱい貼ってあるん。で、ある日彼がうちに遊びに来たんね。まあ、トイレに入らはってんけど、出てきて一言「宅八郎ってバンドしとんけ？」とぽつり……もう、彼はうちの敷居をまたぐことは二度とないでしょう。あ〜あ、背は高いし顔もよかったのになぁーバカッ。あたしがバカ？（寿サマ&ブー）

○敷居をまたがないってことはさー、これから外で会うの？ ねえ、それとも別れちゃうの？ねえ、ねえ（↑オオバリバのまね）（適齢期編集者）

●何の話も思いつかない自分が憎い。（みうらまき）

○……大爆笑！！そこまで言わんでもいーよー。

●あまりにもハガキとが当たらないので大昔に某おまじない雑誌にのっていたポストの前で拝むっていうのを（しかも声を出して）やったら通りすがりの人に変な顔をされただけだった。おまけ…次の日、夕食に食ったカニには当たった。↑イミが違う（笑）（川上ランドセル）

○アタシもこないだ生まれて初めて「かに道楽」に連れていってもらって。かにしゃぶって2〜3分火を通す、って書いてあるんだけど、（みんな）待ちきれなくて半生状態で食べちゃってさー。次の日取材だったから不安だったさ。けど平気だった。



●友だちの学校はブタをいじめると停学、私の学校ではスイカを盗むと停学、メロンで退学。（よっちゃんボール）

○やっぱ北海道だと思った。メロン＝夕張メロン、と思って。メロン好き♡

●高校生のころ、巫女のバイトをしてました。挙式中シーンとなった会場で5歳くらいの子が「ねえ、誰か死んだの？」バシッ！すぐさまその子は母にはり手をくわされた。お子様にはお葬式に見えたようです。（若林みはる）

○あたしもやってた。一番おかしかったのは新郎の父が指輪交換の前に「これ塗っとけ」とニベアを出したこと。新郎は「大丈夫」って断ってた（笑）

DENKI GROOVE まりんの自分相談



A 今月の答え

『ねむれないんです』なんて、ボクの気まぐれな悩みにたくさんの人が妙案を送ってくれました。どうもアリガト。まずは石川県の林奈緒美『くだらん本とか新聞を読む。推理小説は最後まで読んでしまうのでダメ』なるほどね、だけど、ボク本読まないからな。次は杉並区のネオナゴム『眠くないなら寝なきゃイイ』寝なきゃイイってのはその時はイイんだけど、次の日とかボーッとしちゃってすごく苦しいんだよ。ただでもボーッとしてんのに。（笑）次は『安眠できるツボを押す（神奈川県 砂原ヒロミ）』これいーけど、押してくれる人いないじゃん。1人でやんのもさみしいし。将来ね、家庭でもできたらね、やってほしいかな。『酒でも飲んで暴れて疲れてねる（兵庫県 喜子とかいてキコと読む）』これはねー、たまにやってる。実は。（笑）すごくよくねむれるけど、次の日死んでるー。『音楽を小さな音で聞きながら寝る or α波の出る音楽をきく（山形県 足立屋）』『私はクラフトワークを聞けばすぐねむれる（練馬区 顔）』それは、君がクラフトワークを好きじゃないからでしょう。（笑）α波とかって、そんなスグ出るもんなの？ よく分かんないけど、ねむれるのかな。あと『手首を切る』って安眠法を実践してる人がけっこうたくさんいるのはオドロキでした。でも、死んだら困るしな。んでもって、今回は電気のライブでもギターを弾いていただいたりしてるブラボー小松さんにも意見を聞いてみました。「ヘビメタのライブに行けばグッスリだよ。あと、ウォーターベッドは健康にもイイし、よくねむれるみたいよ」ふーん、そうなんだ。ウォーターベッドって母親の子宮の中にいるのと同じカンジがするっていいますよね。ハガキでも『布団を母の子宮と思いながらねる』ってのがあったし、関係あるのかな。安眠と子宮って。「まりんなんて生まれたまんまみたいなもんだからピッタリじゃん」そんなぁ、ヒドイや。とりあえず、今のボクの安眠法としては、枕もとに「においい袋」みたいのを置いてねてます。そのおかげでリラックスするのか、単に忙しくて疲れているのか（笑）さいきんはよくねむれています。おさわがせいたしました。（ペコリ）と、いうわけで今回いろいろな安眠法を教えてくれた人の中から「眠り袋」を送ってくれた東久留米市の松島奈緒さんと「×××」を送ってくれた北海道の清水牧子さんに、ボクの私物のフロッピーディスクをサイン入りでプレゼントします。

Q 今月の悩み

まりんことオン・ザ・ロックのボクが（これが出るころにはまた名前が変わってんだろうな、きっと）電気グルーヴに入ってからすでに1年余りがたちましたが、そのあいだに他の2人による攻撃のせいかどうか定かではありませんが、ハダはボロボロ、シワは増えまくるし、一気に老けてしまったんです。顔色は、具合も悪くないのに授業中に「砂原くん、気分が悪いなら保健室に行ってらっしゃい」っていわれちゃうくらい小さいころから悪いから別に気にしてないんですけど。あげく、本当に熱があったりして「かえんなさい」っていわれちゃったりして。ま、そんなことはどーでもイイんですけどね。とりあえず、老けちゃって困ってます。このままじゃ、若年寄りの道を一直線です。「ケトルマン」も夢ではありません。『こんな食べ物がイイよ』とか、『私はこうして若返った!!』などなど何でもイイので教えて下さい。オン・ザ・ロックからのお願いです。とじ込みハガキの方でバフバフ送って下さい。ヨロシクですぅ。

「Mr.Childrenの今月のオススメ」ではみなさんから"おススメして欲しいもの"を大募集中です。

リバコラ!

副題～リバちゃん、ねぇ聞こえないカキーンってさの巻～

稲垣吾郎ステキッ。ってなわけで、今期のドラマの中で一番おもしろいのは「二十歳の約束」でしょう。テレビブロスで内容を読んだ段階では、もっと心の動きを表現するドラマなのかと思っていたのだが、実際は全て同じトーンで喋る牧瀬里穂と、いつも鼻血出してる吾郎ちゃんという内容(なんじゃ、そりゃ)。でも、吾郎ちゃんが殴られて鼻血を出しながらヘルメットをかぶってバイクに乗った時、アップになってさぁ鼻血は? と思ったらちゃんと両鼻から流れてた時は嬉しかったもんだった。吾郎ちゃん、本物だよ!!音松君だっていいのさ。唐沢がカラオケに合わせてダンシーンしている間に、私の気持ちはすっかり吾郎ちゃんのものです。他には「いとこ同志」をあまりにつまらないと思いながらも、豊川悦司が出ているのでついつい見てしまうことを反省しつつ、「ホームワーク」は、唐沢の彼女役の人の髪形がガチガチなのをいつも気にして見ています。あの人、ロカビリーバンドのボーカルなんだという話だが、なんだよなぁ。

最近は、絵描きの友人とワッツインのサルちゃんとのファックス通信が流行っていますが、夜中の4時頃にサルちゃんからいわれのない"くやしー怨む"と書かれたファックスが届いた時にはビックリ。間違えるのだけはやめて欲しいものです。あっ、今日(11月27日)は私の誕生日だ。ウフ。P.S. 君は、"ウゴウゴルーガ"見たことがあるか。

the Pillows 山中さわお 東京モダンタイムス

近頃僕は、早起きだ。早ければ5時、遅くても7時半には目が覚めてしまう。少し前ならこれから寝ようって時刻だ。そんな時間帯はすることもなく、窓からただボーッと見慣れた風景を眺めている。自転車の少年、スーツのサラリーマン。みんな駅へ向かう中、気になるおじいさん登場。僕の家のすぐ向かいに神社があり、鳥居も立っている。そのおじいさんは、毎朝そこへ拝みにやって来る。鳥居に向かって大きな声で何か祈りのような言葉を告げ、熱心に拝んでいるんだ。不思議そうに通り過ぎる人も、窓からの僕の視線も気にしない……というよりも、きがつかないくらい熱心な様子だ。何をそんなに? 信仰心のない僕にはその一生懸命な姿は気になってしかたがない。うまく言えないが"信じる"パワーを強烈に感じてビビったんだよ。

僕の母はキリスト教徒だ。毎週日曜日、教会へ通いだして、もう30年を過ぎるだろう。「宗教」と言うと誰もがある何らかのイメージを思い浮かべると思う。僕もそうだ。幼いころ普段、別に何といって変わりばえのない母に「本当に神様がいると信じているの?」と質問した覚えがある。サンタクロースも"実はお父サンだった"と知らされた年頃だったからな。"大人"である母が"神様"でもないだろうってね。でも、その時の答えは「信じているよ。

神様はいる。姿、形はなくても心の中にいる。例えばね、誰にもバレないように嘘をついたとするでしょ。でも、必ず自分は知っている。心の中にいるんだよ」まぁ、そんな内容だったと思う。幼い僕にはサッパリわからなかったけど、あとで要するに"自分に正しく生きようという姿勢"のことか、と少し理解できたよ。しかし、しつこい僕は似た質問を宗教とはかんけいなさそうな父にもしてみた。すると「父サンにはよくわからん。けどな、大嵐の海に独りぼっち……理屈ではどうにもならない時に思わず"神様"って祈るじゃないか。本気で"救われたい"思いのことじゃないのかな」みたいなことを言ってくれた。うん。なんとなくわからんでもないな。大昔から人間の歴史には必ず宗教、そして音楽があるんだってね。"神様"とそれを祭る音楽。しかし現在、何だ、集団で結婚してみたり、高いツボ買ったり売ったり?変な怪しい販売してたり。教祖が異常に金持ってたり、それが幸せにつながる手段とはどうしても信用できん!!物質的に損得が動く信仰なんて理解してたまるか。いつの間にか"信仰"を全て否定してた僕だが、今日もおじいさん、熱心に拝んでいるよ。僕の心にも"神様"がいるのか、絶対絶命の時祈るのか知らないが、おじいさん、あなたの願いが叶うといいですね。

Mr.Children 今月のおススメ

～ディズニーランドの巻～

集中連載

●桜井和寿(ボーカル)

ディズニーランドには4回行ったことがあるんだけど、あの空間って全てが夢の世界のようなものって感じが好きなんだよね。あそこでバイトしたいと思ったこともあるもん。やっぱり夢を売る仕事には憧れるよね。みなさんディズニーランドのチケットがあまったら僕に下さいね。

●田原健一(ギター)

中学の卒業遠足で1回だけ行ったことがあるかな……。その時は雨が降っていたことをよく覚えてるよ。好きな女の子と一緒に乗り物に乗れなかったのが残念だった……。みんなディズニーランド好きみたいだけど、やっぱり楽しいのかなぁ?

●中川敬輔(ベース)

もう遠い昔の過去のことで全然覚えてないけど、たしか遠足で1回だけ行ったことがあると思う。何の遠足だったかなぁ(編集部注・中川君と田原君は同じ中学なので、きっと中学でしょう)。僕はディズニーランドへの行き方も知らないので今回は何もおススメができません。ディズニーランドにドンチャックはいるの?(笑)

●鈴木英哉(ドラムス&ボーカル)

俺もあんまり行ったことないなぁ。遠足と友だちと行ったので2、3回ぐらいかな。ディズニーランドってさ、けっこう夜までやってるから、なぁんかその気になっちゃうんだよね(どんな気じゃぁー)。ま、僕がおススメするのはみなさんも友だちと行ってその気になって欲しいということです。

チルドレンの連載が3月号から生まれ変わります!!(大げさ)

ということで、チルドレンあての質問を大募集したいと思います。誰あての質問かを明確に記入し110ページの欄外の住所に送って下さい。とじこみでも◎。例・桜井君への質問。漢字が書けないって本当ですか?私からは言えない…。

大募集!!(のわりに字がちいさい)

— The Blankey Jet City — THAT'S LIFE BY TATSUYA

母親と風呂の中でSEXをした。
母親の小いんしんの中から
子宮の口がのびてきて俺の
性器にすいつこうとしたが
どーにもはまらない。
親父に犯されるゆめをみた
俺はタオル1枚でよるの
街を逃げまわった。
月がいばりちらしその不動
は青いはく643円だ。
俺はゼリーやプリンの
内側からめくれ、やけどを
おった きらわれものの、えきびょうもちの食肉だ。

地獄はトカゲの夜の
はなし・・・・・・
今日もこうして
しらない人々のSEXで
しごとをする。
じごくがあるなら
そこにおちてほしい。
俺はそこの支配者になって
俺のぢごくを
きみにあげたい。
—1992—
SAPPOLOの
夜
ひとり。

調べちゃるけん!!

●すかんちのインディーズ時代のテープ、アルバムの入手方法を教えて下さい。(田中"グリーンドクター"涙)

○『オジタスの謎』『スカンチン・ロール・ショウ』の2枚がありますが、ルートはやはり無く、中古レコード屋さんで探してもらうしかないですね。『スカンチン～』の方はドクターが入る前で、槇原敬之くんがコーラスとキーボードで参加しているそうです。こりゃマッキーファンも必聴だねっ。

●私はブランキーの歌をもっと多くの人に聴いて欲しいので、東芝EMIに入社してボロボロになるまで働きたいのですが、入るには東京の大学に行かなくてはいけないの?(みどりがめ)

○大学卒業の場合、ハガキで資料を請求してください。またアルバイトから社員になるケースもあり、フロムAなどに大体半年おきくらいに載りますが、この場合は学歴不問だそうです。

●あのね、私作詞家になりたいの!どこに詞をおくったりすればチャンスがつかめるの?(黒羽紀子)

○まずは書いてみたいアーチストのCDのクレジットにディレクターの名前が載っているので、その人宛に詞を送ってみる。もしくはCSAの中で作詞、作曲家をマネージメントしているので、そこに詞を送る。ただし2か所とも、返事を確実にくれたり、作品を送り返してもらうことは不可能です。以上は一例です。CSAの方の宛先は〒150渋谷区神宮前2—4—12 CSアーティスツ 国内出版課 RR係まで。

●Xのファンクラブの入り方がわからないので教えて下さい。(ピデラ)

○〒150渋谷区恵比寿西2—13—7代官山Yビル4階 EXC ESS24 Xファンクラブ入会希望係まで、62円切手を貼った返信用封筒を送って下さい。



LUNA SEA

表現者のページ vol.4 （INORAN）

多くを語らぬINORANの貴重な原稿だっ!

こんにちは。ルナシーでギターを弾いています、INORANです。今回はルナシー連載ということで、考えた末、ツアーの事etc…などを書こうと思っています。

9月の末からスタートしたTOURですが、何せ前回のTOUR中に、メンバーから再度TOURをしたいという我ままで、実現した事なので、初日から3DAYS連チャンという、超ハード・スケジュールで始まったTOURでした。

8月の29日の京都スポーツバレーから数えると、約1ケ月振りのライブという事で、メンバーそれぞれ気合いが入っていて、初パナ東北3ケ所、異常な程のテンションで〝このままツアーを無事終了できるのかな?〟と思った程の盛り上がりだった。

その後、東京・渋谷公会堂、新潟・フェイズと続き、水戸でTOURの約3分の1を終わらせた。そして次に、北海道・ペニーレイン2DAYSを回るわけですが、春のTOUR以来の札幌のライブということで、札幌もまた過去にない程の盛り上がりで、皆さん、充分に満足できた事と思います。

その後に続く名古屋、そしてまたまたハードな福岡、熊本、広島の3DAYSと、今まで経験した事の無い様なスケジュールでしたが、その後にこれを含めて、一週間のうちに何と、6日間ライブという、夢の様な?事になったのでした。（笑）

自分達で決めた事とは言え、さすがにしんどかったけれども、シークレットの〝ロケッツ〟を含め、TOUR後半もテンションが落ちる事はまったくなかった。

そしてTOUR最終日、日比谷野外音楽堂前日まで、晴れていたのにもかかわらず、入り時間には雨が降っていた。うちの雨男は誰だ!!

ところがなんと、本番直前になると、今までの大降りから、小雨に変わり、メンバー、スタッフ、そしてファンの人達の気合と共に、雨は上がった。ライブ自体もFinalにふさわしく、客席とステージが、一体化した様に感じた。そしてアンコールの最後のカーテンコールで、本当に満足感に包まれた。

このTOURに来てくれたみんな。Thanks!! これまでまたしばらくライブという形では、みんなの前には姿を見せないけれども、今度会う時まで、みんなパワーをためといてくれ!! 俺らもそれ以上のパワーで会おうと思う。

すかんちの時事放談

ハローエブリバディ!SCANCHのローリー寺西です。僕ちんは昨日、福井県のサバエという所にある福井工業高専というところで学園祭ツアーの一発目を終えたところでありやんすよ。そして今ジムショに戻ってきてこの原稿を書いている次第であります。何というハーデスト・ワーキンマン・インザワールドなんでしょうねぇ、僕ちんてば。それにしても福井県にあるサバエというトコロは何にもなかったぞ。いや、正確に言うとサバエ（漢字で書くと「鯖江」になるらしいというのは今知った）には風光明媚な自然があったというべきであろうか。それに駅のたれ幕によれば、どうやらサバエは体操の町らしいのであった。ウーン、よく分からん。でも福井工業高専の男子生徒たちの野太い掛け声にはノックアウトされたね、本文とは何にも関係ないけど。



というわけで、この号が出るころには我々の学園祭ツアーも終了し、日本洗脳化計画の第一段階はクリアされていることであろう。そんな感じで我々SCANCH一同は4枚目のレコーディングを終えて日本全国を飛び回るトラベリンバンドになっているのであるが、そこじゃなきゃ無いものっていうのは大体食べ物に多いね。その反面、若者のファッションとかは大体どこも同じようなものが流行っているみたいで、空港に降り立った瞬間にそこいら中のヤングが全員アフロヘアードなファンク野郎だったりしたキオクは一回もないなぁ。とか、新幹線降りたとたんに、その街の二十歳以下の若者は全員子持ちで長髪のヒッピーだったりする光景も見たことはないような気がする。というワケでサバエの若者たちもバスケ的な格好をしてた人が多かったなぁ。別に文句言ってるつもりじゃなくて、食べ物ほどのインパクトは感じられないっつーことかな。ツアーに出る時は、コンサートの内容の次にその地方のラーメンとかがまずアタマに浮かぶもんね、やっぱし。

LADIES ROOM

今月は，JUN様の絵心をくすぐる写真がなかったのと（クスン）ハード・スケジュールのために，こんなんなりました。皆様写真送ってね。

みなさん、たのむよひとつ!! 気合いを入れた写真を送ってくれっっ!! おかげで今回はガイ当者ナシになってしまったぢゃあないかぁ。JUN様の絵心をくすぐるような、胸打つ写真が送られてこないと、今回の二の舞になってしまうぞぉー。

さて今回は、カルチャー・クラブ（懐かしいねぇ…本当に）の、ボーイ・ジョージがモデル。



「今回は、ハード・スケジュールにつき未完成。あしからず」こ…こんなメモが、イラストと共に送られてきたぞ…おっ、でも未完成といわれなければ、ひとつのアーティスティックな作品として通じるっつうのに、バクロしてしまうあたりがいいというウワサもある。（笑）でも、現実のボーイ・ジョージよりも、はるかに美しく書いてあるというウワサもあったりする。未完成ではあるが、素晴しいじゃあないですか。ハード・スケジュールだったということで（なんてったって、ライブとかあったしね。ライブの方の記事も読むように!!）、今回は、カンニンしてやってくれてないかい。

というわけで、次号では読者の皆様の似顔絵がここに載るよう、熱くハゲしい写真を送ってくれ。〒102 千代田区五番町6の2 パチパチ・ロックンロール「JUN様に似顔絵を描いてもらいたい」係まで。FANの底力をみせてちょーだい。たのむよ、ひとつ。

生きるヨロコビ

スピッツ 草野マサムネ

④最後のヒコーキ

遠い未来のお話。

地殻や気候の大変動によって、地球はその99・9%までが海となっていました。数多くの小さな島が点在していましたが、人間の住む島はたったの二つしか残っていませんでした。ひとつはピロ人の住むピロ島、もうひとつはガロ人の住むガロ島です。しかし彼らはそれぞれ、自分たちの島以外に人間の住んでいる島があるとは思ってもいませんでした。彼らは狭い土地を耕して作物を作り、魚を獲ったりしながら細々と禁欲的に生きていました。

さて、そんなある日、ピロ島の森の中で奇妙なものが発見されました。金属でできた鳥のようなもの、ピロ人の長老はそれを〝ヒコーキ〟と呼びました。「ヒコーキとは大昔、我々人類がまだ文明というものを持っていた頃に、空を飛ぶ乗り物として使われていたものじゃ」

その頃、人類の生き残りにとって、空を飛ぶなんてことは夢のような話です。彼らは早速、そのヒコーキの遺跡を熱心に調べ上げ、なんとかして再び空を飛ばそうと修理を試みました。修理といっても、もはや金属を作り出す技術も動力機関や航空力学に関する知識もありませんでしたから、ほとんど0（ゼロ）からの出発だったのです。島じゅうにあったけの資源と人材と長い歳月を費し、何度もテスト飛行が行われ、その度に失敗して犠牲者が出ました。それでもピロ人たちはあきらめず、ひたすらヒコーキが空を飛ぶ日を夢見ていました。

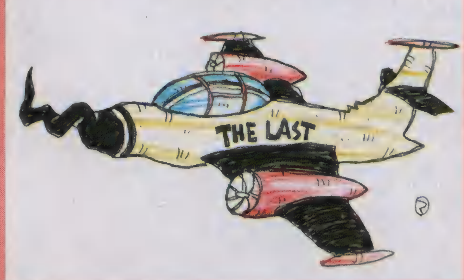
そして百年余を経たある日、島民が見守る中で32回目のテスト飛行が行われました。百年の間に、ヒコーキは何度も手が加えられ、もはや見つけ出された時の形をとどめてはいませんでした。

ヒコーキは滑走路をゆっくりと走り出し、加速していきます。ふわりと機体が浮き上がり、人々は「おーっ!」と歓声を上げました。百年目にしてついにピロ人は、ヒコーキを再び空へと飛び立たせたのです。それも、かつての文明時代に人類が見つけ出せなかったクリーンな動力構造で。

そらからピロ人は、そのヒコーキを使って島から離れたエリアを探索に出かけるようになりました。そして彼らは、海洋を南へ半日ほど行ったところに、人間が住んでいるらしき島、ガロ島を見つけたのです。ヒコーキが島の上空を行ったり来たりしてコミュニケーションを計ろうとしたのですが、人影が全く見えません。その日はあきらめてピロ島へ引き返しましたが、その次も、またその次も、その島に住む人々に会うことはできませんでした。そこで今度は集落と思われる辺りを思いっきり低空飛行してみることになりました。ところがその時、茂みの中から弓を構えた数十人のガロ人の男たちが現れ、パイロットは射殺され、ヒコーキは墜落し、粉々に砕け散ってしまいました。

ガロ人たちは最終戦争以降ずっと、高度な文明を〝悪〟とする教えに従って生きてきたので、ヒコーキは、さしづめ〝悪魔の鳥〟だったというわけです。

その後、人類が完全に滅亡するまで、ヒコーキが空を飛ぶことはただの一度もありませんでしたとさ。





BRAIN DRIVE
離乳

Photography Yousuke Komatsu
Text Mitsuru Hirose

先月とはうって変わってポジティブな2人だぞなもし。理由は様々あるようだが，何より「ミュージシャンとしての自我の確立」が最大の原因らしい。新曲の完成→発表も間近かなようだし，こりゃしばし，反・自虐兵士ブレドラに注目するしかないみたいね。



それまで地味にコツコツと曲作りやリハーサル（単なる練習）にいそしんできたバンド（といってもブレインは2人）が急にメジャー・デビューして業界のシステムに直面すると、自分たちの理想、イメージとのギャップにショックを受けてしまう。

そんな、よくあるパターンにハマッていたブレイン・ドライヴ。先月は落ち込みの絶頂だったが、今月は一転してフッ切れていた。何が彼らをポジティブにさせたか？どうやら、先に行われた〝XEO（ゼオ）レーベル〟のイベントでの好評さが自信に火を付けたよう。

さらに先月と一転して、新曲はできるは、前向きになるは、しかも友達までできたりして（笑）元気なのだ。それにしても、コロコロと変わるヤローどもだ。取材する側としては楽しいんですけどね、とっても。

＊

――なんだか、とっても元気そうだね。

水田「カゼなんですけど、ハァ。見てくださいよ、こんなにファン・レター来て」

表野「一週間でこれだけですよ」

（と、言って手紙の束をカバンから取り出す水田）

――すごいねぇ。もう、返事書いてる時間なくなるね。

水田「そうっすね。いろんな人から来てるんですよ」

表野「大阪の人が多いかな？」

水田「ライブ観てない、まだCD買ってない人からも来てる。いけませんよ『パチ▼ロク』の写真、実物超えてるから（笑）」

――でも、気分は良いと。

水田「幸福になれそうです」

――渋谷公会堂でのイベントの成功からも元気づけられたようだけど？

表野「そうですね。なんだか人気者でしたね、俺ら。びっくりしちゃったよ〝ギャー〟とか言われちゃってんだもん。まぁ、みんな（写真とかに）踊らされてるってことなんですけどね」

――オイオイ、また、そういう事を……。

表野「だって、俺ら、東京で初めてライブやったんですよ」

――そうだけどね。しかし、ステージ出てくるなり〝うるせぇ〜〟とか……。

表野「〝殺すぞ〟〝静かにしろ〟とか言ってんだよ、俺。普通、言わないよね」

――まぁ、照れてるってことかな？

水田「俺、歌はバッチリでしたよ」

――しかし、動きが……。

水田「初代タイガーマスクの動きを盗もうかと思って。フェイバリット・アーティストですから。しかし、バネが違いますね。あと、三沢（2代目タイガー）の動きも取り入れたりして」

――そのわりに、つまずいてたゾ。

表野「そこがイイとこなんですよ」

水田「やっぱ裸でいたい。カッコつけようとすると緊張するし」

――ソフバ遠藤やB-T櫻井のようなキマリ方はできないのかね？

表野「コイツには無理だよ、無理！」

水田「緊張しちゃうし、お客さんが怖くなったりするんですよ、無理すると」

表野「でもライブはいいなぁ。たまってたものがキレイに流されて、心の中がスッキリしますよ、ホント」

――先月の暗さがなくなったようで。新曲は作ってるの？

水田「アッ。1月21日に3曲入りでシングルを。もう3曲できた。っていうか、同じ曲の3バージョン作ったんですよ」

――そのうちの1つを採用して、他の2曲は『完全驚異』（アルバム）のリミックスものと、もう1つ新曲。

水田「そうです。音は今まで以上に過激、メロディはすげえポップ。ギターやリズムの音が過激なんです。テンポも速い」

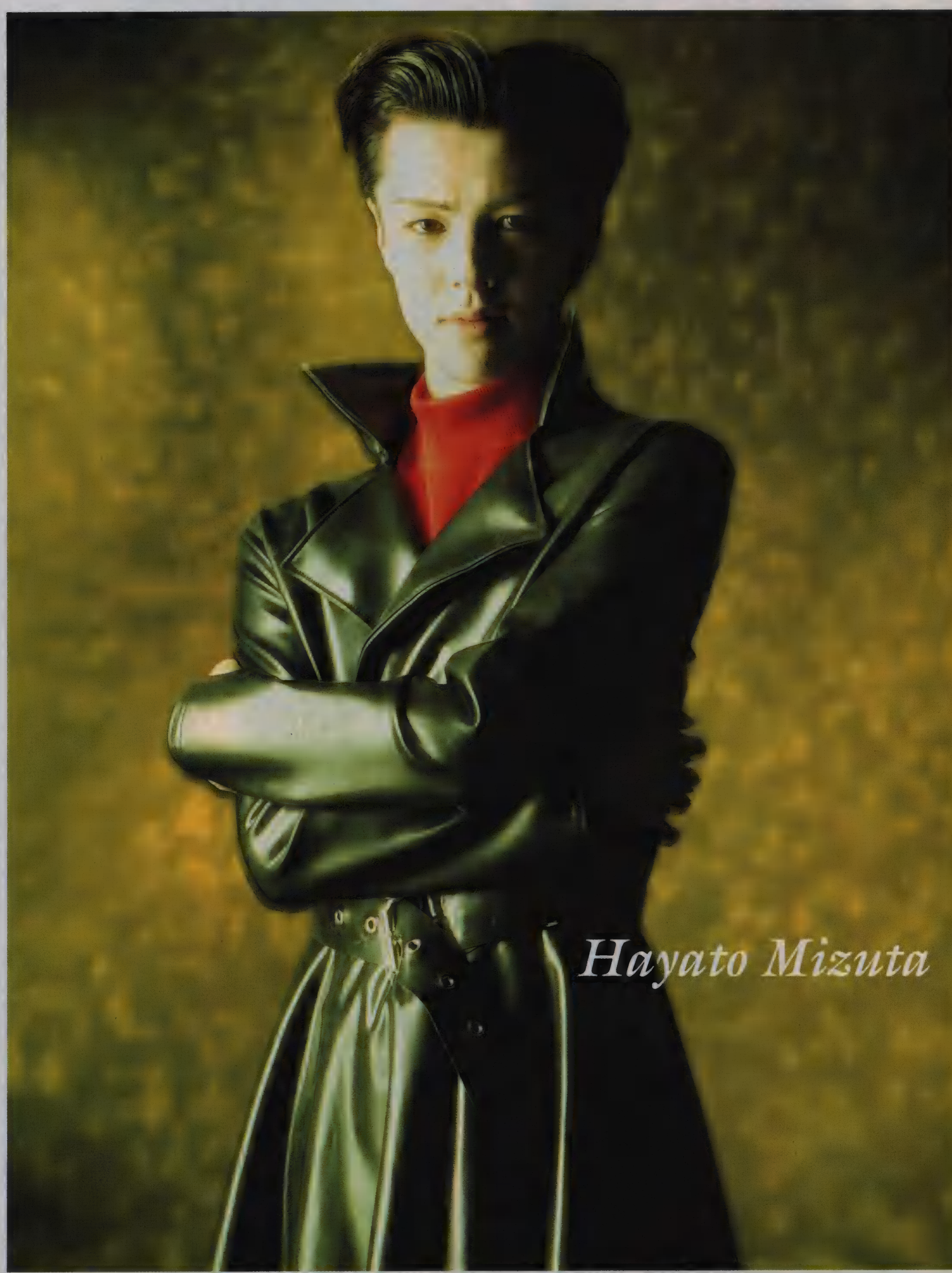
――曲のイメージは？

水田「血ですね。いちばん信じられるものは血。かりたてられるときに感じる血、血が昇るとか血湧き肉踊るにたとえようかなと。それ以上はヒミツ（笑）」

――なるほど。ポジティブな展望が開けてきたようですね？

水田「人間変わりますから。そのとき、そのときに好きなものを演ればいいんじゃないですか？　もう、計画とかそういうのは

いちばん信じられるものは血。かり立てられる時に感じる血，血が昇るとか血湧き肉踊るようなもの。



いいや。美しくないです。最近、曲もできてきたし、早くアルバム作りたい。『完全驚異』聴き返して、反省点もあるし」

――どのへんですか?

水田「カッコつけてました。全般的に等身大じゃなく無理してた。バカはバカなりにバカでいようと（笑）」

――フッ切れてきますね。（笑）表野さんは?

表野「ミュージシャンとしてはフッ切れましたよ。精神的にドン底まで落ちたから、どうでもよくなって。物事にこだわって、うまくこなそうとするのは良くない。ネガティブなポジティブさみたいの、あるじゃないですか? それがわかった」

――フーム……。

表野「そういう明るさが身に付いちゃって」

――何か、フッ切るキッカケはあったの?

表野「森岡（ソフトバレエ）さんと話したんです。渋公の打ち上げの2次会に行くとき、歩きながら話しただけなんだけど」

――そんな短時間で身のある話が?

表野「そこがスゴイとこで。森岡さんがそういう事言ってたんですよ。あの人の気持ちよくわかったんです。こういう人っていないんじゃないかと思ってたんだけど、あ、いるんだなぁって。演ろうとしてることは違いますけど、あの人もこんなにがんばってるんだから、俺もがんばれるゾって」

――もう少し、具体的に教えて?

表野「音楽やってて楽しい、嬉しいってのは始めのうちだけで、プロになって仕事になった以上考えちゃうじゃない? "俺は何故やってんのか"って。で、俺はドラム叩きたい、ドラム以外に表現方法はない！って悩んできて。でも、それがフッ切れて前向きにドラムに代わる表現を見つけようっていう気になったんです。ドラムへのこだわりがやるせなくなったという」

――その点に気づいたと?

表野「ええ。歩いて話すだけで感じました。会えて良かったです。ありがたかった」

水田「僕も藤井麻輝さんに声かけていただいて……」

表野「あの人たち、ホントはカッコつけてないですよね。そこがイイ」

水田「歩いてるときとか、ぜんぜん別人」

表野「だからさ、自分さえ作っちまえばいいんだよね。それがよくわかったわ。確固たる自分ってものを作っちゃえば、あとは何があってもビクともしないんだよ」

――いい出会いでしたねぇ。で、確固たる自分を作ったあとは、どう動く?

水田「気持ちいいか、悪いかのどっちかですから、音楽って自分にとって。気持ちいいことやりたいから、まず、考えるより走ろうと。そのあとにいろいろ意味がついてくればいい」

――考える前に走る。さっきの血の話とも直結してるようで、心情が見えてきますねぇ。

水田「そうそう、そうなんです（笑）」

表野「ところで1月に出る『DANCE2 NOISE』に、僕とDOOMの藤田さんで演った曲が入るんですよ。打ち込んだテープあるんだけど、聴いてよ」

――（聴いた）ヒェ〜、ノイズじゃあ！



ドラム以外に表現法はない!!　って悩んできて。
でも, それがフッ切れた。代わる表現を見つけたい。




LUNA SEA
RYUICHI

Photography **Hitoshi Iwakiri** Text **Kumiko Murayama**

[LUNA SEA色の空]

自分のイメージや心に残ったものを、表現してほしい。

RYUICHIがよく口にする言葉「LUNA SEA色」とは何か!?を語ってもらう。また、『表現者のページ』SPECIALとして、コーナーに寄せられた手紙の中から、何通か紹介し、それについてRYUICHIにコメントをもらった。

──"LUNA SEA色の空"っていうのは、何を指さして言うようになったの?

「やっぱり、自分のイメージの中の色じゃないかな。例えばライブやった後、心に残ったものとか。鳥肌が立ったり、すごい残るものがあったり、それがLUNA SEAの色だったり形だったりすると思うのね。だから"LUNA SEA色の〜"っていうのは、自分のイメージや心に残ったものをちょっとでも俺たちにわかりやすいように表現してほしいってこと。みんながLUNA SEAをどう思っているのか、それを知りたかったっていう。だから"LUNA SEA色"っていうのは、あくまでも限定されたものじゃなくて、ひとりひとりの中で膨らませていってほしいもの。独創性に富んでいてほしいし」

──ライブでRYUICHIくんが感じる色っていうのは、毎回違ってくるの?

「そうですね。それもだから、色っていうのは"空"から始まってるよね。"LUNA SEA色の空"から。まあ空っていうのは、ストレートに"心"だなって思っているんだけど、だから"心が痛い今は何色ですか?"っていうのはあくまでも問い掛けで、本当の色じゃないんだよね。だから"今心が痛いです"でもいいわけで」

──それは言葉を代えられるものなの?

「っていうか、別に色があるものじゃないから。すごく無機質なものだと思うし、感情のみに基づくものだと思うから。前はライブが終わった時に、名前のない塔が建っていればいい。名前も形もない建造物が心の中に一個ほしいねってMCをしたことがあって、意味合い的にはそれといっしょなんだよね。ただそれを、みんなが同じ方向に向かうんじゃなくて、ひとりひとりの中で明確にしてほしかったっていう」

──空っていうのは、あくまでもイメージとしての空だと。

「けっこう空って使うんですよ。本当に俺は、空って心だと思ってるから」

──それって、"果てし無いもの"っていう部分で共通するから?

「そうですね。自分で限界を決めてしまうのがすごく悔しいから。いつまでも"永遠"とか"無限"とか、そういうものに焦がれていたいなとはずっと思ってる。刹那的なものをたくさん知っていても、人生の中でいろんな終わりを知っていても、やっぱり焦がれていなきゃいけないものはあると思うから。俺は、心っていうものはもう魂で、人間は魂しかないっていうか、身体は付属品だし、その魂がどう変化していくかっていうのが、自分の人生だと思ってるから。だからそれはもう、"空"って例えるしかないっていうか」

──その魂っていうのは、本質的な部分でいうこと?

「っていうか、気持ち。だから"みんな気分はどうだった?""よかったよ!"って、それでいいんだけど、もっとアーティストになってほしかったんだよね」

──ライブに来てるファンにも?

「そう。だから全員が、自分の描く空に何色を載せるのか、どういう気持ちでいるのかを言葉にしてほしかったっていうか。例えば、人に"好きだ"っていうのには、プロセスが必要じゃない。自分の中でいろんな葛藤があって、最後に"君が好きだ"って言えるわけでしょ。で、聞いた人は、それほど好意がなくても感動するじゃない。そう言われたことに関して。それと同じで、俺も明確な言葉で感動してみたかったんですよ。ファンの子の明確な言葉で」

──それぞれが違うものでいいから、ちゃんと色を持っていてほしいと。

「そう。好きなこととか愛してるとかって、人間が考えられる時間の中で俺はすごく少ないと思っているから。みんな仕事があったり学校があったりして、その中ではネガティブな発想しか生まれてこないと思う。俺は日本人の根性とか気合いとかって、基本的には好きじゃない。それよりは、好きなことがどういうことなのかとか、どんなふうに好きなのかとか、そういうこと考えるのって俺はすごく幸せだと思うから。みんなにもそういう幸せな時間をいっぱい持っていてほしいし」

──RYUICHIくん自身は、何か具体的に色を持ってるの?

「色はもう喜怒哀楽、たくさんある。でも、自分がボーカリストとして今感じてるのは、ものすごく透明に近い光。それは自分がナチュラル・ハイっていうか、全然ナチュラルな状態でトランスしていく時って、日常よりもスッキリしてるのね。何もかも、時間が止まってるように思えるくらいはっきりわかるっていうか。それが俺にとっては、全く陰りのない透明な光なんだけど」

──トランス状態っていうのは、日常の雑事から解き放たれているから、そうなるわけ?

「だから本当、集中力だと思うのね。自分の中心に向かってるっていうのかな、自分の言いたいことがあるじゃない。今どう思ってるとかさ。で、日常ではいろんなことが邪魔するよね。相手はこう思うだろうから、今これを言うのはやめておこう、とかさ」

──そういう駆け引きはあるよね。

「でも、駆け引きのない世界でしょ、ステージの上っていうのは。初めから目標が明確にある時は遊ぶこともあるけど、ほとんどの場合、自分の芯にあるものだけを見つめられるようになっていったよね、知らないうちに」

──でもファンとの接点ていうのは、駆け引きから生まれてくるんじゃないの?

「いや、投げかければ反応してくれるから。俺は詞を作ってるからかもしれないけど、普段は人の考えてることを、ある程度読んだりしちゃうんだ。それって嫌なんだけど、でも人間て、絶対そうだと思う。友達と話してて、なんとなく落ち込んでるなと思ったら、なんか優しい言葉をかけたりするじゃない。でもステージっていうのは、1対何千で、全員を見ることしかできないでしょ。で、全員をひとつの生き物として見られるのが、もうライブの後半なのね。それまでっていうのは、自分自身の訴えたいことを、まわりに左右されないよう焦点合わせておかないと、もうステージに立っていられなくなっちゃう。それが自分のナチュラル・ハイっていうか。時間がゆっくり流れてて、目の前の風景もコマ送りみたいになっている、みたいなさ」

──ちょっとした覚醒状態になってるんだ。

「それはあると思う。でも、その時々で情報が飛び込んできて、例えばお客さんの笑顔がいいと思ったら"いい顔してるよ"って言ってるのね、最近。いい声だと思ったら"いい声してるじゃない"とか。普段はそんな細かいことまで言わないけど、それは時間が止まっているように見えるからこそのことで。で、そこにいると、歌っている詞を見つめることもできるわけ。見つめるっていうのは、詞を先読みして考えるってことじゃなくて、知らないうちに自分の感情と詞がピッタリ合って歌ってるっていう。だから歌い終わってから自分でも感動できるんだよね。ああ、こういうことを歌いたかったのか、って」

──最初は考えていなかった意味が、歌っていくうちに出てきたりするんだ。

「そうだね。だから、いちばん最初に書いた時の気持ちっていうのが、フレーズによってはすごく印象に残ってたりするんだけど、それを説明する部分に関しては、違う記憶が重なってきたりとかももちろんあるし。人間の記憶なんてすごく曖昧なもので、その時の写真がモノクロームに見えても、その中に真っ赤なドレスを着た人がいたのかもしれないし、それさえも忘れてる可能性もあるわけじゃない。でも、それがフッと浮き出てくる時があるんだよね。

俺の場合、ネガティブなものをポジティブな立場で歌って解消してる部分であるじゃない。過去のドロドロしたものとかを詞にしてるから、読んだ人は"なんてネガティブな人なんだろう""この人ってなんて暗いんだろう"って思うかもしれないけど、そこではすでに次の光が見えてる。いま立っているところは、決して暗いところじゃないわけ。恋愛が終わった歌だったら、次に好きになるだろう人を想うとか、実はポジティブなんだよね。だからこそ歌える過去だったりもするし。やっぱり、基本的にはみんなに楽天的になってほしいと思うからね。もっと自分本位になってほしい」

──RYUICHIくんが実はポジティブっていうのは、わかるような意外なような…。

「それはすごく言えないことだと思うんだ、誰も。人間て、それをいちばん怖がるんだよね。自分の好きなことだけやってると、妙にポカンと穴があいた気がしちゃうじゃない。でも、やっぱり俺の好ましい形は自由とか愛情とか、ちょっとクサいけど、感情とか気持ちの部分を表すことなんだと思う。だって、俺が初めてバンド見に行った時なんて、ベードラの音とかギターの響きとかボーカルのシャウトを聞いて、ただ鳥肌が立ったもん。何なんだろう、でもスゲー、ってまた足を運んじゃうっていうか。バンドって、嵐だって気がした。俺は小さい頃、台風が好きだったんだ。風がすごかったり停電になったり、いわゆる日常とは違うわけじゃない。なんかワクワクするものがあったんだよね」

──そういう気持ちって、詞を作る部分にも関わってくるものだよね。

「作詞とかって、俺は誰にでもできると思うんだ。ただ書いたものが支持されるかどうかで仕事になったり、自分のいるポジションに関わってきたりはするんだけど。だからみんな自分の可能性を信じて、思ってることを素直に見せてくれたら、それがいちばんだと思うし、俺はそれが見たいんだよね」

LUNA SEA

表現者のページ SPECIAL

『表現者のページ』に寄せられた多数の手紙の中から、RYUICHIに印象深い物を選んでもらい、コメントしてもらいました……。あなたも自分なりのイメージを拡げてみてください。

※

初めからそこに存在する事が、
動かせない運命の中にある様に、
1つの場所に集まる。
生きている世界に赤い色を添えれば、
白い色が弾き出され、
白い色を閉じ込めれば、
今度は黒い色が行き場を失くす。
そうやって少しずつ、少しずつ、
この場所に足を向け始めていた。
試行錯誤の中で、
何かが少しずつ変わり始める。

1つの同じ空の下にいる
沢山の生命体が、同じ想いを秘め、
様々な形で空に映し出して行く。
誰の手にも包まれない絶対の空が、
1つ1つの散らばった想いを
1つの色にまとめて行く。
地上に生きる生命体が
どうしても成せなかった
"1つにまとめる"という事を、
限り無く遠く、
だけど必ず見える場所にいる空が
難なく成して行く。
誰かが自分を慰める時、空を想い、
孤独さえ消し去ろうとする。
その空の中、月が朧に映る夜には、
何処か憂鬱に身を染めて行く
自分を感じる。
誰もが知りながら、
決してその存在を
明確に出来ないもの。
神秘という言葉1つでは
語り尽くせない何かが、
空という存在には蠢いている。
幻覚を映し、
人を惑わせる為に
存在しているのかと思うほど、
崇拝を漂わせる月。
それさえも包み込んでしまう空。

1つ、また1つと放たれる想いを、
独自の中に魅せ始める。
LUNA SEA色に
染まり始めた空は、
想いの全てを吸収しようとしている。
空を、絶対の空を
"LUNA SEAの為の空"に
変えてしまう。
優しさを超越した光が
月を通して全身に注がれる。

LUNA SEA色の空に
浮かぶ月は、
自分の世界を破壊して集まった
生命体を祝福する。
過ちだった頃の、
何かに埋もれていた頃の、
様々な自分を心にだけ止め、
「無」の極限から始めよう。
古い時代が崩れ、
空と共に生まれ変わった生命体が、
新しい時代を形成して行く。
誰からも認められる時代を——

（KYO）

●未来に希望を感じる終わりの3文がとてもポジティブで好きです。

※

7月の夜、月の女神が守る7月の夜、
約束の地に人々は集まっていた。
胸に何かを秘めて。
空はだまって見守っていた。
時折、風が優しく髪をなでてくれた。
高鳴る胸を静めるように。
黒い衣に身を隠した人々は、
都会のオアシスに身を委ねた。
その都の空気は、確かに自然だった。
人々が息衝いていた。
そして光が放たれた。
人々の心も放たれた。
もう黒い鎧に身を包まなくても、
闇は優しく包んでくれた。
心と身体は、
リズムに合わせて溶けていった。
何も飾らず、自分を曝け出す。
本当の自分が見えてくる。
この瞬間を待っていた。
月は私達の心の中を
照らしていたからだ。
ただ空はLUNA SEA色だった。

（MIHARU）

●これからも何も飾らない言葉を大切にして下さい。

※

月のシデムまで何千マイル。
私は小宇宙の空の下、
ブローニュの森を歩いていた。
整理された街を離れ、
今現在何をしなければならないかと、
思考しながらここへやって来た。
ただ、呆然と生きている自分に
腹立たしかった事もあるけれど、
私は何かを変えたかった。
ブドウの木が
甘いモーゼルワインの香りを漂わす。
——あなたは誰？

幻と共存しているその姿は、
まだ出来上がっていない
フランス人形の様に、
透明感の塊だった。
私は、頭から足の先まで
自然に観察をする。
そして霧は溶け、
ティフェレトなあなたに
恋をしていた……。
私が見付けたのは、
あなたを愛する事だった。
しかし、私はそれだけでは
"快楽"というものを感じない。
あなたは
「イメージは現実になる」
というけれど、
私はそんな事存在するはずがないと
思い疑いつつ、
真顔のあなたを見つめていた。
もしかすると、冷淡な私にとって、
あなたの話す全てが
羨ましかったのかもしれない。
けれども、ふと思う事がある。
あなたは幻覚の人？
それとも現実の人……。

あの日、私はあなたに
独断として魅了され、
ムーンストーンの夜、
セレネに身を……。

週末になると、
あなたは"ルシナー"を歌う。
祈るかの様に旋律された曲と声。
それはすぐにあなただと分からせる。
ある時私は、作り上げた創造の様、
些細な夢幻に触れた。
真実は確かに、
身近に所有しているという
メタモルフォーゼを知った時、
初めてあなたを抱き締めた……。
人々はカリスマ的な指導者を選んだ。
最上を見るのが怖かったから、
従う事で良いと同じ視野で
ダルは拡がった。
狂ってしまったデジャブ。
透き通ったあなたが
徐々に色付いている。
会うたびに濃厚になり、
それは心の様にいつも違うあなた色。
あれは何色だろう？
見た事もないコラージュ。
少しずつより完璧になって行く
あなたの成長と変身を見つめる、
それだけの私が
感情さえあたたかくなれたのも、
あなたのそんな美学を
認識できたからだろう。

幻覚の中に消化された今、
私はあなたを"ルシナー"と名付け、
現実になったあの人を待っている。
次はどんな色で、
あなたはここへやって来るのだろう。

（VIVIAN）

●あなたの文からはたくさんの絵を見せてもらいました。

※

◆総評

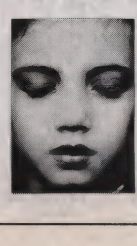
今まで俺の作ってきた詞っていうのが、あまりにも活字を武器にしたものだったから、みんなすごく影響受けちゃってると思うんだ。それはすごくうれしいし、だからこそ今俺が歌っていられるんだけど、それはそれでよしとして、10代の女の子には10代の女の子としての素晴らしい言葉がいっぱいあると思う。俺は先生になるつもりはないし、みんなの詞を読むときは、俺はみんなのファンなんだよね。言葉を見るっていうよりは"この人はどういう人なんだろう""何を思っているんだろう"っていうのをすごく知りたくて。だから俺は点数をつけるわけでもないし、赤ペン持って見るわけじゃないから。みんなとは同じ立場、同じ視点でいたいし、だからそこには友情と愛情しかないと思う。

応募方法&あて先

▶官製ハガキに，右下についている応募券を必ず貼って，住所・氏名・年齢・希望アーティスト・希望グッズを書いて，下記の住所まで送って下さい。
▶あて先・〒156-91　東京都世田谷区千歳郵便局私書箱25号（株）ソニー・マガジンズ　パチパチ・ロックンロール「スペシャル・プレゼント／LUNA SEA」係まで。
▶締め切りは，12月20日，当日消印有効となります。どしどし応募して下さいね。

ファンクラブ&問い合わせ先

▶ファンクラブ入会希望の方は，返信用封筒（62円切手貼付・自分の住所と氏名を名記したもの）を同封の上，下記の住所まで郵送して下さい。〒106　東京都港区麻布十番1-5-10　アトラスビル3F「SLAVE入会希望」係まで。入会すると，会員証と指輪がもらえる他，会報発行，チケットの優先予約，グッズの販売などの特典があるとのこと。
▶問い合わせ番号☎03(5411)1595



▶ LUNA SEAのメンバーが，パチロク読者のみなさんに用意してくれたのは，『IMAGE or REAL TOUR』のツアー・パンフレット。これを3名様にプレゼント。チケットが手に入らなくて，ツアー・パンフを買えなかったという人にはおススメ。気合い入れて送れっ！

RR▶GOODS PRESENT

小室哲哉写真集
HIT FACTORY
SOUTH BEACH WALK SESSION

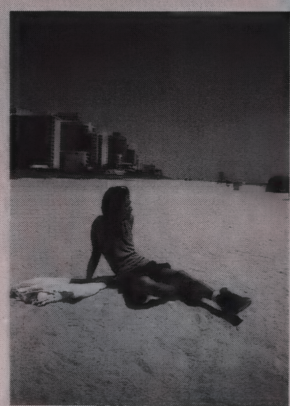
全国の書店で絶賛発売中!!

A4ワイド判・定価3200円（税込）

オール・フロリダ・ロケによるOFFタイム・ショットのみを厳選!!
（撮影/中川弘）

初版特典
特製ポストカード×4

HIT FACTORY
SOUTH BEACH WALK SESSION



TETSUYA KOMURO

『CAROL』の感動がよみがえる!! 究極のSFファンタジー誕生!!

木根尚登
書き下ろし長編小説

夢の木
ゆめのき



12月5日(土)全国の書店で発売!
（発売日が変更になりました）
（四六判・ハードカバー 税込定価¥1300）

初版限定特典
"サイン入り特製クリスマス・カード"が
届くチャンス!!

本をお買い上げの読者の皆さん全員に特製クリスマス・カードが当たるチャンス！ 12月5日書店店頭発売分（初版）のカバーだけに、応募券がついています。お申込みいただいた皆さん全員に、木根サンから素敵な"Marry Cristmas & Happy New Year"のサイン入りカードが届きます。発売と同時に売り切れてしまうことが予想されますので、確実に手に入れるために、いますぐお近くの書店で御予約下さい。（詳しい応募方法等は本のカバーを御覧下さい）

ファースト・ソロ・アルバム
『Roots of The Tree』12月12日発売!!
（EPICソニーレコード [illegible] 税込定価¥2,200）

ファースト・ソロ・シングル
『泣かないで』12月2日発売!!
（EPICソニーレコード [illegible]B3343 税込定価[illegible]）

GB
GUITAR BOOK

1月号 1993 JAN
好評発売中!
定価590円（税込）

表紙&巻頭特集
小室哲哉
テレビ・ドラマ『二十歳の約束』のサウンド・トラック・アルバムを発表。

特集 B'z/槇原敬之/Dreams Come True/大江千里/永井真理子/徳永英明/LINDBERG/木根尚登/UNICORN/KAN/松岡英明/JUN SKY WALKER(S)/PRINCESS PRINCESS/THE ALFEE/THE BOOM/KIX・S etc.…

●別冊付録① MINI BOOK **宇都宮 隆**
シングル「Trouble In Heaven」でソロ・デビューを飾るUTUに迫る。

●別冊付録② SONG BOOK ニュー・アルバム全曲集
大江千里『六甲おろしふいた』/Dreams Come True『The Swinging Star』/JUN SKY WALKER(S)『STAR BLUE』/LINDBERG『FLIGHT RECORDER 1989-1992～Little Wing』
その他、最新ヒットソングを満載!

POPGEAR

12月号 好評発売中!
特別定価680円（税込）

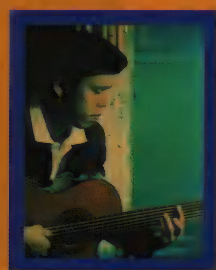
FINAL ISSUE DON'T MISS IT!

▶強烈なオーラを放ち続けるマドンナの魅力を解析!
MADONNA
▶バックステージでアクセル他にインタビュー
GUNS N' ROSES
▶バンドの頭脳レイチェルに肉迫
SKID ROW
▶12月来日『ダンシング・ザ・ドリーム』発売!
MICHAEL JACKSON
▶全米ツアー中、ボノとエッジをキャッチ
U2
and many many more

ソニー・マガジンズ 〒102 東京都千代田区五番町6-2 TEL.03(3234)5811

誰も作れないのが
クリーチャーズ・ミュージック




LITTLE CREATURES

リトル・クリーチャーズ

[A LONDON RECORDING]

3rd album

NO VOTE NO VOICE

ノーヴォート・ノーヴォイス

MDCL-1204 ¥3,000(tax included)

前作「ヴィシタ」から１年８ケ月-----待望のニューアルバム、遂にリリース!!
Ｕ２，エルビス・コステロ，ピーター・ガブリエル，ケイト・ブッシュなどを手がけた、
ケビン・キレンをエンジニアに迎えたＵＫ録音。
自らのアイデアを最高のサウンドで実現させた３rdアルバムです。
インストルメンタル３曲を含む全12曲収録。

リトル・クリーチャーズの
新曲が電話で聴けます。
東京:03·3449·9700
大阪:06·539·9700
アクセス・ナンバー
1510

NOW ON SALE

1993.1.9(sat) Live at SHIBUYA ON AIR

MIDI INC.



力強いハードロックのグループをベースに
ドラマチックで斬新なプログレッシブサウンドを展開するテレピアス。

時を越えて、夢を越えて
心につたえられてきた〃愛〃…
〃永遠の翼〃であれ。

3rd Album 11·21 Release

TERRE PIERCE

dream is over

VICL-359/税込定価¥3,000(税抜価格¥2,913)



First Album
The Boys – They were floating in the dreams and the realities of life –
'91·9·21 Release
VICL-184/税込定価¥3,000



Second Album
C'est Le Paradis[セ・ル・パラディ]
'92·6·21 Release
VICL-285/税込定価¥3,000



First Single
虹の橋
'92·11·21 Release
VIDL-111/税込定価¥930

Victor
JVC

TERRE PIERCE

Left To Right :
Masao Kamata (vo), Kenta Hirano (b),
Tatsuya Yamada (ds), Tadashi Itoh(g)



Dream Is Over—夢の世界にようこそ

3 部作の完結編「DREAM IS OVER」が11月21日にリリースされたテレピアス。だけど，まだ眠りから醒めたくはない…パチロク創刊以来，初の試みであるテレピアス夢物語という手法を通じて，今までリリースされた「TERRE PIERCE」,「Ces't Le Paradis」の世界も見て感じて欲しい。そしていつも自分達が見る夢の世界と共に彼らへもう少し近付いて欲しい

Photography **Kiyoto Takahashi** Text **Saruaki Kobayashi** Styling **Kiichi Arai(K'S office)**

TERRE PIERCE
Dream Is Over—

Dream is now on…夢を見ている人は ドリーム・エキスプレスにお乗り換え下さい

ぼくは電話ボックスの前で、前の人が話し終わるのを待っていた。

ボックスの中の人は、話しているのではなく、歌っているようだった。その声はギターの音にそっくりだった。

突然、大きな音が空いっぱいに轟いたかと思うと、目の前の地面に亀裂が入り始め、あちこちから「地震だ」「揺れているぞ」と悲鳴にも似た声が上がった。

「ここは危ない。早く逃げよう」

ぼくは咄嗟に姉の手を引いて、近くを走っていた路面電車に飛び乗った。姉は震えが止まらない。

「地震の真似がうまいなあ」と言うと、姉はにっこりして、震えるのを止めた。路面電車に乗っていた人々もにっこりして、天井からぶら下がっているぶどうをもぎってはぼくたちにくれた。乗客のひとりが耳打ちした。

「この先にみやげもの屋があって、桃やぶどうを売っている老夫婦がいて、挨拶は必ず〝タイム・ハズ・カム〟なんだよ。その先は森だよ」

電車はみやげもの屋の前で停車した。乗客の話のとおり、老夫婦が奥から出て来て、ぼくたちに桃とぶどうを勧めた。姉もぼくも、ぶどうはこれ以上持ち切れないと思い、桃を3個ずつもらった。出発の時間になると姉は、「この老夫婦と深刻な話をしなくちゃいけないから、ここからはひとりで行きなさい」と言ったので、ぼくがうなずくと、その老夫婦は、別れ際ほんとうに「タイム・ハズ・カム」と挨拶した。ぼくは、姉が深刻な話をする価値のある人たちなのだと感心した。

電車は森を抜けて走る。窓を開けて風を受けていると、その風は女の人の声だった。

「女の風が歌っていますよ。これは何の曲でしようね?」

ぼくは、向かいの列にいた、彫りの深い顔の男に身を乗り出して聞いてみた。男は、

「わたしも曲の名前を知りたくて、こうして旅しているんですがね」と、ぼくを咎めるように答えたので、この話題が電車の中ではタブーなのを、ぼくは初めて知った。

電車が森を抜けると、目の前は海だった。

レールは真っ赤な砂浜を突っ切って、そのまま海に続いている。女の歌い声は、水平線のむこうから来ているようだ。電車はぼくたちを乗せて、海の中へ入って行った。海の色が透き通った暗いブルーにしては息苦しくない。ぼくは、目の前で泳ぐ熱帯魚の群れを、うっとりと眺めながら、桃を食べようとした。そのとき、熱帯魚の目が、一斉に瞬きした。ぼくは独り占めしようとした自分が、急に恥ずかしくなった。

白い服を着て、ぼくたちは浸食された白い崖の上を、鹿のように跳びはねながら戯れている。女の人は皆、天使のように美しく、額には小さな小さな目がついている。

「ここはどこ?」と訪ねると「アトランティスよ」と、女たちは一斉に答えるのだが、そのハーモニーは、リハーサルのときと比べものにならないくらい感動的だった。

ひとりの大柄な女性が、額の小さな小さな目を、きらきら輝かせながら言う。

「あなたもテレピアスを見に来たの?」

「でも、ぼくはまだ、一度も見たことがないんだ」

すると、今まで気まぐれに戯れていた白い服の人々がぼくを取り囲み、口々に言った。

「あら、じゃあ、崖の下にある湖に飛びこまなくっちゃあ」

「崖の下には湖があって、所どころに岩がのぞいていて、魚が泳いでいるの」

「よく見ると、湖底は秘密基地になっていて、その一角にライブハウスがあるんだ」

「おもしろいから、覗いてみるといいわ」

それらの声も調子も、さっきのハーモニーとは較べものにならないくらいに濁っていた。この人々は、きっとテレピアスのファンなのだろうが、アドリブは下手くそなんだ。ぼくはこっそり、心から思った。

崖の下を覗くと、言われたとおり湖がある。湖の底は秘密基地だった。

ぼくは何故か胸をドキドキさせていた。

背中に圧力を感じた。誰かがぼくを押したのだろう。その圧力には、愛情が込められていたので、落下しているのに少しも怖くなかった。空を見上げると、飛行機雲が2本、筋を引いていた。その筋は蛇そっくりだった。

傾いたステージの上で演奏が行なわれている。テレピアスのメンバーはつんのめりそうなのを必死でこらえながらのプレイ。観客も皆、緊張のあまり、握り締めた手から汗をしたたらせている。

汗がフロアに落ちると、じゅっと言う音がして、湯気が上る。フロアは床ではなく、虹色に塗り分けられ、虹の形をした鉄骨の橋が架けられているだけで、足を踏み外した客が、次々と暗闇へ落ちて行く。美しいばらにはトゲがある。ぼくはそんなことを考えながら、初めて見る彼らのライブに興奮していた。

突然、ぼくは叫んでいた。

「この曲の名前は〝ドリーム・イズ・オーバー〟って言うんでしょう」

すると、高さ200メートルのジャングルジムの頂上にセッティングされたドラム・セットを叩いている山田が、そのとおりと答えてくれた。その声はひきつっていた。高所恐怖症の人にしか出せない張り詰め方に、ぼくは感動したが、なぜかげらげら笑ってしまうのだった。隣には貴花田と宮沢りえがいて、ふたりともげらげら笑っていたので、ぼくは少し気が晴れた。気が緩んだなと思った瞬間、ぼくは足を踏み外し、谷底に落ちて行った。

下のほうから、

「だからいわんこっちゃない」と声が聞こえて来た。ぼくはすかさず答えていた。

「先に落ちたお前に言われる筋合はない」

〝ドリーム・イズ・オーバー〟のベースのフレーズを口ずさみながら、ぼくは自然体のまま、落ちて行った。

新宿駅。山の手線14番ホーム。

家に帰ろうとしている。耳鳴りがさっきから止まらない。ぼくはかなりいらいらしていた。腰まで海水につかっていたが、そのことは出来るだけ気にかけまいと心がけていた。

霊感が突風となって襲い掛かった。その風は、どうやら、ぼくだけを襲っているみたいだった。

乗り遅れてなるものか。

ぼくは風に逆らって、ホームに滑り込んで来た、三鷹行最終列車に乗り込もうとするが、体はびくとも動かない。他の人はすたすたと乗り込んでいる。誰もぼくには気付いていないようだ。あるいは見て見ぬふりをしていたのかもしれない。

「田舎にいたときも、確か同じ目に遇ったことがある」と、ぼくはホームを離れて行く黄色い電車を見送りながら、ぼんやりした頭で、そのときのことを思い出そうとしていた。

アナウンスががらんとした駅に響き渡る。

「本日の運転はすべて終了しました。夢を見ている人は、夢のホームに止まっているドリーム・エキスプレスにお乗り換え下さい」

ぼくは、海と森の混じった匂いを嗅ぎながら、昔一緒に仕事をしたことのある物真似タレントと、チョコレートを投げ合いながら、夢のホームへと急いだ。

ドリーム・エキスプレスに乗ると、そこには、傾いたステージでつんのめりなら張り詰めた演奏を繰り広げたテレピアスのメンバーが着替えを済ませようとしていた。

つかつかと寄って、お疲れさまと声をかけると、ボーカルの鎌田が、笑って言った。

「今度は平らなステージでやらなくちゃな」

物真似タレントはメンバーに加えて欲しいと、バンドのマネージャーに売り込みをかけている。マネージャーは、考えておきましょうと、社交辞令でかわしていた。

ぼくはシートに深々と沈みこみ、目を閉じた。発車のベルが頭の中を駆け回った。



Ladies Room

LIGHT OF YOUR EYES

**10月18日，LADIES ROOMが日比谷野音でワンマン・ライブを決行。
官庁街の野音とLADIES ROOM。なんだかとってもミスマッチ。
だがしかし，夏のツアーもトバし，久々のライブというだけあって，大盛り上がりだ。
恋人も濡れる街角，日比谷公園の一角で，観客も濡れたライブだっ!!**

Photography **Kenji Tsukakoshi** Text **Yūsuke Katoh**

日比谷の空にこだまする3千人のあえぎ声。

どーでもいいんだけどさ、こんとこテレビをつけると必ずやってるじゃない、『ストップ・ザ・AIDS』。あれ、なんとかなんないのかなぁ?

「AIDSにならないためにはSEXをしないことです。それが無理なら初めからコンドームを使いましょう」

「AIDS患者と一緒にお風呂に入ったりキスしても大丈夫なんだよ」

ってさぁ、ホントかよ? じゃあフェラチオでは絶対に感染しないわけ? 思いっきりディープ・キスで、しかも口の中に傷があったりしても本当に大丈夫なの? まぁ高校生にコンドームを配る・配らないで大騒ぎしてるような国だからしょうがないんだろうけどさ。マドンナの写真集もスミぬりしないと持ち込めないしな。

そんな中で桂三枝がたったひとつだけ正論をいってるんだよね。

「AIDSにならないためにはSEXをしないこと」

これは正しいと思うよ、極論だけど。

でもさ、SEXっていつでもリスクを背負ってるじゃん? 「無理矢理ヤッちゃって嫌われちゃったらどうしよう?」「ヤッたのがバレたら学校クビになっちゃう」とかの軽いのから、「妊娠したりしたらどうしよう?」「病気になっちゃったらどうしよう?」までさ。そんなの当たり前だって。伊達や酔狂でSEXしてんじゃないんだから。学校や性病が怖くてSEX出来るかってーの! だって気持ちいいんだも〜ん!

(尚、この気持ち良さについては偉大なAV監督代々木忠の偉大な著『プラトニック・アニマル』で詳細に書かれているので是非読んでみて下さい。目からウロコが落ちるよ)

LADIES ROOMはSEXの気持ち良さをそのままロックの気持ち良さに昇華出来る数少ないバンドだ。人生の究極の命題であるSEXに真正面から取り組むことによって浮き彫りにされる人間の愛・夢・希望・悲哀・挫折etc……。やつらのハードなナンバーが僕たちを興奮させるのは、やつらのポップなナンバーが僕たちを楽しくさせるのは、やつらのバラードが僕たちを切なくさせるのは、そのすべてがSEXに詰まっているからだ。

そんなやつらが10月18日、日比谷野音でライブをやってしまった。日比谷といえばアータ、屋根もなければ壁もないまったくのオープン・エアー。しかも東京のど真ん中、日本の政治や文化の中心、すぐ近くには皇居もあるというLADIES ROOMにはもっとも似つかわしくない場所。そんな場所で果してあの気持ち良さが味わえ



るのか? 全員があえぎ声を上げるのか? オッパイを出しちゃう女の子がいるのか?
　いよいよライブがスタート。キーを差し込みアクセルをふかす。聞こえて来るエキゾーストノートは「ホット・レディー」だ。「週に1度のサンデー・ナイト。今夜はお前とベイビー、最高の夜になりそおー!」ってお前は横浜銀蝿か!(笑)
　しかし、さすがに10月ともなれば夜は肌寒い。エンジンもいたわってあげなきゃね。暖気運転が必要だ、ってわけで「ミス・ロックンロール」「コントロール」とアクセルを徐々に踏み込みギアをローからセカンドへと上げて行く。続けて百太郎のMC。「今日は野外でこんな気持ちのいいのもめったにないから、楽しんで行けよ!」
　はいはい、わかってますって。ここんとこLADIES ROOMのライブにはずっとお預け食わされてんだもん、いわれなくたってそのつもりだよ。
　曲は「ワン・ナイト・スタンド」「ビッグ・パイ」「ユア・ネイキッド・ハート」とLADIES ROOMならではのポップ・ナンバーでいやがおうでも高まる回転数を押さえる。何事も焦りは禁物よ。
「レディー・トゥ・キス」、「ジャスト・ライク・ア・キャンディー」でぼちぼちギアもサードに入ったかな?
「よっしゃ、これからトップでブッ飛ばすぜ!」
　と客席のはやる気持ちを察知したLADIES ROOM。
「狭いニッポン そんなに急いでどこへ行くぅ? そんなんじゃ入れる前にイッちゃうよ」
　と「リトル・ピース・オブ・ヘブン」「1685」とバラードを2曲。これがもう彼女とふたりで六甲山から見下ろす神戸は100万$の夜景って感じで胸にシミるシミる! 熱いふたりはケンメリのシートで熱い口づけを交わすのであった。(笑) よしよし、インター横のラブホテルのベッドまでもうすぐだ。(笑)
　六甲山からホテルのベッドまでの道のりは(あと、フロントのおばちゃんにニヤニヤされたりHビデオをチェックしたり服脱いだり風呂入ったりも)アクセルべた踏みのJUNのリズム・キープで省略。(笑) GEORGEの「パープル・ヘブン」でいよいよ本番だ! ミディアムでヘビーなビートがグイグイ腰に来るぜ! 彼女も我慢し切れずに次第に声を上げ始める。ついに出たぁ~! 「SEX SEX&ロックンロール」だぁ! 日比谷の空にこだまする3千人のあえぎ声!
「イク イク♡ イレテ イレテ♡ アンアン♡ おかぁさ~ん!」
　これだよ、これ、これが聴きたかったんだよぉ! うぅ~、たまんねぇ! 巨大な回転ベッドと化した野音が揺れる。「セックス・ドライブ」じゃ百太郎がイカせ方を教えてくれるぜ、
「スロー・イン ファースト・アウト!」
　もうこうなったらちゃんとイクまで止まらない。「ヘイ・ガール」じゃ彼女の方から着けてた下着をステージに投げつけ「次はわたしをヤッてぇ~」とメンバーを挑発。百太郎もGEORGEもNAOもステージを走り回りのヤリまくり! 負けてはならずとJUNも熱くブッといビートをブッ放つ。3千人の野外スワッピング・パーティーも盛り上がって来たぜ! ハードなエッチで揺れる部屋のことを歌ってると思ってたら実は違った「ロッキン・ハウス」。どの女とやろうかをチェックしてるんだと思ってたらこれも違った「チェック・チェック・チェック」。こうなったらエンドレスで朝までヤリまくりだぜ! の「ナイト・トゥ・ナイト」。最後はターボ全開・最高速度記録更新・エンジン爆発・スゴーイ! こんなの初めてぇ! の「ゲット・ダウン」で見事に昇天。

こんなに気持ちいいのもめったにない。



「今夜のお前、最高だったぜ、フッ」
　とタバコをくゆらす暇もなく彼女はアンコールをねだる。奇蹟的な回復力の「ビッグ・ブーブズ&バンズ」で2回戦に突入。まだまだパワー全開だぜ!
　2度めのアンコールは最高の彼女たちに感謝の気持ちを込めてしっとりと「ライト・オブ・ユア・アイズ」。「一番大切な女」というタイトル通りの精一杯の愛情表現で今度は彼女の瞳が濡れる。
　そして最後はこれぞ元祖「スワッピング・パーティー」。百太郎もGEORGEもNAOもJUNも一滴も残すまいと最後の力を振り絞る。彼女だってもう何回イったかわからない。ほんのりピンクに染まった肌と潤んだ瞳が色っぽいぜ!
　ステージを後にするメンバーの気持ち良さそうな顔。笑顔で手を振る彼女たちの気持ち良さそうな顔。本当のSEXでもこんなにいい顔めったに出来ないよな。ああ~本当に気持ち良かった。でもひとつ心配なのは、こんなに大勢の女の子とエッチしちゃってAIDS大丈夫かな? (笑)



RR GOODS PRESENT



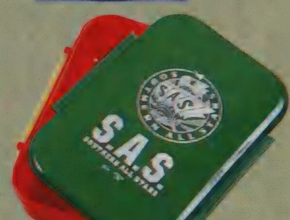
日比谷野音のライブも大成功に収めたLADIES ROOMからのスペシャル・プレゼントは，ツアー・パンフレット。5名の方にプレゼント。官製ハガキに左下の応募券を貼り、住所・氏名・年齢・希望アーティスト・希望グッズを書いて下記まで送って下さい。〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号㈱ソニー・マガジンズ パチパチ・ロックンロール「スペシャル・プレゼント/LADIES ROOM」係まで。締め切りは、12月20日の消印有効です。ライブを見に行けなくてパンフが手に入らなかったとお嘆きのアナタ! ご応募お待ちしております。

present

今月はスペシャルプレゼントもあるわけでこっちの方のプレゼントはややオモムキが違っております。アイドル(笑)をフューチャーした品揃えになっています。え、いつもだって？　ま、そうおっしゃらずに。折り込みのハガキに欲しい番号を記入してポストまでお散歩してね。締切は年の瀬も押し迫った12月20日消印有効よん。







29名

サザンオールスターズ

⑰バンドエイド20名⑱ぬいぐるみ4名⑲お弁当5名（提供　ビクタースピードスター）どーだい、ビクターさんからどどーんと太っパラのプレゼントだい。ライブに行った人が身近かにたくさんいてびっくりしたわよ。もちろんみんな仕事ヌキ（誰と行ったんだろ?）「やる曲やる曲みんな知ってる曲だからすごいよね」とはパチ▶パチ編集者M氏。うん、さすがサザンはちがーう!



2名

De+LAX

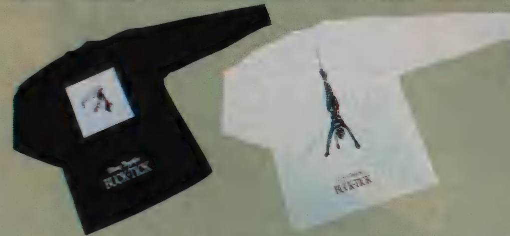
⑪ポラ（提供　編集部）フォーライフレコード、ってことは今井美樹と同じとこだよん



10名

電気 GROOVE

⑫ポスター（提供　キューンソニー）武道館お疲れ様でした。祝　鼻毛!





30名

10名

BUCK-TICK

①Tシャツ白5名②Tシャツ黒5名（提供シェイクハンド）③ポラ大（全員が写っているもの）5名④ポラ小（一人づつ写っているもの）15名（提供　編集部）やー、ユータさんとトールさんって兄弟なんだってねー。アタシ全っ然知らなかったさぁー。だって名字ちがうんだもん。



1名

鈴木結女

㉕パーカー（提供　メディア　レモラス）'92 Jリーグヤマザキナビスコカップのテーマ曲



10名



5名

SHEEN

⑬Tシャツ(提供　インデビジュアルレコード)12月10日は青年館でアシッドなライブ



1名

Fishmans

㉖Tシャツ（提供　メディア　レモラス）アルバムのジャケットにはヤラレタよね（笑）

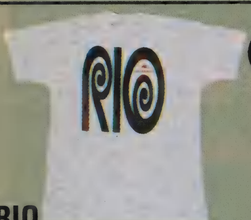


ブレインドライブ

⑳ポスター5名（提供　ビクターインビテーション）㉑ポラ5名（提供　編集部）こないだ会社で見かけたざんす。二人とも繊細そうでカッチョヨカッタっす。



10名



3名

RIO

㉗Tシャツ（提供　EMI）アキアカネとは?赤とんぼかな、きっと。シャツについてる



3名

ZELDA

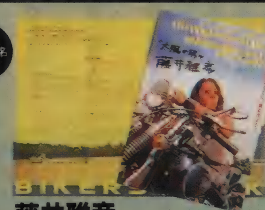
㉒Tシャツ（提供　アルファ）12月1日『LOVE LIVE LIFE』ビデオリリース



1名

田島貴男&高野寛

⑧ポラ（提供　編集部）どうよ？　あのCM。くくく。カワイーつーか、なんつーか、ね。



3名

藤井雅彦

⑤サイン入りパンフ（提供　メルダック）先月の取材の時にもらいました。



TOSHI

⑭ポスター5名⑮パンフ5名（提供　BMGビクター）予約に行ったレコードやさんで田原俊彦と間違えられたってハガキ多いけど、大体トシちゃんのことをトシと呼ぶか?



10名



5名

五輪真弓

㉓テレカ（提供　ソニーレコード）いつわまゆみさん。うちの母は大ファンです。



3名

DIE IN CRIES

⑨Tシャツ。(提供　BMGビクター)寒さにもオッケーのブ厚いロンティーです。



3名

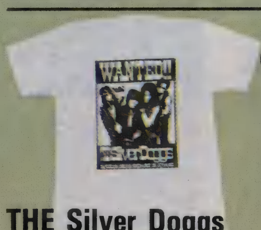
ソフトバレエ

⑥Tシャツ(提供　ビクター)写真集の締切はもうすぐ!　12月10日です。急げ!



槇原敬之

㉘テレカ5名㉙ポスター5名（提供　WEA）NHKでのライブがグー!!　いつもしないアンコールまでしたもんね。しみじみと聴けるあなたは恋をしている!?（レコード会社談）



1名

THE Silver Doggs

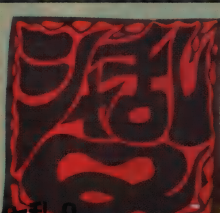
㉔Tシャツ（提供　コロムビア）アーチスト名の由来は何かしら?



1名

リトルクリーチャーズ

⑯ポラ（提供　編集部）なんか台風来てて大変な取材だったみたいです。



5名

シャ乱Q

⑩バンダナ(提供　BMGビクター)ホコ天ならぬ、城天（大阪版ホコ天）の人たち



10名

COWCOW

⑦ステッカー（提供　パブリックイメージ）過激でカッコイイやつらデビュー!!

Back Number



1992. 12

JUN SKY WALKER(S) UNICORN 他



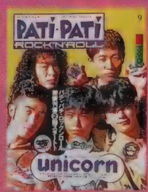
1992. 11

TOSHI／電気グルーヴ／X／LUNA SEA 他



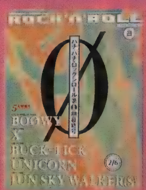
1992. 10

布袋寅泰／BY-SEXUAL／SHAKE 他



1992. 09

UNICORN／BUCK-TICK／BY-SEXUAL／J(S)W 他



1992. 08

BOØWY／J(S)W／X／BUCK-TICK／UNICORN 他



1992. 07

ZIGGY／寺田VS宮B／ラウドネス／ANGIE 他



1992. 06

LA-PPISCH／HEAVEN／BUCK-TICK／J(S)W 他



1992. 05

BUCK-TICK／ANGIE／the PILLOWS 他

バックナンバー購入方法

最近、すごい本を読んだ。その名も『プロポーズの瞬間』。作詞家の麻生圭子さんが書いてて楽しく読みやすい。ま、内容は結婚のことなんだけど、よく考えるといろんなことにあてはまるんだよね。簡単に言っちゃうと「結婚しても夫に頼らず、自分というものを持て」とか、「よーく考えて決断しないといけないけれど、相手はいつまでも待ってくれない」とか。本って偉大だよなあ……。アーチストの言葉の中、ライターの言葉の中から真理を見つけて下さい。書店で「ソニーマガジンズのパチロク○年の○月号のバックナンバーを取り寄せたいんですけど」と言ってね。

11月号当選者発表

①電気 GROOVE・ポスター／川崎市　若林孝子／所沢市　赤沢春恵／神奈川県　山本敦子／青森県　千葉正子／他6名
②電気 GROOVE・エプロン／川崎市　若桑千鶴／岐阜県　小林英理香／三鷹市　加賀裕美／福岡県　米城ちなつ／他1名
③電気 GROOVE・ポラロイド／愛知県　安藤嘉江子／千葉県　内藤優子／愛知県　山口陽子／大阪府　上村純子／他14名
④L↔R・Tシャツ／千葉県　江沢尚子／福岡県　阿部京子
⑤ FLYNG KIDS・Tシャツ／静岡県　佐野友香／他4名
⑥ソフトバレエ・ポラ／大阪市　有澤典子／熊本県　福島れいか
⑦真心ブラザース＆ロッテンハッツ・うちわ／茨城県　古谷奈津江／大阪府　藤森香苗／北海道　大谷理恵／他7名
⑧ハミングス・ステッカー／埼玉県　山口紀子／他4名
⑨X・バッチ／北海道　清水亜希／山口県　篠田智子
⑩ ARAKAWA RAP BROTHERS・ステッカー／京都府　山本信吾／京都市　植田紀子／神奈川県　沼田忠之／他7名
⑪M-AGE・ポスター／神奈川県　田代由紀子／他4名
⑫M-AGE・ポラ／川崎市　柳本ケイ子／他3名
⑬M-AGE・撮影小物／埼玉県　高橋久美子／他2名
⑭楠瀬誠志郎・ミニブック／北海道　前嶋亜希／他9名
⑮JUN SKY WALKER(S)・ステッカー／東久留米市　後藤普作／石川県　高橋永央子／栃木県　鮎沢香織／他7名
⑯JUN SKY WALKER(S)・ポラ／埼玉県　古沢利恵／福井県　小林美由紀／知立市　徳永美香／世田谷区　大木樹里
⑰吉川晃司・ポスター／調布市　奥田ヒロ子／他3名
⑱吉川晃司・ポスター／杉並区　荒川豊美／他2名
⑲THE BOOM・パンフレット／北海道　徳田朋子／大分県　佐藤孝恵／沖縄県　宜野座洋恵／杉並区　山ノ内志保／他1名
⑳ZARD・テレカ／群馬県　有坂絵美子／大田区　有田京子／埼玉県　田所香保里
㉑シュガービート・テレカ／新潟県　出邑かおり／他4名
㉒JUSTY NASTY・ライター／埼玉県　山根香／他3名
㉓ブランキージェットシティ・ステッカー／杉並区　藪田幸代／青森県　佐藤葉子／猿島郡　秋葉しのぶ
㉔LUNA SEA・パンフレット／神奈川県　廣仲利那／兵庫県　山内春香／善通寺市　古田みどり／石川県　坂田大輔／他6名
㉕LUNA SEA・ステッカー／石川県　山岸千珠／福岡県　坂田桂子／青梅市　長尾佳代子／佐賀県　小野留美／他6名
㉖BY-SEXUAL ポスター／杉並区　新井貴子／他2名
㉗BY-SEXUAL ポラ／八王子市　穂高戀／青森県　小野陽子／千葉県　石綿美奈
㉘オルケスタ・デ・ラ・ルス・オリジナルキャップ／北海道　小林斉子
㉙DOG FIGHT・ポスター／千葉県　根本秀樹／山梨県　高松由香／大阪府　西山登
㉚Bonnie Duck!?・ブレスキッド／北海道　渡辺明岐／埼玉県　高橋一代／茨城県　田中かおり／他2名
㉛東京パノラママンボボーイズ・ポラ／大田区　森川毅／他1名
㉜セルフィッシュ・ボールペン／宮城県　鈴木晴賀／岡山県　服部高資／島根県　松本絵理子／杉並区　徳山和美／埼玉県　相田友子
㉝SION・テレカ／千葉県　野武かがり／静岡県　鈴木サヤカ／北海道　砂川良子

㉞篠原利佳・シューシャイン／千葉県　加藤美由紀／兵庫県　横山絵美／江東区　小松千鶴子／北海道　府金慈子／練馬区　辻絵理香
㉟BRAIN DRIVE・サイン入りメンバー私物／北海道　神長敦

㊱シャ乱Q・サイン入りポスター／大阪府　市川優美子／愛媛県　重松恵子／千葉県　白井和美
㊲シャ乱Q・レジャーマット／水戸市　浅井絵美子／山形県　久連山伸也
㊳林アキオ・ポラロイド／神奈川県　飯尾桂子／宮城県　根本麻紀子



3名

貴島サリオ

㊱ゴルフボール（提供　ポニーキャニオン）お父様もしくは年上のボーイフレンドに





2名

ピチカート・ファイヴ

㉚Tシャツ（提供　コロムビア）9月21日にその名も『スィート・ピチカート・ファイヴ』をリリース。12月23日に中野サンプラザでライブもあるよ〜ん。カワイイシャツ♡



3名

いつかどこかで

㊳テレカ（提供　ポニーキャニオン）ロングディスタンスコールをしよう、ね。



3名

LUIS MARY

㊴ポスター（提供　クラウンレコード）ルイマリーと読みます。



3名

UNICORN

㉛ポラ（提供　編集部）なんか元気な方たちなため撮影がハチャメチャだったとか。



3名

THE DEAD POP STARS

㊵ポスター（提供　クラウンレコード）デーハーだけど美人です



3名

PSY・S

㉜Tシャツ（提供　ソニーレコード）話題の映画『きらきらひかる』は見た？





2名

THE YELLOW MONKEY

㊶Tシャツ白黒各1名（提供　ポインマンミュージック）なんて名前の事務所なのかしら



2名

瀬能あづさ

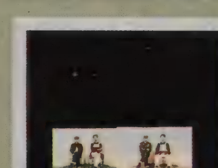
㉝Tシャツ（提供　ポニーキャニオン）さーこっから特別アイドルバージョンだよーん



1名

西田ひかる

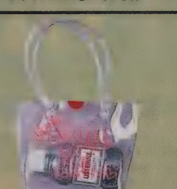
㉞マグカップ（提供　ポニーキャニオン）カワイイッ。ホットココアをいれてね



1名

真心ブラザーズ

㊷ポラ（提供　編集部）12月2日に『善意の第三者』というニューアルバムリリース



2名

羽野晶紀

㉟リステリン（提供　ポニーキャニオン）そっかー、クリスマスデート用？（←深読み）

編集後記

●いやあ、今日の私は働いたわ。〆切り前にさぼった私が悪いんだけど。ごめんなさいね、平原さん。私があまのじゃくなばかりにいつもメーワクかけて…。といいつつも、まりんの原稿まだ書いてなかったりして。ゴメン、平原さん。もうチョット待って。（チバ）

●今日は私の誕生日。（11月27日）。編集後記にこの言葉を書くようになって早4年がたとうとしています。ああ私も、もう23才なのね。稲垣吾郎に恋してる場合じゃないのよね。SMAPが年下だと昨日まで気がつかなかった私。"クリスマスのために"来てね。（リバ）

●10月はエキサイティーング！することが多くて多くて。川田・三沢戦しかり、ボンバーズ・ムラサキ戦しかり。川田も植木も本当にかっこいいわ♡　日本シリーズも久々に燃えたわ。でも応援する人達はみんな負けてしまった。アタシャ疫病神かあああっ。㊕

●最近感動したことは……（先月はマツタケで……）友人たちがしっかりとした考えを持っていて、私の相談に乗ってくれたこと。みんな大人なんだな、と思った。学生時代と社会人ではこうも言葉の説得力がちがうものか。感謝しています。（ヒラハラ）

●出張で沖縄に行った。ホテルのプールでリゾート気分を味わっていたら佐野元春そっくりな人がいた。世の中にゃ、似た人がいるもんやなと感心してたら後日、本人と判明。ビックリ。しかし、夜の泡盛攻撃でヒックリ。でも今回は暴言、失言、暴力はなし。進歩かも（みほ）

●フィネガンズウェイク買った⇨うーむわからん。まっぷたつの子爵⇨まだ途中、思ったより重い。何を今さら高野聖⇨すげぇ怖ぇ。幻獣辞典⇨正直つまらん、リタイア。愛を乞う人⇨ TVドラマみたい。紫苑物語⇨背筋凍るほど。誰か至福千年売ってくれぇ ㊍

●今月号では、パチ▶ロクから皆さんへのXマス・ギフトのつもりで全アーティストのプレゼント企画を実施しました。協力してくれたアーティストの皆さん、アリガトウゴザイマシタ。そして今年も残すところ1ヵ月余り。読者の皆さんにも感謝感謝です。㊋

●もうあと一か月で今年も終わり。早いものです。プレゼント企画はいかがでしたか？　街にもクリスマスディスプレイがにぎやかに飾られ、いやがおうでも気分が高揚しますが、ここはひとつ厳粛な気持ちで一年を振り返ってみてはいかがでしょうか？（Ago）

Rock'n'Roll News A Go Go

パチロク今月号では掲載アーティストのプレゼントがよりどりみどりなんやけど，いつもはプレゼントがあるこのページがなせか，今回はひとつもなし。まっ，人生長いよ，こんな時もあるさ。

アーティスティックなサウンドの提供



デジタルレコーディング、デジタルミキサー、デジタルキーボード。デジタルを楽器として使いこなすアーティストが音楽を変えている。よりリアルに、厚みのある、インパクトのある音へとアーティストのこだわりを再現するために、余裕と迫力を生む新しい体感メディアを追求したプロ・ピクシー。デジタルテクノロジーはここまできたか!?
●ソニー　PRO Pixy　MHC-J900EX　¥160,000（税別）

ソニー・ミュージックエンタテインメントより MDソフト191タイトルがリリースされる



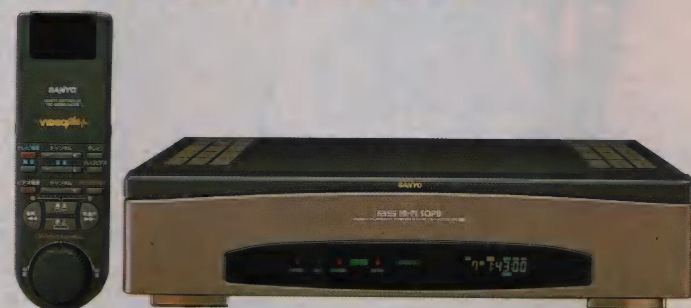
ソニーから発売されたMDプレーヤーに注目が集まっていたが、それと対応させるべく、ソニーミュージックエンタテインメントよりMDソフトが191タイトルリリースされる。プリプリ、米米クラブ、マイケル・ジャクソンなどソニーの人気アーティスト達がMDになって新登場。アナログ盤の時代が懐しい。
●㈱ソニー・ミュージックエンタテインメント　MDソフト　国内制作¥2,800〜　ポピュラー　¥2,300〜　クラッシック¥2,600〜

アクネケアのための洗顔とクリーム



ニキビは青春のシンボルや、でもやっぱりスベスベ、ツルツルの肌でいたいのは全女の子の本音。アクネウォッシュSSSで余分な皮脂や毛穴の汚れを洗い流して、アクネベースクリームSSSでオイリースキンをすっきり整える。日やけによるシミ、ソバカスを防ぐUV効果もあるのでお肌のお手入れはこの2本でバッチリ。
●アクネウオッシュSSS¥800
アクネベースクリームSSS¥800

スポーツ番組も半分の時間で楽しめる



2倍速にすると音声まで2倍速になって何言っているんだかわからないことってよくあるよね。そこでサンヨーの時短ビデオはF1もスポーツも映画もニュース・トーク番組だって時間のないあなたにも全体の流れを把握しながら臨場感たっぷりにしかも音声は通常のスピードとトーンで再現されるんだからすごい。これはオススメでしょう。
●SANYO　BSチューナ内蔵Hi-Fiビデオ　VZ−H430B

表現の楽しさが広がるユニ・ウォーターカラー



学校の授業での美術って何だか押しつけがましくて好きじゃないって人だって、自分の描きたいものがある時は1人でも描いちゃうものだよね。そこで色鉛筆の描線を水を含んだ絵筆で伸ばしていくだけで水彩画の色合いを引き出せるこのセット。スケッチにハガキにと手軽に自分の描きたいものの幅が広がる。試してみては。
●三菱鉛筆　水彩色鉛筆　12色スケッチセット　¥3,000（税別）

BADオーディションVol.6

音楽制作会社としてB'z、TUBE、織田哲郎、LOUDNESS、T−BOLANなど多数売れっ子ミュージシャンを抱えるビーイング・グループが主催するBAD（Being Artist Deveropment）オーディションが行われる。
現在までにT−BOLAN、大黒摩季、矢嶋良介（MOON）等がデビューし、その活躍ぶりはご承知の通りであろう。我こそはと思うアーティスト志望の君にその応募要項を。
・応募資格、性別、年齢、プロ、アマ問わず
・応募方法、オリジナル作品を収録したカセットテープ、ビデオに歌詞を添付し、プロフィールと写真カラー2ポーズetcを
〒106港区六本木5−2−1　ほうらいやビル6F　㈱ビーイング内　BADオーディション事務局へ　締め切りは93年1月末日。
人生にチャンスはいくつもない。自分の可能性を信じて応募してみよう。
詳しくは03−3479−2132、BADオーディション事務局まで

環境と人にやさしい93年のモデル画王



津川雅彦サンのCMでおなじみの画王。今年のテーマは人と地球にやさしく。目と耳にやさしい映像づくりと音声づくり。お部屋にやさしいコンパクト設計。多局化時代にやさしい対応、モノ志向からハート志向へと先進性とやさしさを両立させた画王の集大成と言えるシリーズが続々と誕生。テレビ・ライフが楽しくなるね。
●パナソニック　大画面テレビ　画王　TH−33VS35　33型　¥350,000（税別）

"V"シリーズのデザインを一新!



"V"シリーズがデザインを一新して新たに登場。ハイパッキング技術の採用で高画質、高音質を実現、高出力、高S/Nの実現、タイムバリエーションに180分を追加、静電気防止樹脂を採用などによって映像ノイズの少ない安定した記録再生を実現。バランスのとれた音の再現といった従来の機能を更に強化されたこのシリーズ。
●ソニー　VHSビデオカセット　V、Vハイグレード、Vスーパー VHS

MONTHLY
おもしろ元気ヤング・ミュージック・マガジン パチ・パチ

PATi·PATi

A 4ワイド▷大増248ページ▷キャンペーン号▷定価600円（税込）

チェッカーズ解散!!
最後の表紙・特集40ページ!



特集

米米CLUB
UNICORN
BUCK-TICK
B'z／氷室京介
J(S)W／TMN
etc

パチパチ１月号は12月９日（水）発売!!

RR▶ SPECIAL ARTIST GOODS PRESENT

パチロクからの
X' mas＆お年玉プレゼント！
スペシャル・アーティストグッズ
をもらおう！

ONCE MORE CHANCE!!

応募方法

各ページに付いている応募券を切り取り、官製はがきに貼ってください。宛て先は〒156-91 世田谷区千歳郵便局私書箱25号 ㈱ソニー・マガジンズ パチロクスペシャルプレゼント○○（アーチスト名）係まで。でも、さすがにここでしか手に入らないものを多く、でももう１冊買うのも何だかなーというアナタ。この応募券が味方になります。何にでも使えるオールマイティ応募券。応募方法は同じです。



RR X'mas SPECiAL EVENT

MR.CHILDREN's イベント
"クリスマスのために"

出演 Mr.Children



最後のGuestスピッツに決定!!

ゲスト
CHARA
井上陸都美
スピッツ



12月19日（土）川崎クラブチッタ

詳しくは、11月30日発売パチパチ読本を見よ！

OH! サンタスティックパーティ!!
byスチャダラパー

出演 スチャダラパー、クレア
モダンチョキチョキズ A.K.I.
吹越満、梅垣義明（ワハハ本舗）他



50組100名様
をご招待！

12月25日（金）後楽園ホール

詳しくは、パチパチ１月号＆本誌102ページを見よ!

1
パチ・パチ・ロックンロール
1月号 第7巻第1号 通巻72号1993年1月1日発行
1988年(昭和63年)12月3日第3種郵便物認可
発行 / ソニー・マガジンズ 〒102 東京都千代田区五番町6番地2
電話 / 03-3234-5811(販売) 03-3234-7906(編集) 03-3234-5101(広告)
PATi-PATi ROCK'N'ROLL

雑誌07567-1 定価◎390円(本体379円) ©Sony Magazines Inc. Printed in Japan 印刷:大日本印刷株式会社
T1007567010397